昭和43年 4 月 3 日第 3 種郵便物認可 平成11年 1 月25日発行 モデルアート 1 月号臨時増刊 第529集

AFVモデル塗装テクニック
ドイツ編
"HOW TO PAINT GERMAN AFV MODELS"

- ドイツ軍用車輛の塗装を 1/35 スケールモデルで再現
- 塗装工程を写真で紹介
- ドイツ軍用車輛塗装変遷史



MODEL ART
モデルアート 1月号臨時増刊

AFVモデル塗装テクニック ドイツ編

''HOW TO PAINT GERMAN AFV MODELS''

目　次

ドイツ軍車両の塗装変遷史

GERMAN AFVS COLOR DEVELOPMENT 1908～1945

Mitsuo Terada　寺田　光男

本項の主旨は第２次世界大戦中のドイツ軍塗装について述べる事だが、話の流れとして、それ以前の塗装についても触れておく事とする。

なお色名についてはドイツ語のカタカナ表記ではなく、一般的により理解しやすい英語読みに直した表記を主に採用しているので、その点御了承願いたい。

また文中、色名の後に付加されるRALと4桁の数字は、RALが定めた色の識別番号を表している。RALとは1925年に発足したドイツの工業規格制定団体で、現在の日本で言えばJISに相当するものである（色のみについて言うなら日本塗料工業会のようなものである）。この団体は今でも活動しており色見本も存在するのだが、詳細は後で述べる事とする。

『第２次世界大戦前の塗装』

――1908年――

ドイツでは1908年１月23日付け通達第36号により、フェルトグラウ（独語）が陸軍機材の統一色として制定された。フェルトグラウは英語で言えばフィールドグレーであり、直訳すれば野戦用灰色となる。これは第２次大戦中にも同じ名称の色が存在した。両者が同じ色であったのかどうかはわからないが、おそらく色調は異なっていたと思われる。いずれにしてもこの色は、緑がかった灰色であったとされている。

――1914年――

1914年に第１次世界大戦が勃発してからもフィールドグレーがドイツ陸軍のカラーとして使われていた。1917年に登場したドイツ軍初の実用戦車A7Vも、最初はこのフィールドグレー単色で塗られていたようである。これが1918年に入ると、塗装によるカモフラージュ効果を狙う思想が導入され、新たに黄、茶、緑の３色による迷彩に切替えられた（ちなみに陸軍航空隊の飛行機には1916年から迷彩塗装が導入されていた）。ただし、迷彩パターンは特に決まっていなかったようで、３色を適当にスプレーしたものや、刷毛塗りで各色の境界に細い黒線を縁取ったもの等様々であった。またフィールドグレーの上から、この新3色をオーバーペイントした車両もあった。この他にフィールドグレーとは違う、緑がかっていないやや明るめのグレーも存在し（後述するタオベングラウと同色かもしれない）、新3色の内の黄色の代わりに使用されたらしいが詳細は不明である。

――1922年――

第１次大戦後もワイマル共和国軍は、基本的に戦中の塗装色を継承していた。ただし1922年6月付けの命令により若干の変更が加えられている。それによると装甲車や牽引車等の特殊車両は、シャーシから車体全体まで多色迷彩を施すものとしていた。その他の乗用車やトラック類は、シャーシとフェンダーをブラックとしていた。車体は救急車とバスそれに大型トレイラーは、タオベングラウ（独語）という色で塗る事になっていた。これは直訳するとハトの羽のようなグレーという意味になるが、色調は不明で要するにライトグレーの事と思えばよいらしい。トラックや小型トレイラーそれに汎用機材等は従来通りフィールドグレー、乗用車は市販車用のダークグリーン、ダークブルー、ダークグレー、ダークブラウン等の色が認められた。ちなみにオートバイは全体をブラック一色としている。

――1933年――

ワイマル共和国軍は1933年４月20日付けの服務規定488/1号において、多色迷彩についての再確認と共にその名称と色番号を記載している。それによると、アースイエロー17番、ブラウン18番、グリーン28番となっている。これらは第１次大戦中の黄、茶、緑に相当する色でもあったと思われるが、色調は不明である。これらはヒトラーが政権を取ってからも使用されたので、Ｉ号戦車等にこの3色で迷彩した例が確認できる。なお各色の塗装は境目をはっきりさせていたが、パターンについては規定されていなかったようである。

――1937年――

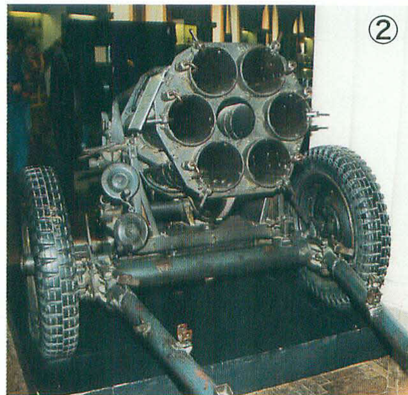
新生ドイツ陸軍は1937年6月12日付け通達第340号で、それまでの3色迷彩に代わる新たな基本塗装色を導入した。それはダークグレーRAL7021とダークブラウンRAL8002（RAL7017説もある）の2色である。さらに1938年11月2日付け通達第687号では塗装に際し、ダークグレーとダークブラウンの面積比を2対1の割合にする事を指示している。このダークグレーは、しばしばパンツァーグレーとも呼ばれ、英米図書ではフィールドグレーと表記される事もある。また日本では長らくジャーマングレーという名称で親しまれたものである。色調は黒に近いかなり濃いものであった。一方ダークブラウンはそれに比べれば明るかったので、写真での識別は容易である。

――1939年――

ダークグレーとダークブラウンによる２色迷彩は、陸軍全ての軍用車両を対象としており、多くの例が確認できる。また２色の境界線ははっきりさせる場合が多かったが、スプレーによるぼかし迷彩の車両もあった。中にはダークグレーとダークブラウンの面積比が逆転してる場合もあった。1939年に入るとほとんどの軍用車両はダークグレー単色塗装となり、２色迷彩はごく一部の車両にしか見られないようになった。一説にはダークグレーとダークブラウンの2色迷彩は1939年に廃止されたとも言われている。







①オリジナルのダークグレーRAL7021で塗装された3.7cm Pak36。元々この色は黒に近い非常に濃いものだったとされているが、退色したためにかなり明るめになっている。屋内展示のためこれでも保存状態はよい方である。(サンクトペテルブルグ砲兵博物館)
②③これもダークグレーRAL7021で塗装された、現存する15cm Nbw41。これは砲架部と脚部で色調が違っている。脚部の方が退色劣化が激しいようだが、その場合は黒みが消えて青みが強くなる傾向があるようだ。(サンクトペテルブルグ砲兵博物館)

『第２次世界大戦中の塗装』

――1939年――

ドイツ軍は1939年９月にポーランドに侵攻し、第２次世界大戦が勃発した。この時に参戦したドイツ軍車両は、一部にダークグレーとダークブラウンの２色迷彩を施したものもあったらしいが、写真で確認できるほとんどのものはダークグレー単色塗装である。ポーランド戦には1938年に併合したチェコソロバキアで製造された35（t）と38（t）戦車も参加したが、これらもダークグレーのみで塗装されていた。

――1940年――

ポーランドを手中に収めたドイツ軍は1940年４月に北欧へ侵攻し、５月には西方戦を開始した。この時の車両の塗装は、全てがダークグレー１色のみであったといってよい状況であった。ただしグロースドイチュラント歩兵連隊所属第640突撃砲中隊のⅢ号突撃砲には、ダークグレーとダークブラウンの2色迷彩がまだ施されていたとする資料もある。しかし筆者はこれを写真で確認していない。

フランス陥落後の1940年７月31日付け通達第854号にて、ようやく実際の塗装状況を追認するようにダークブラウンが廃止され、ダークグレー単色による塗装が制式化された。以後この塗装は1943年まで継続される事となる。

ダークグレー単色は、陸軍のみならず空軍の地上戦闘部隊(高射砲部隊等)の機材にも用いられた。ただし通常の空軍用車両（補給トラックや連絡用乗用車等）は、ダークグレーRAL7021とは別のブルーグレーRAL7016とういう色の単一塗装で統一されていた。この色はダークグレーRAL7021に色調は似ていたが、青みの強いものであった。

――1941年――

★北アフリカ戦線

ドイツアフリカ軍団が北アフリカに初上陸（トリポリに）したのは1941年２月の事であった。戦車連隊は一ヵ月後の３月に到着したが、この頃はまだアフリカ戦用の熱帯地塗装は制定されていなかった。そのため、全ての車両はアフリカの地に似つかわしくないダークグレー塗装のままであった。そのため多くの車両はそのまま戦闘に投入されている。しかし中には、現地の砂を水または油で溶き、車体に塗り付けてカモフラージュする車両もあった。(独立）第605（自走）戦車駆逐大隊所属の4.7cmⅠ号対戦車自走砲がその代表例と言えよう。

これに対し、1941年３月17日付け通達第281号にて、アフリカ向け機材には面積比2対1の割合でイエローブラウンRAL8000とグレーグリーンRAL7008にて塗装するように指示が出された。イエローブラウンRAL8000はくすんだ黄土色で、グレーグリーンRAL7008は緑がかった黄土色でイエローブラウンよりも多少暗かった。これらの色の境界線はぼかす事とし、車両のホイル部分はどちらか一方の色のみで塗る事とされた。ただしこの規定通りに塗装されたものは、後に本国から補充された車両に限られると見てよいようで、しかも規定はしばしば無視されてイエローブラウン単色で塗装される事もあった。これらの塗料は５月になって北アフリカに持ち込まれ、まだダークグレー塗装のままの車両にオーバーペイントされた。この場合も概ねイエローブラウン単色で塗られていた。その他、これらの塗料以外にイタリア軍の塗料も使用されたが、白黒写真での識別は困難である。

★バルカン戦線

ドイツ軍は、1941年４月にバルカン方面に侵攻するという新たな行動を起こすが、この時もダークグレー単色に変化は付けられていない。

★東部戦線

1941年６月にバルバロッサ作戦が開始され、ドイツ陸軍部隊がロシアの大地に広く展開する事となった。無論この時も全ての車両がダークグレーに身を包んでいた。

今ではよく知られた例外として、秋に増援部隊として投入された第5装甲師団所属のⅢ/Ⅳ号戦車の例がある。第５装甲師団のⅢ号戦車はバルカン戦役を経た後、北アフリカへ送られるべく車体色をイエローブラウンRAL8000に塗り変えていた。またⅣ号戦車はさらにその上からグレーグリーンRAL7008による蛇行迷彩がスプレーにより施されていた（おそらく同師団の車両は、戦車以外の車両もイエローブラウンで塗装されていたと考えられる)。ところがこの後予定が変更され、第5装甲師団は東部戦線の中央軍集団戦区に投入されたため、ロシアの地にイエロー系塗装の戦車が登場する事になったのである。これらの戦車は再塗装する時、師





これは屋外展示されているII号戦車A～C型の車体前面。50年以上も野ざらしにされると、こうなるという例である。ダークグレーRAL7021は青みがかったライトグレーと化し、もはやオリジナルが黒に近い色だったとは想像しがたい。上の方に見える赤い色は錆止め用の下地塗料(RAL8012)で、装甲車両の迷彩塗装はこの上から行われた。ツィメリット・コーティングが施された場合は、下地塗料の上にコーティングをし、その上に迷彩塗装を行った。(レニノ軍事歴史博物館)

団マークである黄色の×印や連隊マークの赤い顔の悪魔は四角くマスキングされたので、マークの周囲のみダークグレーが残されていた。

上記の例以外はロシア侵攻がこの頃は勢いに乗っていた事もあり、特別なカモフラージュ塗装が顕著に行われる事はなかった。ところが冬前にモスクワを陥落させるヒトラーの予定は達成されそうに無く、ドイツ軍の戦いは冬にまで及ぶ事が予見された。そして、1941年11月18日付け通達第1128号によりノルウェー、フィンランド、ロシア方面の冬季雪中迷彩に関する指示が出された。これはドイツ軍初の白色迷彩指示で、ホワイトRAL9002を用いる事とされた。これは水で洗い落とす事が可能な塗料とされ、春になったら元の色に戻せる事が前提であった。

しかしドイツ軍はバルバロッサ作戦開始時から、冬季戦を全く考慮していなかったので、他の冬季装備と同様この塗料もあらかじめ準備されていたわけではなかった。したがって塗料の絶対数が不足しており、中々前線部隊に行き渡らなかった。しかもこの年の雪は意外と早く降り出したため、各部隊は石灰を水で溶いたものを塗ったり、チョークや白い布等を使って車体を白くする工夫せざるを得なかった。またこのような材料の不足から、車体全体にまで手が回らず、部分的に白くしただけの車両も多かった。無論、冬じゅう最後までダークグレーのままで通した車両もあった。

――1942年――

★北アフリカ戦線

1942年3月25付け陸軍通達第315号においてイエローブラウンはRAL8000からRAL8020に、グレーグリーンはRAL7008からRAL7027に改定され、旧塗料の在庫が無くなり次第、新しい色に切替えられる事となった。塗装の面積比率等は変えられていない。これらの塗料は1942年7月3日付け陸軍通達第600号で、クレタ島駐留軍にも適用される事となった。イエローブラウンRAL8020とグレーグリーンRAL7027は、RALが現在所有する色見本によると、旧カラーのRAL8000とRAL7008に比べてどちらも明るめの色調になっており、両者のコントラストの差はあまりないものになっている。

また北アフリカではよく知られているように、連合軍の車両を数多く捕獲して使用していたが、その際オリジナルの塗装に対しイエローブラウンまたはグレーグリーンにて迷彩を施したりする場合もあった。

★ヨーロッパ全般

すでに占領下となった西方、北欧、バルカン地域における駐留軍の装備は、基本通りダークグレー単色で塗装されていた。ここではもはや大きな戦闘は行われなかったので、特殊な迷彩等もほとんど行われる事はなかった。

★東部戦線

1942年の春になると、各車両は冬季迷彩を落として再びダークグレーの単一色に戻った。ドイツ軍はこの年、ロシア南部への攻勢が活発となった。特に夏以降はブラウ(青)作戦の発動により、多くの装甲部隊がウクライナ南部に投入されている。これに伴って車両の塗装にも変化が生じるようになった。というのも南部ロシアの気候風土は、どんよりとしたヨーロッパとは違い、明るく乾燥した感じであったため、ダークグレー単色塗装の車両は逆に目立ちぎみだったようである。そのため部隊によっては、2～3色による迷彩塗装を独自に施すといった例も多かった。その多くはダークグレーの基本色の上にイエロー系の塗料を重ねるといったものであった。迷彩パターンは蛇行型やスポット型等様々であった。また車体全体をイエロー系塗料で塗り、その上に新たにダークカラーによって迷彩を施したものもあった。

このイエロー系塗料は後に制式化するダークイエローという可能性もあるが、アフリカ向けのイエローブラウンと考えた方が時期的に自然であろう。またダークカラーについてもやはり、アフリカ向けのグレーグリーンだったと考えるのが適当と思われる。この他ブラウン系塗料も迷彩に使われており、もしかしたら戦前の指定色であったダークブラウンRAL8002を使用していたかもしれない。

この他、塗料を使わずに土を水や油で溶き、それで迷彩模様を書き込むといった車両もあった。クリミア半島に進出した一部の部隊では、冬季迷彩にも使用した石灰を水で溶き、迷彩模様を書き込むといった事も行われている。ただし、これらはあくまで例として掲げたまでで、ダークグレー単色のままの車両も数多く存在した事を忘れてはならない。また同時期の北部及び中部戦区の部隊では、南部戦区のような迷彩はほとんどしていなかった。

やがて冬の到来と共にドイツ軍車両は、再びホワイトRAL9002を塗装する事となったが、さすがにこの年は前年とは違って沢山の塗料が準備されており、チョーク等で間に合わせる車両は無かったようである。

――1943年――

ドイツ軍は1943年2月18日付け陸軍通達第181号で、ダークグレーRAL7021に代わってダークイエローRAL7028を新しく基本色として制定した。これは車両のみならず、無線機等のあらゆる機材に適用された。同時に車両用迷彩カラーとしてオリーブグリーンRAL6003とレッドブラウンRAL8017が選定され、これにより各地域に適合した迷彩塗装を行う事となった。この内ダークイエローは工場で新しく完成した車両にフィニッシュとして塗装され

たが、オリーブグリーンとレッドブラウンは部隊側に支給され、そこで迷彩を加える事となっていた。各色の面積比率やパターンは特に指示されておらず、迷彩色はどちらか一方しか使わない場合もあった。ただ、規則的なパターンを広い面積に施してはならないし、一つの面を一色で塗る事も禁止された。ただ実際には迷彩を施さずに、ダークイエロー単色のまま実戦に投入された例も数多く確認できる。

新塗装は補充部隊や占領地の駐留部隊の既存の機材にも適用され、速やかに塗り変える事が要求された。ただし、すでに前線部隊に配備され使用されている装備については特に塗り変える必要は無いとされ、迷彩や修理等の塗り変えの際にのみ新塗料が使用された。また工兵部隊では新塗装は全面的に採用されず、旧塗装のままとされた。

この後の1943年５月３日付け陸軍技術命令書第39号では指示が若干変更され、新塗装は前線部隊とすでにそこに送られる事が決定した装備にのみ適用されるとしている。

ただし、ここで注意しなくてはならないのは、ダークイエローには２種類が存在したという事である。ダークイエローRAL7028は当初に用意された色で、これは1943年半ば頃にRAL番号を持たない、やや明るめの新しい色調のものに改定されてしまい、以後終戦まで改訂版が使用された事になっている。つまりダークイエローRAL7028で塗装された時期は、極めて短い期間だけであった。

★東部戦線及びヨーロッパ全般

新塗装が導入されたため、1943年春から新造された車両は新３色を用いていたが、前線（東部戦線）で戦っていた既存の車両にとっては、迷彩用の塗料が新たに３色加わったも同然であった。それに先にも述べたようにアフリカ向け塗料も用いられていた形跡があるので（南部ロシア方面のみ）、この時期の東部戦線にはダークグレーRAL7021, イエローブラウンRAL8020, グレーグリーンRAL7027, ダークイエローRAL7028, オリーブグリーンRAL6003, レッドブラウンRAL8017の6色の塗料があった事になる。したがって理論的にはこの６色を組み合わせたあらゆる種類の迷彩塗装が考えられる。もっとも車両1台につき使われた色はせいぜい３色止まりであったが、それにしてもかなりのバリエーションが考えられる。この色の組合せについては、白黒写真からでは中々判断できるものではないので、この辺は各自で推察する他ない。

一方、前線ではないヨーロッパの駐留部隊にも新塗装への塗り変えが指示されたため、ダークグレーと新３色の組合せが誕生した。もっとも、ほとんどの場合はダークイエロー単色に塗り変えただけであった。ただ、連合軍の上陸に備えて６月にギリシャ入りした第1装甲師団の中には、ダークグレーにダークイエローの蛇行迷彩を施したもの等もあった事が知られている。



ダークグレーベースに白色迷彩したⅢ号戦車J型（モデルアート増刊Ⅲ号戦車モデルフィーベル参照）制作：杉村光生

1943年７月には東部戦線のクルスクで大規模な戦車戦が行われた。いわゆるチタデレ作戦と呼ばれるこの戦闘に参加した車両のほとんどは新迷彩を施しており、ダークグレーの地肌が見える車両はほんの一部に過ぎなかった。この時は季節が夏という事もあり、迷彩には主にオリーブグリーンが使われていたようである。

★イタリア戦線

1943年６月、連合軍のシシリー島上陸に備え、イタリア軍増援として第15装甲擲弾兵師団とヘルマンゲーリング装甲師団が派遣された。これらの装備は全てダークイエローをベースとした新迷彩が施されていた。ただし、チュニジア入りするためにシシリー島に待機していた第504重戦車大隊第2中隊のティーガーⅠは、明らかにアフリカ向け塗料で塗装されていた。同隊のティーガーは結局チュニジアには行かず、同地で第15装甲擲弾兵師団と行動を共にした。そしてその一部はイタリア本土へも渡っている。

★チュニジア戦線＆ティーガーⅠの塗装について

1942年末から、北アフリカ戦線は最後の激戦地チュニジアへと絞り込まれた。もっとも塗装に関しては1942年当時と変化していない。あえて言うなら、イエローブラウンとグレーグリーンの旧カラーRAL8000とRAL7008で塗装された車両が少なくなったいう事位である。可能性としては1943年３月以降に補充された車両の中に、ダークイエロー塗装のものがあったかもしれないが、白黒写真でこれを確認する事は極めて難しい。

チュニジアには1942年の末に第501重戦車大隊の最初のティーガーⅠが到着しており、計20両のティーガーⅠが1943年にかけて同地に投入された。チュニジアにおける第501重戦車大隊のティーガーⅠ（Ⅲ号戦車も）の塗装については、様々な説が存在している。というのも通常イエローブラウン系で塗装されているはずのドイツ軍車両の中で、これらのティーガーとⅢ号戦車の中にグリーンで塗装したものがあったという説が出現したからである。この出典は1971年に発刊されたブラッドフォード氏著作の「armor camouflage & markings (NORTH AFRICA 1940-1943)」が最初であり、これによると第501重戦車大隊のティーガーⅠはデザートサンドで塗装されていたが、グリーンの車両もあったように見える、とある。またⅢ号戦車については、832号車に関してピーグリーンだったと述べている。ピーグリーンのピー（pea）とはエンドウマメのことで、極めて曖昧な表現となっている。

この後チュニジアのティーガーⅠグリーン説を追認する形となったのは、ブルース・カリヴァー＆ビル・マーフィー共著の「Panzer Colors」（1976年）であり、ピーグリーンではなくオリーブグリーンという名称を使っていた。この後カリヴァー氏は「TIGER in action」（1989年）の中でより具体的な説明を行っており、第501重戦車大隊のティーガーⅠは最初デザートブラウンで塗装されており、その後チュニジア沿岸の気候風土に合わせてオリーブグリーンがオーバーペイントされたとしている。しかもデザートブラウンは



イエローブラウンで塗装したⅢ号戦車Ｎ型（モデルアート増刊Ⅲ号戦車モデルフィーベル参照）制作：山田卓司

RAL8020、オリーブグリーンはRAL7008だったとしている。

1993年にはNEW VANGUARD 5「TIGER I HEAVY TANK 1942-1945」でトム・ジェンツ氏が新説を打ち出した。それによるとティーガーⅠは最初フィールドグレー(パンツァーグレー)で塗られており、砲塔番号は白縁のみであったという。これがチュニジア到着の少し前に、オリーブグリーンがとても薄くオーバースプレーされ、その際砲塔番号はマスキングされたために、番号の中はグレーのままであったとされている。

1994年に発行されたシュナイダー氏著の「TIGERS IN COMBAT 1」では、元の色がサンドオリーブで、それにアメリカ軍から捕獲したオリーブドラブを上塗りした車両もあったとしている。その場合、白縁番号の中の色は元のサンドオリーブだったという説明は、色が違うだけでジェンツ氏説に準じている。

この番号の中と外の色が違っているという割合説得力のある説を頼りに、筆者は1997年にこれらの説を検証しつつ、自分なりにティーガーⅠグリーン説に否定的な結論を出した(グランド・パワー誌97年5月号)。というのも白縁番号の中と外で明度差がある車両を発見できなかったからである。ところが最近になって発刊された大日本絵画刊の「ティーガー重戦車写真集」に、明らかに番号の中と外で明度差がある写真が掲載され、この説に修整を加える必要性を感じた次第である。

その写真に写っているのは、チュニジアのビゼルダに到着したばかりのティーガー142号車で、少なくともこの車両は番号の中の方が外よりも明るいトーンで写っている。ただし、この差は実に微妙なものになっている(ブラッドフォード氏説では番号の中を赤としているが、ドイツ軍の第2中隊の例でもわかる通り、赤はもっと暗いトーンだったのでその可能性はかなり低いと思われる)。142号車に関しては他にも多くの写真が残されており、その中には番号の内外でトーンに差があるように見える写真も掲載されていたのだが、図版が小さい事もあり筆者はこれを目の錯覚だと思い込んでいたというわけである。もっとも同様な例を他の車両に求めても、今のところはっきり確認できるものは無い状況である。したがって、142号車は少なくともそうだったと言う他ない。なるほど思いかえしてみると、ブラッドフォード氏やカリヴァー氏が例に上げているのも皆142号車であった。

さてそれでは142号車は何色だったかについて述べてみよう。筆者は第501重戦車大隊のティーガーⅠは、工場から編成中の部隊に輸送されてきた時から既にアフリカ向け塗装だったと見ている。色は当然時期的に見てイエローブラウンRAL8020だったはずである。これは142号車も当然同じであったと考えられる。では砲塔番号以外にオーバースプレーされた色についてはどうかと言うと、1) 特別な色が用意された、2) グレーグリーンRAL7027だった、3) アメリカ軍のオリーブドラブだった、の３説が今のところ考えられる。

この内1) 説は、証拠がない限りはあまりに御都合主義的で、説得力に欠ける。要するに、にわかには信じがたい。3) 説は可能性としてはあるものの、やはり考え難い。なぜなら142号車の塗装は状況からして船積み前に行われていた事が確実だからである。作戦中ならともかく、チュニジア投入前の新品車両にアメリカ軍の色を塗ったとは、やはりにわかには信じがたい。残る2) 説のグレーグリーンRAL7027は、元々ドイツ軍のアフリカ用指定色であり、もっとも順当で可能性の高い説と言わざるを得ない。グレーグリーンRAL7027が緑色だったのかというと、実際には黄土色と緑色を混ぜたような感じだったらしい。したがって見る人によっては茶色に見えたり、緑色に見えたりする非常に微妙な色合いだったようである。そのため、グリーンに塗ったティーガーⅠがあったとする説から、取り合えずは逸脱していない事になる。この2) 説は、要するに「TIGER in acution」の説と一致するものだが、筆者としてはジェンツ氏の説も取り入れて、グレーグリーンRAL7027を非常に薄くオーバースプレーしたという事にしておきたい。

ただしこれはあくまでも１つの説であって、真実を解きあかしたというものではない。142号車の白縁ナンバーはリペイントしたようにも見えるので、本当にマスキングしたのかどうか疑いの余地がある。またマスキング材料やマスキング方法について明らかになっていない点においても、疑問を抱いてみる必要がありそうである。

第501重戦車大隊の他の車両について述べると、ティーガーⅠは142号車以外はイエローブラウンRAL8020の単色が標準塗装だったと思われる。ホルヒ等ソフトスキン車両には、明らかにイエローブラウンRAL8020とグレーグリーンRAL7027による迷彩塗装が確認できる。Ⅲ号戦車に関しては、概ねイエローブラウンの単色塗装であったが、一部の車両はグレーグリーンをも加えた迷彩を施していた。また中にはティーガー142号車のように、全体をグレーグリーン単色にしていた車両もあった可能性がある。

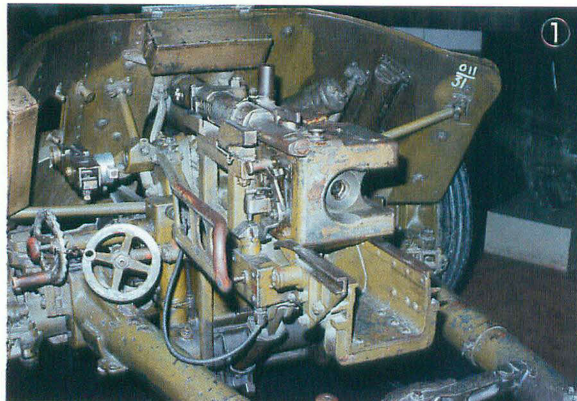
ちなみに1943年３月に遅れて到着した第504重戦車大隊のティーガーⅠ等の塗装については、サンド系の単色だったというのが世界的に一致した見解であり、要するにイエローブラウンRAL8020だったという事である。

――1944年――

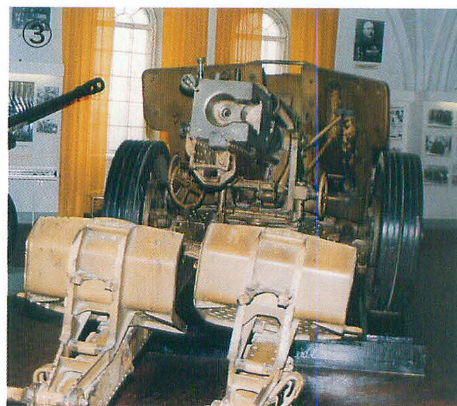
1944年８月19日、ドイツ陸軍は製造工場での最終塗装をダークイエロー単色ではなく、オリーブグリーンRAL6003とレッドブラウンRAL8017を加えた３色迷彩とする事を命令した。これに対する工場側の対応も比較的スムースに行われたようである。この時期は既に戦線はヨーロッパとロシアに限定されていたので、あらかじめ３色迷彩を施していた方が前線に投入しやすかったのだと思われる。

８月の後半には「光と影」と呼ばれる、新しい迷彩パターンが導入された。これは３色迷彩のそれぞれの色の面の中に、別の色の斑点を散りばめた一風変わったものであった。この塗装には単にスプレーで行われたものや、型紙を用いたものあるいは刷毛塗り等、いくつかのバリエーションが認められる。

11月の終わり頃から基本塗装色がダークイエローではなく、オリーブグリーンRAL6003に変更された。しかも







①これはダークイエローとレッドブラウンRAL8017の迷彩塗装をした5 cm Pak38。脚部に青っぽいグレーが見える事から、ダークグレーRAL7021で塗装されていたものを後に塗り直したらしい。(サンクトペテルブルグ砲兵博物館)
②③ダークイエロー単色に塗装された 8.8 cm Pak43/41 。砲部は発熱のせいか塗料が剥げている。ダークイエローは先程の Pak38 の場合と大分色調が違っているが、写真の場合は撮影条件によって色調が変わるので、その理由についてはなんとも言えない。ただダークイエローには初期のRAL7028(タイプⅠ)と、1943年夏頃から色調変更されたRAL番号を持たないタイプⅡと呼ばれる2種類が存在した事が知られている。(サンクトペテルブルグ砲兵博物館)

これは装甲製造段階の仕上げとして塗るものと指示された。組立工場では基本的にこの上からダークイエローとレッドブラウンRAL8017の迷彩を行った。各色の境目ははっきりとしており、ダークイエローの占める面積が非常に小さくなっているのが特徴となっている。また末期には車内の塗装(アイボリー)までも廃止されてしまった(錆止め用塗装のままという事)。

これ以後終戦に至るまで、軍からの塗装変更指示はでていない。しかし1944年以降はドイツ国内も混乱しだしており、全ての工場でこれらの命令が貫徹されたのかというと、そういうわけでもなかった。したがって塗装に関する実情は工場ごとに少しづつ違っていた。

カッセルのヘンシェル工場で生産していたティーガーⅡを例にすると、最初ダークイエロー単色で塗装されていたティーガーⅡは、1944年8月19日の命令に従って3色迷彩に変更され、8月末までには規定通り光と影迷彩が導入されている。ジェンツ氏の記述によれば、車内のアイボリーペイントが廃止されたのも、この頃だとしている。9月になると塗料の供給が不安定となり、錆止め用の下塗り塗料(レッドプライマーRAL8012)をダークイエローで全て塗りつぶさないでよいとされてた。ようするに、レッドブラウンRAL8017の変わりにレッドプライマーRAL8012(この色ははレッドブラウンRAL8017よりも赤みが強くかなり明るめの色調であった)を用いよという事である。しかも、迷彩用の塗料は非常に薄く塗られたとされている(これはニーベルンゲン製作所で1945年3月頃に生産されたヤークトティーガーも同様な処置がとられていた事が知られている)。

さらに10月31日からは塗料の供給不足のため、ティーガーⅡの塗装は再びダークイエロー単色のみで出荷された。ダークイエローがない場合は旧基本色であったダークグレーRAL7021を代用したという。

11月からは基本塗装がオリーブグリーンRAL6003となり、規定どおり3色迷彩にもどされた。迷彩パターンは3通りが指示されたというが、その実体はよくわかっていない。

戦争の末期には混乱のためか、3色迷彩は必ずしも守られておらず、ダークイエローとオリーブグリーンの2色迷彩のティーガーⅡも確認できる。

他の生産工場でも概ねこのような塗料不足による、塗装の変動があった事は容易に想像できる。各生産工場の塗装の変化については、今後の研究対象の一つと言えよう。

一つ気になる事例として、チェコのBMM社とスコダ社で生産されていたヘッツァーの塗装があげられる。現在ドイツ側(研究者)の見解としては、ヘッツァーは1944年10月から、旧チェコの塗料を用いて黄、茶、緑の3色迷彩を施していたとしている。迷彩パターンも旧チェコ陸軍のものに似ているので説得力があるが、当のチェコ側の見解としては塗料はチェコのものではなく、ドイツ軍のダークイエロー、オリーブグリーン、レッドブラウンだったとしており、この辺に食い違いが見られる。ところで、古くはAFVプロファイルに載ったカラーイラストのように、ヘッツァーの迷彩色の1つにライトグレーが使われていた事が示されている。これは勘違いでも想像でもなく、実際にイギリス軍がベルギーで捕獲したヘッツァーの塗装がそうだったのである。そのヘッツァーは今もボーヴィントン戦車博物館に展示されており、現在では当時に近い形に復元塗装されているが、迷彩塗装にはグリーン、ブラウン、ライトグレー、ホワイト(当時はアイボリーだったらしい)が使われている。当時これらの塗料がどういう素性のものであったかは不明であるが、もし工場で塗られたものだとしたら、単なる3色迷彩だったとする説と一致しない事になってしまう。果たして真実はどうだったのであろうか。

『色番号と色について』

冒頭でも述べたように、ドイツ軍の塗装色は全てRAL(帝国工業規格)によって定められていた。ここでは1927年から色番号を1から順に制定していったというから、ワイマル共和国軍が定めたアースイエロー17、ブラウン18、グリーン28もRAL番号によるものだったのかもしれない。もっともこれらの色に関する情報は、現在では一切失われてしまったとされている。その後1939年頃から色番号の付け方に変化が生じ、全て4桁の数字で表すようになり(旧番号も4桁数字に改正された)現在に到っている。

ところで色の名称についてはどうかというと、これはあまり統一されていなかったらしく、資料によって呼び方が異なっている。たとえば、RAL7021のダークグレー(ドゥンケルグラウ)

はブラックグレー（シュヴァルツグラウ）とも呼ばれており、RAL8017のレッドブラウン（ロートブラウン）はチョコレートブラウン（ショコラーデンブラウン）とも記載されている。各研究書ではこのような正規資料の呼び名ではない俗称も使用されているので、色の名称は使う人によって様々という状況になっている。したがって正確な色を指定するのにはRAL番号を表示する必要があると言えよう。無論これは実車研究上の立場からの見方である。

当時RALでは各色の配合比データや色見本も存在していたと思われるが、1953年の改正により多くの色が削除され、同時に古い記録が失われてしまったという。現在では当時の陸軍色は、10色前後の色見本が存在する程度でしかないようだ。もっとも筆者は残念ながらこの色見本を入手していない。たとえ手元にあったところで、印刷物でその色を正確に再現する事はおそらく不可能と思われる。気になる方はグランド・パワー1997年２月号とアーマーモデリング第4号を参照してほしい。両者には同じ色見本が掲載されているのだが、色調の印象がかなり異なっており印刷物で色を表現する事がいかに難しい事かがわかる。またこの色見本がいくら公式なものとは言え、50数年前の色を正確に伝えているのかというと、当然それには疑問がある。現にこの色見本に異論を唱える研究者もおり、現状ではこの色見本が決定的な資料だとは言いえない状況である。

二次的資料として当時のカラー写真が存在するが、写真の場合はフィルター、レンズ、フィルム、印画紙、現像液等全てに独自の特性があって、そのものズバリの色が表現される事はまずないといえるし、同じ被写体を写しても撮影条件や使用した器材によって全く異なる写真に仕上がってしまう。この事は当時はもちろん現在においても全く変わっていない。従って色の識別はできても、正確な色調を判断する事は不可能といえる。しいて言えば塗装に対する自分なりのイメージ作りに多少役立ってくれる程度のものでしかない。また白黒写真においても全く同じ事で、トーンの濃淡からでは色を識別する事は不可能である。従って撮影された年代、季節、場所から各自が考察する以外にはない。

もう一つの資料として、現存車両や器材に残存するオリジナル塗料がある。これがたとえ泥の中に埋まっていて空気と遮断されていたとしても、50年以上もの長きに渡り経年変化がなかったというのも信じがたい話であり、通常の状態ならばなおさら塗料の劣化による変色や退色があると見るべきである。したがってこれも色調の決定的な判断材料にはなりえない。





これはⅢ号突撃砲最後期型に残るダークイエロー，レッドブラウンRAL8017, オリーブグリーンRAL6003による3色迷彩塗装例。本車は塗装した時期から推察してダークイエローはタイプⅡのはずである。各色の色調はあくまでも50年経過したものであり、なおかつ写真であり印刷である事をお忘れ無く。ただこれらのカラー写真は、モデリング時の塗装において、自分なりのイメージを確定するための参考にはなってくれるはずである。（パットン戦車博物館）

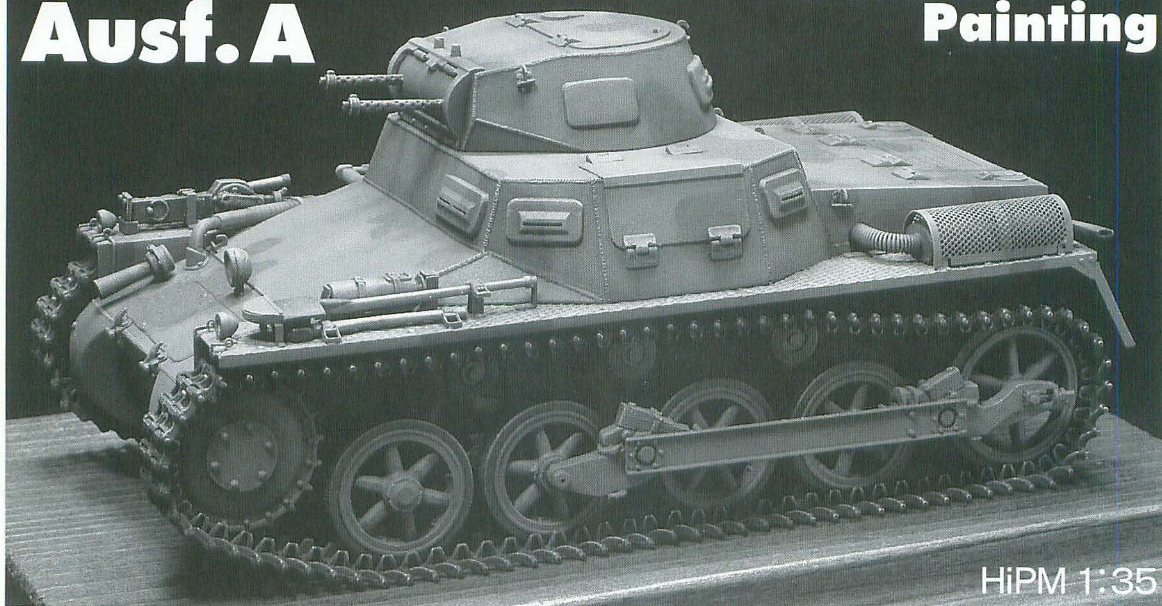
要するに、当時の色を正確に再現する事は限り無く不可能に近いと言える。また塗料は基本的に退色するものであり、戦場という過酷な条件下においては特にそれは顕著だったはずなので、オリジナル塗料の色調にあまりとらわれすぎるのもどうかと思われる。その意味では前出の現存車両に残った色が、退色後のものとして多少の参考になりえるであろう。

本書は模型雑誌であり、本来ならRAL番号に対応する模型用塗料を選定すべきなのであろうが、上記のような不確定要素が多すぎて筆者にはとても「これが正解」と言う勇気もなければデータも持ち合わせていない。模型は説得力だと筆者は考えているので、他人がすばらしいと賛同してくれるものに仕上げられるのであれば、作者のオリジナリティーが塗装色に反映されていてもかまわないと思っている（無論自己満足を主張するなら、どんな色にしても自由である）。また現在ではドイツ陸軍用の模型用塗料も多く発売されているので、指標となるものが全くないという状況でもない。したがってそれらを使うか、混色するかあるいはオリジナルを作るかは個人の裁量におまかせしたい。

──主な参考資料──

・グランド・パワー（1997年2,3,4,5月号）デルタ出版
・アーマーモデリング（Vol.1/2/4/5）　大日本絵画
・スケールアヴィエーション（Vol.2）　大日本絵画
・ドイツ軍車両の塗装とマーク　サンデーアート社
・ティーガー戦車　大日本絵画
・重駆逐戦車　大日本絵画
・ドイツ軍用機の塗装とマーキング　モデルアート社
・第１次大戦機の塗装とマーキング　モデルアート社
・Panzer Colors　SQUADRON/SIGNAL
・TIGER in action　SQUADRON/SIGNAL
・NEW VANGUARD　OSPREY MILITARY
"KINGTIGER"　"TIGER 1"　"STUG 3"
・armor camouflage & markings　George Bradford
"NORTH AFRICA 1940-1943"22
・DIE GEPANZERTEN RADFAHRZEUGE　MOTORBUCH

グレー地にブラウンの2色迷彩法



I号戦車A型　1937年　2色迷彩

HiPM 1/35　　製作：杉村　光生　Mitsuo Sugimura

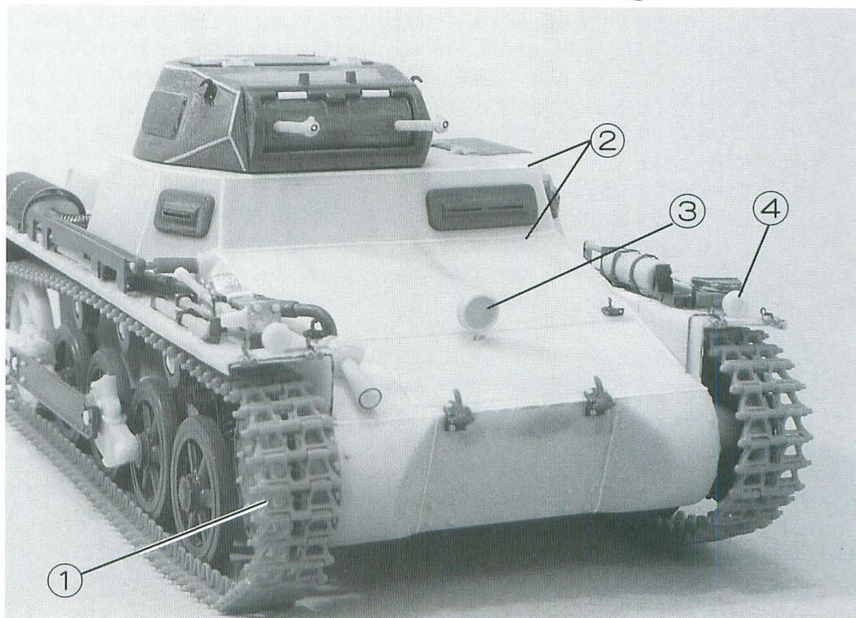
キットについて

チェコ・HiPM社のI号戦車A型は、'98年の発売。I号火焔放射戦車とのコンバーチブルキットで、吸排気口のカバー等、後期型のパーツも入っています。同社の空物キットと同様、ボックスと説明書がとても良く、パッケージングにセンスを感じさせます。

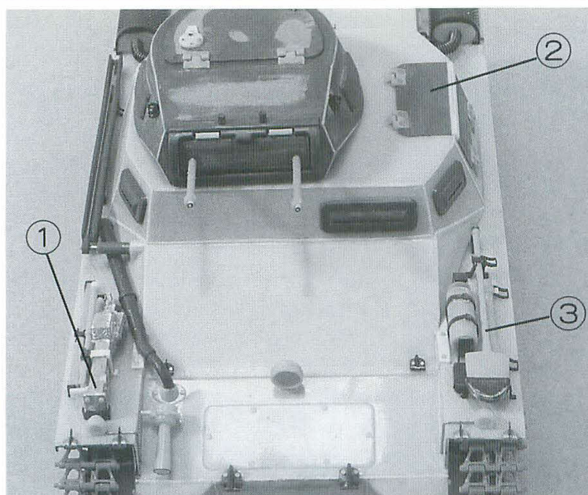
但し、簡易インジェクション（金型がアルミで作られている為、少ない費用で出来るが、数が沢山打てない）というAFVモデラーに馴染みの薄い製法のキットであるため、最近特に組み立て易くなったロシア、東欧圏のプラスチックモデルと同じに考えてしまうと、ちょっと違うかもしれません。

取り敢えず珍しいキットだから形にしてみたい、という方はバリを取って仮組みをキッチリ行えば、箱の中のパーツだけでも立派な完成品が出来ます。

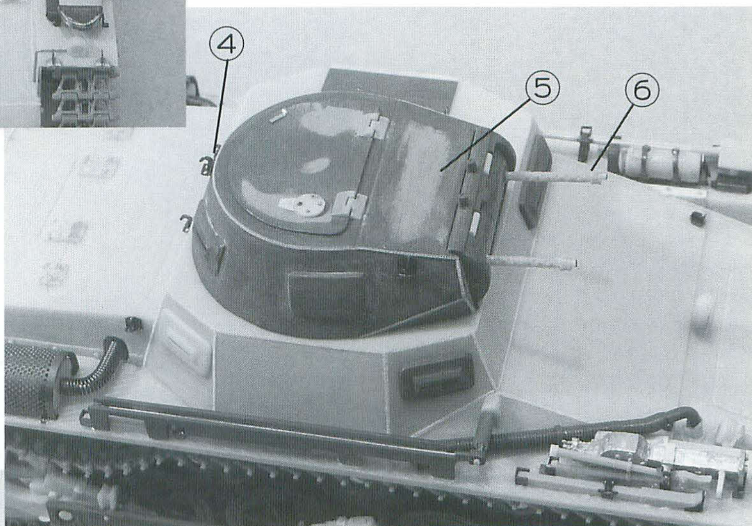
いっちょうモデルカステンのキャタピラや、エデュアルドのエッチングパーツをおごってやるか、と思われている方も、パテ盛りとサンディングで各部



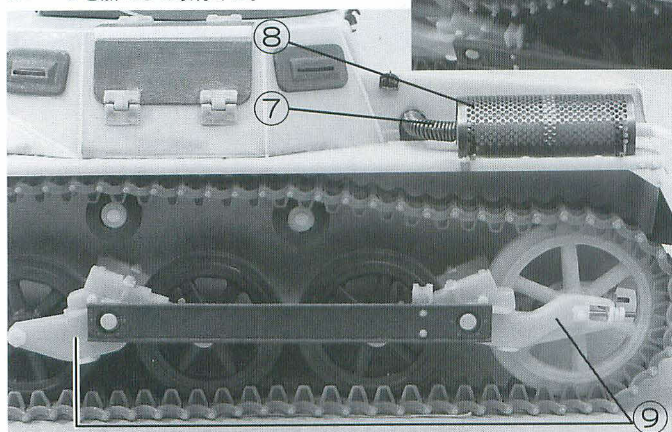
①モデルカステン・I号戦車B型用可動式履帯。
②溶接跡は、目立つ所だけプラペーパー（流し込み接着剤で溶かし、針でモールドを刻む）の細切りで再現。
③前照燈と尾灯はロイヤルモデルのドイツ軍車輌用ライトセットより。
④車幅燈は、グンゼ産業のIII号戦車を数台組むと大量に余るパーツより。こういう事があるので捨てない方が良い。



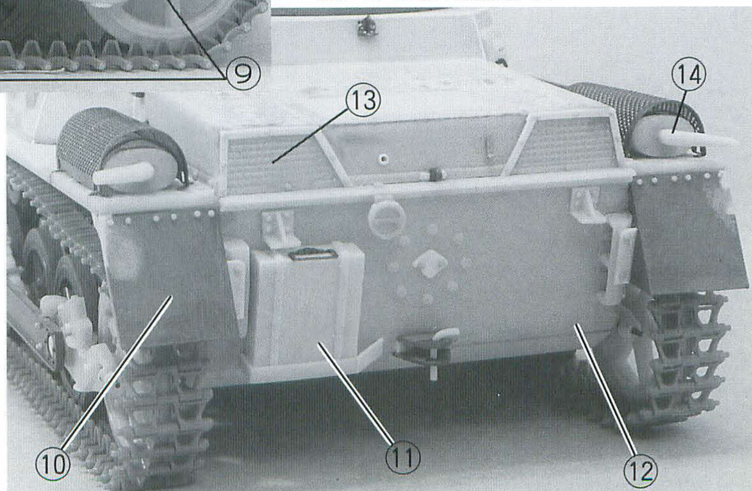
①ジャッキは、ADVの改造キットに入っていた物。どこかで初期型ジャッキ各種を発売してくれませんかねえ。
②ヒンジは、タミヤのⅢ号戦車より。Ⅰ号戦車用にしては大き過ぎるが、エンジン点検ハッチのヒンジの大きさに合わせてしまった。分割式の側面ハッチは、上面、側面とも装甲板に対しツライチにならなければならなかった。
③O. V. M はタミヤのⅣ号戦車車外装備品セットより。エッチングパーツでディテールアップ。
④吊り上げフックはエデュアルドのエッチングパーツ。フックの形状が平らになってしまっているのと、少し大きいので実物とは違う印象だが、精密感が出る。
⑤砲塔は、修整の手間を考えて、ズベズダの物にそっくり交換。ヒケている所をパテで処理する。



⑥MG13は、ドラゴンモデルスのドイツ軍歩兵セットに入っていたMG34を加工した物。
⑦排気管はウェーブのAスプリング。中に真鍮線を通しておく。
⑧エデュアルドのマフラーカバー。同社の製品は幾つか使った事があるが、今までで一番、使った感じが良い。
⑨白い部分がHiPMのパーツ。型ずれによる段差をナイフとパテで慎重に消し、プラバンなどによりディテールアップ
⑩後部泥除けは、エッチングはやめてズベズダのパーツを加工して取付けた。



⑪ジャッキ台はADVの改造パーツより。
⑫車体各部の合わせ目は、ポリエステルパテ、タミヤパテ、プラバン等でスキ間を埋め、サンディングし、エッジや平面を出す。
⑬途中までエッチングパーツを使わないで作るつもりだったので、車体後部の排気口もキットのままで作り進んでいた。やはり、くり貫いてメッシュを入れた方が見栄えが良かったかも。
⑭マフラーはキットの物を加工（ヒケと型ずれの修整）し、排気口を開孔する。



のエッジを出す、型ズレを修整する、ディテールパーツを他キットの部品と交換する等の作業を行なえば、より見映えのする作品になると思います。

今回、私の使用したパーツは、

①ズベズダ（旧イタレリ）Ⅰ号戦車B型（塗装前写真のグレーの部分）
②モデルカステンSK-32 可動式履帯
③エデュアルドⅠ号A型（HiPM用）エッチングパーツ
④タミヤ・ドイツ車外装備品セット
⑤ADV・Ⅰ号A型改造キット（ジャッキ、ジャッキ台、ホーン）

以上です。資料は、Waffen-Arsenal S-48 PANZER Ⅰ、月刊モデルグラフィックス'90年1月号の尾藤満氏の記事などを参考にさせて頂きました。

製作の途中までは、あまり手を入れるつもりは無かったので、ヒンジの大きさ、排気口のメッシュ等、中途半端な印象になってしまいました（言いわけ）。塗装前写真にコメントを入れまし



塗装前写真、塗装時には可動キャタピラははずしておく。

▼タミヤ・スーパーサーフェイサーを吹き終えたところ。今回は金属部品には余り大きなエッチングパーツは使っていないし、ランナーについた状態で軽く表面を荒らしてあるので、特に金属用プライマーは塗っていない。塗装の下地をきちんと作り、傷やヘコミのチェックを行なう。但し、吹き過ぎると表面がザラザラになってしまい直りにくいので注意。



▼車体下面に3㎜ナットを仕込んであるので、ビンの蓋にネジ止めし、ビン自体を握りを兼ねた塗装台としている。別にエビアンでなくても良いが、栄養ドリンクだといつまでも臭いので念のため。基本塗装が終えるまでは、砲塔と起動輪は外して別々に塗り、ウェザリングに入ったら取付けて行なう。



▼サーフェイサーを吹いた写真と変わらないように見えるが（泣）、Mr. カラーニュートラルグレー＋ジャーマングレーをベース色として吹いたところ。ブラウンの迷彩色が濃く見えるように、明る目にした。フェンダーや転輪の陰で良く見えない部分は、予め濃いグレーを塗ってある。



たので、製作記事として見て下さい。

塗　装

Ｉ号戦車と云えばジャーマングレー単色だな、と私は早合点していたのですが、担当氏より「戦前の迷彩で」とのリクエストがあり、相談の結果1937年の「グレー地にブラウン迷彩」で塗装する事にしました。以下、番号順に説明させて頂きます。

①キットの洗浄

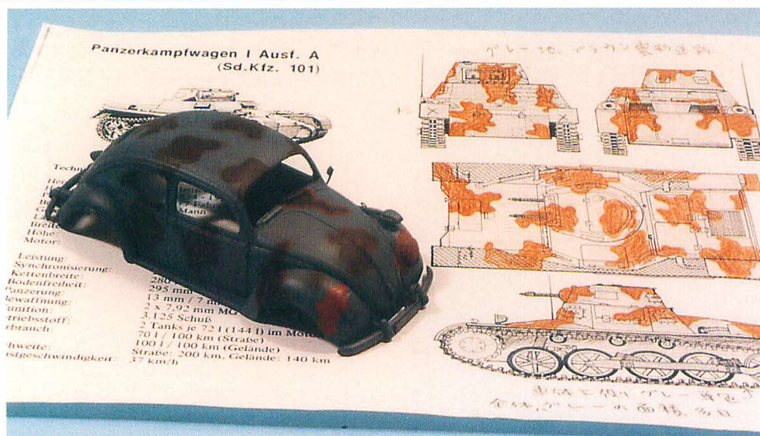
私はパーツ状態や、ヤスリがけ後の製作途中はもち論､塗装前にも必ずキットをクレンザー＋歯ブラシで洗います。手の脂や、埃などで結構汚れているものです。但し、大きな板状の金属パーツの接着面は、隙間に水が入ると中々乾かないので、注意が必要です。洗った後は、２～３日自然乾燥させます。

②サーフェイサー吹き

パテの修整跡、ヤスリがけ部分のチェックの為と､金属部品のプライマー効果も兼ねて、タミヤ・スーパーサーフェイサーを吹き､一晩乾燥させます。

③暗い部分（足周り）を塗る

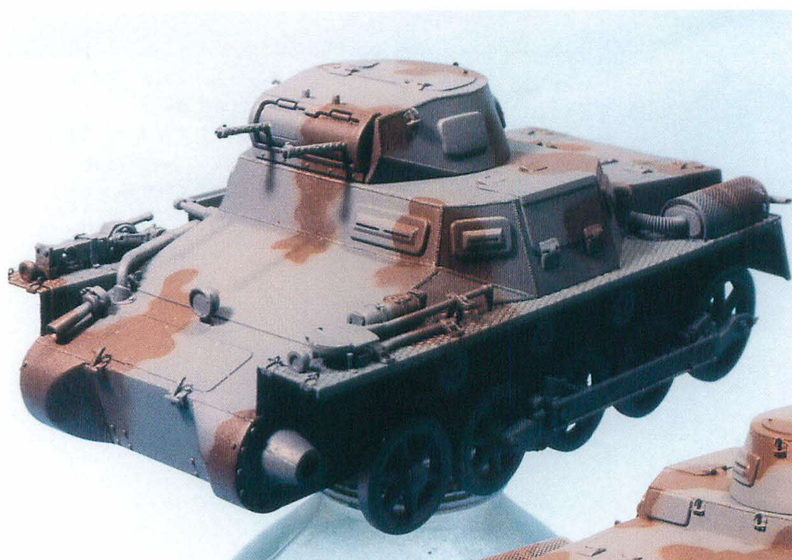
フェンダーの下側、転輪の裏などは後では塗りにくいので、予めベース色



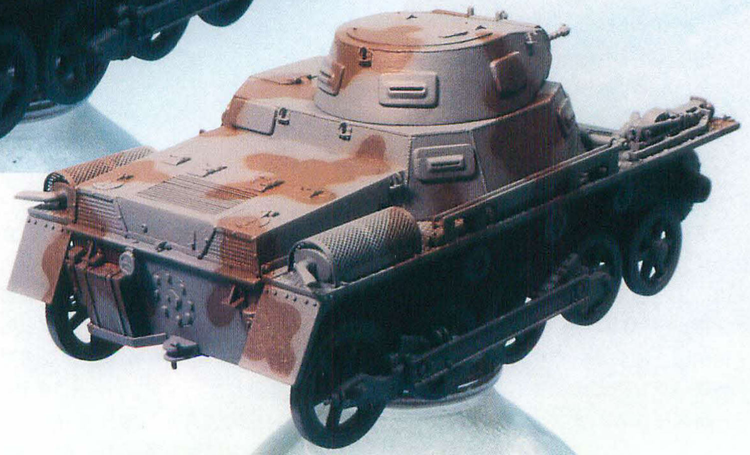
◀1937年〜の２色迷彩についての特別な資料はないので、四面図のコピーに色鉛筆でパターンを考えながら描き入れる。自分で考えた物を参考にして塗るのも何か変だが、この手間を省くと、後でやり直すハメになる可能性が高い。不要なキット（LSのワーゲン）に同じベース色を塗り、迷彩の色と方法をテスト（練習とも言う）してみた。

▶Mr.カラー・レッドブラウンのビンのままの色を、筆で迷彩の輪郭を描き、中をエアブラシの細吹きで埋める方法に決定。図面を見ながら描いてゆくが、様子を見て少しパターンを変更した。フェンダーの縁にかかった迷彩をエアブラシで吹く際に、転輪等に塗料が懸らないようにマスキングしている。





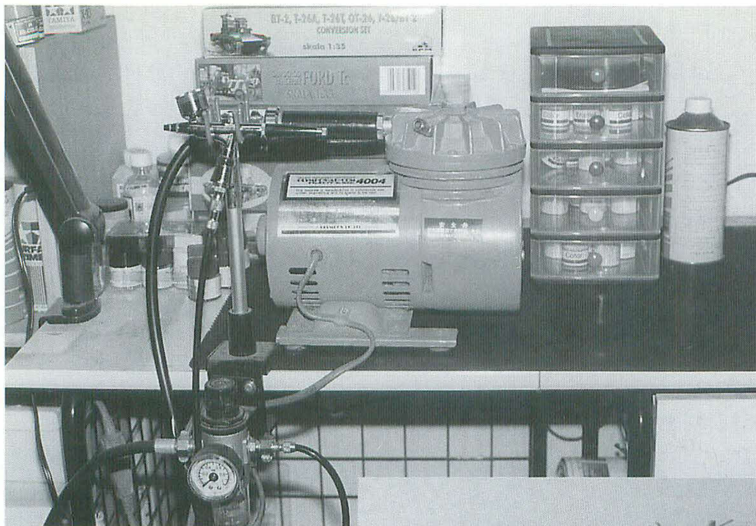
◀▼基本塗装の仕上り。エアブラシを細く絞って少しずつ吹く。使用したコンプレッサーは、オリンポス・アド・コン4004＋グンゼ産業Mr.プロコン·エアフィルターセット（両方とも借り物です）、エアブラシは十数年選手のオリンポス・PC-101。写真は、Mr. カラー・レッドブラウンで迷彩をした後に、ニュートラルグレー＋ジャーマングレーのベース色を溶剤で薄めて全体に軽く吹き、茶色を少しぼやけさせたところ。



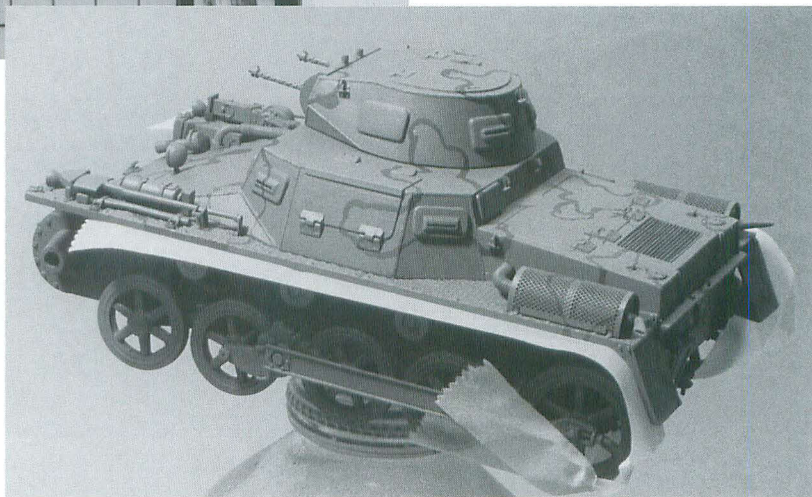
よりも少し暗く塗っておきます。今回ベース色がグレーなので、グンゼ産業Mr. カラーNo.40ジャーマングレー1/2:同No.33ツヤ消しブラック1/2をエアーブラシで吹いています。

④ベース色を塗る

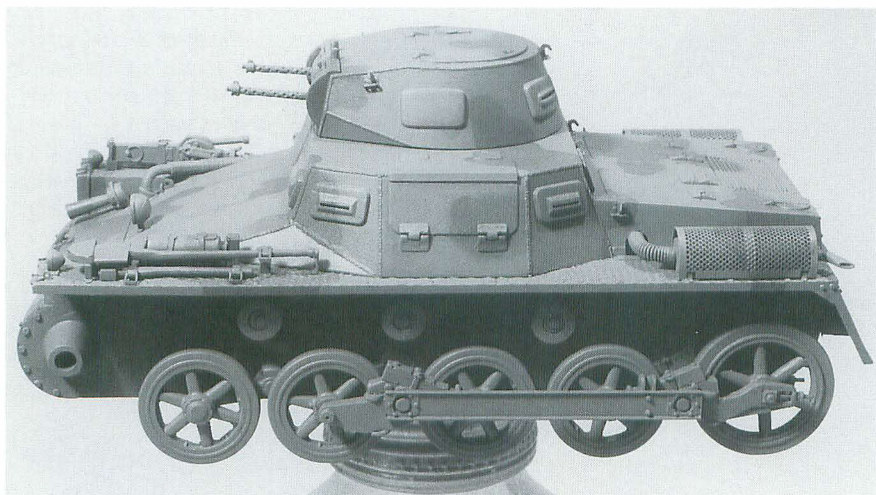
1939年以降のグレー単色塗装ならばグンゼ産業Mr. カラーNo.40ジャーマングレーが向いていますが、今回は濃い



◀これが使用した器材。圧力の大きなコンプレッサーには圧を下げるレギュレーターを使った方がボカシ塗装などはキレイに吹ける。



▶境目のはっきりしている迷彩は筆塗りでないと…と思い込みがちだが、輪郭のみ細筆で描いてあとはエアーブラシを使えば筆塗りが苦手でも、この手の迷彩に苦しむ必要はなくなる。



◀迷彩色の塗装後、茶色をなじませるために薄いグレーでトーンを落す。これで基本塗装が終わり、ウォッシング→細部塗装→ドライブラシへと工程が移って行く。

茶色の迷彩をグレーのベース色に塗る訳ですから、これでは少し暗過ぎる印象です。従ってグンゼ産業Mr. カラーNo.13ニュートラルグレー2/3:同ジャーマングレー1/3をベース色としました。塗料が廻りにくく良く見えない部分は予め暗いグレーで塗ってあるので、上方、斜め横からエアブラシで吹き付けます。

⑤迷彩パターンの決定

その物ズバリの塗装指示図面は、今の所無いので、当時の写真を見ながら四面図のコピーに色鉛筆で数種の迷彩パターンを描いてみました。グレーの部分を多くし、茶色がうるさくならないよう意識しています。キットに直接、パターンを考えながら塗ってゆくと、あそこも、ここもと塗ってしまい結局やり直しという事になる（何回も経験済み）のでこの作業は案外、重要です。

塗料（Mr. カラー・タミヤアクリル・ハンブロール）、色（それぞれの塗料で持っている茶色）、塗り方（筆塗り・筆でパターンを描き、中をエアブラシで吹く・エアーブラシだけで吹く）を不要なキットでテストしてみた結果、Mr. カラーNo.41レッドブラウンを筆と

▶ウオッシング用に使った油絵の具（チューブ）と溶剤のテレピン油（ビン）。下にある３本の角柱状のものがパステルで、これはヤスリで削ってその粉を筆等で塗る。
編：上に映っている箱は何かメッセージでしょうか？ やっぱり渋いアイテムが好きなのですね。



▼OVMやライト、転輪のゴム部を塗り終えた状態。



▼あまり活躍しなかったエナメル系塗料のハンブロール・カラー。こうやって整理すると使い易いという例。



エアーブラシで塗る方法に決めました。

⑥迷彩の塗装

図面を参考に、筆で迷彩の輪郭を描いてゆきますが、OVMの下など、吹き付けにくい所はそのまま塗ってしまいます。転輪に茶色がかからないように簡単にマスキングしてから、エアーブラシを細吹きにして、ていねいに輪郭の内側を描いてゆきます。迷彩を描いた後、溶剤で薄めた（目安として、エアーブラシのカップ半分の溶剤に対し、２～３滴の原液）下地色のグレーを全体にサッと吹き、茶色を落ち着かせます。

⑦ウオッシング

ウオッシングとは、新品の色に黒や茶色を薄く塗ってから拭き取り、古びて見せるという、つまり偽物の骨とう品を作る際に使われる!?ようなテクニックです。私は今まで、この工程を省いていたのですが、小さいＩ号戦車をあまり明る目に仕上げるとオモチャっぽく見えるかもれないと感じ、久し振りに行いました。

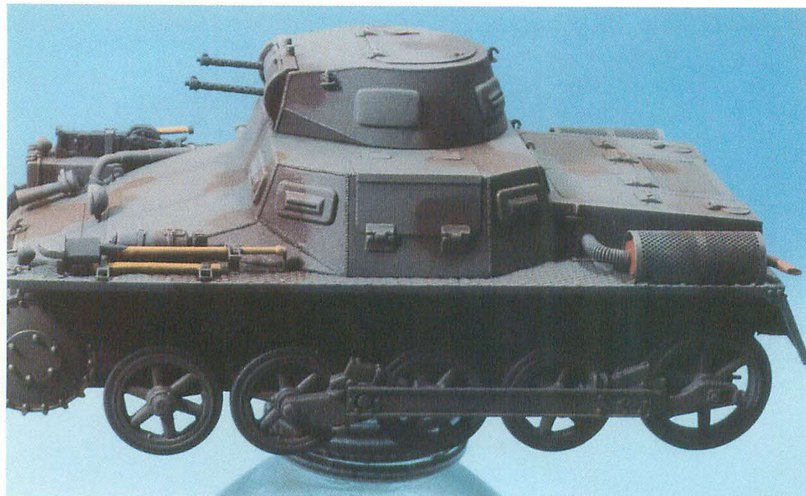
油絵の具（ホルベイン社）バーントアンバー（コゲ茶。様々な陰の部分に使える便利な色）をテレピン油で薄く溶き、全体に刷毛塗りします。半乾きになったら、シミにならない様に、テレピン油を含ませた筆で、垂直方向に払ってゆきます。過不足がないか良くチェックし、必要ならば部分的にやり直します。

⑧部分塗装

転輪のゴムをタミヤ・エナメル塗料XF-1フラットブラック4/5:XF-2フラットホワイト1/5で塗り、もう少し黒い色で機銃、OVMの金属部分を塗ります。OVMの木の柄はタミヤ・アクリル塗料XF-60ダークイエローで塗った後、油絵の具のバーントシェンナ（赤茶）を薄めて塗り、ニス仕上げ風にします。マフラーは、ハンブロール113マットラストで塗っておきます。

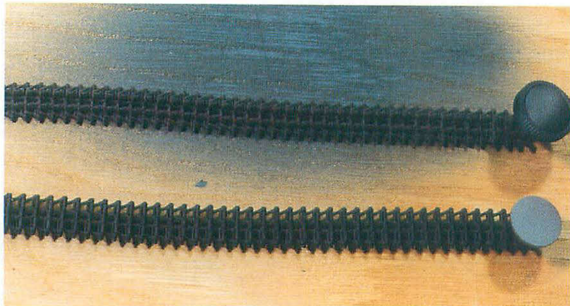
⑨ドライブラシ

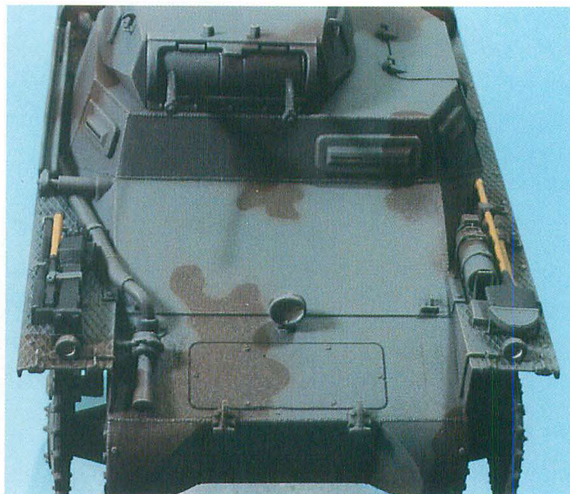
油絵の具のネイプルスイエローとホワイトを混ぜて平筆に取り、ティッシュで良く拭い取ってから、ディテールの凸部分に軽くドライブラシします。私



◀迷彩を終えた後、油絵の具のアンバーでウオッシングを行い、グレーの色調を少し落とす。ティシューは使わずに、テレピン油を含ませた筆でシミにならないように拭き取ってゆく。転輪のゴム部、機銃、OVMの金属部分をタミヤ・エナメルの黒＋白で、マフラーを完全なツヤ消しになるハンブロールのラスト（錆）で。OVMの柄は、後で油絵の具のジェンナーを塗り重ねるため、タミヤアクリルのダークイエローで塗っておく。

▼モデルカステンの可動キャタピラの塗装中。Mr. カラー・つや消しブラック＋ジャーマングレーを塗った後、薄めた土地色（日本戦車色）をサッと吹いている。面倒ならばこのままクロームシルバーをドライブラシしても良いが、今回はこの後、赤茶色のパステル粉末を全体にまぶし、筆でこすってサビ表現を強調している。黒色のベースで、うっすらサビ色が入っている、というのが狙い。





の場合、エッジの強調程度の意味なので、余り多くは行なっていません。

⑩パステル

ヌーベルカレーパステルのセピア、黒、茶を粗いサンドペーパーで粉末にしておきます。セピアをそのまま細筆にとり、溶接跡、ハッチやクラッペの周り、ホイル等にウォッシングの補足として描き込みます。マフラーのススを黒で。全体のアクセントとして、セピアの部分に所々茶を入れてみました。

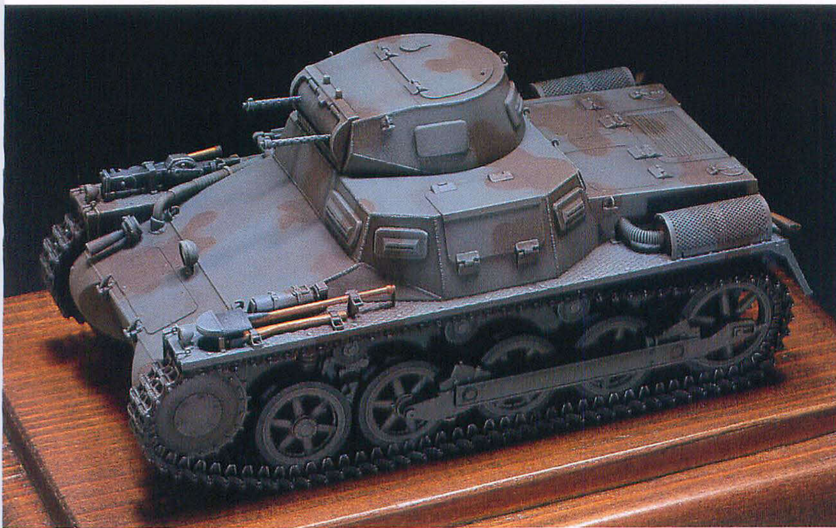
⑪車体の仕上げ

グンゼ産業水性ホビーカラーH12つや消しブラック1/3：H47レッドブラウン2/3をタミヤ・アクリル溶剤で薄め、エアーブラシで全体に雨の流れた跡のように垂直方向に細吹きします。これは好みなので、少しくどくしたい時に限ります（やり過ぎに注意）。足周りの土埃り汚れ表現として、水性ホビーカラーH341マッドを溶剤で薄め、様子を見ながら吹きます。機銃、OVMの金属部分にはタミヤ・ペイントマーカーX-11クロームシルバーを筆に含ませて一度完全に拭きとってから、銀粉をこすり付ける感じにドライブラシします。

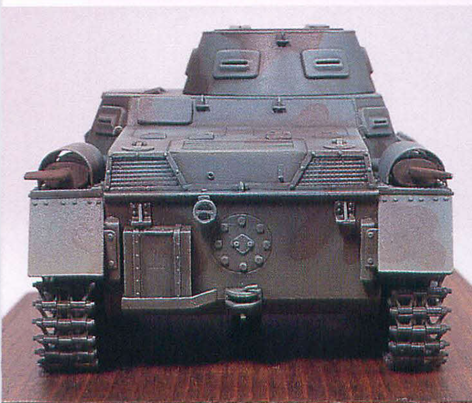
⑫可動式キャタピラの塗装

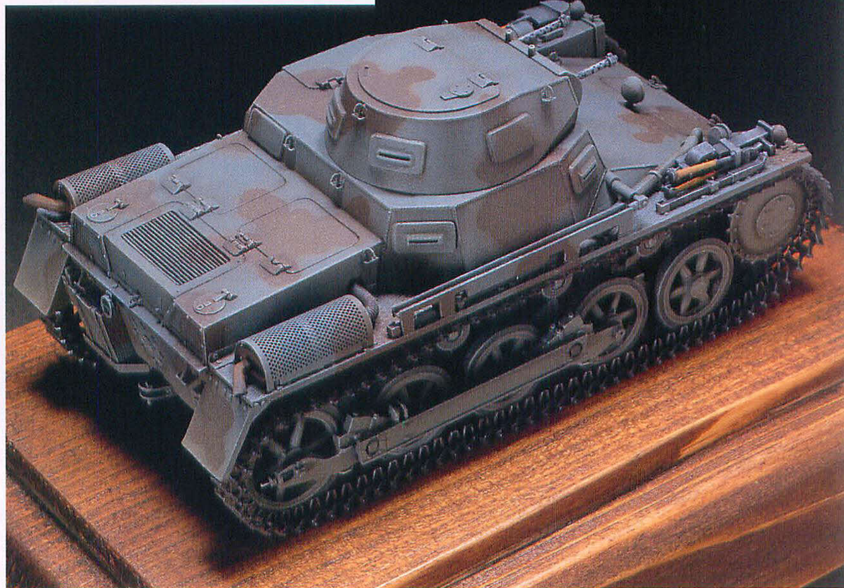
車体と同じ様にサーフェイサーを吹き、乾燥させます。ベニア板に画鋲で留めてから、車体下部に塗ったのと同じグレーをエアブラシで吹き、乾いたらMr. カラーNo.133土埃色を溶剤で薄めてサッと吹きます。茶色のパステル粉末を平筆でキャタピラにまぶし、別



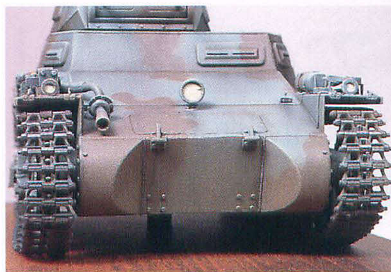




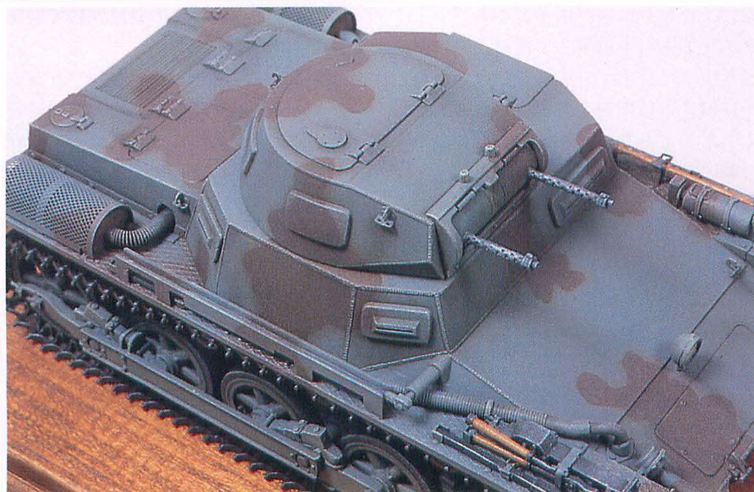




▼シルバーのドライブラシが効果的な履帯



▼雨の流れた跡の表現として水性のつや消し黒とレッドブラウン（グンゼ産業）の混色をエアーブラシを使って上から下へと垂直方向で細吹きしている。



の筆で余分なパステル粉を払い落としてから、ペイントマーカーのシルバーをドライブラシしてキャタピラの完成です。

まとめ

以上、今回のＩ号戦車の塗装方法を説明させてもらいました。ビギナーの読者の方に、情報を取捨選択して頂き、中にひとつでも参考になる事があったならば幸いです。それでは最後に塗装中の注意を。実は④の下地塗装の際に、溶料の原液を車体に大量にこぼしてしまい（パニック！）、慌ててウスメ液で拭き取ったら今度は下地処理のパテがだんだん溶けてきて(パーニック!!)、本当に困りました。皆さんも気をつけましょうね、ってこんなことしてるのは私だけか（←何年作ってても手際の悪いヤツ）。

※このキットの問い合わせ▼バウマン☎03－3795－2666

単色のメリハリを付ける塗装法

SOMUA
S-35

Overall
Dark Grey

GUNZE SANGYO
1:35

ソミュアS-35ドイツ軍仕様「ジャーマングレー単色」

グンゼ産業 1/35

製作：村田　稔　Minoru Murata

はじめに

模型の楽しみ方というのは人それぞれですので塗装にしても目標としてコンテストに出品するような高度なものからコレクションとして数をこなしていくので細部にはそれ程こだわらないというものまで様々でしょう。

では私はというと完成度の高い模型を土日2日を中心に1ヶ月位で完成(ほぼストレートで製作）させて完成品を入れる棚が埋まっていくのが楽しいという作り方をしています。ですから塗装にそれ程の時間を（乾燥時間を除けば数時間）かけるわけではありませんが出来れば作品が新品の戦車ではなく時間の経過による汚れや退色が塗装によって表現されメリハリがきいて見える様になればと思っています。

塗装の前準備

私は先ず袋を開けたら洗剤でパーツを洗ってしまいます。洗剤のタイプに特にこだわりはありませんがスプレータイプのものを噴霧して歯ブラシで一通り擦っています。洗浄をしないと確かに製作中に指先などがツルツルしてくるものもありこれがどの程度塗装時の弊害になるかはわかりませんが大した手間ではありませんので必須作業にしています。洗浄したパーツはエアー（OA機器用の物）で水滴を吹き飛ばし完全に乾燥するのに私は一晩待ちます。

ソミュアS35の組立

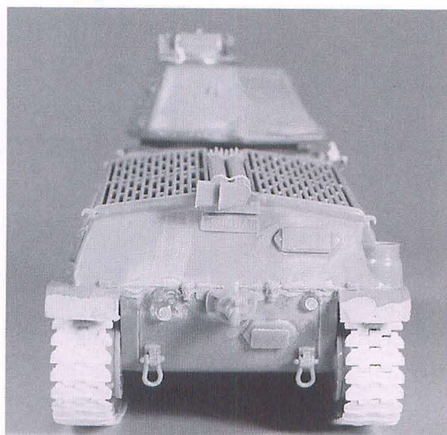
このキットはエレール製の物にドイツ軍仕様とする為にメタルパーツでキューポラ、ハッチ、アンテナベースとデカール、連結式キャタピラを加えた物でキット自体は一昔前といった感じです。ですから組み立て自体も部品自体の歪みなどもありスラスラという訳にはいきませんが唯一のキットですし完成してみるとその姿は独特で興味深いものです。

資料としてはデルタ出版刊『グランドパワー95年9月号第二次大戦のフランス軍用車両』があげられますが現在絶版となってしまっています。さて不明の点の多い製作となってしまいましたが手を入れた部分を記します。

①ライト及びホーンのガードをプラバンで作り直す。(部品番号19.81)
②車体前面下部装甲板の曲面の表現がきついようなのでのでパテを盛って調整。(箱絵参照)
③車体、砲塔の装甲バイザーの形状修整とモールドのスジ彫り化。(部品番号12. 39. 40)

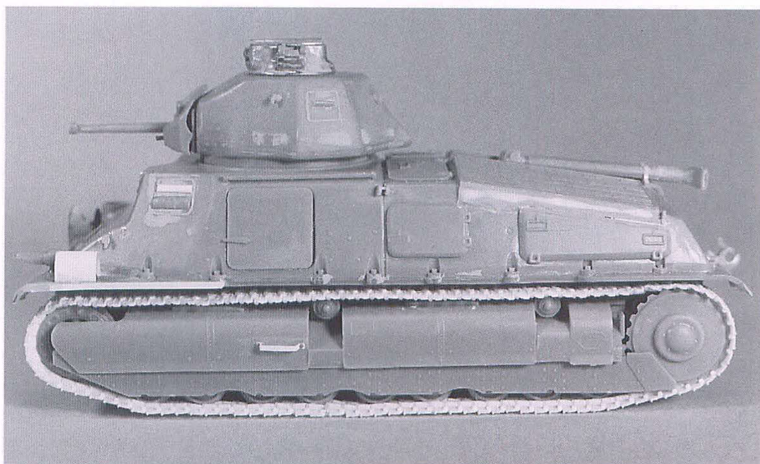


サーフェイサーを吹く前に最終チェックをして傷・ヒケ等をパテ、溶きパテで埋めておく。ライトはメッシュを入れたので前もって筆で基本色を塗った。
サーフェイサーがかからないように、ライト類にマスキングする。

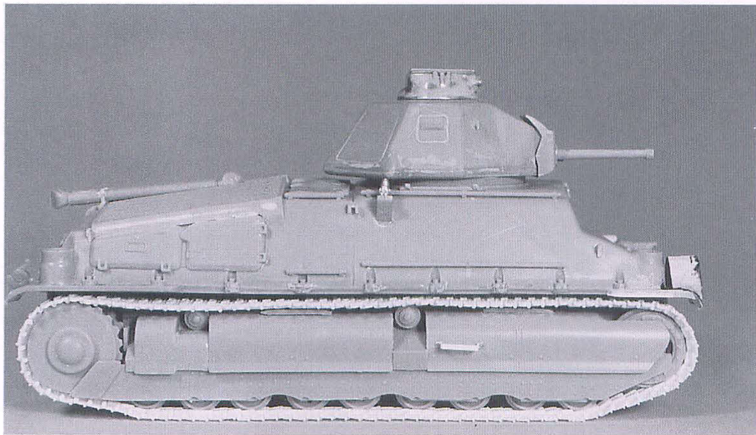




アンテナには加工が便利なエバーグリーンのプラボウロッド直径0.5㎜を使用。



パテで修整をしてもサーフェイサーを吹くと気が付かなかった箇所が現われる。



④排気管固定バンドをプラペーパーで追加。
⑤メタルパーツ製アンテナベースをヤスリで薄く削る。
⑥車体及び砲塔のフックを修整。(部品番号60．61．79．ドラゴンのⅢ号戦車の部品を加工して使用)
⑦サスペンション部装甲板についている取っ手をプラバンで自作。
⑧車体前部のフェンダー内側に泥除け部をプラバンで追加取り付け。(箱絵参照)
⑨砲口は開口、機銃は真鍮パイプに取り替え。
⑩アンテナロッドはエバーグリーンスケールモデルズの0.5㎜のプラボウロッドを使用。実物のアンテナロッドは先端になるに従って細くなっていくのですが金属線では加工に時間がかかり、伸しランナーはなかなか真っ直ぐにはなってくれずに苦労しましたが、このプラボウをナイフで大まかに削りヤスリで仕上げてやれば楽に作ることが出来ました。

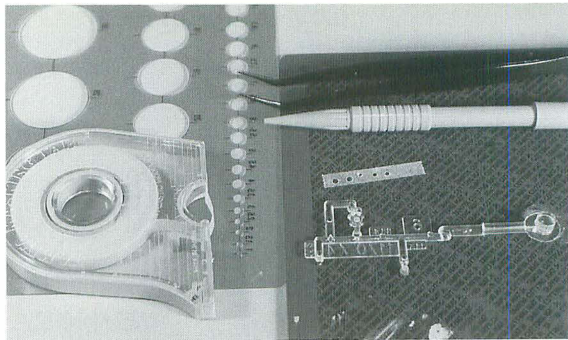
私は全て組み立てた上で塗装に入る事にしています。これは単に楽しみ方の問題で仕事を終えてからの限られた時間の中で製作しますので平日は組み立てだけを楽しみ、塗装は休日の自然光のある中で一日かけて作業したいという理由からです。

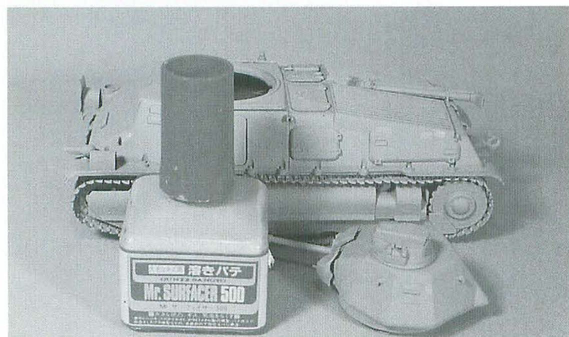
下地処理は？

私が模型作りを再開した時やはり模型の技法書を読んだのですがどうもサーフェイサー処理の必然性がピンときませんでした。要するに溶きパテを吹き付ける訳ですからモールドにシャープさがなくなると思ったのですが、実際にタミヤのスーパーサーフェイサーを使用してみるとモールドがダルくなることもありませんし、ヒケや傷の発見のしやすさとキット以外のパーツや素材を用いたときにでる色の違いと質感を揃えて、その後の塗料ののりをよくする効果があります。

ただしサーフェイサーを吹けば傷やヒケが消えるわけではありませんので吹き付ける前に傷、ヒケ等は溶きパテ(グンゼ産業の溶きパテMr.サーフェイサー500)をよく攪拌してから筆で塗りますが深い傷等はチューブ入りのタ







Ⓐタミヤのスーパーサーフェイサーを全体に吹き付ける。素材の色の違いを整え、塗料ののりが良くなる。
Ⓑ透明パーツにマスキングをする。小径の円を切る時はケガキ針とテンプレートを用いて行う。マスキングテープをカッティングマットに針り、テンプレートをあてケガキ針で力を入れず何回もなぞって切る。
Ⓒサーフェイサー塗付後に現われた傷、ヒケには溶きパテ（グンゼ産業Mr. サーフェイサー500）を筆塗りする。
Ⓓ筆塗りした溶きパテはしっかり硬化させてから耐水ペーパー（400～600番位）でならす。段差が出ないよう修整箇所の周りにもかける。



ミヤパテをヘラ（私はタミヤ調色スティックを使用）で盛りつけます。完全にパテが硬化しましたら紙ヤスリ（耐水ペーパー400番から600番位）でパテで修整した箇所を削りますが周りも自然にかけないと段差となってしまいますので注意が必要です。また傷やヒケがなくともタミヤのスーパーサーフェイサーは装甲板のざらついた感じが出るので私は常用しています。

サーフェイサーの塗付

さて前処理が終わりましたら削りかすや埃を除去しますが私はエアーで吹き飛ばしています。また戦車の場合あまり必要ありませんがライトなどクリアーパーツを使ってある場合はマスキングテープ（タミヤマスキングテープを使用、ケースに入っていて使い易い）を用いてマスキングを忘れずに施します。

缶はよく振って使い、模型との距離を20から30㎝とりながら一度に厚く塗らずにタレないよう様子を見ながら間をとって何回かに分けて吹いていきます。なお砲塔と車体は別々に作業しないと回転しなくなってしまうことがあります。ここで発見した傷、ヒケは溶きパテを筆で塗って再び修整します。どうもサーフェイサーと溶きパテの相性が今ひとつのような気がしますので大事をとって一晩かけて硬化させています。

パテの完全硬化後、紙ヤスリを使う際、段差が出ないように自然な仕上がりになるようにするのは前述と同じです。ここで最終チェックをしてなおす箇所があれば作業の繰り返しとなります。仕上げのサーフェイサーは前回よりタレやすいので気を付けて作業します。

使用用具

ここからはエアーブラシを使いますが私の道具はタミヤのスプレーワークエアーブラシセットにアダプターを付けて家庭用電源からも使用できるようした物です。これで不自由してはいませんでしたが不注意から付属のエアーブラシを壊してしまったのを機にタミヤのスプレーワークHGエアーブラシ（ダブルアクション）に代えました。

コンプレッサーの均一な低圧力のエアーでしたら扱いやすいもので、これから模型を始める方にもお勧めできると思います。

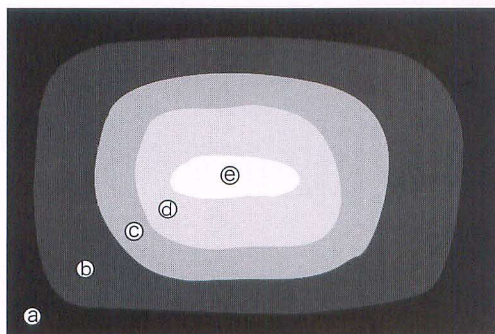
塗装で目指している事

その昔、缶スプレーで初めて塗装した時は今までの筆塗りと違い、そのムラのない仕上がりに感動したものですが何か足りないと漠然と思ったもので



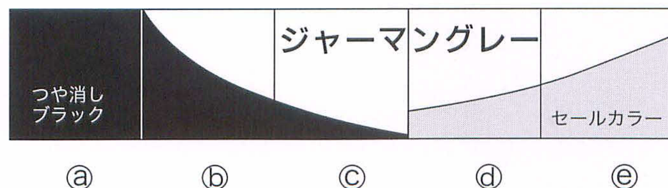
使用したタミヤのスプレーワークとHGエアーブラシ。

エアーブラシによるグラデーション塗装略図



光の当り方によってⓐ～ⓔの面積は変化する。

混色概略図




ジャーマングレーの明暗差をつけた塗装でメリハリを出した砲塔。

した。その当時何かの記事でティッシュペーパーを筆代わりにエナメルのダークイエローを（グレーベースの場合）ナットや泥除け部にカスらせるという方法が載っていてこの技法で当時の私は満足しました。その後一時、私は模型作りを離れていきました。現在、模型を再開してみると塗装方法についての情報は多くそれを私なりに解釈し今回、ソミュアS35を塗装してみました。

①色をムラなくきれいに塗ってもリアルにはならない（実物と模型の違い）。

②光による陰と陽（明と暗）を考えるが絵画の様に光源を固定した位置で考えて影を想定する必要はない（自分のイメージで）。

③明暗で各部位（部品）にメリハリをつける事に重点をおく（ソミュアの砲塔を例にとると上面、側面の７角形、砲塔基部の各面があり、キューポラ、ハッチ、防盾、砲、フックなどの部品による集合体で成り立っています。この各部品は取り付けられて上下、角度、内外側、高低差が出るのでそれにより生じる明暗をそれらく塗装する事によって各部位の存在を表現したい）。

④装甲板などの平面体のものでは溶接跡やボルト等で囲まれた面を一区画として捉え、装甲板の外側から内側の中心部に向かって暗から明として４段階前後で塗装表現しますので外郭はつや消しブラックⓐを残し、次はジャーマングレーにつや消しブラックを加えⓑ、その内側はジャーマングレーにつや消しブラックを混ぜる比率を減らしⓒ、中心に近づくに従いつや消しブラックに代えてグンゼのMr. カラー45番セールカラー（バフ系）を加えていくⓓⓔといった具合です。（図参照）

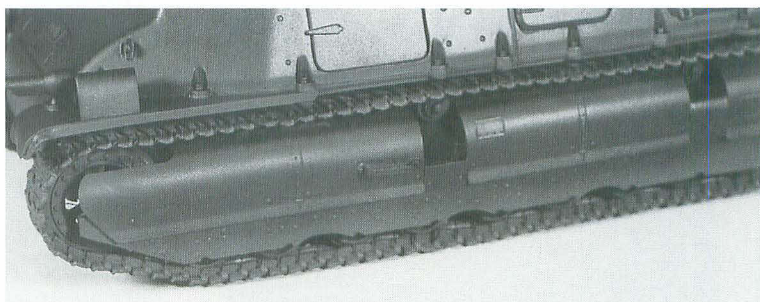
下塗り（影をつくる）

塗装し始める前にマスキングしておく箇所は処理し、埃などは除いておきます。ここではエアーブラシでグンゼ産業のMr. カラー33番つや消しブラックを使って全体を塗っていきます。塗料は専用の薄め液を使って薄めて使用しますが私の場合は概ね塗料と同量より多めというところで、人により使い易いうすさがあると思います。ここでは影をつくる為の作業ですからあまり薄くしない方が作業効率はいいでしょう。また塗料の入り難い所は塗り残しのないよう注意します（凹表現になっているパネル部などは特に注意して塗り残しがないように）。この上に色を今



◀下塗りの後、キャピタラにタミヤのアクリル塗料ハルレッドをエアーブラシを使って塗装する。

▶ハルレッドは車体に多少ついてしまっても後から修整できるので、この時点ではあまり気にしない。





◀エナメルのメタリックグレイを薄めた塗料で、下地のハルレッドが完全に隠れないように塗って行く。

後重ねていくのですから充分に乾燥させて下さい（私は一晩おいています）。

キャタピラの塗装

このキットは連結組立式（無可動）のキャタピラになっています。塗装前にキャタピラがしっかりと接着されていることを確認して下さい、泥の表現をする場合はパテを使うのもいいでしょう。

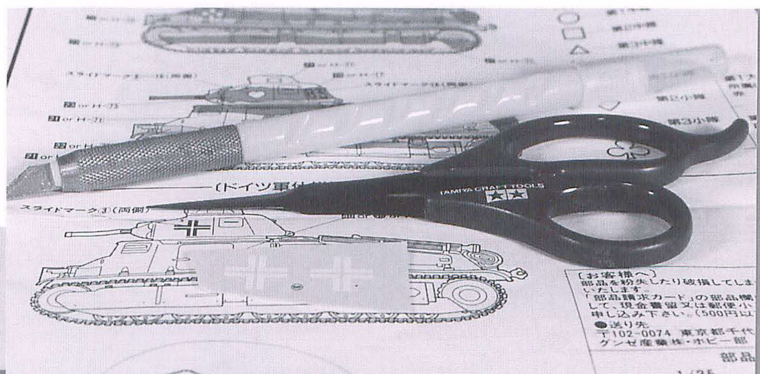
塗料はつや消しの具合がいいのでタミヤのアクリルカラーXF9ハルレッドを使いました。これもエアーブラシで吹き付けますが濃い場合は私はグンゼ産業のMr. カラーうすめ液で希釈していますが特に問題はないようです。エアーブラシを調整して細吹きしますが車体などに塗料が付いてしまっても汚し塗装の時に使う泥系の色ですし、これから車体にも色を重ねていきますので問題はありません。

続いてタミヤのエナメルのXF56メタリックグレイを下地のハルレッドが残るように同じくタミヤのエナメル塗料うすめ液で薄めたものを平筆を使ってキャタピラに塗っていきます。塗料を思いの通りの濃さにするのは難しいものです、初めから目立つところなどには塗らずにキャタピラの下弦の見えないところで試してみて下さい。メタリックグレイなどの金属色は指などに付けると指紋が模型に残ったりしますがその場合は綿棒にエナメル塗料うすめ液を少し染み込ませて拭き取って下さい（うすめ液は必ず模型メーカーが発売している専用のものを使って下さい。ホームセンターなどで売っているペンキ用のものは性質が違うものもありますので）。

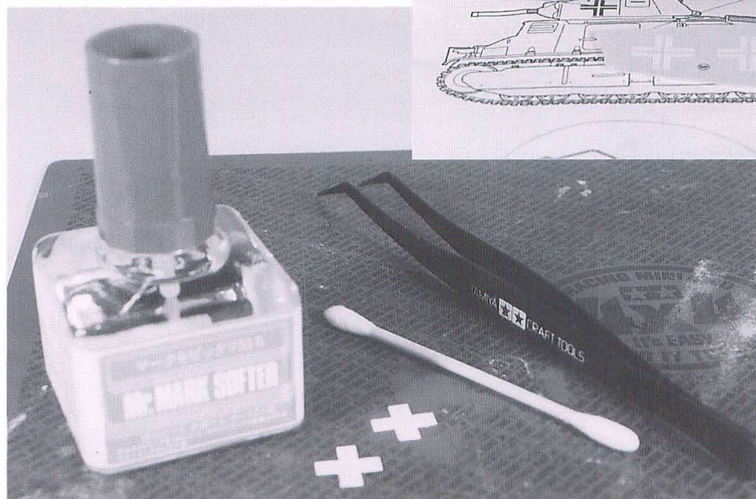




下地色としてMr. カラー33番つや消しブラックを塗ったもの（左）とジャーマングレーの4段階のグラデーションをかけたもの（右）。モノクロ頁の為、分かりにくいのでカラー頁を参照（40,41頁）。



▶デカールははさみで台紙を大まかに切り取ってから、デザインナイフで透明な余白をカットする。



◀デカールは端のギリギリまで切り込み、マークソフターを使って貼り、綿棒を横にして腹の部分でローラのように転してなじませる。

車体色を吹き付ける

前述したようにつや消しブラックから始めて今回は５段階で吹き付け塗装をしていきますがジャーマングレイベースですと写真で見てもそれ程の変化は感じられないかと思います。ここではエアーブラシで作業することによってその自然なグラデーションをいかしたいと思います。文章ではどうも伝えるのは難しいかと思いますので写真で作業を順に説明してみました（カラー40,41頁）。

デカールを貼る

次にドライブラシをかけますのでその前にデカールを貼っておかないと不自然な仕上がりとなってしまいます。さて今回は大きめのスライドマークが２つだけですがどうも説明図と箱絵と模型の３つでそれぞれ位置関係が違っています。まあここは特定の車両を作るわけでもありませんので適当と思われる場所に決めました。

デカールは台紙ごとデザインナイフと定規で十字の外側の透明な余白部分をカットしてしまいますが、今回は十字の中の余白部分は面積も小さいのでそのまま残してあります。カットしたものは水に５秒程浸しティッシュペーパーなどの吸水性のいいものの上に置き水滴をとります。スライドマークを貼る位置にマークソフターを軽く塗ってデカールを台紙からその上に滑らし、位置がずれているようでしたら綿棒で軽く押して修整して下さい。位置が決まりましたら余分な水分をとりデカールの上からマークソフターを塗り綿棒の腹の部分をローラーの様に使って模型の地肌と馴染ませます。

汚し塗装

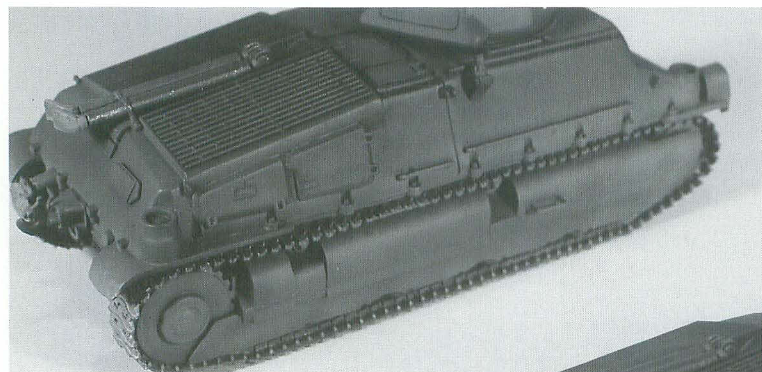
汚しは個人の好みが分かれるところではないでしょうか。ジオラマ仕立てならおのずからベースに合った汚れ方になるのでしょうが単独の作品となると作り手の好みで汚れ程度は様々でしょう。私は足周りを中心に車体にも



汚し塗装に使ったグンゼ産業水性ホビーカラー。左よりミドルストーン、ダークアース、ラフサンド、マッド、スート（すす）、ラスト（さび）、焼鉄色、今回はラフサンドは未使用。



ドライブラシ専用筆とドライブラシ用に使ったタミヤのエナメル塗料2種（フィールドブルー、ダークイエロー）。





◀どろ汚れをエアーブラシで吹く。キャタピラの近くは茶色の濃い色、遠くは薄い色に。
▼ドライブラシをかけた状態。エッジやモールドが浮き出た。

土埃がかかった位の軽いものを塗装表現しています。

塗料はグンゼ産業の水性ホビーカラーをつや消し（半光沢のものはフラットベースを混ぜる）にしてエアーブラシを使用しました。泥汚れとしてミドルストーン、ダークアース、マッドを使用、排気管にはスート（すす)、ラスト（錆)、焼鉄色です。

汚し塗装には順番がありますが、今回ですと時間の経過と共に発生した錆の上に泥が跳ねがあるわけで、泥の上に錆が出ると不自然になってしまいます。泥は新しい泥が跳ねる訳ですからぬれた感じに（濃い)、遠くの跳ねた泥は早く乾き始めるでしょうから乾いた感じに（明るい）というように考えました（私はダークアース→ミドルストーン→マッドの順で使用しましたが再考の要ありです)。

フェンダーは潰れて錆も出ていると想定しましたのでラストを筆で塗りその上に泥表現をします。

排気管は筆で焼鉄色を塗り下地の焼鉄色を完全に隠さないように筆でラスト、排気口にはすす汚れとしてエアーブラシでスートを吹き、砲口や排気ガスがあたる車体後部にも塗装します。

ドライブラシ

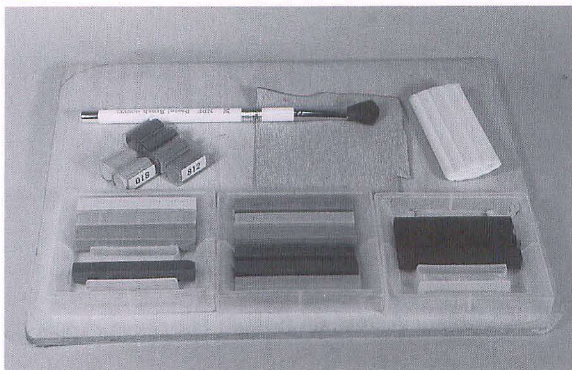
最初は友人からドライブラシの説明を聞いてもぼかし筆のイメージしかわきませんでした。

要はカサカサの状態の塗料で筆を縦横に動かせば模型の凸部の引っかかる所にしか塗料が残らないので、地より明るい色を選べば凸部の縁で着色されてよりディテールが引き立つということだと思います。しかしここまでエアーブラシを使って車体色等にグラデーションをつけてきましたのでドライブラシは1回のみとしました（ドライブラシは通常では数段階色調を変えて作業していますがそれではエアーブラシの効果が薄れてしまいそうなので)。

使用した筆はドライブラシ専用筆を使っていますが平筆で問題ないようです、塗料は乾燥時間が比較的長く塗料ののびもいいのでタミヤのエナメルを使いました。ジャーマングレイより明るい色で近似のものとしてフィールドブルーに少量ダークイエローを混入しました。これを少々、筆につけてティシュペーパー等に擦ってもほとんど色がでないという状態にしたら最後に私は手の平で確かめてから作業します。ドライブラシ実施箇所はハッチ等のヒンジ、ボルト等の凸部のディテールを浮き立たせたいものに限り前述の理由から軽くかけています。

パステル

パステルはヌーベルというものが種類も多く専用のブラシから練り消しまで出ていて画材屋でも手に入れやすいです。これを600番前後の紙ヤスリで粉



パステルの道具。専用の筆とねり消しもある。粉にするヤスリは600番を使用した。

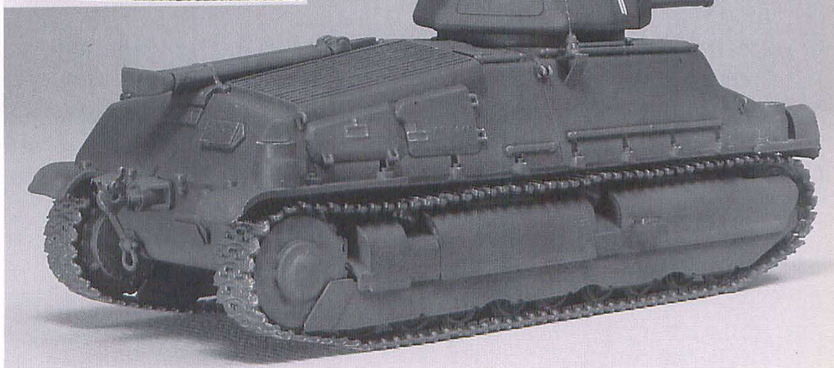

スポット的にメリハリを付けるのに、パステルの明るい灰色を直接使う。




▲強く付きすぎたパステルをねり消しで取って調整する。軽くたたくように使う。

◀排気管に直接、コゲ茶のパステルを擦り込む（フェンダーのさび部分にも）。ここも付きすぎたらねり消しで調整。





にして筆にのせて擦りつけます。泥や埃の感じは何しろ粉で表現するのですからエアブラシより上ですし、私の場合、泥も明暗３種類の茶系のパステルを使うのですがその混ざり合ったグラデーションはこれでしか表現できないものでしょう。また車体の上部などに埃がついている状態などはサンド系のパステルでうっすらとのせてやれば簡単にリアルに出来ます。パステルはのっているだけですから定着液等を使わないと触ったときなど指紋が残ってしまいます。ただし残念なことに専用の定着液を使っては使用後のあのかさついた埃っぽさがなくなってしまいますので、私は定着液を使用せず出来るだけ触らぬように注意しています。

またそのかさつき感を利用して錆の箇所にそのまま赤茶系のパステルを擦ってから筆で余分のパステルを掃き落とすということも今回やってみましたが塗料では出せない表現が出来たと思います。

これの応用でドライブラシでの表現が足りなかった小さな部分（ハッチのヒンジや取っ手等）にジャーマングレーより明るい灰色のパステルを同じく直接擦りつけて筆などで払い練りケシで更に気になる余分部分も軽く叩くようにすることで奇麗に消すことが出来ますのでピンポイント的にも可能ですし、補修用としても有効ではないでしょうか。何しろ失敗しても練りケシで消してしまうことが出来ますので初めての方でもリスクは少ないと思います。

おわりに

どうも原稿（文章表現）と写真の色表現の限界、そして理屈と実際の私の技術の差があり伝わり難い部分が多く申し訳なく思います。１つでもヒントになることがあればよかったのですが。

自作塗装ブース製作法

予算一万円以内

村田 稔



はじめに

今年でタミヤのミリタリーミニチュアシリーズも30歳だそうで私の場合小学校3、4年生時にパラシューター付きのⅢ号突撃砲を作ったのが最初でした。その後3年間位はただただ作る事が楽しくて工具は爪切りのみで、塗装する事もなく消費していきました。その後、友人の色を付けたウイリスジープを見て感動し、筆塗りで始め→缶スプレー→オリンポスヤング（エアー缶）→エアーブラシ（コンプレッサー）と現在に至っています。

今でも筆塗りはムラになり缶スプレーはタレてしまうというわけで行き着いたのがタミヤスプレーワークHGエアーブラシ（ダブルアクション）とスプレーワーク・エアーブラシセットのコンプレッサーです。特に考えがあって購入したわけではなく、その時々で手の届く物を揃えていったというところです。道具は今でもこれで不足はありませんが一つ障害がありましたそれはカミサンの存在でした。

高校3年生で模型は中断し再開したのが30歳の時で流石にコタツで吹き付け塗装が出来ないぐらいの分別がありましたので、最初は風呂場を塗装場所としていましたが冬場は寒く湿度の影響も受けてしまうのですが換気扇と汚しても洗えるという便利さの為、この時代が3年程続きました。その後、木工の趣味に足を踏み入れた時に、もっと快適に模型（塗装作業）が出来ないものかと作ったのが塗装ブースでした。

塗装ブースの製作

①塗料の霧（溶剤臭）を部屋に拡散させない効果があること。
②取り外しが出来、なるべく場所はとらないよう分解可能な事。
③取り付けも容易なこと。
④予算は1万円程度、製作時間も2時間程度で完成出来ること。

材　料

①衣料収納などに使う透明のボックス（横60cm、高さ40cm、奥行き35cmの物を私は使用しています）3000円。
②木製の床材（32cm180cm）2000円。
③フィルター付き換気扇
（羽直径20cm位で本体の幅30cmまでの物、フィルターがあると吸い込み量もテープなどを貼ることにより調整できますし掃除も楽です）4000円前後より。

製作の前に

先ず換気扇を付ける窓を決めねばなりませんが場所としては窓枠がしっかりしていること(アルミサッシがよい)、隣家や通行人の支障にならない風が吹き付けない場所がいいでしょう。

次に自分の作業姿勢（椅子か床に座るか）で塗装ブースの高さを決めます





上 換気扇の幅は30cmを超えないものを使用。

右 ボックスを置くための作業台（ベンチ）で高さ調整。

図1

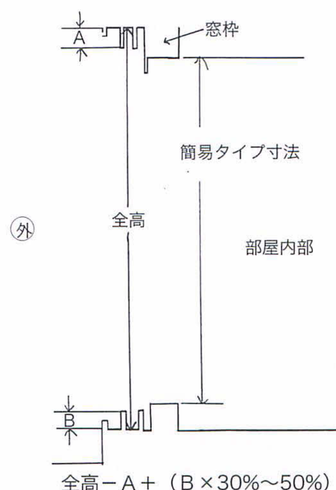
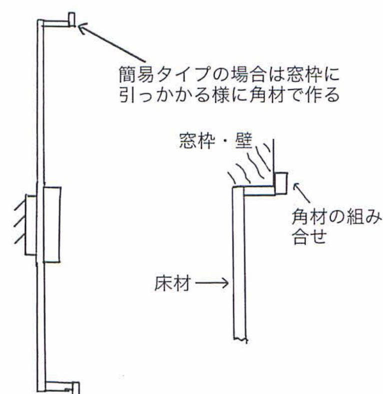


図2



が、窓の左右どちらかの端に換気扇を付けるので柱があったりブースを置く寸法がとれない場所はさけます。

製　　作

①衣料ボックスを作業する高さに置きます。椅子に座る場合は机（私は日曜大工用の作業台4000円位を使用しています）などが必要になりますし、床に座る時でもちゃぶ台のような低いテーブルや箱状の物を使った方が塗装作業効率がいいでしょう。

②換気扇を取り付ける床材を窓枠に合わせて切断ないしは延長します。取り付け及び取り外しが容易なように床材の長さを決めます。木造住宅の雨戸や障子戸、襖の様に上部の溝の深さのアソビを利用して取り付ける方法と同じです。では寸法のとりかたです。

全高（レール溝底の上から下までの寸法）－A（上のレールの溝の深さ）＋Bの30から50パーセントの寸法（上の溝の深さにより調整）といったところでしょうか（図1参照）。

または自立はしませんが部屋側の窓枠に寸法を合わせて塗装ブースで押さえてしまうやり方もあります（外に倒れたりしないよう注意、図2参照）。

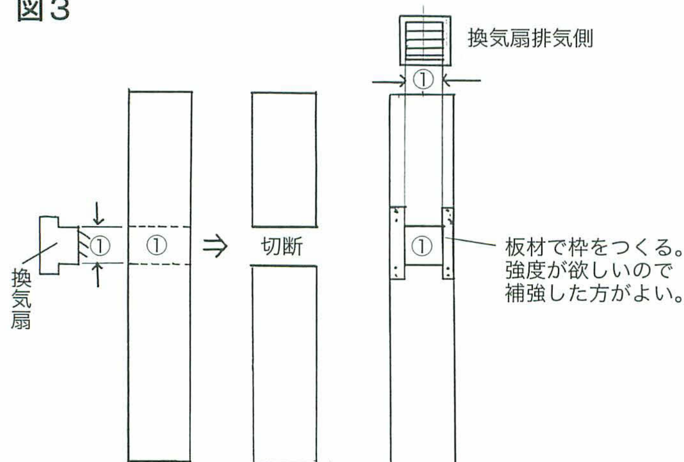
③換気扇を取り付けます。床材を窓枠にセットし衣料ボックスを置いて換気扇取り付け用の穴を開けるだいたいの位置を床材に決めます。その後で正確な寸法を書き込みます。

さて次に床材を換気扇の室外排気口側の寸法に合わせて開口しますが、ドリルやジグソーなどの木工用工具がない場合はホームセンターに依頼した方がいいかもしれません。その際寸法は２㎜位大きめにとって下さい（きつく



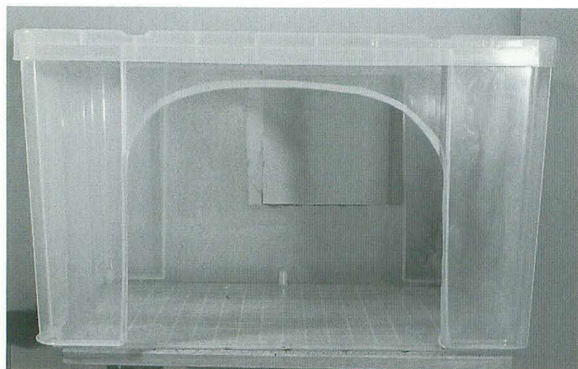


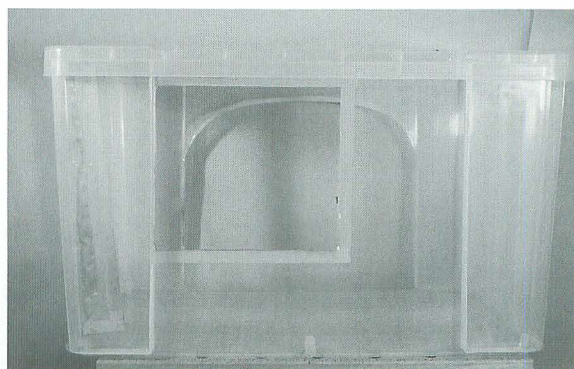
上 換気扇の排気側の幅Ⓐで 右 床材を切断する。切断にはドリルで四隅に穴をあけ、ジグゾーを使って切断したが、細身のノコでも可能だろう。





上 ジグゾーと電気ドリル。手動のドリルと細丸ノコギリでも代用できないことはないがホームセンターに切断を依頼するのも確かだ。
下左 作業し易い大きさで表側を切る。
下右 換気扇の大きさ位置に合わせて開口する（裏側）。





て入らないものを修整するのは時間がかかりますが大きいときは隙間テープ等で塞ぐことは容易）。

鋸一本しかないが自分でという方は寸法に従って上部と下部に切り離してしまい、換気扇縦枠部分を別の木材でしっかりとネジと接着剤を使って固定してもいいでしょう（図3参照）。

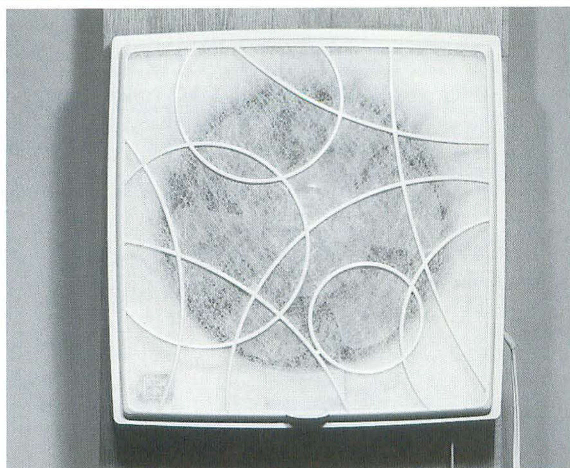
④衣料ボックスを開口します。

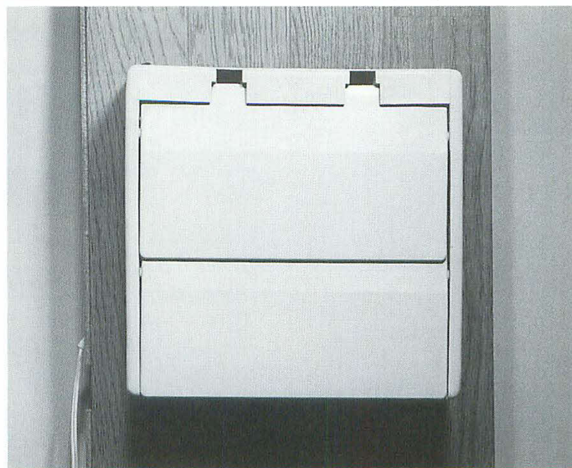
床材に換気扇を取り付けた状態で、ボックスが透明なのを利用してマジックで印を付けて厚刃のカッター等で切断します。

作業口側は自分の手を入れるのを想定して作業がし易いよう切断して下さい。ただし不必要に大きく開口するのは塗料の霧の拡散を考えると避けるべきかと思います。

その他

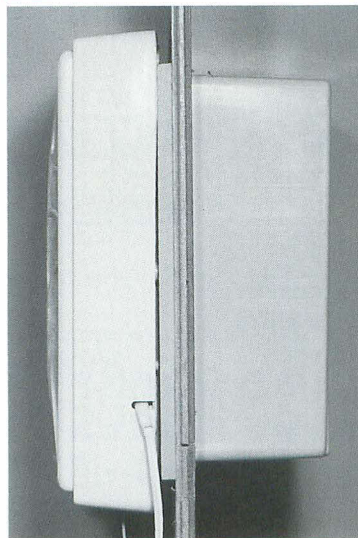
透明のブースですから昼間は窓辺で作業すれば光が入りますが照明スタンドを上に置いて併用した方がいいでしょう。また作業中は溶剤などを拭き



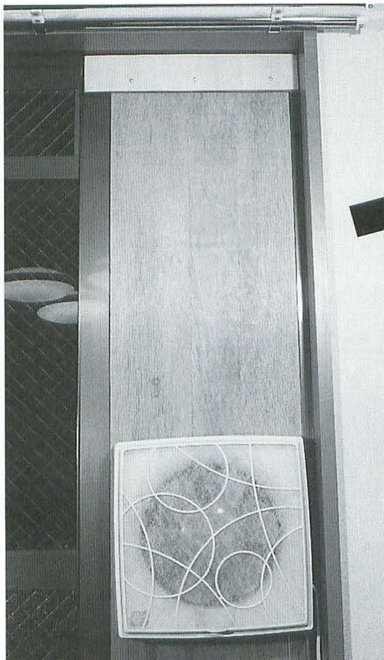


上左右 換気扇を開口した床材に取り付けたもの。

下左 ガタがある場合などは添え木などで修整。



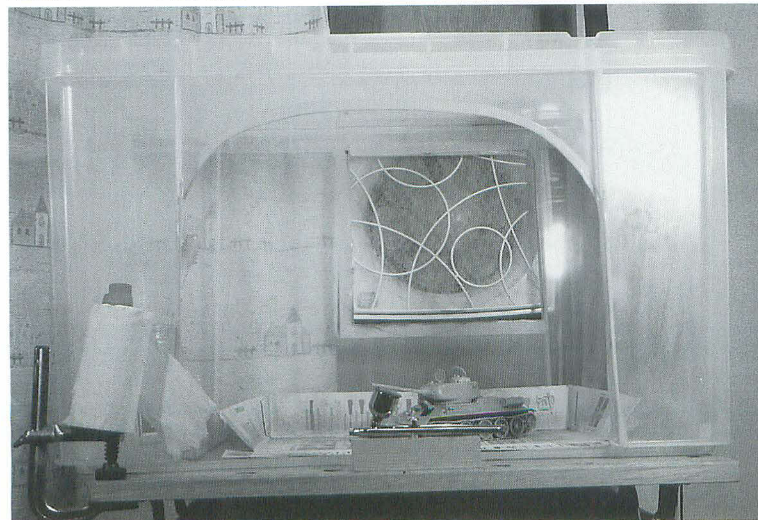
右 窓が少し大きかったので板材で延長。





窓に取り付けた換気扇。

下 塗装ブースと換気扇。

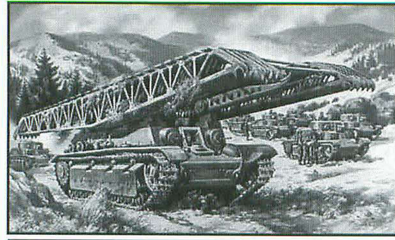


取ったウエス等も缶に入れて塗装ブース内で排気しています。

また友人宅で作業した時、窓の高さが2mあり取り付けに苦労(床材は180cm位までが規格)したのですが、衣料ボックスに軽量の換気扇を直に取り付けて（ボックスの換気扇取り付け部分はネジ等を用いるなら板をあてて補強する）窓から排気側を出すという簡易的方法も考えたのですが冬の事を想い(寒い) 実行しませんでした。しかしこれでも排気効果は期待できると思われます。要は部屋の間取りや窓も様々ですので現物に合わせての作業、調整が必要となりますのでこの記事は1つのヒントとしてお考え下さい。

この塗装ブースを使ってからは部屋の中が塗料でザラついたりすることもなくなり、塗装中の模型に糸埃が付くことも少なくなりました。でも塗装中はマスクの使用をお勧めします。健康に気を付けて長く模型とつき合いたいですよね。

模型製作もアートワークとお考えの方！ここにそのアイテムがあります



ICM社待望のニューキット登場

ソ連IT-28重架橋戦車

ウクライナ・ICM　プラスチックモデル　1/35スケール

第二次大戦中にソ連軍が使用したT-28多砲塔戦車の車体を流用した重架橋戦車。全長30センチ以上のビックなモデルを精密に忠実に再現。本当のメカニカルな秀作アイテム

1月入荷予定
販売予定価格 ¥4800

ICM社待望の主力キット再入荷

入荷数限定・人気ICM社1/35スケールアイテム　好評発売中！

ソ連多砲塔中戦車
T-28
¥4800
プラスチックモデルキット

Alan ロシア・アランホビー

1/35スケール
Panzer I auf F
ドイツI号F型歩兵軽戦車
バウマン扱い品・全国模型専門店にて発売予定
プラスチックモデル
1-2月入荷予定　**¥2800**

1/35スケール
プラスチックモデル
好評発売中！

ICM社待望のドイツ戦車登場

ウクライナ・ICM社製　第二次大戦ドイツ偵察戦車
PzKpfw II ausf L
LUCHS
ルクス

●ドイツ戦車兵1体付
●プラ製連結キャタピラ

販売価格 **¥2600**

最後の鋼鉄の肉食獣"ルクス"（山猫）登場！

全国有名模型店にて販売中！

1/35スケール　**チェコ・HaPM社待望のミリタリーモデルキット登場**
新金型

PzBefWg.IAusf.A CommandTank
I号A型指揮戦車

●1/35スケール初のドイツI号A型指揮戦車プラモデルキット
●金属製アンテナパーツ付・プラ製キャタピラ

販売予定価格 **¥2800**
プラスチックモデル　1月入荷予定

ロシア・マケット社NEWモデル登場

プラガ38(t)G型軽戦車
Pz38(t)aufG
新金型
1/35スケール プラスチックモデル
販売予定価格 **¥2700**
1-2月入荷予定

1/35スケール　**チェコ・HaPM社待望のミリタリーモデルキット登場**
新金型

PzKpfw.IaufA/FlammPz.I
I号A型軽戦車/火焔放射器戦車

●1/35スケール初のドイツI号A型軽戦車プラモデルキット
●機銃搭載タイプと火焔放射器タイプ選択式

販売予定価格 **¥2800**
プラスチックモデル　1月入荷予定

フランス・アイアンサイド社1/35スケール

1/35

あのノルマンディや東部戦線後期に活躍したロレーヌシュレッパー75mm対戦車自走砲がハイクォリティのパーツ満載で登場です。アルミ砲身、エッチングパーツ、そして高品質のレジンパーツとわくわくする内容。超待望の逸品！

販売予定価格 **¥5200**
3月入荷予定

Sdkfz135 MARDER-I
ドイツ・75mm対戦車マーダーI自走砲

ポーランド・テクモッド社待望の新製品

PzKpfw.II Ausf.L
LUCHS
ドイツII号L型偵察戦車ルクス

1/35

●完全新金型による同社オリジナル精密モデルキット
●エッチングパーツ付！●各ハッチ開閉選択式！
●プラ製連結キャタピラにて実感のあるサスペンション

販売予定価格 **¥3800**　1999年1月入荷予定！

Alan アランホビー人気モデル　第二次大戦参加車両　1/35スケール

ソ連・ロケットランチュアBM-13カチューシャ1941年タイプ

●6輪タイプのシャーシーも忠実に再現●キャビン部分も新規パーツ追加●発射装置もリアルに再現●各部隊マーキング付

第二次大戦中、すさまじい破壊力のあるロケット攻撃を送り込み、ソ連に侵攻するドイツ軍にスターリンオルガンの名称で恐れられたBM-13カチューシャがついに1/35スケールプラスチックモデルとして登場です。

エンジン室内部のディテールも再現！

ロケット砲架は上下左右に可動することもできます。

好評発売中　**¥3200**

1/35スケール　**フランス・アズムット社ビックモデル登場！**

S-BOOT

第二次大戦ドイツ海軍高速魚雷艇
限定生産品

初回入荷1月予定
全長1m以上FRP製船体

第二次大戦のドイツ海軍の勇猛な高速魚雷艇S-Boot(エス・ボート)がついに1/35スケールにて登場。全長1メートルに及ぶ巨大なFRP製の船体と膨大なレジン製パーツによる詳細な各パーツ群、搭載の魚雷はプラスチックインジェクションパーツとハイディテールなモデル。限定生産のまさにビックなモデル、ご注文のみの入荷となっています。

販売予定価格
ご予約承り中　**¥85000**

全国有名模型専門店にてお求めになれます

バウマンインターネットホームページ http://www.t3.rim.or.jp/~baumann/

☆広告の商品は全国有名模型店にてお取扱願っています☆　☆お近くに模型店のない方には通信販売も行っています☆　お問い合わせは下記の住所まで

通信販売に関して

¥160（¥80X2）分の切手を同封の上、お名前・ご住所（読みにくい漢字にはふりがなを）・リスト請求と明記、バウマン通信販売部まで封書にてお送り下さい。通販案内とリスト等をお送りします。直接現金及び書留にてのご注文はお受け致しかねますので通販案内を入手のうえご注文下さい。

☆バウマン通販部：〒155-0033東京都世田谷区代田3-13-12カサベルデB1-＃D

BAUMANN

有限会社　バウマン
東京都世田谷区代田3-13-12
カサベルデB1-＃D（〒155-0033）
TEL 03-3795-2666　FAX 03-3795-2444
Casa Verde B1-#D 13-12,Daita 3chome,Setagaya-ku, Tokyo 155-0033 JAPAN

☆表記価格には消費税は含まれていません。　☆多くの商品は輸入品のため価格、入荷時期等余儀なく変更いたします。ご了承下さい。

アフリカ戦線 イエローブラウンとグレイグリーンの迷彩

STEYR TYPE 1500A/01

Overall Yellow-Brown with GreyGreen

TAMIYA 1:35

シュタイヤー1500A/01 アフリカ戦線2色迷彩

タミヤ 1/35

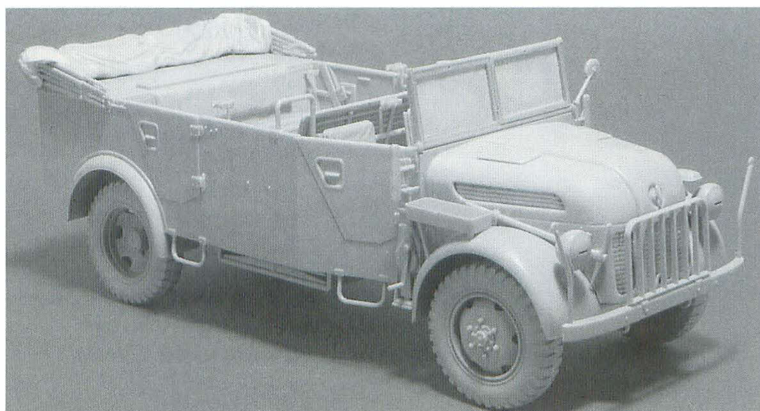
製作：伊藤　康治　Kohji Itoh

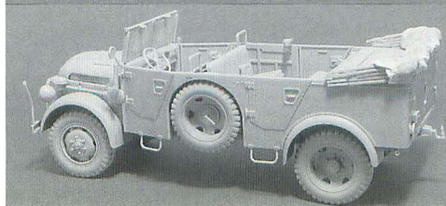
タミヤのシュタイヤー1500A

発売以来、既に高い評価を得ているタミヤのシュタイヤーですが、ソフトスキンモデルでは久々の変わり種アイテムに食指を動かされたモデラーの方も多かったことと思います。

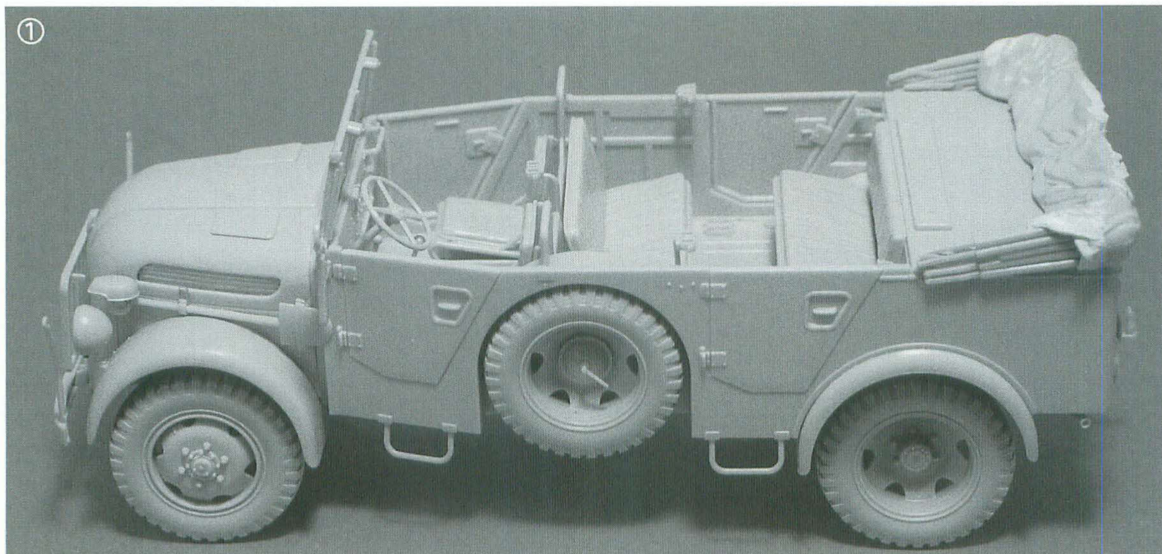
同様の統制型車両としては他にもホルヒやベンツなどが有名ですが、当時の写真を見る限りシュタイヤーの活躍にはひときわ目立つものがあり、ブタの鼻を連想させるユーモラスなフロントマスクは、他の車両にはない独特の魅力を放っています。

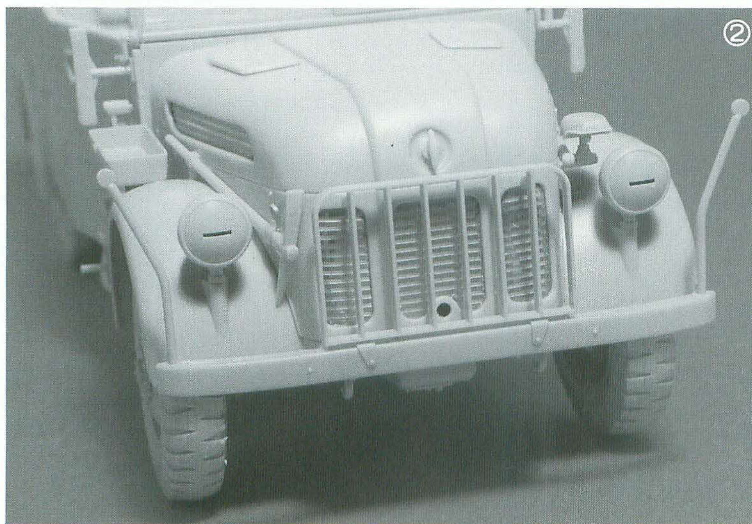
バシバシ決まるのはさすがにタミヤスタンダード。フィギュアや砲隊鏡などのアクセサリーもお約束通りの出来で、エンジングリルの選択肢に至ってはエッチングメッシュも同時に発売される等、付加価値の高いキットに仕上





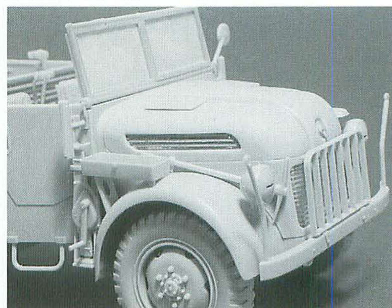
タミヤのシュタイヤー1500Aは左ボディパーツが２種類つき、スペアタイヤ露出タイプと内部収納タイプが選択できる。



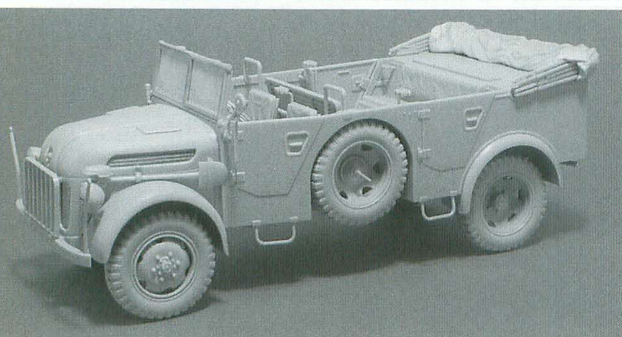


①塗装前のシュタイヤー1500A。

②フロントとサイドのグリルはタミヤの純正ではなく、リンクスのエッチングシートを切り出して使っている。



③金型の関係で成型できない幌の凹凸はエポパテでボリュームアップ。同時にシワを付けてやると更に雰囲気は良くなる。





がっています。

今回は、エンジルグリルの横格子をもっと強調したかったので、リンクスのルーバー状のエッチングシートを切り出して使ってみました。

幌は幌骨との際と背面側にエポキシパテを盛り付けてボリュームアップ。ワイパーはキットのウインドフレームと一体成型になっているので切り離し、真鍮線とプラペーパーから作った自作のものに付け換えています。

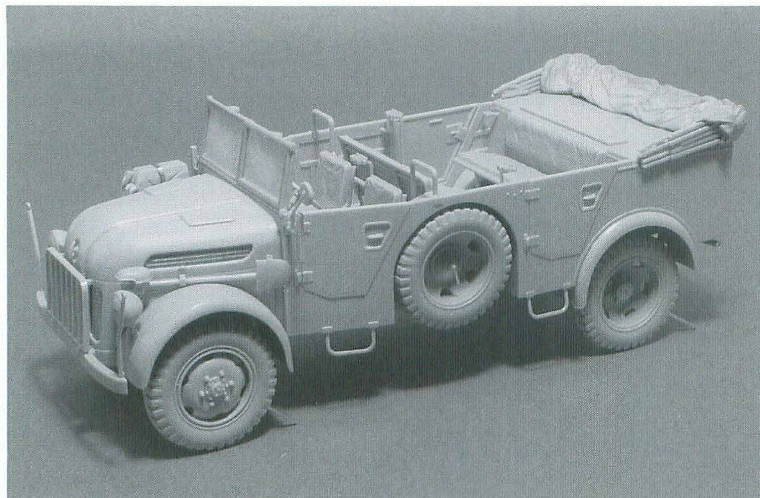
その他のディテールアップは…。ウ〜ッ、もしかしたらキットのままで十分かも知れない………。

アフリカ戦線の塗装を考える

現在までに明らかになったドイツ軍車両の色は年代と戦線によって大別できますが、迷彩については陸軍通達によって色の組み合わせや塗装方法までが更に細分化されていました。

しかし、アフリカ戦線においては初期にドュンケルグラウ(ダークグレイ)の車両も配備されていたことから、砂漠でのカモフラージュ効果への期待と濃色による吸熱効果を軽減するため、現地の砂をペースト状に溶いて車体に塗布するなどの実用的迷彩塗装？も施されていたようです。その様子は当時の写真からもうかがい知ることができ

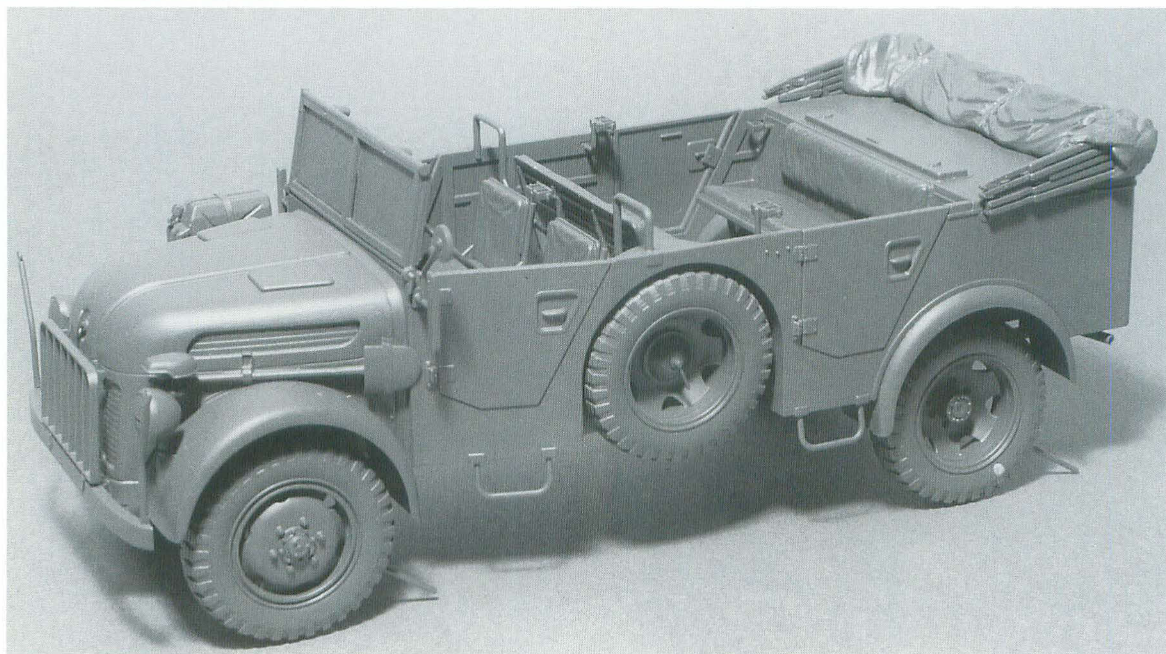




■下塗り

全体にグンゼ産業のマホガニーを吹く。いつも缶スプレーで行っているが、手軽なところが気に入っている。





ますが、通達にない迷彩塗装の車両は数多く存在していたようです。

ドイツ軍車両の正しい色については様々な場面で意見を交わす機会がありますが、AFVモデルにうまく取り入れるには『正確な色』というよりはむしろ環境により創られた『適切な色』を推察することから始めなくてはなりません。例えば、ゲンプブラウン（イエローブラウン）のカラーチップを差し出され、これがアフリカに投入された車両の正確な色だと言われても、あまりにも暗い色調にはきっと多くの方が戸惑うことと思います。しかし、実際の砂漠では日にさらされては砂塵に洗われ、オリジナルの色など短時間で褪色し、強烈な日差しや埃によっては更に白っぽく見えるであろうことは誰しもが容易に想像することができるのです。

それではその色はどんな色か？の問いに、ある人はグンゼ産業の19番であったり、ハンブロールの93番であったり、砂埃を被っているからタミヤカラーのバフ、といった具合に十人十色の答えが返ってくるに違いありません。

もちろん『正確な色』はひとつしかありませんが、その人なりの『適切な色』は限りなく存在する訳です。正確な色にこだわりながらも心眼を駆使して、より実態に近い色味を自分よりに推察し、表現できることが塗装本来の楽しみであり、工作におけるディテールアップ以上に作者の主観的表現力が問われる大きな要素だと思います。

シュタイヤーの塗装

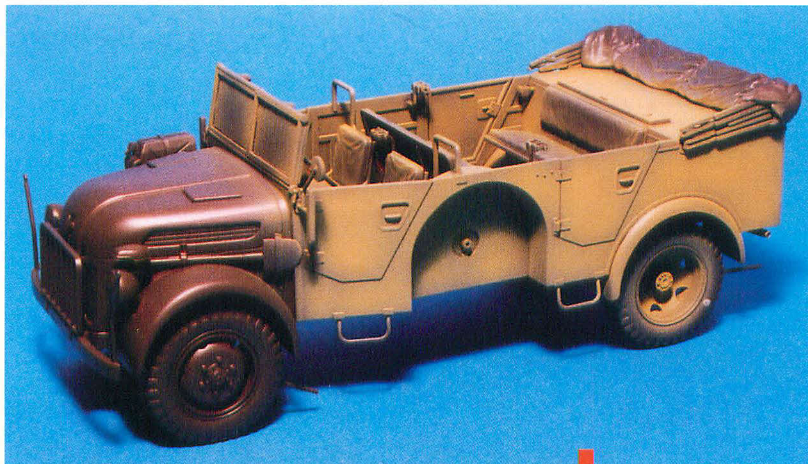
作例では、1941年に陸軍通達で指示されたゲルプブラウンをベースとしたグラウグリュン（グレーグレーン）の迷彩塗装としてみました。

下塗りにはグンゼ産業Mr.カラーのマホガニーを塗布します。今までにも何度かお話しましたが、ラッカー系の塗料は比較的隠蔽力が弱く、重ね塗りをした場合下地の色の影響を受けやすいのが特徴でもあります。この特性を逆に利用して同系の暗色を下地に使うことで、淡色の上掛けの色味に変化をつけるのがその大きな目的。同時に入り隅など陰になる部分を塗り残すことによって、輪郭が強調された独特の雰囲気に仕上げることができます。

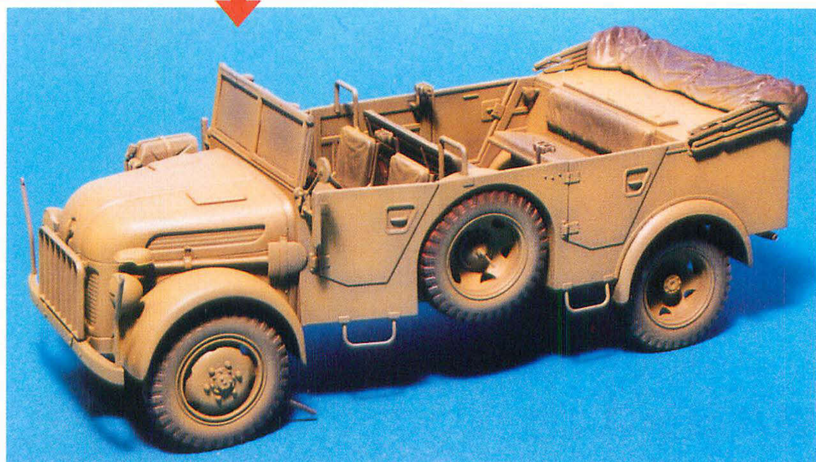
上掛けに近似色として選んだのはグンゼ産業Mr.カラーのダークイエロー。薄めに溶いたものを出隅を中心にエアーブラシで丁寧に吹いていきます。

迷彩色はダークグリーンにダーク

■上塗り



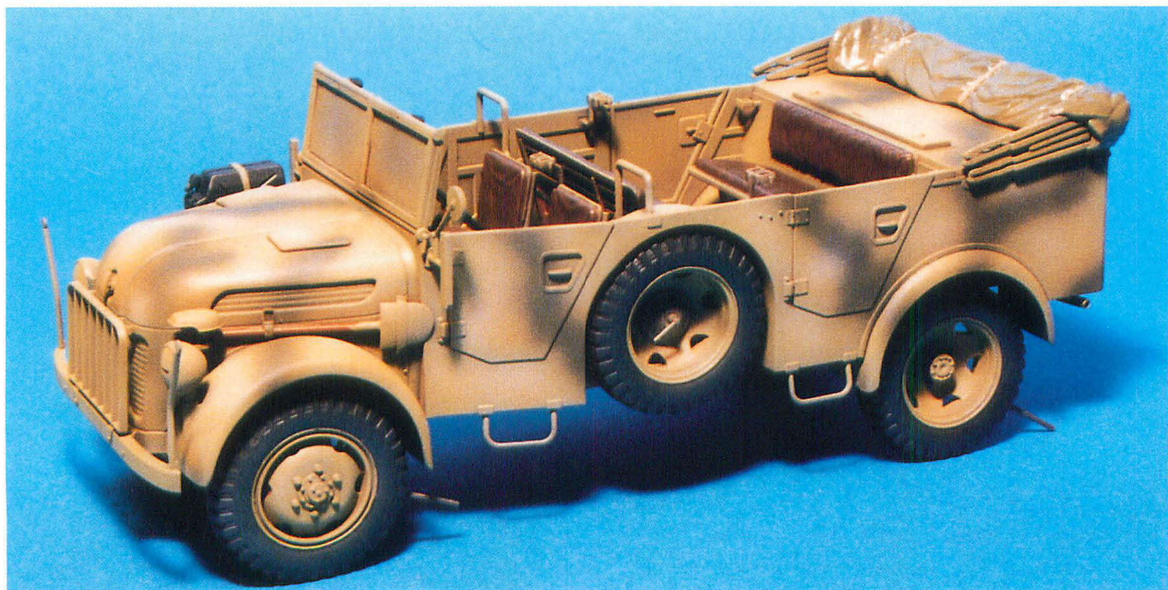
エアブラシでダークイエローを塗り重ねていく。入り隅奥までは吹かないように注意すること。



写真では分かりにくいかも知れないが、下塗りのマホガニーの影響でダークイエローのトーンはかなり落ちている。



■迷彩、細部塗り

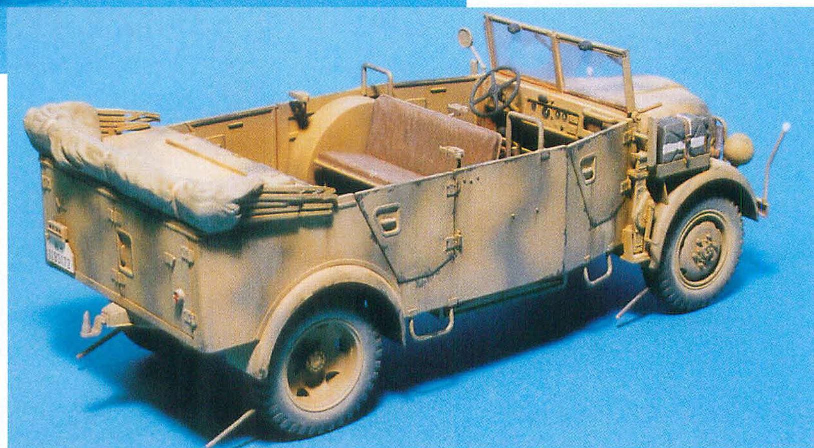


細部の塗装を筆塗りで行った後、迷彩色を混色して作ったグラウグリュン（グレーグリーン）？を吹き重ね、明度を上げるためにバフで再度リタッチしている。

■ウェザリング



塗装の剥れを書き込み、カーキ系のパステルを擦り込み砂埃を表現する。



パステルはタイヤのリム周りにも施してやるとリアルに仕上がる。タイヤに付いたピンは、車両をグランドに固定するため真鍮線。



■バランスのチェック



グランドの塗装は、車両を置いてみて色のバランスを確認する。これはとても大切な作業で、色使いを間違えれば車両が浮いてしまうので慎重に行なう。







①デコパージュの板とグランドは可能な限り分離できるようにした方が良い。お互いの塗装工程を干渉しないのでとても楽。
②グランドは芯材にスタイロフォームを使用し、木工用ボンドを混ぜたミラコンで被せるようにテクスチャーを付けてみた。
③グランドはやや赤みがかったサンドベージュとしてみた。塗料はタミヤのアクリルを使っている。

アースを少し混ぜたものを使用してみましたが、もう少し明るめの設定にすれば良かったと深く反省。迷彩塗装後、リタッチにバフを軽く吹きかけて明度を上げたつもりなのですが…。

次に、細部の塗装で特に気を付けたいのはタイヤの色。作例ではパンツァーカラーのシュヴァルツグラウを塗ってみました。明るめな印象に反して違和感のない仕上りが得られ、これはお勧め。タイヤってクロじゃないんですよネ。

ウオッシングには油彩のローアンバーをエナメルシンナーで薄く溶いたものを使用します。縦方向に平筆でサーッっと引くように塗り、ウエスでふき取ってはまた塗っての繰り返し。入り隅の強調よりも全体のトーンを整えることに注意するのがポイントです。

車両の塗装の剥れを表現するために下地色としパンツァーカラーのシュヴァルツグラウを選択。面相筆で出隅の要所に剥れを書き込みます。また塗装が擦り取れた部分には同じくパンツァーカラーのシュヴァルツグラウをドライブラシの要領で擦り付けてやると良いでしょう（パンツァーカラーは絶版）。

最後にツヤを整えるためにニッペの艶や消しクリアを吹き、パステルで入り隅に入り込んだ砂や車体に付いた剥れ埃を擦り込みます。



④筆の数は決して多くはない。使い易い筆が必然的に絞られてきたのだと思う。

弘法は筆を選ぶ？

名筆家は筆のことなど無関心といわれますが、モデリングの場合には必ずしもこのことが当てはまるとは限りません。筆の善し悪しによっては作業性と仕上がりに大きな差となって現われます。これは単に筆の値段だけではなく、作り手の目的にあった筆の選び方も重要なポイントで、いくら高級であっても平筆ではフィギュアの顔に書き込みができないように用途に応じた筆の使い分けが肝心であるといえます。それでは、どのような筆を選べば良いのでしょうか。

私の場合、基本的には三種類、七〜八本程度を常時使い分けています。

油彩用の平筆、ホビー用の平筆、面相筆と言った場合。タミヤのモデリングブラシも使っていますが安価にもかかわらずこれはあなどれません。

油彩用の平筆は、コシの強いものを選ぶようにしています。正直言って溶きパテの塗布から、ウオッシング、ドライブラシに至るまで荒っぽく使っています（写真上の３本）。

ホビー用の平筆は精雲堂の製品。毛が細い割りにコシが強く穂先のまとまりも良いため、この作例ではシートやタイヤの塗装に使っています。また広い面積でのパステルの擦り込みにも適しており大変に重宝しています（写真中央の２本）。

面相筆は、ここ２年程愛用しているのが文盛堂のウッディーフィットシリーズの２／０〜４／０。車両の細部の書き込みからパステルの擦り込み、フィギュアの顔の塗装まで小ワザなら何でもこなしてくれる強い味方。コシの強さとまとまりは抜群で、穂先は細いものよりも太いものの方が使い易いようです（写真下の３本）。

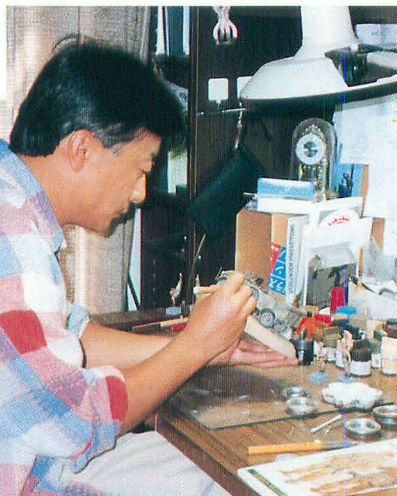
▼シュトルヒを見送る兵士達。





▲バーリンデン、ウォーリアのフィギュアにホーネットのヘッドを使用。

▼製作中の筆者。





いずれにしても、長く使用していくためにはそれなりの手入れは欠かせません。使用後は早期に専用の溶剤で塗料を良く落とし、ペン立て等に立てて保管することをお勧めします。

ジオラマ

今回はビネット風に仕上げてみました。ベースはDIYで入手したデコパージュの板にウレタンニスを塗布したもの。グランドはスタイロフォームを切り出しミラコンや拾った小石などでテクスチャーを付けています。今回は、ベースとグランドを最後まで別々に製作を進めたもので、グランドの塗装の際にもマスキング等の煩わしさがなく比較的楽に完成させることができました。車両をグランドに固定した後に、エポキシボンドでグランドごとベースに接着しています。



フィギュアはバーリンデンやウォーリア。ヘッドはホーネットを使用しています。日焼けを意識して赤みの強いフレッシュで肌色を再現。それぞれの服装にも微妙に変化を付けてメリハリが出るように塗装してみました。

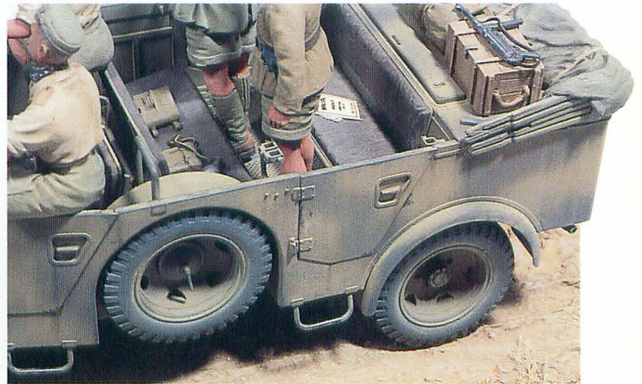
North African Campaign

Overall Yellow-Brown with Grey-Green

イエローブラウンとグレーグリーンの2色塗装法

アフリカ戦線









1941 年に陸軍通達で指示されたゲルブブラウン（イエローブラウン）ベースとしたグラウグリュン（グレーグリーン）の迷彩塗装でシュタイヤーを製作。

折込カラー51,52頁に続く。

大戦前の2色迷彩

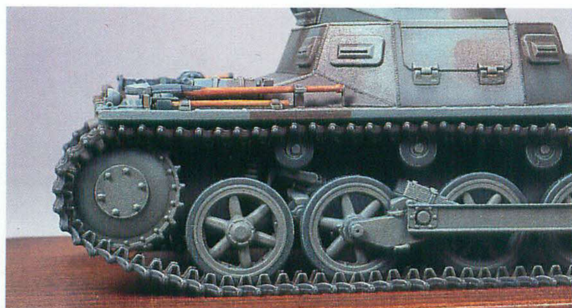
PANZER KAMPF WAGEN Ⅰ Ausf.A

HiPM 1:35
PzKpfw Ⅰ A/Flamm Pz.Ⅰ

Modeling by
Mitsuo Sugimura

Ⅰ号戦車A型 1937年 2色迷彩

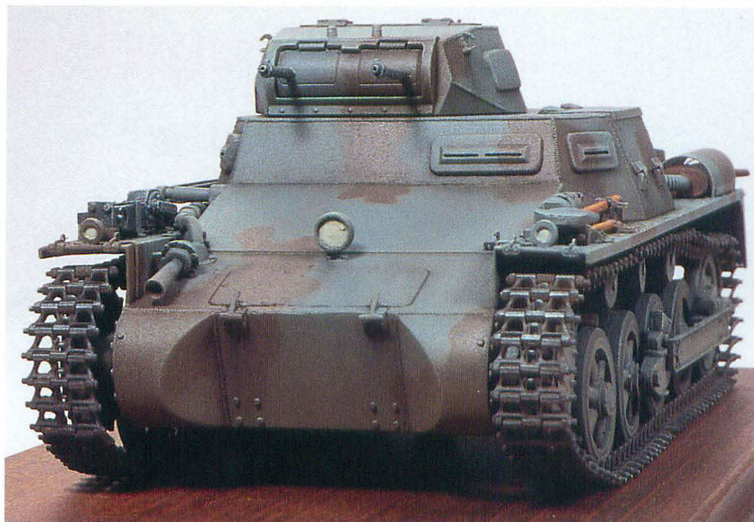
Hi PM 1/35 杉村 光生

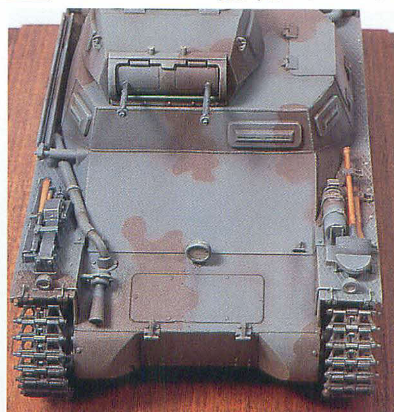


ドイツが第１次大戦後、最初に開発、量産化したのがこのⅠ号戦車Ａ型である。武装は機銃MG13の2丁、最大装甲は13㎜、乗員２名で、基本的には訓練用として設計されたものであった。しかし本格戦車のⅢ／Ⅳ号戦車の生産が遅れたため、ポーランド戦やフランス戦では戦力の一端を担うこととなった。

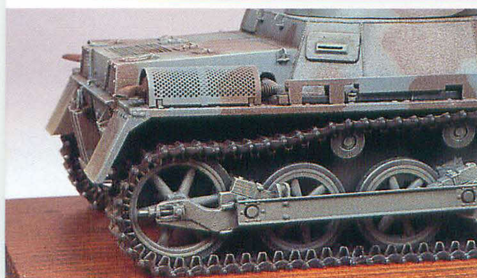
Ⅰ号戦車A型ではワイマル共和国軍時代に3色迷彩された車両もあったが、ヒトラー政権下の新国防軍となって1937年にダークグレーとダークブラウンの2色迷彩が導入された。







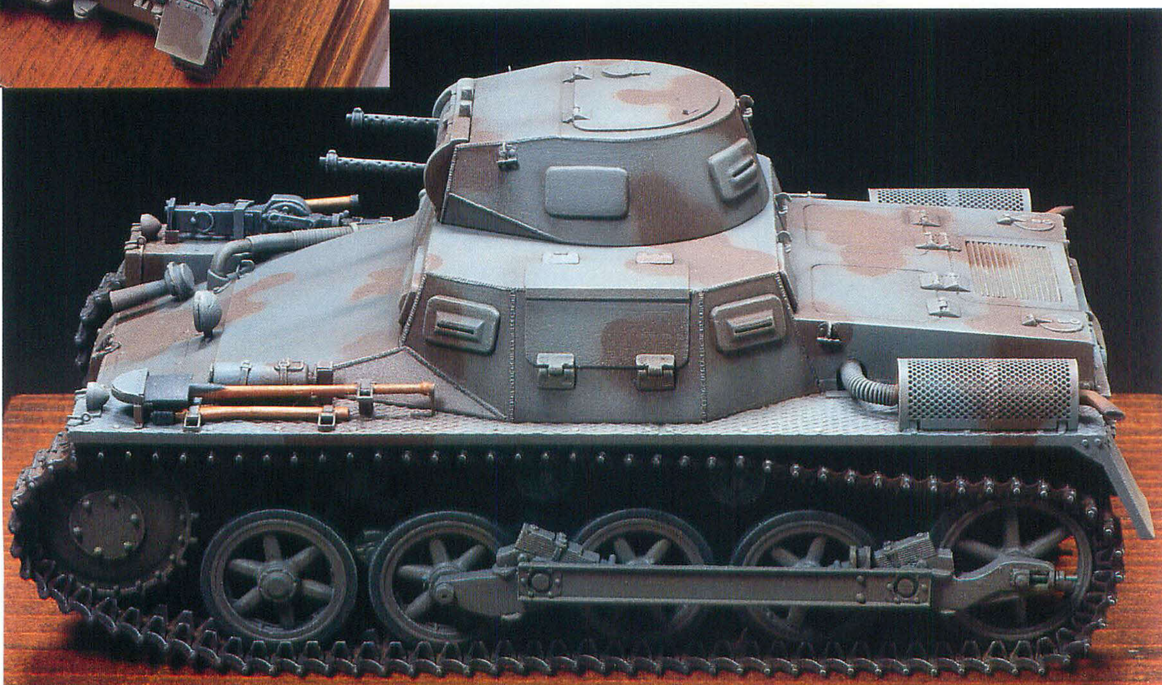
OVM（車外装備）の木の部分はダークイエローに油絵の具のバーントシェンナを薄めて塗ったニス仕上げ風。







この２色迷彩は、境界線がはっきりしているので茶色の迷彩の輪郭を筆で描き、エアーブラシを細吹きにして同じ色を内側に丁寧に塗付している。



ジャーマングレー単色

Overll Dark Grey Painting

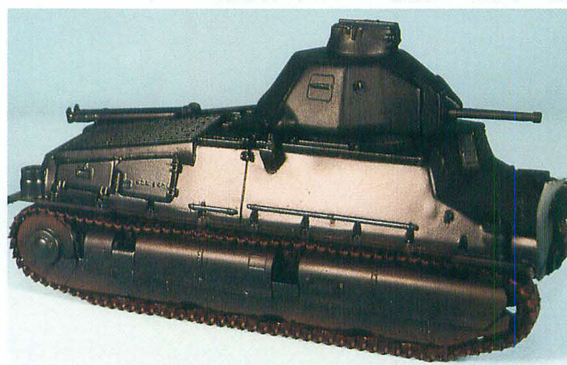


ソミュアS-35(ドイツ軍仕様) ジャーマングレー単色メリハリ塗装法

グンゼ産業 1/35　製作：村田　稔



1 サーフェイサー塗付後、第1段階としてつや消しブラックを全体に吹く(影を作る作業)。



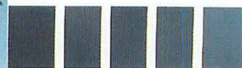
2 タミヤのアクリルのハルレッド(XF-9)をキャタピラに塗る(はみ出しても後で修整可能)。



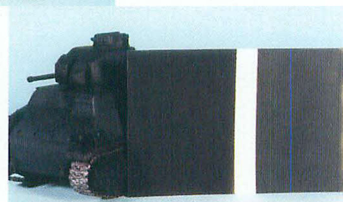
3 2の後で薄めたメタリックグレイ(タミヤのエナメルXF-56)を下地のハルレッドが残る様に塗る。



4 黒から徐々に明度を上げた色を塗って行く。下の色見本左から右に。

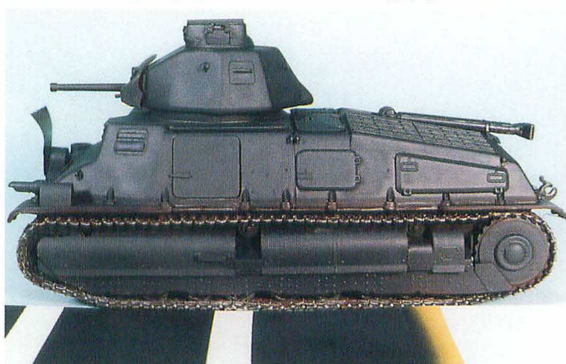


5 左側がつや消しブラック、右側がジャーマングレー(グンゼ産業Mr. カラー)につや消しブラックを混ぜた色。

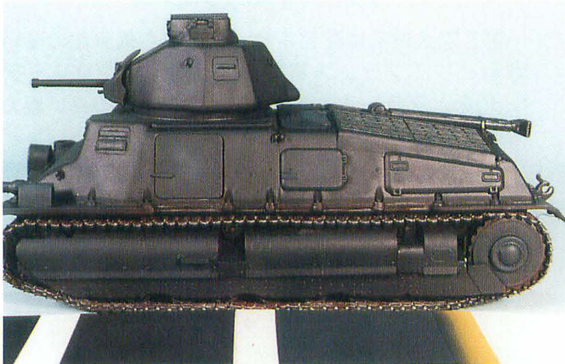




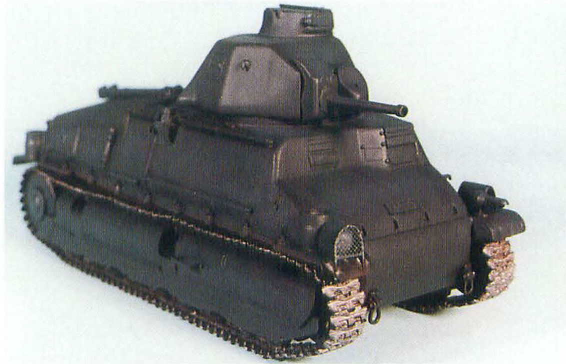
6 点検パネルなどが少し浮き上がってきた。車体についていたハルレッドも消えてきた（第２段階）。



7 ジャーマングレーにつや消しブラックを少し加えたもの(右の色)をハッチや装甲板の中心部に吹く(第３段階)。



8 ジャーマングレーにセールカラーを加えた色（右端の色）を７よりも中心に吹く（第４段階）。



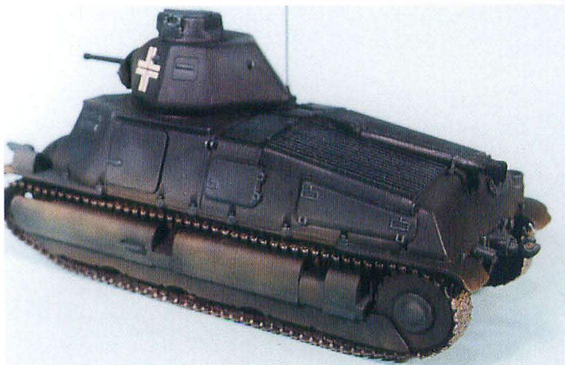
9 この第４段階でマスキングをはずす（これ以降だと不自然な仕上りになる）。全体にメリハリがついた。



10 かなり明るい色(カラーチップ右)をポイント(ハッチ、パネル、凸部のトップ)にかるく吹く。メリハリの出た塗装となる。



11 汚しの前にデカールを貼る。足周りの泥汚れや排気管などの錆を表現する。



12 ドライブラシをかけるが、ジャーマングレーのグラデーションがかくれないように軽めにかける。



13 車体の埃の表現やエッジを強調するのにパステルを使う。強くなりすぎたものは練り消しなどで落としておく。



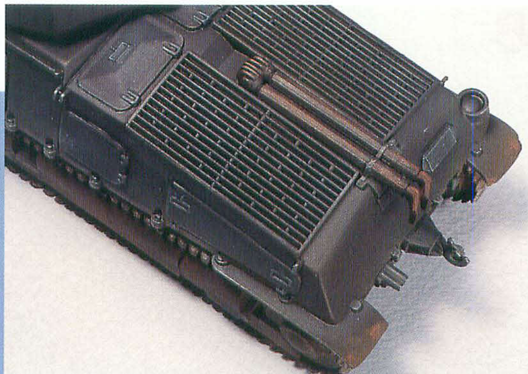




第２次大戦前に開発され、当時最も信頼性の高い戦車としてフランス軍に配備されていたソミュアS-35を、フランス占領後のドイツ軍はその高い能力を買って自軍で使用した。

このソミュアS-35は、ドイツ軍独自の改造が施されハッチ付きのキューポラやドイツ軍仕様のアンテナなどに変更され、第２線部隊やフランス駐留部隊等に配備された。

塗料もドイツ軍車輌に準じたジャーマングレー（ダークグレー）となり、大きなバルカンクロイツ（国籍マーク）も付けられた。



SOMUA S-35



Pz. KpfwI Ausf. F

ALAN 1:35

Modeling by Hideyuki Aoki

I号戦車F型　ダークイエロー+レッドブラウン迷彩

アランホビー 1/35

製作：青木　秀之

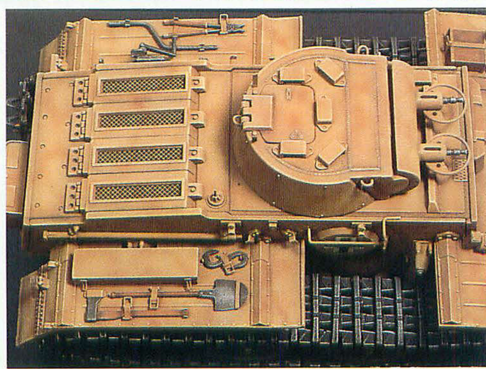
I号戦車のサイズで可能な限り重装甲にすることを目的に1942年に30両のみ製造され、東部戦線に投入された。前面装甲80㎜、ドライバーズバイサーがタイガーIと同型、幅広の履帯という姿はミニタイガーIというイメージがある。

ロシアのメーカーアランから発売されているこのキットは、実車の雰囲気を巧みに再現しているので、ディテールアップすることでよりリアルに仕上る。

1943年夏頃からの実戦投入なのでダークイエローベースの迷彩塗装が施されていたと思われる。



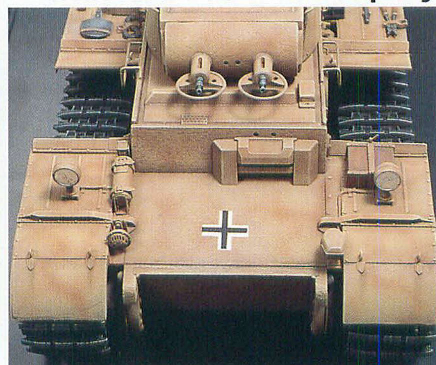




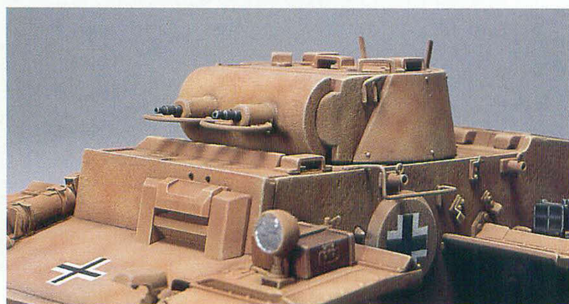
Pz. KpfwI Ausf. F

Overall Dark Yellow with Red Brown overspray

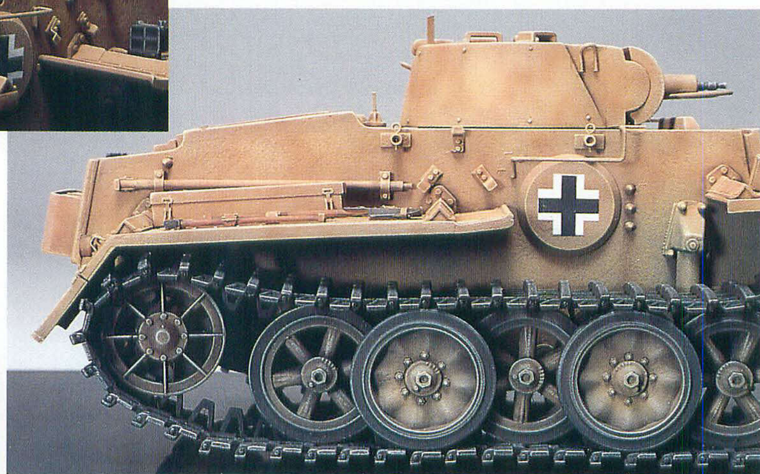


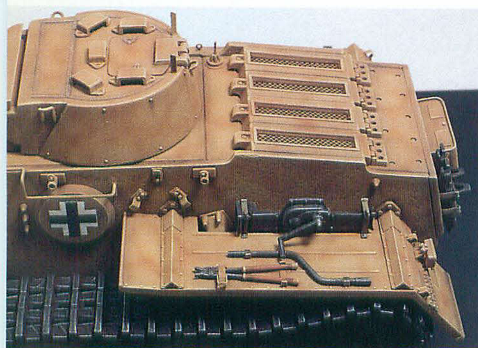


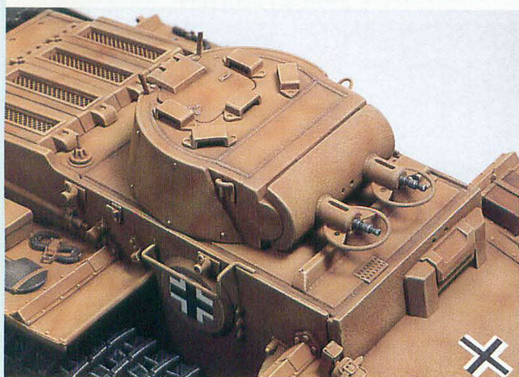
　基本塗装をタミヤのアクリル、トーンダウン用はタミヤのエナメル、ドライブラシはハンブロール、墨入れはパステルを粉末にしたものを使用。迷彩色を塗る前にトーンダウンした基本色にドライブラシをかけて、迷彩色のレッドブラウンがぼけるのを防ぐことができる。この後迷彩色塗布後にも２回目のドライブラシはかける。

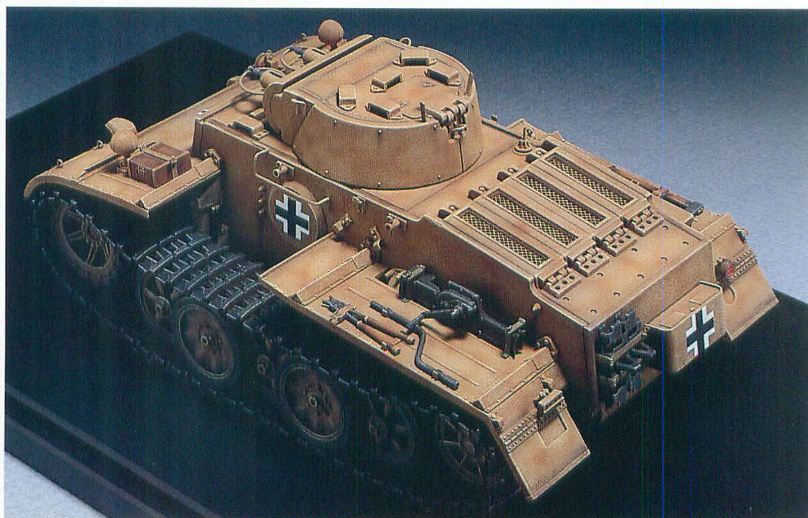


　下地塗装やパステルの墨み入れによって塗装にメリハリが出ている。汚れの方向性に注意。パステルを定着させるため薄めたダークブラウンを吹く。

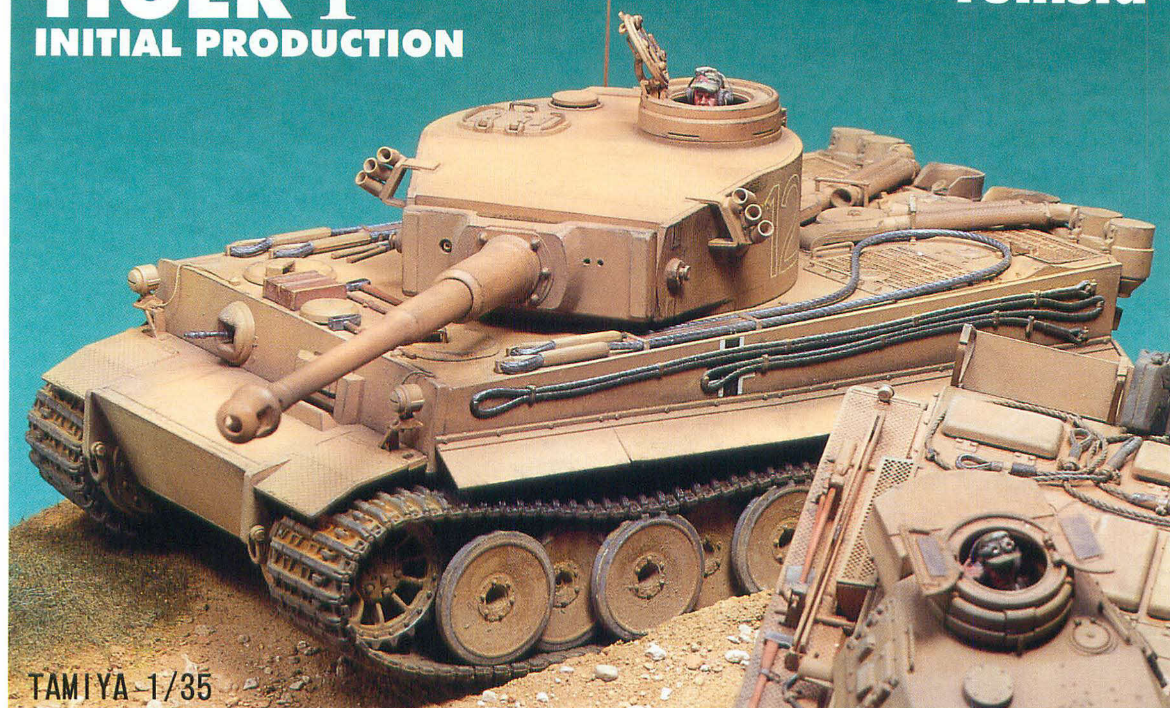








北アフリカ戦線のタイガーⅠ



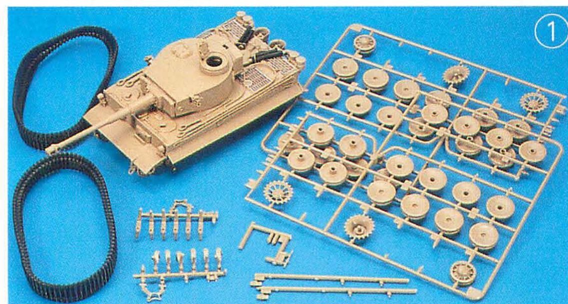
山田流塗装仕上げ法

タミヤ 1/35 タイガーⅠ極初期生産型　　製作：山田　卓司 Takuji Yamada

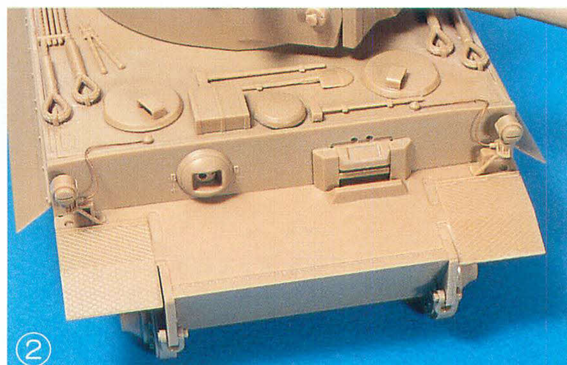
戦車模型の楽しみ方は色々とあると思いますが、完成させる事を前提に考えた時「塗装」と云うファクターは非常に大きいと思われます。特に他のジャンルの様に原色での塗り分けやその発色、ツヤ出しであるとか細かなマスキング処理が無い分、戦車模型では「質感」や「重量感」がひとつのポイントだと思います（もちろん、リアリティの再現を考えるならば、細かなディテーリングの工作や味付けの部分など言及すべき事はありますが）。

そうした意味で今回はタミヤの『タイガーⅠ極初期生産型』を使って、ワタシの塗装仕上げを紹介したく思います。何かのヒントになれたら幸いです。

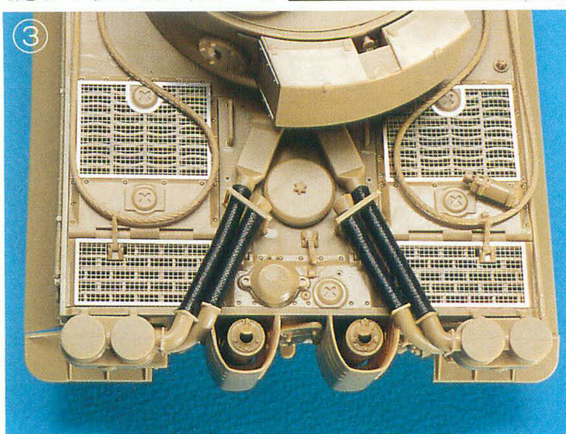
1 塗装前

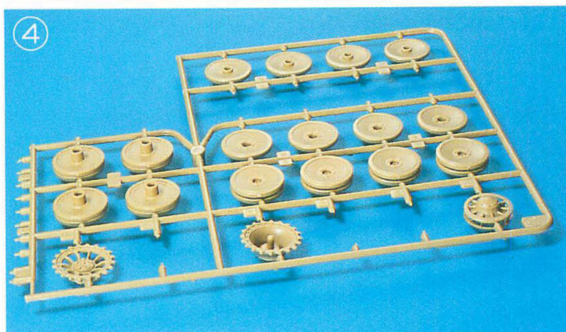


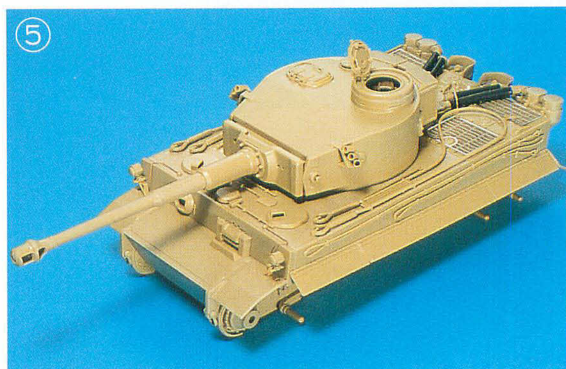
①まずは塗装を始める前の段階。
足周りが未組立なのは複合転輪のゴムフチを塗る為なのと、サスペンションを可動にしたかった為。見えない所は塗らなくても良いと考える人は第1、3、5、7転輪の外側の転輪を接着しないだけでも良いと思います。



②今回ディテーリング工作は行なわないつもりだったのですが少しだけやっておく事にします。ライトコードは焼きなました真鍮線0.5㎜φで。ワイヤーロープの取り付け位置を前に移動させて接着。



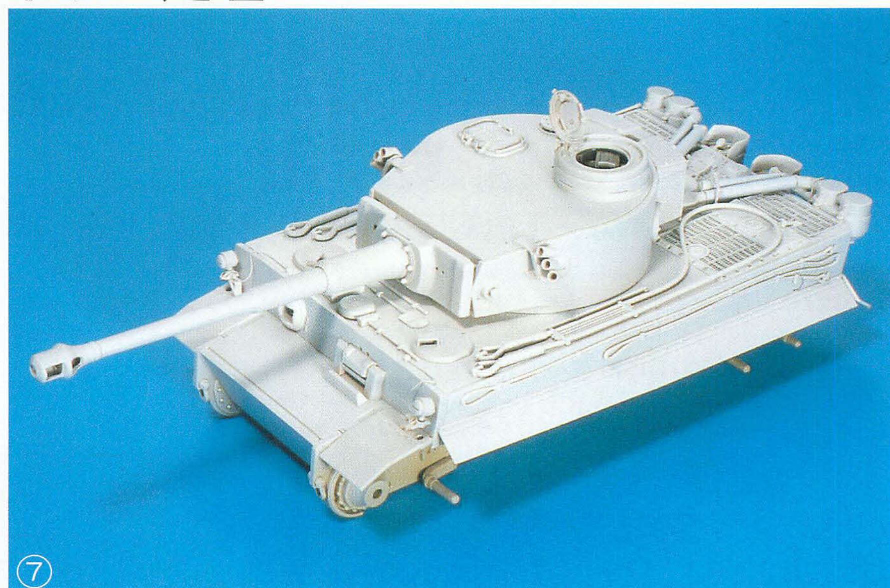


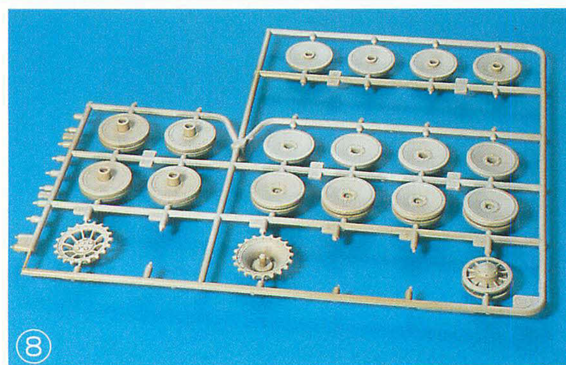


③グリルメッシュはタミヤ製。メーカー純正パーツとして比較的入手し易いですから、ココだけはエッチングパーツを使用しています。
④合わせるパーツを間違えない様に注意して接着しておきます。ゲート跡は揃えておくと後で削り取る時にラクですね。
⑤塗装前の下準備としてホコリをよく払っておきます。出来れば中性洗剤を入れたぬるま湯で洗っておくと良いでしょう。

2サーフェイサー処理

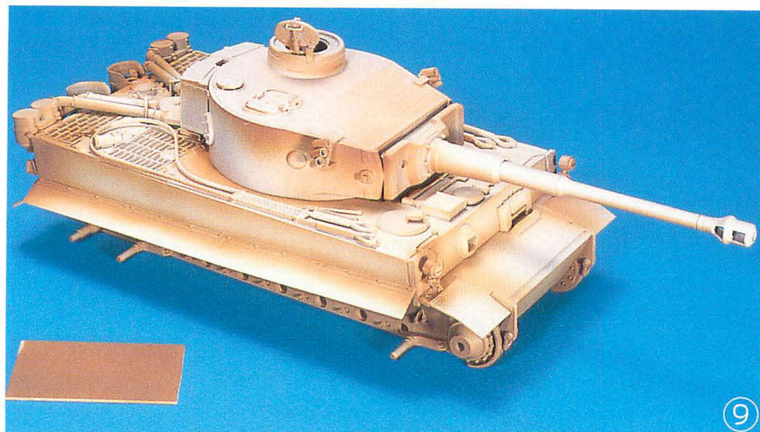


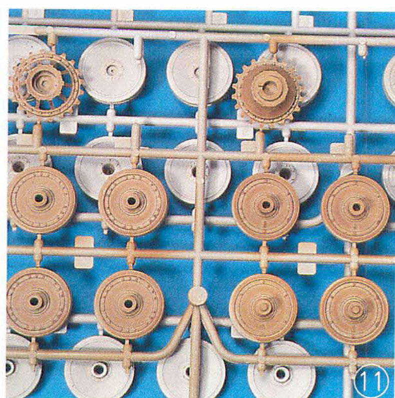




⑥タミヤのサーフェイサーを使ってみました。色はホワイト。金属部のプライマー効果もあり使い易い物です。特にダークイエローは下地の色の影響を受けやすい為にホワイトの塗装は有効です。
⑦全体に軽く塗ります。粉をふりまくカンジです。本塗装の様にベタッと塗る必要は無く要は塗膜の層が出来れば良い訳です。
⑧転輪も同様に。後で汚しをする上で、遠目から吹いてザラザラの塗面にするのも悪くないと思います。

3影の色を吹く



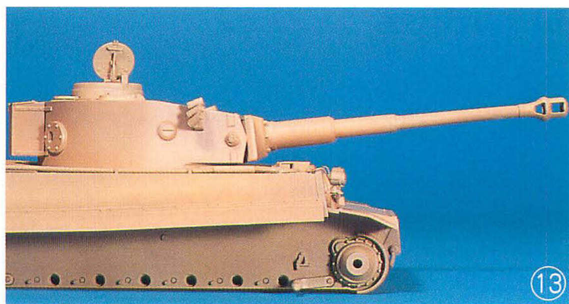


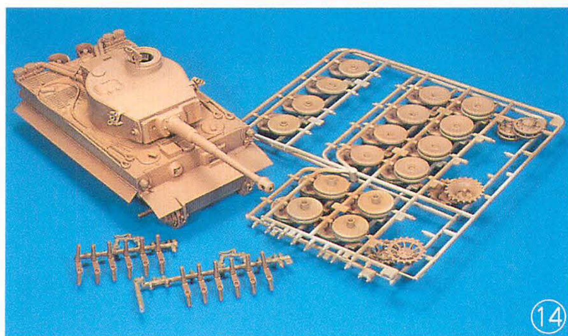


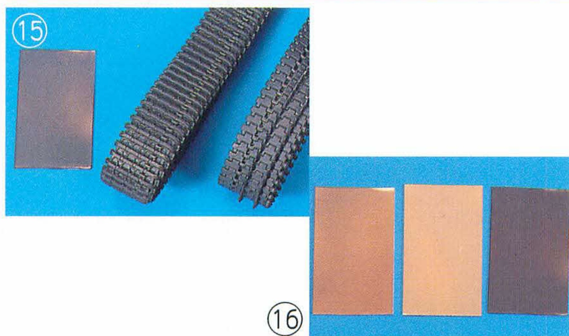
⑨本塗装のダークイエロー（後述）を塗る前に影になる所や面の変わり目などにダーク色（ブラウン FS30219 ㉛2.5：ダークイエロー㊴1：ダークアース㉒0.5の混色した色　グンゼ産業Mr. カラー）を塗ってやります。
⑩⑨の側面。砲身の下側はやや強調ぎみに塗っています。私は最後に仕上げで調整するのでこの周りの塗装は、けっこうラフです。
⑪転輪裏面も同様。裏面は完成後にはまったく見えなくなるのですが、気分的にね。

4ハイライト色を吹く





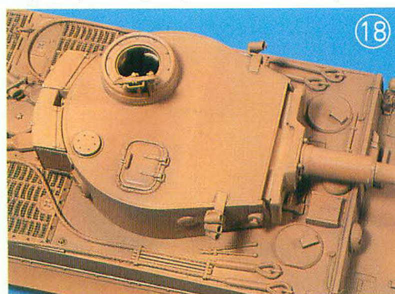


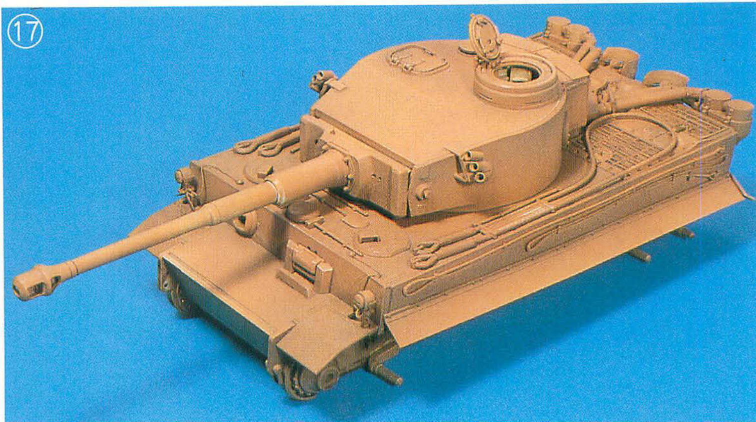


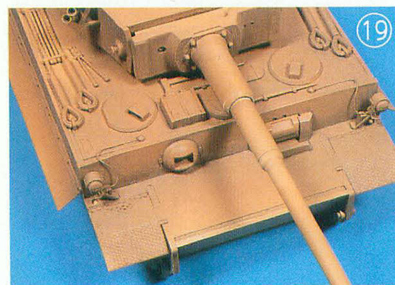
⑫本塗装としてダークイエロー（ブラウン FS30219㉛2.5：ダークイエロー㊴1：フラットホワイト㊷0.5）を塗っていきます。
⑬写真では車体にセットしていますが砲塔は外して全体に塗料がかかる様に塗っていきます。砲身は塗る方向を考えて先に塗った色を生かして上から塗っていきます。
⑭ダークイエローが塗り上がった状態。

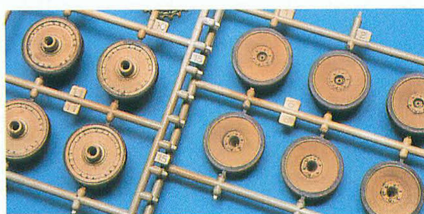
⑮履帯はダークアース㉒1：ニュートラルグレイ⑬1.5の混色した色で表裏共しっかりと塗ります。
⑯これまでの塗色のカラーチップ。印刷で本物そのままの色は表現しくい筈なのでここでは明度差を見ておいて下さい。

5 ウオッシング


⑱


⑰

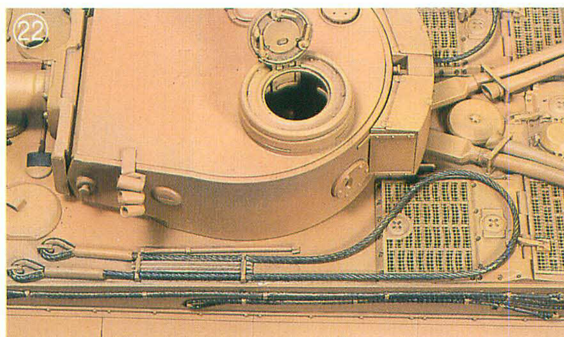

⑲


⑳

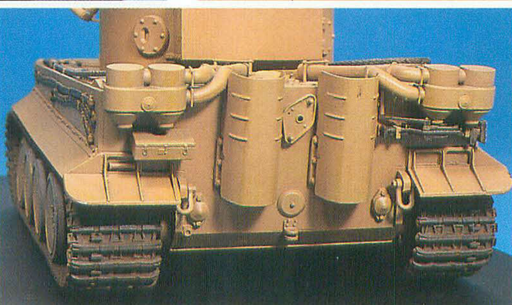
⑰今回は油絵具をエナメルシンナーで溶いた物を使って全体を洗う様に塗ります。色はセピア。エナメル塗料でも、もちろんＯＫです。
⑱ここの工程は「ウオッシング」と言い、基本的には全体の色調を落とす事を主な目的とします。
⑲ウオッシングはまた、モールドをハッキリさせる「スミ入れ」の意味もあります。
このあたりから仕上げにかかってきますからていねいに塗っていきます。
⑳転輪のゴム部も塗ってしまいます。
私はココはパステルの黒、灰、茶を混ぜた物を流し込む様に塗ってやります。

6 細部塗り分け


㉑


㉒


㉓


㉔

㉑ここでようやくサスペンション、転輪、履帯をセットしますが、ワイヤーロープや工具の鉄色の部分をフラットブラックで塗ってからです。
㉒鉄部の塗り分け等をする時は足まわりは無い方が塗りやすいです。
とりあえずサッと塗っているだけで塗れていない所もありますが、後で修整します。
㉓工具の木部もパステルの茶色を粉にした物を水性アクリルの溶剤で溶いた物で塗っていきます。
㉔ジャッキは鉄色としていますが、車体色でも良いでしょう。このあたりかは実際はどうだったかより個人の考えるリアリティの範囲で自由だと思います。

schw Pz Abt. 501 at Tunis

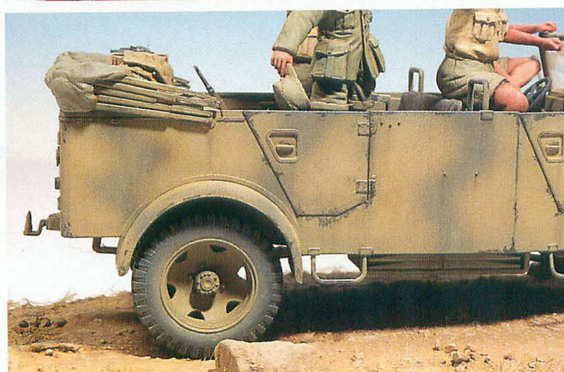
チュニジアの「第 501 重戦車大隊」



DA/01
A 1:35

Modeling by
Kohji Itoh





タイヤは塗料の黒をそのまま塗っても実感は出ないので、ダークグレーを使用するとリアルに仕上がる





に車両の塗装の剥
.これは下地のダー
なる。
をワイパーが取っ
意。ワイパーは真
ものに換えている。
ウォーリア、ヘッ
内側の塗装にも注



ia



Modeling by Takuji Yamada

アフリカ戦線２色迷彩

Storch

STEYR 150(
TAMIYA

"シュトルヒ"

シュタイヤー1500A/01 タミヤ 1/35

製作：伊藤　康治

北アフリカ戦線でのドイツ車両の塗装は1941年３月の通達でイエローブラウンRAL8000とグレーグリーン RAL7008で塗装することとなった。作例のシュタイヤーもそれに基づいて塗装を行なっているが、砂漠で退色したイメージを出すためダークイエロー（Mr. カラー）を使用。





使い込まれた感じを出すため
がれを出隅に面相筆で書き込む。
クグレーが出て来ている表現と
フロントガラスについた砂埃
た状態を再現しているのにも注
鍮線とプラペーパーで自作した
フィギュアはバーリンデンや
ドはホーネットを使用。帽子の
意。

タイガーⅠ型極初期型　ジオラマ(折込49,50頁)
チュニジアの「第501重戦車大隊」

Takuji Yamada　　山田　卓司





今回のジオラマは『Ⅲ号戦車モデルフィーベル』の時のⅢ号N型と組み合わせて、チュニジアの「第501重戦車大隊」としてみました。

チュニジアは私自身いつかは行ってみたい所ですが、いわゆる「北アフリカの戦い」の中でも、それまでのリビアーエジプトの砂漠の戦いとは少々イメージが異なります。

それは作戦上の戦闘の目的から見ても大きく違いますし、気候的にもイタリアやギリシャ等の地中海性のもので植物も多い訳です。時期的にも真冬から春にかけてで残された写真の兵士は皆長ソデまたはコート姿で寒そうにしています。

そんな訳でジオラマとして考えると色々と表現する為のファクターも多くて、ひと味違った物が出来そうです。

ただ、そうは言っても、やはりリビア砂漠と呼ばれる地域もありますから、何も無い石ころだらけの開けた所もそれなりにある様で、残された写真でも、それはうかがえます。今回はそんな所から戦車の戦いをジオラマで表現してみる事にします。

模型として考えても戦車がグルッと砲塔を回した活動中の姿は最もカッコ良く見えますが模型誌上では以外と無い気がします。

また、戦闘中と云う事でシンプルにまとめています。人形も半身のみで見えない手はまるで造っていません。

一般的にジオラマは「足し算」として受けとめられていると思います。車両を作って人形を配して地面があって…と短絡的に考えて逆に大変な苦労がいるなと思っている方もいるかと思いますがハッキリ言って、それは違います。

この30年近くジオラマのみを造り続けてきたジオラマバカの私の現在の結論は「足し算」では無くて「掛け算」です。つまり、色々なファクターを組み合わせた上でベースの上に存在しない物、別の何かを表現する事です。

例えば音や空気、感情、湿度などカタチにはなりませんが、ジオラマという「表現」ではソレが可能だと言う事です。…と云うのは私の作家としてのフィロソフィであってホビーの中では別にイイです。忘れて下さい。私は他人から何かを強要したり、強制されたりするのは大キライです。自由が一番。

48頁からの続き





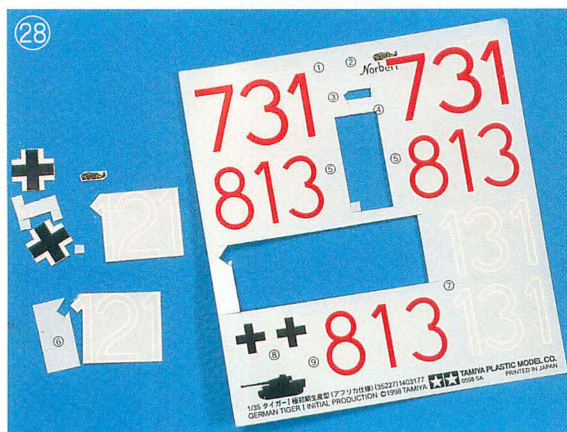


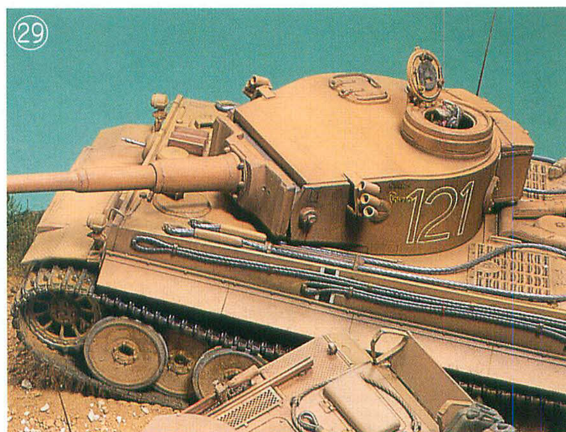
㉕履帯は全体の明るい茶系パステルを粉にしてまぶしています。ツヤ消し塗装した上なら、ある程度はくい付いてくれるので大丈夫。

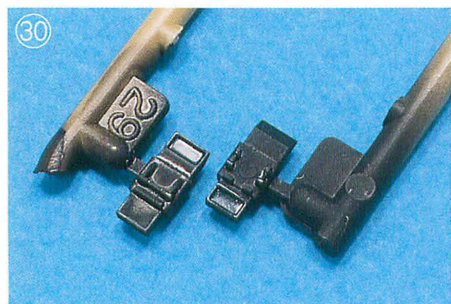
もちろん、作りたいモデルの状態によってはシンナーを混ぜて塗ったり、パテを混ぜたりはします。

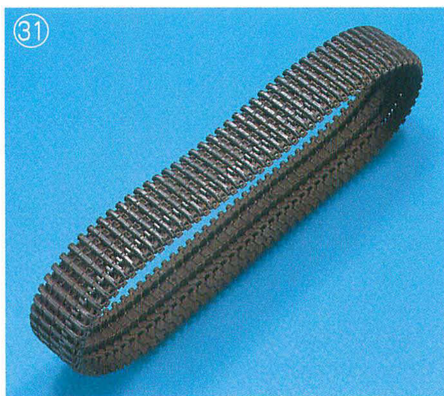
㉖今回使用した画材。油絵具は水でも溶く事の出来て乾燥も早い「デュオ」。パステルはヌーベル社の物。私の住む地方の画材店で手に入る物ばかりです。

㉗これまでの使用色のサンプル。







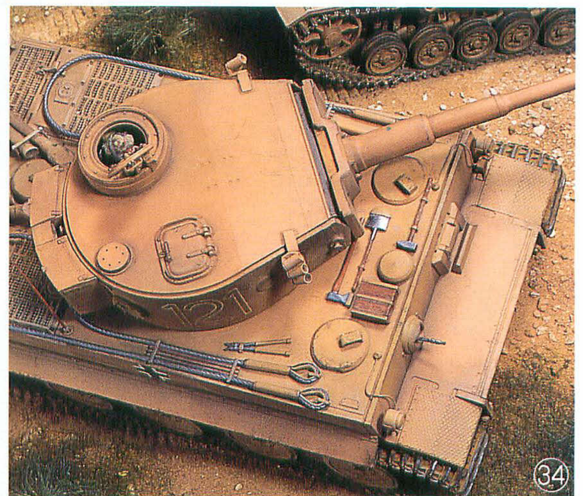


㉘㉙デカールはニスの部分を出来る限り切ってから切り、更にデザインナイフで各文字のアウトラインをなぞり、字間のニスは完全に除去します。マークソフターでしっかり押えて完全に乾いた後でツヤ消しのトップコートを吹きつければ残りのニス部は目立たなくなります。

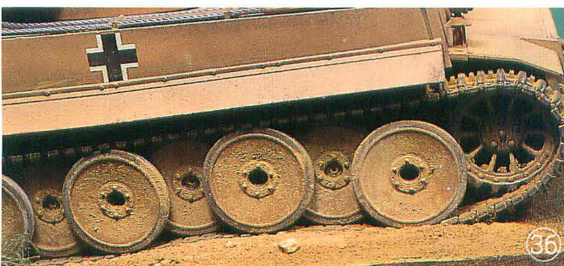
㉚ペリスコープはフラットブラックで塗装後レンズ部にクリアーイエローとクリアーブルーを混色した塗料を流し込むとリアリティがまします。

㉛履帯の出っぱった所もメタルコート仕上げ。こうした鉄部のテカリは鉛筆で塗るのも他の方法として、私がよくやる方法です。









㉜仕上げはパステル。このあたりの工程は本当はじっくり見て頂きたかったのですが工程の関係でお見せ出来ず申し訳無い。

㉝黒と茶を混ぜた物で先にダーク色を塗った所や入りズミの所にすり込む様に塗ったり、もう少し明る目の色に調合した物でエッジを目立たせたりして、ディテールを強調します。

㉞鉄部の仕上げはメタルコートで。私はハンブロールの物でやっていますが、グンゼ産業のラッカー系の物でもバッチリです。

㉟仕上げは何度も何度も気に入るまで塗ります。今回の121号車は車体側面やフェンダー等、特徴的なヨゴレが実車写真ではありますからこれらを再現するのも良いと思います。

㊱サスペンションは第1、8のみ接着し、他は転輪とは接着しているものの本体には差してあるだけです。構造的に抜けてこないワケです。これはキット附属のベルト式履帯を使った時ならではのワザです。

以上で単品の出来上り。これをジオラマに組み込む。

ダークイエローにレッドブラウン迷彩



I号戦車F型　2色迷彩

アランホビー 1/35　　製作：青木　秀之　Hideyuki Aoki

はじめに

今回、私が担当したのはアランホビーのI号戦車F型です。

キットの内容については、既に本誌でも紹介されてますし、発売からかなり時間も経っていますので、既に作られた方も多いのではないでしょうか。キットの出来は実車の雰囲気を、うまく捉えており、基本型自体はそれほど問題は無いようです。

しかし、各部分のモールド及び成型状態を、チェックしてみますと、色々と気になる部分が出てきます。

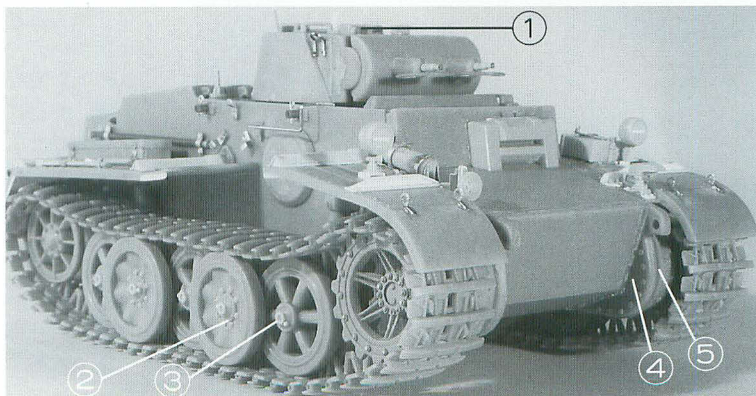
しかし、特に今回は塗装特集ですので担当の方より、ディテールアップに関しては、モデルフィーベル並にする必要は、無いと言われていたのですが、作例としては後発ですので、気になる部分につきましては、ディテールアップを施してあります。

それでは製作に入りたいと思います。

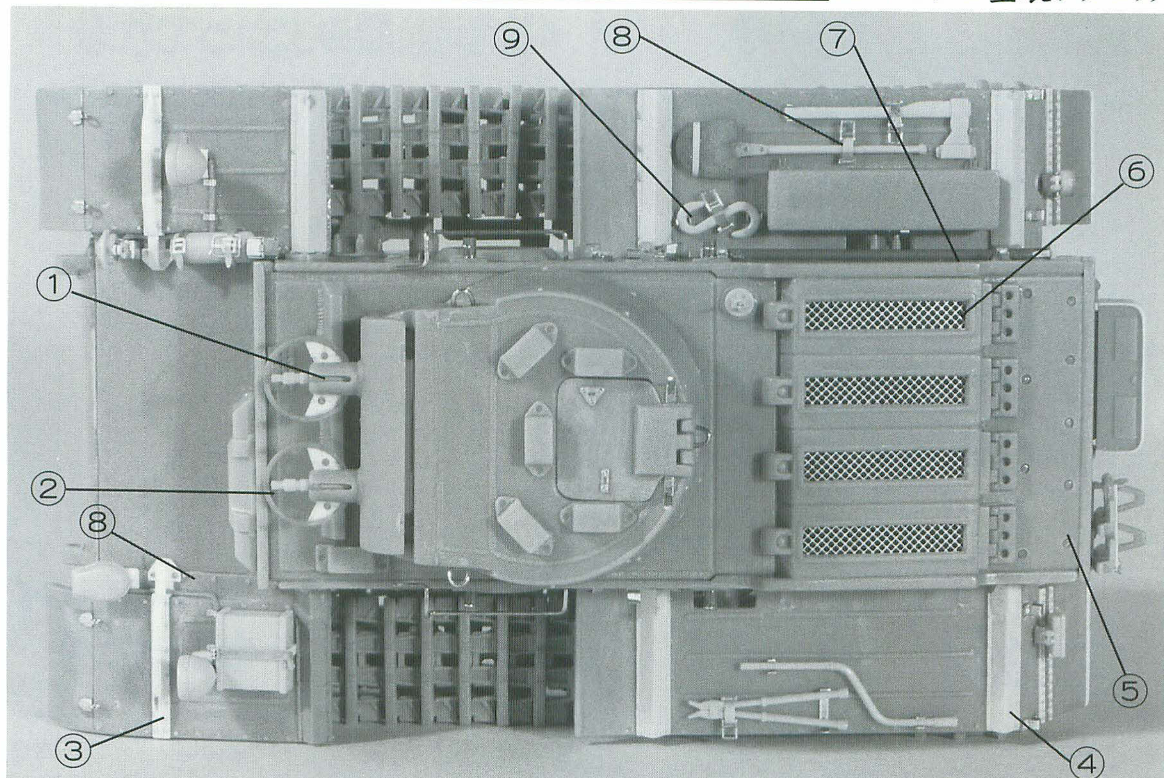
車体

車体は箱組みですが、接着面のすり合せをしっかり行えば、しっかり組むことが出来ます。機関室上面のグリル

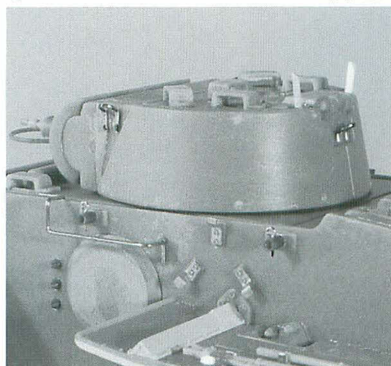


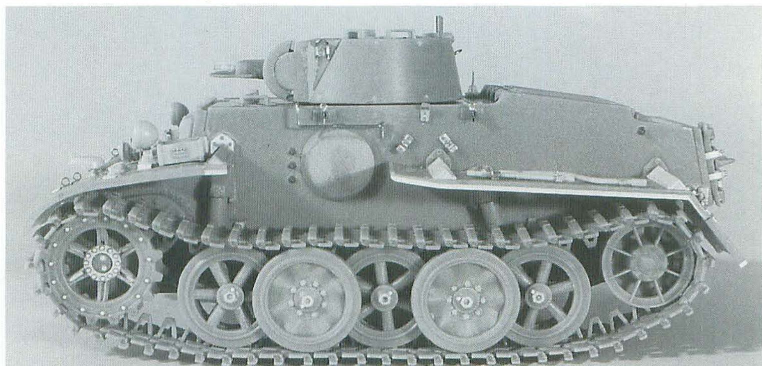


①ペリスコープカバーはキットのままでは厚いので薄く削って使用。
②このボルトはタミヤのパンターの転輪ボルトを使用。
③バーリンデンのボルト&ナットセットより。
④ボルトをヒストレックスのパンチ&ダイにて打ち直し。
⑤ファイナルドライブギアのカバー基部は段差があるので0.3㎜のプラバンで再現。



①装甲スリーブは放熱用の孔をあけ、スリーブ自体の長さもキットの物より１mm程短くした。
②コントレールの0.5mmのプラロッドとプラバンを使用して作り直したアンテナガード。
③フロントフェンダーのステーはキットのモールドを削り取り、自作のパーツに交換し、キットのモールドの位置に接着したが実車では作例より２～３mm前につく様です。その為、作例ではジャッキ台の場所ライトの位置などのバランスが狂っています。
④フェンダーステーはフェンダーと一体成型でモールドもはっきりとしていなかったので、原型を１個作りそれをワークの型想いと、ポリパテを使って複製した。
⑤中のボルトはヒストレックスのパンチ＆ダイで作ったボルトに換えている。
⑥アベールのエッチング製のメッシュに変換した。
⑦アンテナケースもコントロールのプラロッドとエッチングのジャンクパーツを利用して自作した。
⑧OVMのクランプは、アベールのエッチングパーツを使用。
⑨タミヤのヴェスペのS型シャックルのパーツを使用。





の部分は、くり抜いてアベールのエッチング製のメッシュに張り換えてあります。又、バイザーブロックはタミヤのタイガー１のパーツを移植してあります。ファイナルドライブギヤー周辺のボルト類も打ちなおしており、尖頭鋲等も自作したパーツに交換してあります。

フェンダー

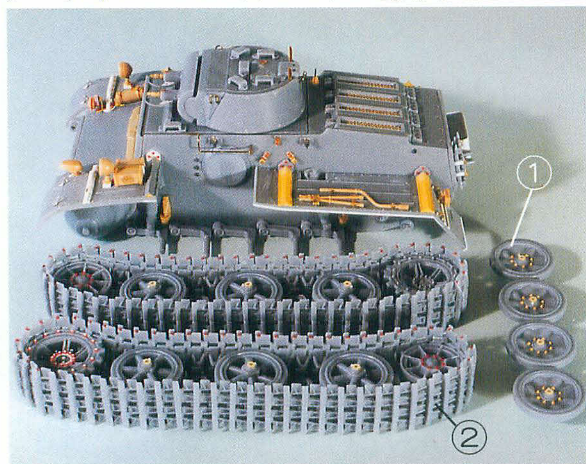
次にフェンダーですが、このパーツで一番気になるのがフェンダーステーのモールドです。エッジがはっきりと出ておらず、フェンダーと一体成型の為、リアリティーに欠けてしまっています。その為フェンダーステーのパーツは原形を１つ作り、ワークの型想いを使って複製した物に交換してあります。フロントのフェンダーステーのパーツはエバーグリーンのプラ材で作り直しました。

砲塔

砲塔自体に関しては、別に問題になる部分はありませんので、基本的には素組みです。手を入れた部分としてはアンテナガードの自作と、MGの装甲スリーブの放熱用の孔の開口、装甲スリーブの長さをキットの物より約１mm程、短くしてあります。

足周り

足周りに関しては、まず転輪のボルトのモールドが、寝ぼけていますので全て交換してあります。次に起動輪ですが、このパーツも全体的にモールド



◀塗装前、組み上がった状態

可動式キャタピラを使用しない時には、この位のパーツに分けて塗装を行なえば時間的にかなり楽になる。足周りも慣れてしまえば、バラで塗装した時とほとんど遜色はない。

①このタイプの足周りで組み立て後に塗装する場合には、前面（外側）の転輪を別々にして後で組み込む様にしておけば塗装はより楽にできる。
②キャタピラは今回キットの物しかなかったのでロコ方式にした。

塗装工程カラー解説



1 サーフェイサー吹き

乾燥後ボークスのガレージキット用サーフェイサー造形村（製造はソフト99）を遠目から全体に吹きつける。

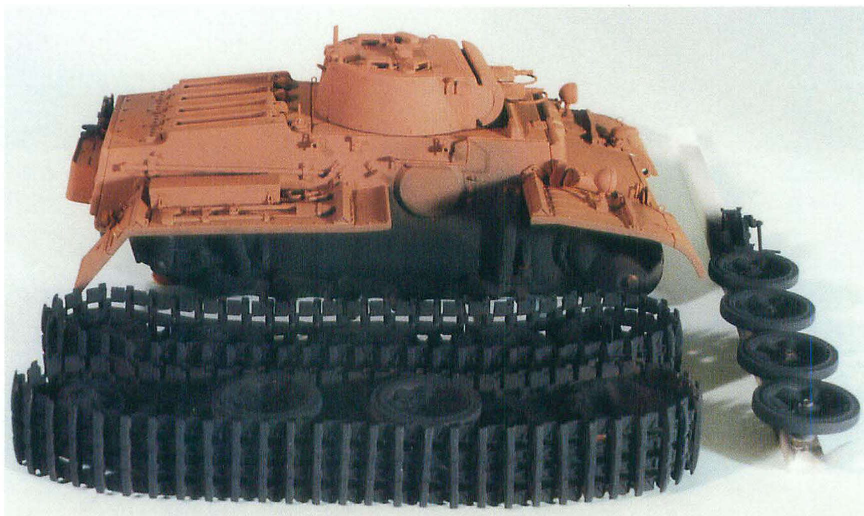
これはドライブラシをかけ易くするためのもの。

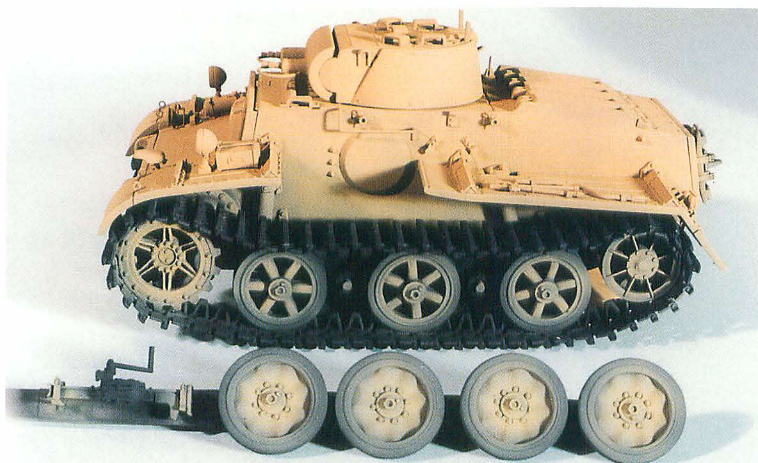
▼

2 下地塗装

これは影づくりのための工程。車体上部はレッドブラウン、下部にはつや消し黒を塗る。

影にも明るい部分と暗い部分を出しておく。





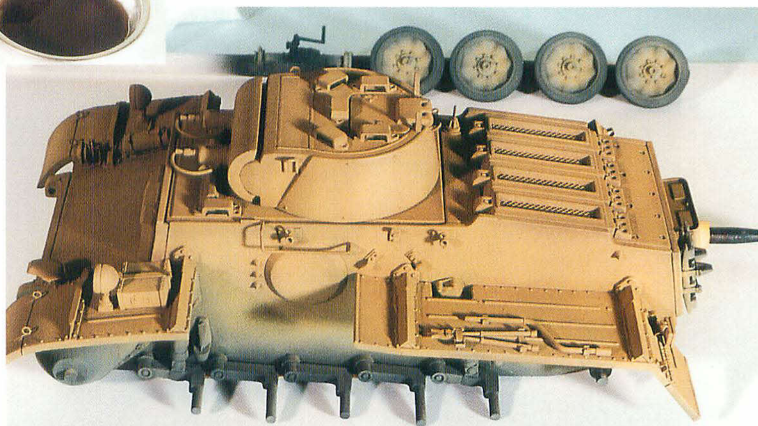
3 基本色塗装

車体上部、下部ともデザートイエローを塗ることで微妙な色調の変化が出る。
下部は黒い部分を意識的に残すようにする。

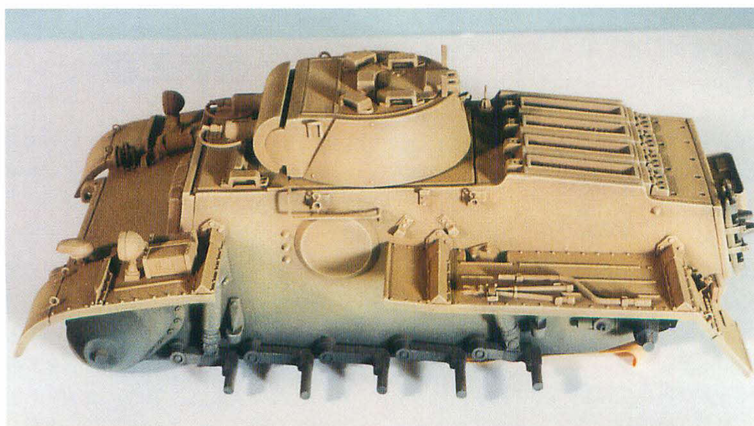


4 トーン落し

基本色を落ちつかせるために、レッドブラウン、ハルレッド、ブラックの混色（ダークブラウン）を12倍ぐらいに薄めて塗る（拭きとらない）。
右下の塗料皿にあるのがダークブラウンの塗料。

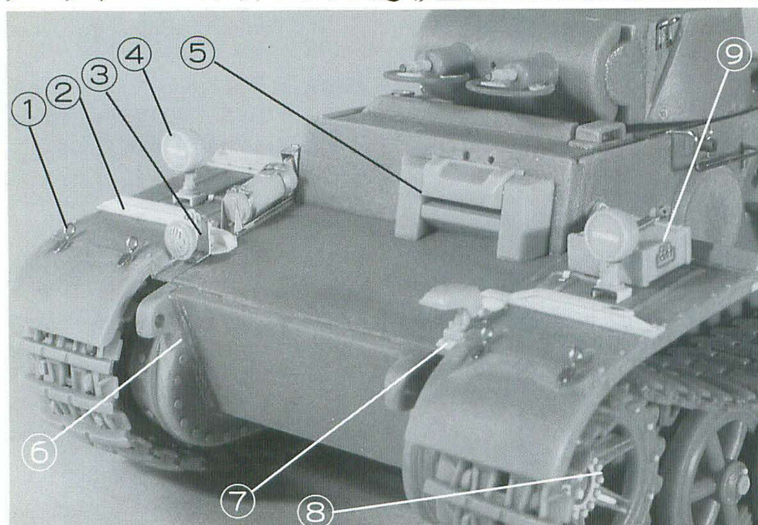


▶混色のダークブラウンを今度はエアーブラシで筋彫り部分や影になる所に吹きつける。（6倍に薄めたものを使う）

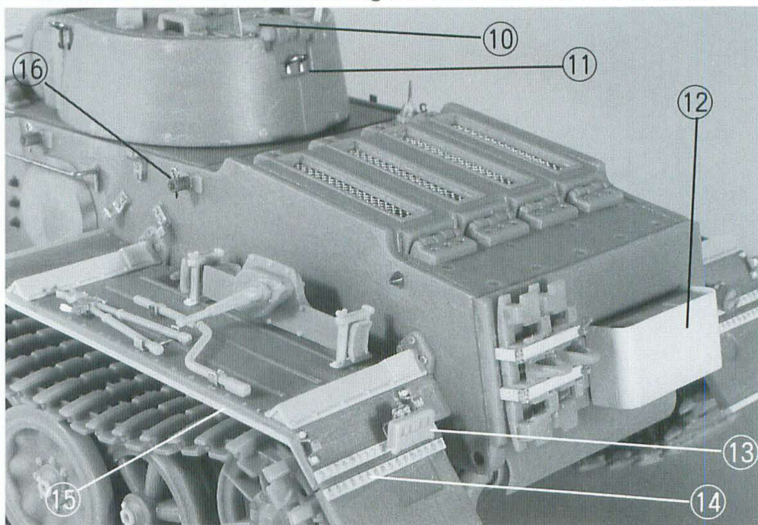


5 1回目のドライブラシ

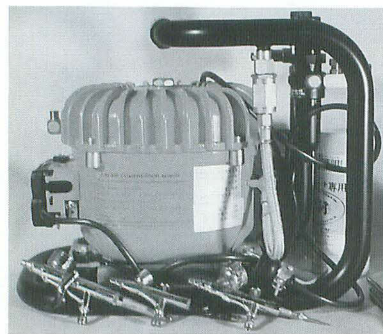
迷彩色を塗る前に基本色より少し明るい色でドライブラシをする。全体のディテールが軽く出た。



①MBモデルのⅡ号戦車C型の改造キットに入っているエッチングパーツを使用。
②エバーグリーンのプラ材で作り直したフェンダーステー。
③ホーンの基部はエッチングパーツの枠とエバーグリーンのプラ材にて再現。
④ライト本体はタミヤⅢ号戦車J型のパーツを使用。基部はタミヤのⅣ号戦車車外装備品セットのノテックランプの基部を使用。
⑤バイザーブロックはタミヤのタイガーⅠのパーツに交換。
⑥溶接跡は伸ばしランナーとモーターツールで再現。
⑦ノテックランプはタミヤのⅢ号突撃砲のパーツを使用。
⑧起動輪のスポークは肉抜きをしている。
⑨タミヤのヴェスペのジャッキ台を使用。



⑩ハッチストッパーはエッチングのジャンクから。
⑪砲塔に3ヵ所付くフックは真鍮線にて作り直した。
⑫ドラゴンのⅢ号突撃砲のパーツにエバーグリーンの0.25㎜プラ材を巻いて作成。
⑬車間標示燈及びフェンダーストッパーはエッチングパーツの枠を利用して作成。
⑭リアフェンダーのヒンジはモールドがはっきりしないので、プラロッドとプラバンで作り直した。
⑮キットの成型状態が良くなかったのでプラバンにて修整。
⑯牽引ロープの留め具はコントレールのプラロッドより自作。ストッパーは0.3㎜の真鍮線で。



が、寝ぼけていますのでかなり手をいれてあります。途中写真を見て頂ければ分かりやすいと思います。

細部について

OVM類はタミヤⅣ号戦車外装備品セット及び、ジャンクパーツから、ラック等は専用のエッチングパーツが発売されていませんので、クランプのパーツはアベールのエッチングパーツを使用しその他のパーツは、エッチングのジャンクパーツを利用して製作しました。

塗装

塗装用具及び塗料について

まず塗装の方法に入る前に、使用した塗装用具と塗料について説明しておきます。基本塗装は全てエアーブラシで行いますので、当然、エアーブラシ本体とコンプレッサーが必要になります。エアーブラシは口径が0.3mmが2本（ボタン式とトリッガー式各1）0.2mmが1本、0.3mmのトリッガー式は基本塗装、ボタン式は迷彩用、0.2mmはシャドー用と使い分けています。コンプレッサーはレトラセットの物を使用、これは深夜、作業する事が多いので購入したものです。次にAFVの塗装技法で最も重要なドライブラシ用の筆ですが、腰が強くて柔らかい、ナイロン製の筆を使用しています。本当はセーブルの筆が一番いいのですが、地方では（ちなみに私は静岡です）手に入りにくく、模型屋で手に入りやすい、ナイロン製の筆を使用しています。

ナイロン製の筆はすぐ使えなくなりますので、5、6本を用意しておくと良いでしょう。

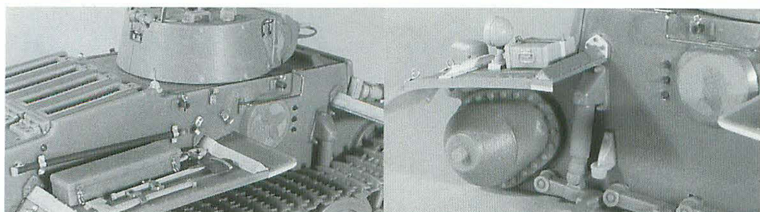
塗料は基本塗装はアクリル、トーンダウン用はタミヤのエナメル、ドライブラシ用はハンブロールを使用しています。墨入れはパステルを粉末にした物を使用しています。

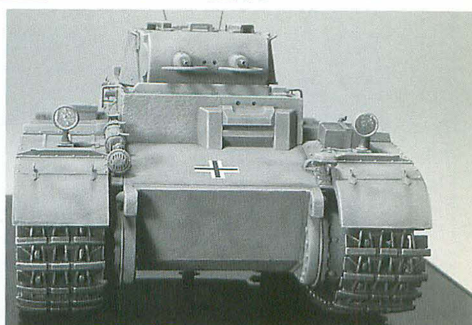
塗装工程

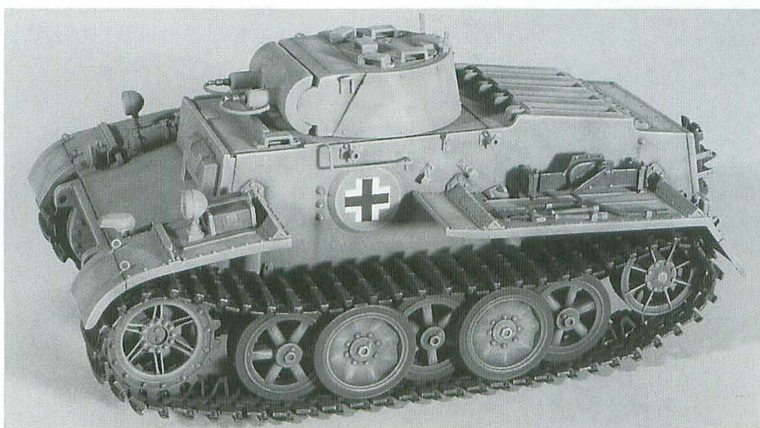
1サーフェイサー

まず、いつもの用に中性洗剤で奇麗に洗います。乾燥したら全体にプラサフを遠目から吹き付けます。

これは、ドライブラシのしやすい下地を作る為ですので、奇麗にカバーする必要はありません。金属パーツ部分にはメタルプライマーを吹き付けておきます。今回、プラサフはボークスの商品を使いました。製造元はソフト99ですが、通常のソフト99より、塗料の









粒子が細かく出る様に調整されている様です。

2　下地塗装

サーフェイサー吹きが終ったら、次は影の部分になる、下地の塗装を行います塗装色は車体下部はつや消し黒、車体上面はレッドブラウンで、上下でも陰影が出る様にしてあります。

3　基本色の塗装

次に基本色のデザートイエローを吹き付けます。車体下部は黒の部分を残す感じで吹き付けますが、車体上部は影を残すのでは無く、レッドブラウンの上にデザートイエローを乗せる事で、微妙な色調の変化を出す為にこの工程を行います。

4　トーン落とし

全体の色調を落とす為に、レッドブラウン、ハルレッド、ブラックを混ぜて作ったダークブラウンを12倍位に薄めた塗料を塗ります。これはウオッシングではありませんので、拭き取りはしません。次に上記のダークブラウンを６倍位に、薄めた塗料をエアーブラシで筋彫り及び、影になる部分に吹き付けます。

5　ドライブラシ

次に１回目のドライブラシを行います。最初のドライブラシは、当然の事ですが基本色よりあまり明るい色では行いません。全体のディテールが軽く浮き上がるような感じにします。ハンブロールの72番にフラットイエローとフラットホワイトを混ぜた色で、ドライブラシを行いました。

6　迷彩色の塗装

１回目のドライブラシが終わりましたら、レッドブラウンの迷彩色を塗装します、今回の様な迷彩の場合、最初に全ての塗装を行ってしまうと、何回かドライブラシをかける内、迷彩色がぼけてしまいます。ドライブラシの後で塗装する事によって、迷彩色にも微妙な濃淡が出すことできます。

7　パステルによる墨入れ

次はパステルで墨入れを、行います。ダークブラウン、ライトブラウン、ブラックの３色のパステルを粉にした物を混ぜて、墨入れ用のパステルを調合します。筋彫り、影になる部分などを中心にパステルを置いていきます。余分なパステルは吹き飛ばし、残ったパステルは奇麗な筆を使って、ぼかしておきます。今回の様な小さい車輛では余やりすぎると、煩くなりますのでポイントを絞って、墨入れをおこなっています。

最後にパステルの抑えを兼ねて、最初に作ったエナメルのダークブラウンでパステルを置いた所を中心に吹き付けておきます。

8　２回目のドライブラシ

１回目のドライブラシの色よりも、明るめに設定した塗料を全体のバランスを考えながら、ドライブラシを行います。最初のドライブラシは、全体のディテールを浮上がらせる為ですが、２回め以降のドライブラシは全体のメリハリを付ける為ですので単調に成らない様に作業をします。

9　仕上げ

最後にエッジの部分に、バランスを見ながら、ハンブロールのフラットホワイトでドライブラシを行います。OVMの木製部分はレッドブラウンに塗装し、パステルのダークブラウンでメリハリを付けます。

金属部分はフラットブラックに塗り、タミヤのペイントマーカーのクロームシルバーでドライブラシを行います。

10　転輪及びキャタピラの塗装

今回、足周りはロコ（オーストリア製1/87AFV半完成キット）方式で組み立てありますので、まず全体をフラットブラックで塗り残しの無い様、塗装します（この黒が転輪とキャタピラの色になります)。次にデザートイエローで転輪を塗装しますが、このとき影の部分を残すように、塗装して下さい。次にはみ出てしまった、デザートイエローの部分を、修整する為フラットブラックを吹きます。次はトーンダウンの為、エナメルのダークブラウン（4のトーン落しで作った物)を塗ります。乾きましたら、ハンブロールの72番に少量の、ホワイトを混ぜた塗料を転輪と起動輪にドライブラシを行います。次にパステルのダークブラウンで、墨入れをおこない、１回目のドライブラシをおこないます。キャタピラの部分は、タミヤのペイントマーカーのクロームシルバーでドライブラシをしておきます。現在、私は可動キャタピラの場合でも、この方法で塗装しています。この方法ですと、非常に簡単かつ奇麗



6 迷彩色の塗装

迷彩色であるレッドブラウンをニードル径0.3㎜のエアーブラシで吹いて行く。

迷彩色を吹く前に１回目のドライブラシをするのは、今回の様な迷彩パターンでは迷彩色がボケてしまうから。また迷彩色に微妙な濃淡が出せるのも理由。

7 墨入れ
8 ドライブラシ（2回目）

墨入れはパステルを粉末にしたものを筋彫り部や影になる部分に筆を使って置いて行く。調整後パステルの抑え用に４のトーン落しに使ったダークブラウンを吹きつける。

２回目のドライブラシは全体のメリハリをつけるために行う。





9 仕上げ

各エッジ部分にフラットホワイトでドライブラシをする。

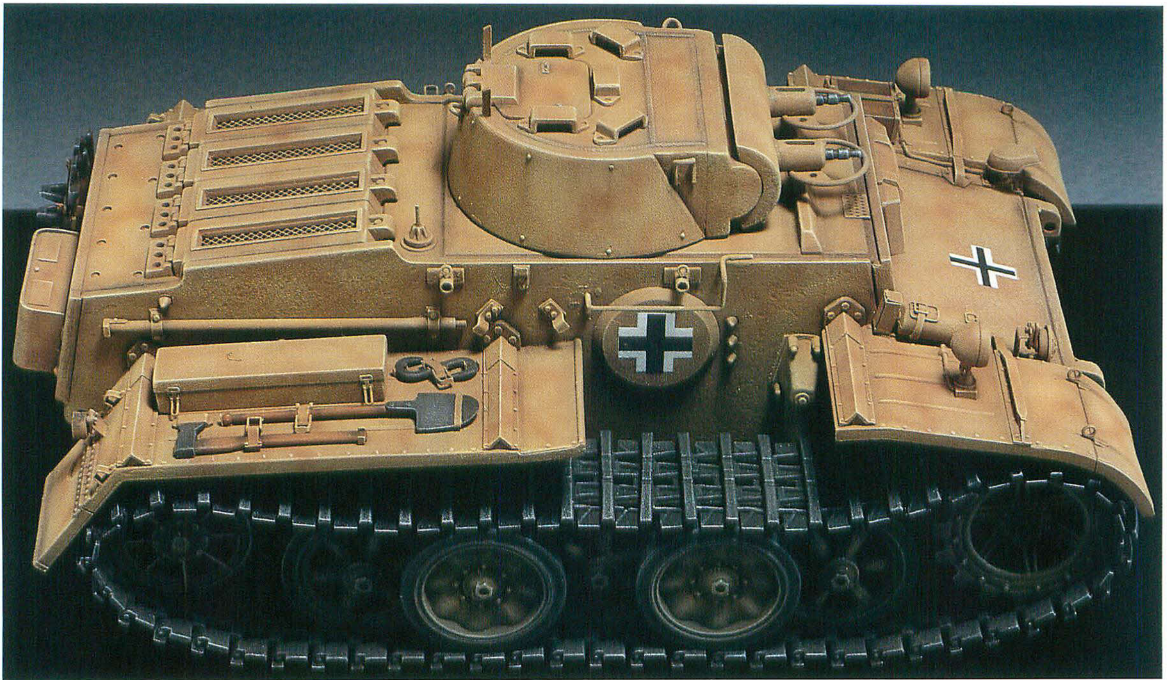
キャタピラやOVMの金属部にはクロームシルバーでドライブラシを施した。

に転輪を仕上げる事が出来ます。

最後に

以上が私の塗装方法です。どちらかといえば、あっさり目の塗装だと思います。私は単品しか作りませんので、あまりくどい塗装はやりません。こんな私の塗装方法が、少しでもなさんの、お役に立てれば幸いです。

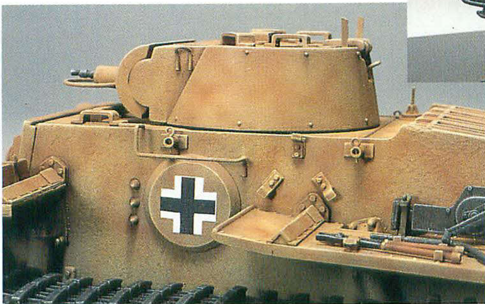




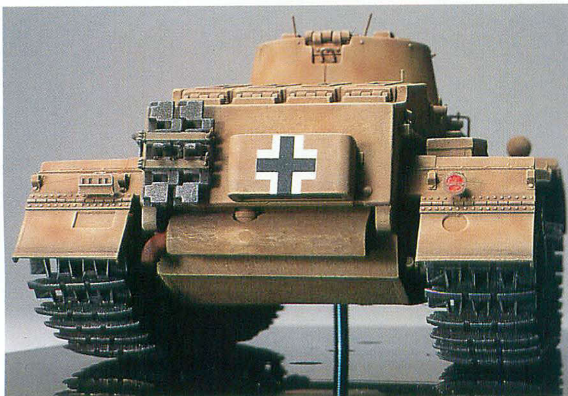
汚しよりも陰影を強調した作品。パステルやドライブラシが効果的に使われている。単品では汚しは押え気味な方がディテールが良く出て、奇麗に見える。

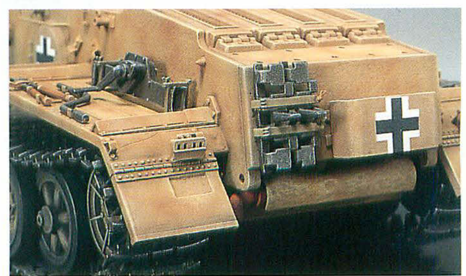


※このキットの問い合わせ▼バウマン☎03-3795-2666









バランスを考えた3色迷彩塗装

Sd. Kfz250/1
NUE

GUNZE
SANGYO 1:35

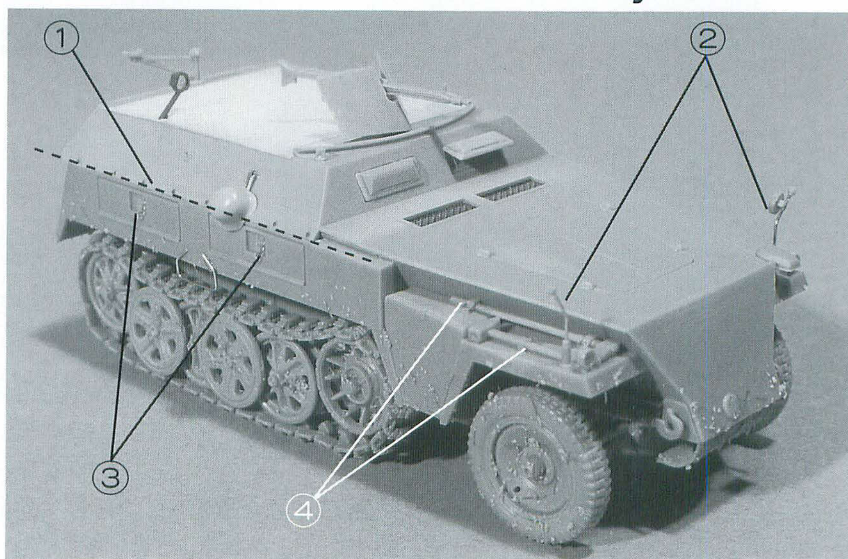
3 Color Scheme

Sd.Kfz250/1 ノイ 3色迷彩

グンゼ産業 1/35　　製作：荒屋敷 正和 Masakazu Arayashiki

Sd. kfz250/1 ノイ

ガレージキット花盛りの頃、つい食指を動かされて購入してしまった“ノイ”の改造キットを、力ずくで組んだという記憶がありますが、まさかインジェクションキットとして、再会できるとは思ってもいませんでした。しかも、開発スタッフにあの高田氏・五十嵐氏のスペシャルユニットを迎え、Made in 香港ながら、グンゼ産業より満を持してのリリースです。前評判の高さに、いささか煽られつつも実際に目にしたキットは、全くギャップを感じない、むしろそれ以上の内容で、スタッフ陣のレベルの高さとこの車輌に対する熱き思いが伺えます。巧みなパーツ処理で、意外に複雑な面構成からなる各装甲板のフィッティングもばっちり決まって、組み立てには特に問題なし。これで、カステンのキャタピラで完璧かと思いきや、とんでもない、パッ

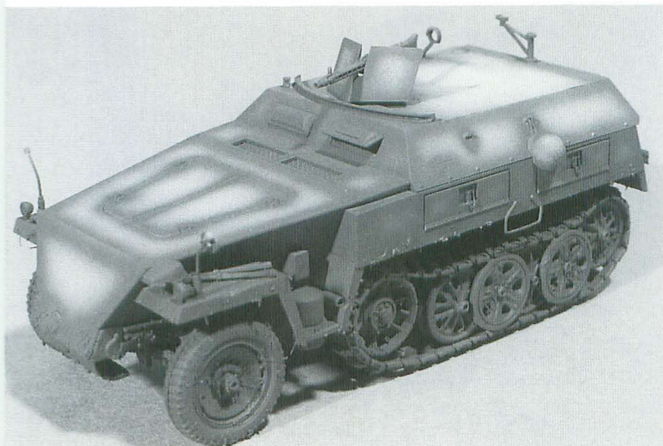


①このラインが組み立てのキーポイント。仮り組みによるチェックが大きく左右する。
②ポールは真鍮線で作り換えた。
③④エッチングのジャンクパーツから、チェーンと留め具のハンドルをそれぞれ追加。
⑤足周りの泥は情景用パウダーとパイルにマットメディウムを混ぜてペースト状にしたものを筆でなすりつけている。

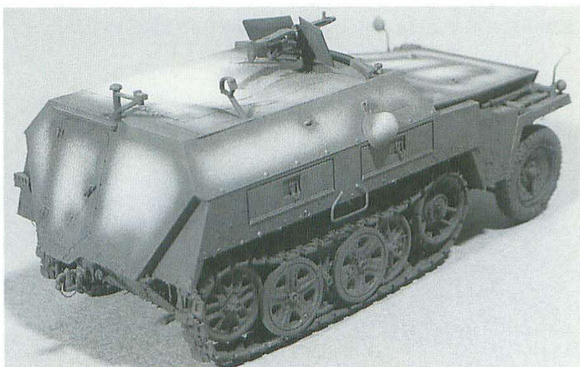


①ループもエッチングパーツのジャンクパーツより。
②インテリアの塗装を保護するためのマスキング。両側の装甲板のエッジを利用して直角にカットしたテープで丁寧にマスキング。
③ハッチの開閉ハンドルを伸ばしランナーで自作した。
④リベットのモールドがややおとなしいので、タミヤのM3スチュアートの車体から移植した。
⑤ステップを真鍮線で追加している。
⑥車間標示燈の配線はソフトワイヤーで。

下塗り：シャドー吹き



▲タミヤのサーフェイサーで下地を仕上げたあと、タミヤ・アクリルのレッドブラウン＋フラットブラック＋オリーブドラブの混色で作った焦げ茶を下塗りする。
▼下塗りは足周りを中心に奥まった部分やパネルラインを意識しながらシャドー吹きをする。



ドの厚さも絶妙なキット附属のものとしては、最初で最後か？の連結可動式が仲々いい味を醸し出しています。

なんらかの理由でまだ作っていない読者のために、敢えて補足させて頂くと、特にこの手の車輛に言える事なのですが、事前の仮組みとチェックなしの一発組みは危険です。精度が高いだけに、一つ狂うとボタンの掛け違い状態になりかねません。それと、誘導輪アームのパーツ（A10）は、キャタピラのテンションを調整するため、最後に接着した方が良いでしょう。インストに指示はありませんが、キャタピラは片側39個がベストです。

さて、作例は手持ちの余ったエッチングや、真鍮線等だけで仕上げてみました。高価な市販のパーツを使わなくても、この程度のモデリングで気軽に楽しめるのは、やはり出来の良いキットの強みだし、本来あるべき姿の様な気もしますが…。ディテールアップ箇所の詳細については、途中写真にキャプションを入れましたので、そちらをどうぞ。

塗装

a．塗装前の下地処理

エッチングパーツや真鍮線等の金属素材には、酸化防止のメタルプライマー（グンゼ産業）を塗布しておきます。個人的には、サーフェイサーの一発仕上げで充分だと思いますが、念には念をという事で…。サーフェイサーは、ラフ面のチェック、塗料の食い付きや塗装条件を統一する上で欠かせません。各メーカーから出揃ってますが、こればかりは好みの問題もありますので、各自でリサーチして下さい。因みに私は、無条件でずーっとタミヤ製です。

b．下塗り

今回使用したのは、タミヤアクリル塗料。エアブラシは２機種で、昼間用にタミヤの２代目「スプレーワークHG」、夜間用は、アクセルワークの「しずか御免」です。その名のとおり、驚異的な静粛性のおかげで、多少のエアー圧の低さなんか気になりません。

下塗りは、レッドブラウン＋フラットブラック＋オリーブドラブで調色した焦げ茶を、足周りを中心とした奥まった部分や、パネルラインに添った、いわゆるシャドー吹きです。陰影を強調してメリハリを付けるのが狙いですが、一方では、ウェザリングのためのベース作りという意識もあります。

C．基本色と迷彩色

基本色のダークイエローは、タミヤ・アクリル ダークイエロー＋フラットイエロー＋オレンジ＋フラットホワイトを調色したもの。別にビンの生色でも良いのですが、吹き付けると白っぽくなるし、下地が焦げ茶だと発色が悪い

基本色を塗る





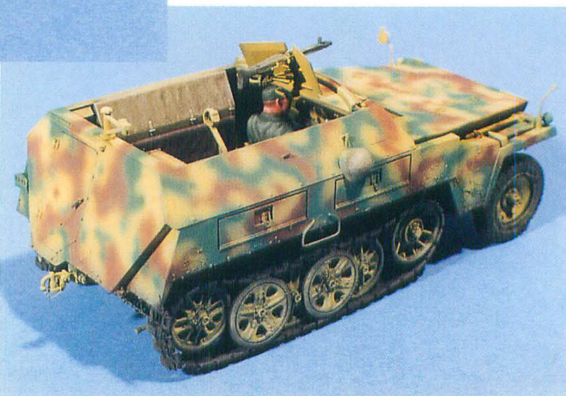
下塗り乾燥後



ダークイエロー＋フラットイエロー＋オレンジ＋フラットホワイトの混色をエアーブラシする。下塗りを生かしながら足周りはうっすらと、グラデーションをつける様に、トップは数回塗り重ねている。キャタピラやタイヤのゴム部にはなるべく色を着けないこと。　ダークイエロー（上記の混色して作ったヤツです）に若干のフラットホワイトを加えたもので、ハイライトを入れて基本色の塗装は終了。

迷彩色を塗る





グリーンはダークグリーン＋フラットグリーン、ブラウンはフラットブラウンで、これに基本色のダークイエローを加えてトーンを落している。迷彩は模型としてのバランスに留意されたい。

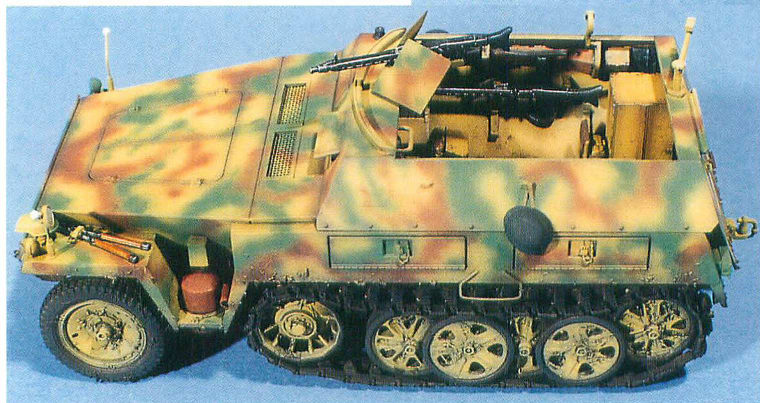
迷彩塗装は各人のセンスに因るところが大きい様に思う。慣れてない段階では、キットの箱絵やインスト、資料本等のカラーイラストをそのまま真似てみるのも一考だ。

細部・車外装備品を塗る

キャタピラに着いてしまった色は、下塗りの焦げ茶でリタッチする。転輪、タイヤのゴム部をジャーマングレーで。インストの塗装指示どおり黒をビンからそのまま塗るのは避けたい。

機銃、工具類の金属部分は、ガンメタル＋ジャーマングレーでドライブラシした。柄はデザートイエローをベースにレッドブラウン＋クリアーオレンジを薄めてムラ塗り。グンゼ産業のウエザリングカラー、ラスト＋オレンジの錆色をマフラーにドライブラシしている。





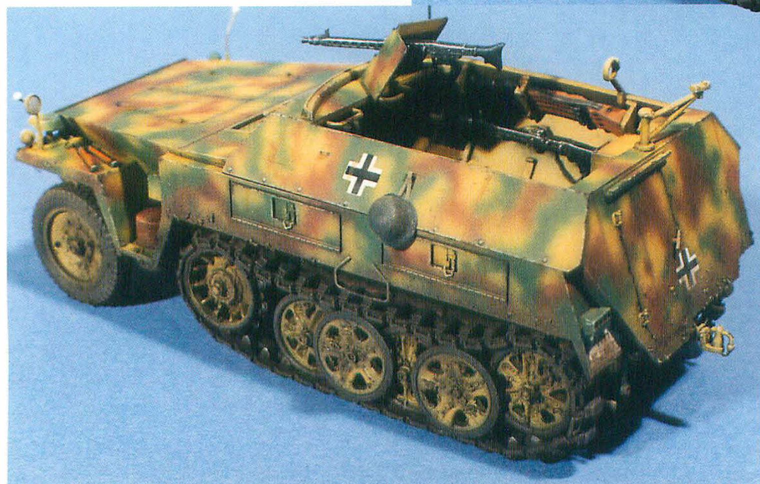




ドライブラシウェザリング

ペトロールで溶いた油絵の具のローアンバーによるウオッシングが済んだら、乾燥後デカールを所定の位置に貼る。タミヤエナメルのバフで車体を調色したアース系で足周りと車体下部を軽くドライブラシ。次に錆、雨垂れ等を車体に描き込んでいく。基本的に要所要所を抑えていれば、それで良いと思う。





今回は塗装本という事で、奮発して車体の塗装の剥れを表現してみた。下塗りで使った焦げ茶で(この色便利！)、エッジを中心に筆でこちょこちょ突っついている。全てのプロセスをクリアーしたところで、足周りをパステルで仕上げ最後に極薄のミディアムグレイを全体にオーバースプレーして完成。



主に使用しているエアーブラシとコンプレッサー。日中はタミヤの「スプレーワークHG」(右)で、アクセルワークの「しずか御免」(左)は、基本的に夜間使用することが多い。中央のホルダーとトレイはグンゼ産業のもの。作業スペースを広く使える。





しで、グラデーションの際の明度にも限界があります。

塗装は、下塗りを生かしながら足周りはうっすらと、グラデーションをつける様に車体のトップへ移動させながら、数回塗り重ねる作業を繰り返します。キャタピラは焦げ茶がベース色になるので、なるべく他の色を着けない事。仕上げは、基本色に若干のフラットホワイトの混色でハイライトを入れました。

迷彩色のグリーンは、タミヤ・アクリル ダークグリーン+フラットグリーン、ブラウンはフラットブラウンですが、そのままだと1/35のスケールエフェクトとしては強すぎるので、基本色のダークイエロー等を適宜加えて、トーンを落とした方が良いでしょう。迷彩塗装に関しては、各人のセンスに因るところが大きいので、慣れない向きにはキットの箱絵やインスト、資料本等のカラーイラストをそのまま模倣してみるのも一考です。

d. 細部と車外装備品

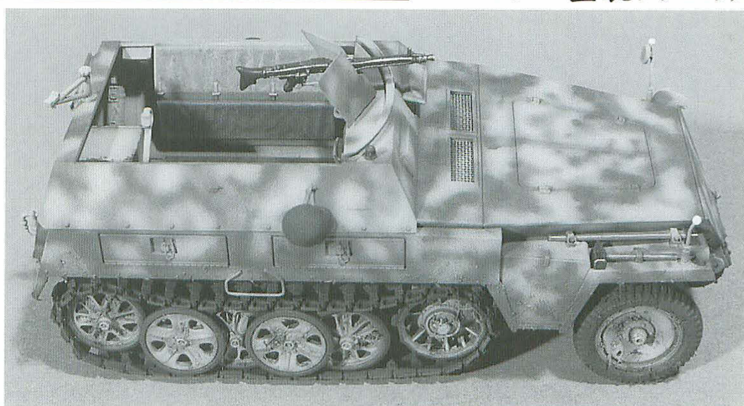
キャタピラに着いてしまった色は、下塗り色でリタッチします。転輪やタイヤのゴム部はジャーマングレー。塗り分けに気を遣いますが、ドライブラシやウェザリングで多少の粗はカバーできるので、あまり神経質になる事はありません。マフラーの錆は、グンゼ産業のウェザリングカラーのラストにオレンジを加えたもの。機銃やワイヤーカッター、ハンマー等の金属部分はフラットベースで艶消しにしたガンメタ

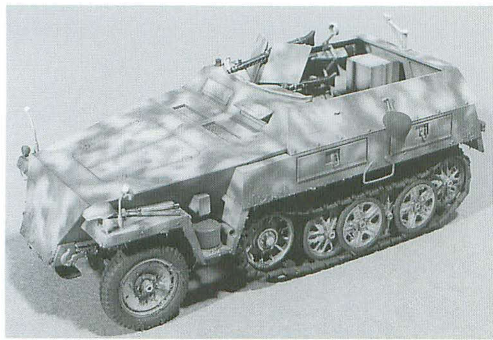
牛乳パックを使用した、簡易塗装台。小型、軽車両ならこれで充分です。





ジャーン！附属のドライバーのフィギュアがちゃんと乗っている。新製品の作例ということでまじめに使ったら、ジオラマのシチュエーションに合わず浮いてしまった。それにしても車内は装備品類でかなり狭い。

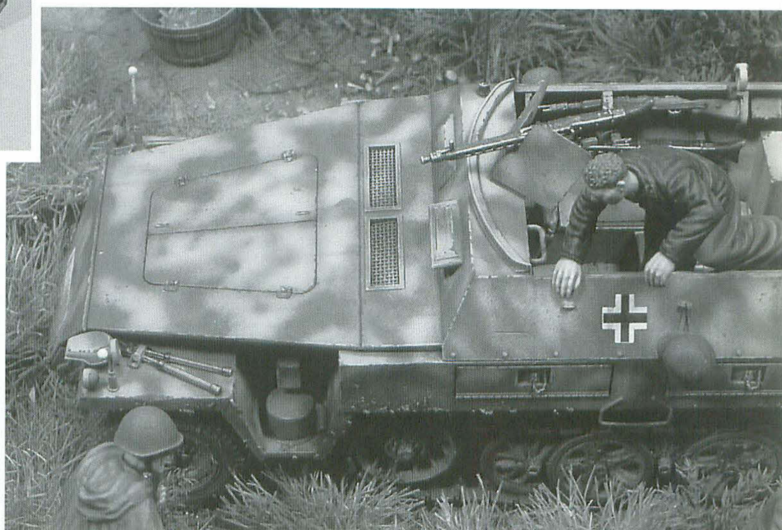




ジオラマに組み込んだ Sd. Kfz250/1ノイ。設定がソ連軍に降服しているシーンとなったため、上記のドライバーフィギュアは合わなくなったが、他のフィギュアを使ったためほとんど見えなくなった。

ドライブラシ、ウエザリングなどを施しリアルさを増した作品となった。





ル＋ジャーマングレーで塗装したあと、メタリックグレイでドライブラシしました。柄の木部はデザートイエローをベースに、クリアーオレンジ＋レッドブラウンを溶剤で薄め、意図的にムラ塗りをして変化をつけます。

e．ウオッシング

あくまで、ウェザリングとしてのプロセスだと思っています。基本的にエナメル系塗料で行いますが、私は油絵具派。これに合わせて溶剤も専用のペトロールです。エナメルはプラへの侵食性が強い様なので、いかがなものかと。ローアンバーを色のついた液体程度に薄めて、筆は上から下へ雨水の流れを意識して、垂直に運ぶのがポイントです。

f．ドライブラシとウェザリング

所定の場所へデカールを貼り終えたら、いよいよエナメルによるドライブラシがあなたを待っている。筆に含んだ塗料をキッチン用のペーパータオルで（ティッシュでも可）拭き取り、パサパサの状態でモデルのディテールを強調する様に、表面をブラッシングするという古典的な技法。円を描く様に、最初はアンダンテで、筆の塗料が乾燥してきたら序々にフォルテシモって感じです。塗料は、車両がダークイエローベースの場合はタミヤのバフ。因みに足周りはアース系。筆は、ホルベインと毛先が丸型カットのヌーベルのパステルブラシを併用しています。

モデルにリアルさを加味する上で、肝要なのがウェザリング。戦場での環境や気象条件、酷使による傷や錆等を考慮して仕上げる訳です。なんて、偉そうな事を言っていますが、正直、今後の課題とすべき領域なので、詳細はもっと上手い人の記事を参考にして頂くとして、ポイントだけちょっと…。

土埃りによる汚れを表現するなら、やはりパステルが有効でしょう。紙やすりで削って粉状にしたものを、足周りを中心に筆でなすり付けてやります。これは、雨垂れ等の表現にも応用できます。使用しているパステルは、ヌーベルとドイツ製のFaber-Castellの２種類で、とりあえず黒と茶系数色があれば用は足りるはず。

錆は、レッドブラウン＋フラットレッド＋フラットイエロー＋オレンジの混色を薄めに溶いて、何度も塗り重ねる様に筆で描き込んでいます。

最後に、パステルの定着と艶消し効果も兼ねて、しゃぶしゃぶのミディアムグレイを全体にオーバースプレーしました。



グムカのT-34-85用のエッチングパーツでディテールアップしたドラゴンのSU-85Mと塗装中のフィギュア。

第2次世界大戦後半は連合軍の進撃はもの凄く、特にソ連軍の攻勢はドイツ軍を常に圧倒した。その中でドイツ軍も勇猛に戦ったが、戦局は覆らなかった。









ジオラマ

高田氏・五十嵐氏の手によるキットでまとめてみようという事で、ドラゴンの傑作T-34系から、強引にSU-85Mをセレクトしました。主役を食ってしまいそうな大きな車両との組み合わせは、ジオラマ道のセオリーに反する様ですが、表現方法は種々あるにせよ、末期のドイツ軍の劣弱な状況を強調するには、どうしても必要だったのでしようがない。キットは、グムカより好評発売中のT-34/85用のエッチングパーツでディテールアップ。非常に壷を押えた構成は、少ないパーツで最大の効果を生むという、正に理想的な製品に仕上がっています（高田さん、提供ありがとう。いつもお世話になります）。キット購入の際は、合わせてどうぞ。

さて、ジオラマですが写真用パネルのサイズにいささか限界を感じていた折、丁度、日本画用のものを見つけたので、早速使ってみました。サイズに独特の規格があるみたいで、これでバリエーションも倍増です。これにいつもの木目シートを貼って、台の出来上がり。よく、ジオラマ台の枠を額縁に例えられますが､どうも枠だけ立派で、しかもそれに負けている様な作品を、たまに拝見したりすると、やはり、この方法が自分には一番似合ってるなと思う今日この頃です。

ベースは、発泡スチロールの積層で大まかな地形を作り、ドフィックスの壁補修材でコーティング。園芸用の土と、カスタムディオラミックのガレキセットのものを適当に（いい加減という意味じゃない）ばらまき、水で溶いた木工用ボンドを染み込ませて固着します。植え込みすぎてタワシみたいになってしまった草は､サイザル麻のロープ。樹木は、荻窪・喜屋ホビー取り扱い（問TEL03－3398－1424）のオランダドライフラワーに、ハーブのスペアミントで葉をつけました。ミニ教会は､レミ社のプラ製バキュームフォームキットです。

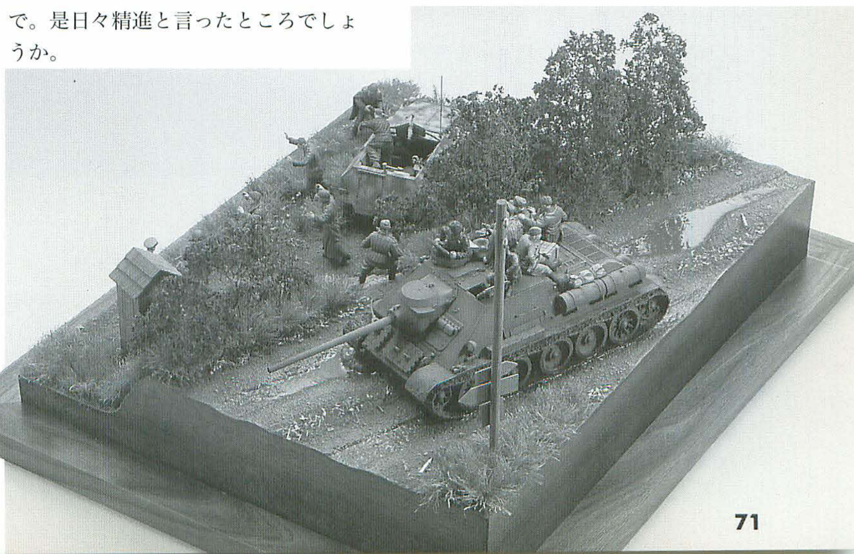
塗装の方も触れておきましょうか。塗料は車両と同様､タミヤのアクリル。筆塗りでは辛いので、エアブラシで仕上げます。地面、草は、単調にならな





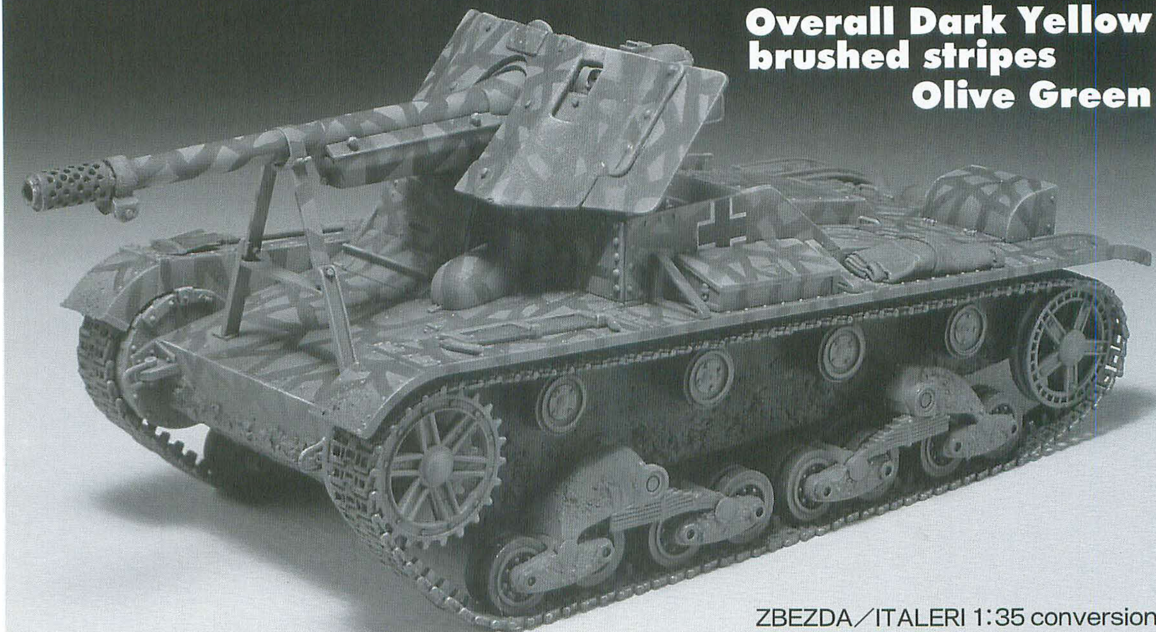
い様、明度の異なる色を数色吹き付けました。樹木や教会等の障害物は、別に塗装してから後で接着します。ドライブラシでめりはりをつけて、地面と草地の境界線は、自然な感じにリタッチ。という事で、肝心の具体的な色名が出せなくてすみません。何しろ、作り置きの怪しいフィルムケースの色を、現場でごちゃごちゃやっているもんですから…。折込カラー等で察してもらえると有難いです。

いつも各戦線の地理的な特徴とか、季節感とか更にはその日の天候とかを、ジオラマで表現できたらと思っているのですが、如何せん技術が伴わない様で。是日々精進と言ったところでしょうか。



オリーブグリーン網の目塗装

7.5cmPak97/98auf Pz. Kpfw T-26(r)



7.5㎝Pak97／98auf Pz.Kpfw T-26(r)自走砲

ズベズダ／イタレリ 1/35 改造　製作：清水　稔 Minoru Shimizu

今回は塗装例という事でチョット変った塗装例で選んだのがこの自走砲です。御存じの方もいると思いますが鹵獲車輌のT-26の車台にフランス製の砲を乗せた物です。厳密に言うとドイツ軍の5㎝pak38の防盾にフランス製の1897式7.5cmの砲身を組み込みロシア軍T-26の車台に載せた物です。

話は前後しますが、今回は何を製作しようかと思案していた時にマキシムさんの所にズベズダのサンプルT-26が届いていました。砲に関しては、以前にマキシムさんで見ていたのを思い出し高田氏に聞いた所「確かあったと思う」という事で探していただきました。「ありました、ありました。ミニアート・スタジオの砲が。」高田氏の好意に甘え着いたばかりのサンプルといっしょにいただいてまいりました。無論お金は払ってきましたよ！その節はありがとうございました。孤高のモデラーの私は、まだ作例が決まらぬマジックハンド佐藤氏をしり目にそそくさと帰って参りました。



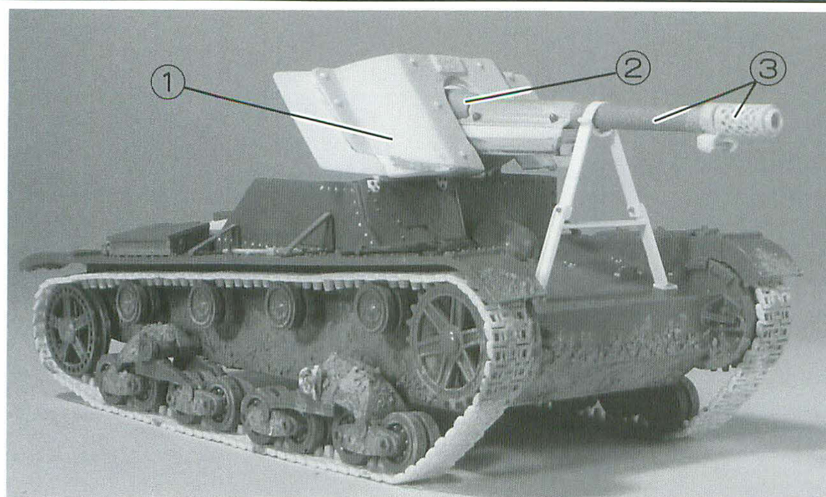
使用したキット＆資料
①ズベズダ 1/35T-26。
②ミラージュ 1/35 ビカーズ6 ton。
③ミニアートスタジオ 1/35　7.5㎝Pak97/98 対戦車砲。
④スチールマスターNo.26

製作

初めにスチール・マスターNo.26に記載されていたこの自走砲の図面をキットに合わせ拡大します。次に車体上部側面を、図面を元にカットします。次に機関室の仕切りと戦闘室側面及び床をプラバンで製作します。尚、床には滑り止めパターンの真鍮板を貼ります。



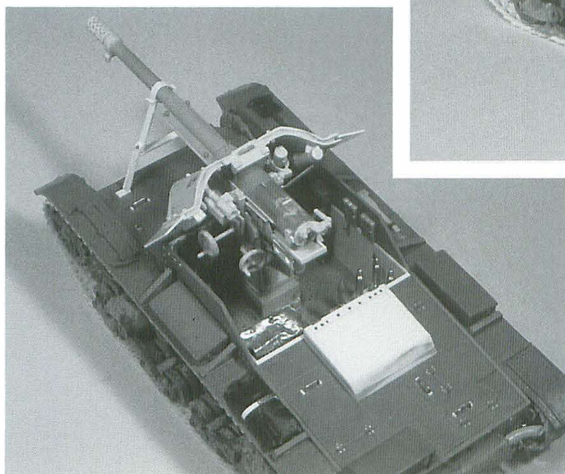
ズベズダのキットはイタレリブランドとして日本でも発売（タミヤ取扱い）。

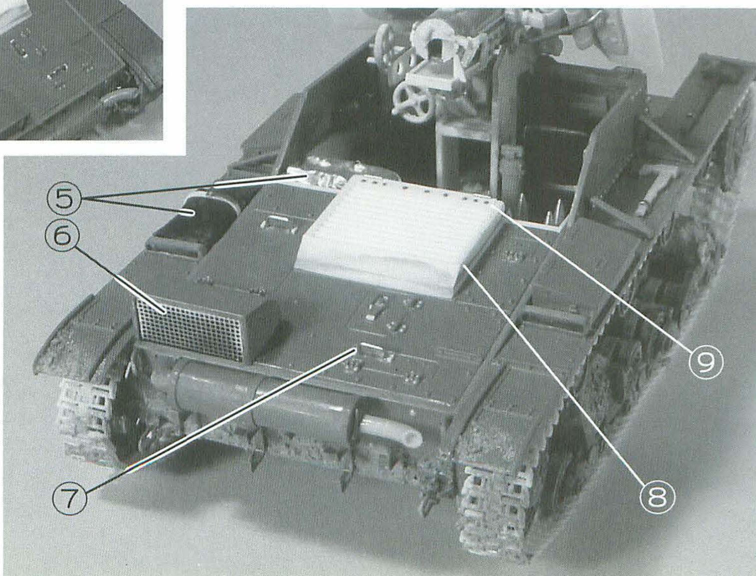


①防盾（５㎝Pak38）は左右の前方下部をプラバンで改修。
②タミヤのブルムベアの砲身を流用。
③タミヤのⅣ号戦車の砲身を使用。後ろの一部にプラペーパーを巻いて太くした。マズルブレーキはミニアートのレジンパーツを使った。



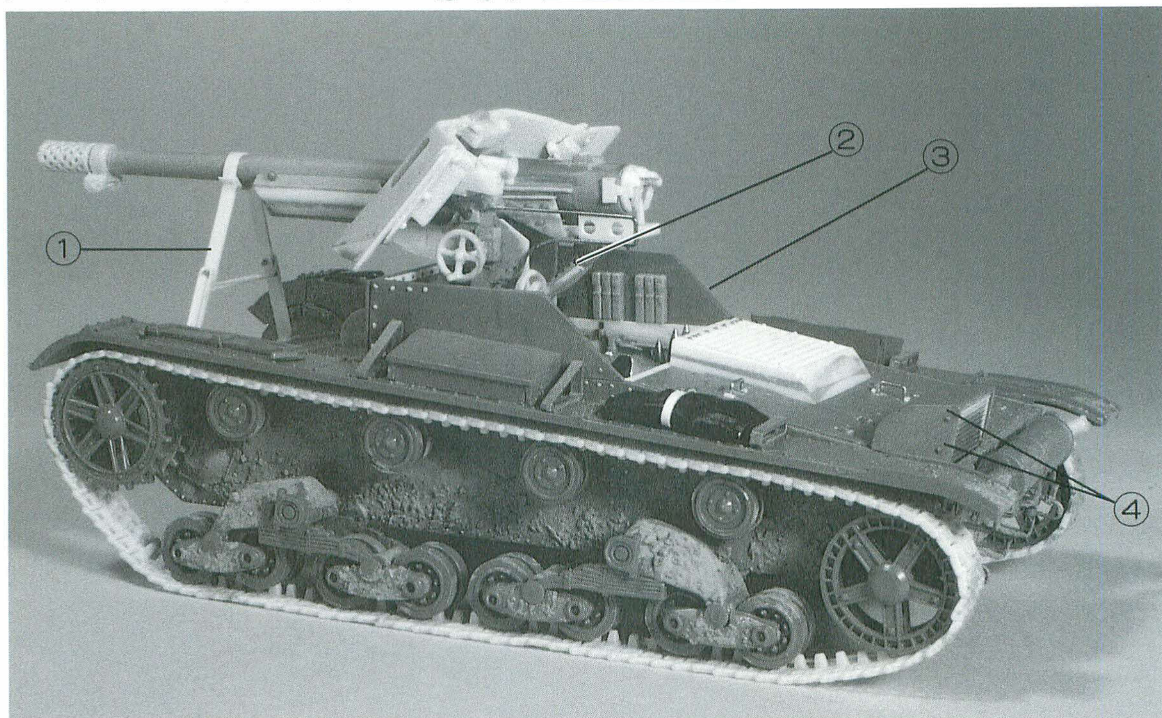
④砲の台座はプラバンで製作。戦闘室内部については資料がないためフィクションで作り上げている。

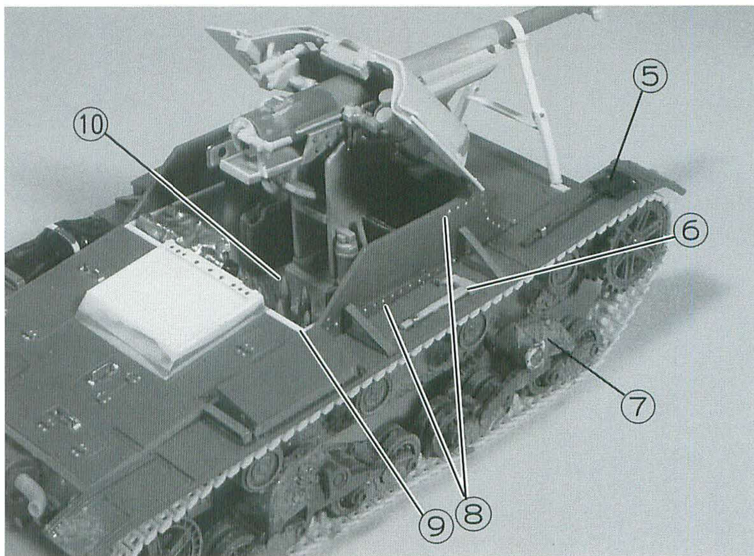




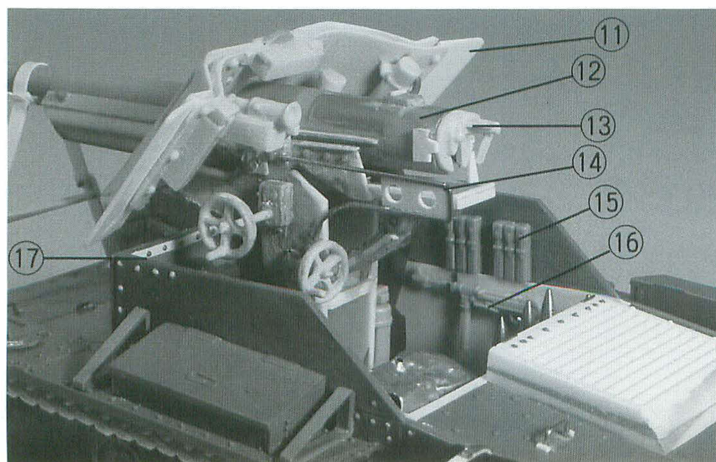
⑤ワインのコルクカバー（銅）を使って、砲弾カバーやシートを再現。
⑥タイガー用のグリルメッシュを流用した。
⑦0.3㎜真鍮線とプラペーパーでディテールアップ。
⑧ビッカーズのキットのものを使用。１㎜プラバンで高くした。
⑨エバーグリーンとスケールリベットで作る。

ダークイエロー＋オリーブグリーン2色迷彩



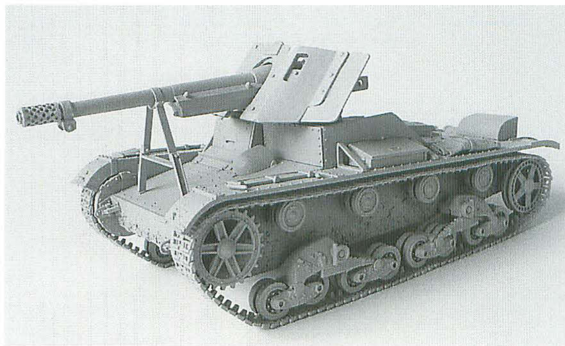


①砲のトラベリングロックはエバーグリーンのプラ材から自作。
②タミヤのPak40の物を流用。
③キットの戦闘室後部を斜めに切り取る。
④左右にリベットを追加。
⑤タミヤのT-34戦車のもの。
⑥タミヤのⅣ号戦車車外装備品セットから。
⑦泥の表現には、タミヤパテを一度乾燥させてから砕き、パテと再び混ぜ合わせたものを塗布した。
⑧リベットを追加。
⑨１㎜プラバンを使用しエンジンルームとの隔壁を作る。
⑩タミヤのM4シャーマン用砲弾。



⑪防盾はPak38よりも拡大されているので、0.5㎜プラバンで製作。
⑫イタレリのモダン・バトル・ギア・アクセサリーセットのガスボンベを流用。
⑬砲身はキット（ミニアート）の物。
⑭ガードは真鍮線とプラバンで自作。
⑮MP40 用マガジンケースはタミヤのジャンクパーツ。
⑯ドラゴンのMP40。
⑰エバーグリーンのプラ材とリベットで製作。

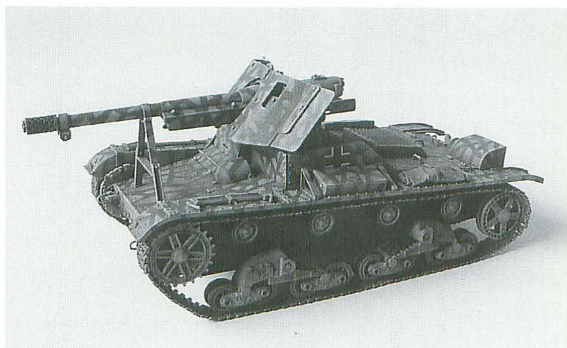
下地（サーフェイサー）　➜下塗り





上塗り　➜迷彩





次に機関室上部の通気用ルーバーはビッカーズのキットから流用しました。ただし１㎜プラバンで高さを増してあります。細部は図面を元にリベットとエバーグリーンのプラ材で製作します。又､最後部の排気口のネットはタイガーのジャンク品のエッチングを使用しました。尚、マフラーの先端はパンターの物から作りました。次にヒンジをはじめ車体周りに付くリベットはジャンク品などから切り取り使用します。

次に主砲の製作に移ります。砲身のジャンク品の75㎜砲身とブルムベアの砲身、そしてイタレリの小物キットに入っていたガスボンベから作りました。駐退器はエバーグリーンから又砲架はミニアートのレジンキットとプラバンを合わせて作ってみました。マズルブレーキを切り取り使用し、防盾はミニアートの物に左右はプラバンで張り出した犬耳を作ります。又、主砲の車体への取り付け方法ですが台座部分が不明なので内部インテリアなどと共にフィクションですので悪しからず。車体下周りはストレートに組んだ後にビッカーズのキャタピラを使用しました。モデルカステンの物が間に合わなかったのが残念です。又、泥はタミヤパテをペーパーの上に出し乾燥後に砕き再びタミヤパテと合わせ附着させます。

《塗装》下地作り

①車体は一度洗いましょう。次にタミヤのグレーのサーフェイサーを吹き付けます。この時の戦車って美しいよねぇー私は好きです。今まで手を入れた各ディテールがくっきり浮き出してくるんだよね…。乾燥後に細部の補修をします。ここをしっかりやっておかなければ後悔する事になります。

下塗り

②塗料にも色々な種類がありますが下塗りには最近はMr. カラーを一番多く使用しています。何か全体のディテールをしっかりホールドしてくれる様に感じるからです。色としてはグレーや黒及び茶系です。カラーについてはこれとは決めてませんが製作した作品や使用された地域により使いわけています。ちなみに今回はグンゼ産業のMr. カラー　ジャーマングレーを吹き付けます。塗りずらい所から吹き付けていきます。

上塗り　パートⅠ

③今回使用したのはタミヤアクリル塗料ダークイエローにホルベインの透明水彩絵の具を交ぜて吹き付けてみました。使用した色はイエローオーカーとアイボリ、ブラックです。ダークイエローに２色を交ぜ合わせた物を作り下地色を残し吹き付けます。

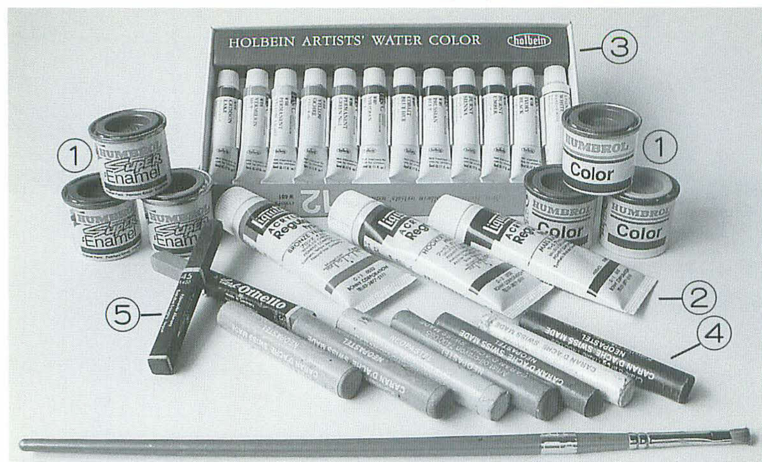
上塗り　パートⅡ

④次に先ほどと同じ様にダークイエローと透明水彩絵の具のイエローオーカーを合わせカラーを作ります。ここではアイボリ、ブラックは交ぜ合わせていません。心もち明るくなっていると思います。これをパートⅠで吹き付けた内側に吹き付けてみます。

墨み入れ

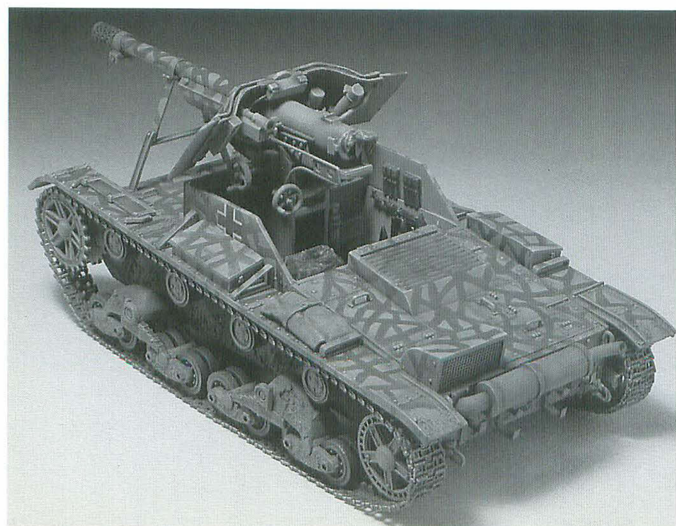
⑤各点検口やヒンジ部分などに薄めた塗料を流し込みます。又、基本色でつぶれてしまったリベットなどにも再度入れてみましょう。今回墨み入れに使用した物はリキテックスの水性アクリル絵の具不透明のアース・ブラックです。水で簡単に薄める事ができます。やりすぎてしまった所にはティッシュでこよりを作り吸い取らせます。尚水性アクリル絵の具は乾いてしまえば色なきする事もなく重ね塗りもできますので模型作りにはかなり利用度の高い

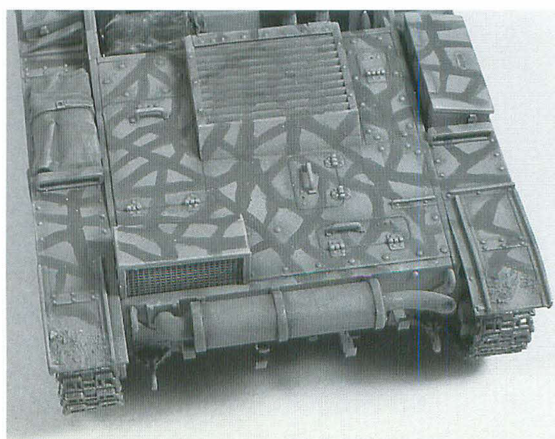
ダークイエロー＋オリーブグリーン2色迷彩



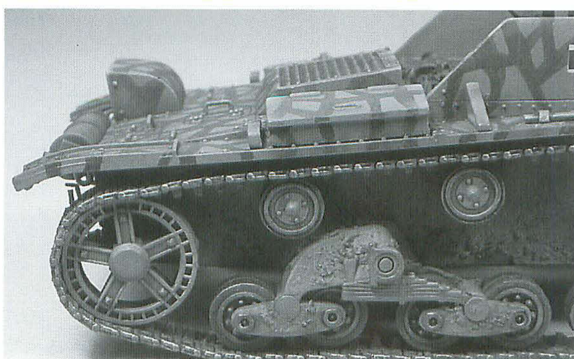
使用した塗料
①ハンブローブ（エナメル）。
②リキテックス（水性アクリル）。
③ホルベイン（透明水彩）。
④パステル（ソフトタイプ）。
⑤パステル（ハードタイプ）。
この他にもタミヤのアクリル(水性)塗料を使用。

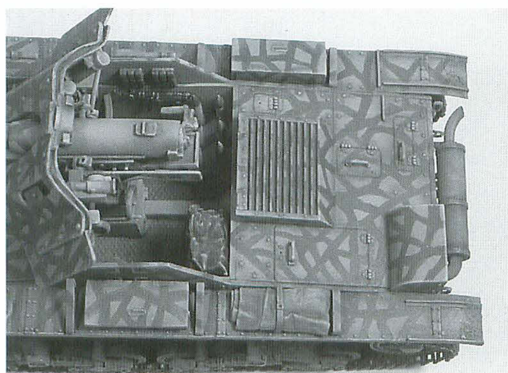














画材だと思います。

迷彩

⑥今回のカモフラージュはやはり、リキテックスの水性アクリル絵の具を使用しました。カラーはフーカス、グリーン、ヒュー半透明を蒸留水で薄め、手書きで描いてみました。カラーに関しては前後に各色があるので交ぜ合わせてみるのも良いでしょう。

車体下部

⑦こちらの方はパステルを中心に使用しました。ハードタイプとソフトタイプです。ハードタイプの方はサンドペーパーで削り、アクリル溶剤でといて使用します。又、私の場合ソフトパステルはセーブル筆などで直接こすり取り、色調を見ながらこすり付けますが、後もどりできないので慎重に入れます。次に墨入れした時と同じリキテックスのマースブラックにて転輪に色付けします。又この時キャタピラにも同様に色付けをします。ついでと言っては何ですがスコップと手斧などにも色付けをします。又、取っ手部分などはハンブロールとソフトパステルのオレンジ色を使用しました。

車体内部

⑧床部分は、リキテックスのマースブラクの後にハンブロールのバフをドライブラシをしました。また左右の側面は基本色の上からソフトパステルのホワイトを色付けしてみました。

マーキング&ドライブラシ

⑨マーキングはドライブラシの前に済ませます。トリミングを忘れずに！次にドライブラシですがハンブロールのNo.121を使用しました。ボロ切れなどにほとんどの色を取りのぞき車台の角やヒンジ及びリベットなどにこすり付けます。一度に済ませようとせずに慎重に行います。又車台下部や各転輪などにも同様に行います。

ウェザリング(仕上げ)

⑩最終段階です。私自身バトルダメージを受けた車輌を作る事が少ないでそんなしつこく入れません。たいしたダメージの無い車台にやたらサビの跡など多く入れすぎても変ですよね。やはり製作した車体に合わせる事が大切だと思います。フェンダーが曲がってしまっていたら……。そこからサビが出て来たとか、やはりその車体のストーリーがあります。それに添った方で入れる事が望まれます。サビやすいマフラーやマズルブレーキの煙硝の後などが中心です。又、削れた起動輪の歯車なども大切です。いずれにせよあなたの製作した車体に合ったウェザリングが一番です。この方法としては、薄めたエナメルカラーや、各パステルなどです。オイルのにじんだ跡やサビはフラット・アルミでドライブラシをします。又、最近はやりの塗料のハゲ落ちた所には極細の筆で描いたりエンピツで入れるのも一つの方法です。最後にタミヤアクリルフラットアースの薄めた物を車台全体に吹き付けて全体の色調を合わせます。こうする事によりバフなどでドライブラシした所が浮き出してくると同時にデカールが車体へ馴染みます。最後にもう一度パステルなどを使用し微調整して出来上がりです。

おわりに

出来上がった作品を編集者に手渡す為マキシムさんを訪れた際五十嵐氏が居られました。作品を見るなり「キリンさんみたい！……」ゼブラがあってキリンがある！そうこれからはキリンパターンと呼ぼう！先生、あなたが名付け親です。しかしこんな迷彩他にあったかなァ〜 ！

参考資料　スチールマスター　No.26

T-34のダークイエローベース迷彩

T-34-76
BEUTEPANZER

Overall Dark Yellow
with Olive Green and
Red-Brown over sprey

ZVEZDA／ITALERI 1:35

T-34-76鹵獲戦車の迷彩

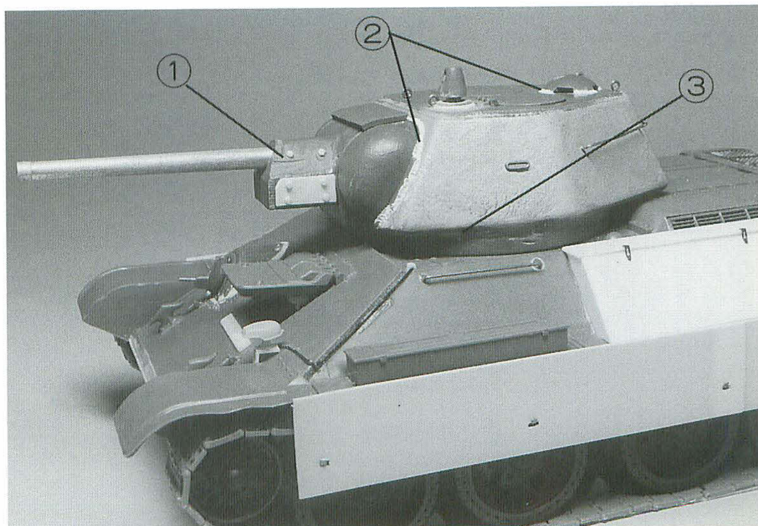
ズベズダ／イタレリ 1/35　　製作：尾林　大輔 Daisuke Obayashi

戦場において敵国の兵器を自国のそれとして使用する事は、有史以来の事であり、そうめずらしくはありませんが、第2次大戦中のドイツ軍ほど効率良く組織的に運用した例はあまり無いのではないでしょうか。

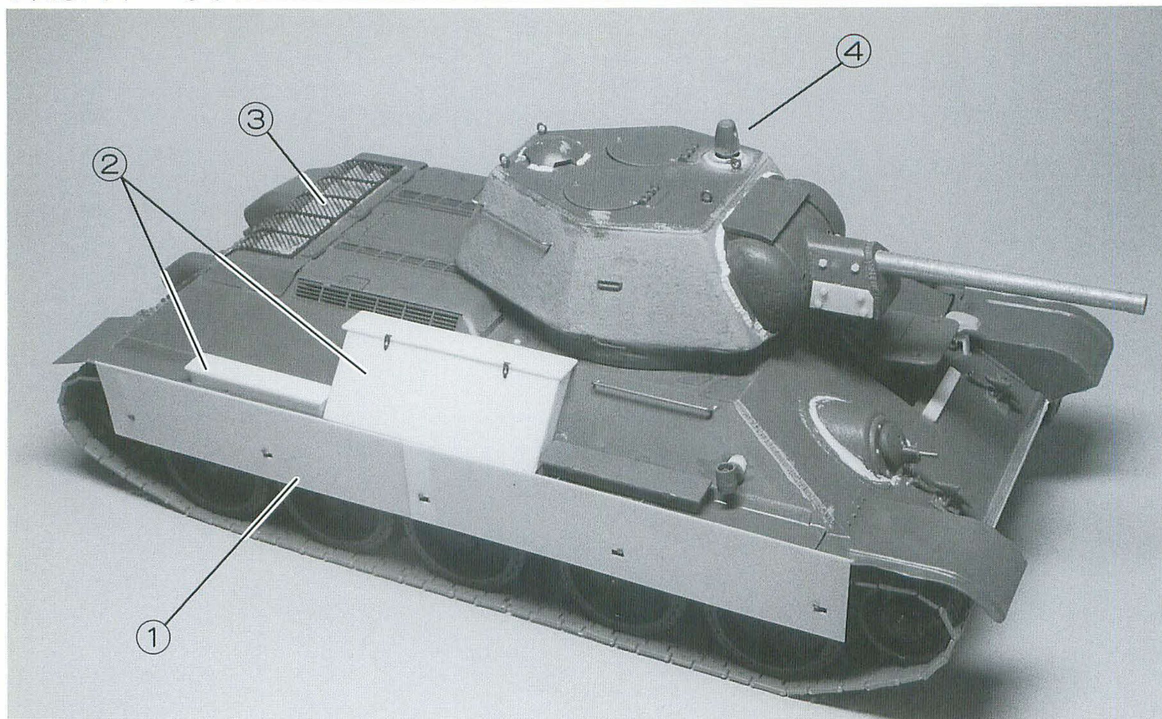
ハリコフを占領したドイツ軍は、当時そこにあったT－34の工場も設備ごと丸々接収し、オリジナルの装備を付けた車輌を前線へ送り込んだようです。1943年のクルスク戦にはダス・ライヒ師団がT－34中隊をもって参戦しています。今回はこの部隊の所属車輌といわれているT－34を作ってみます。

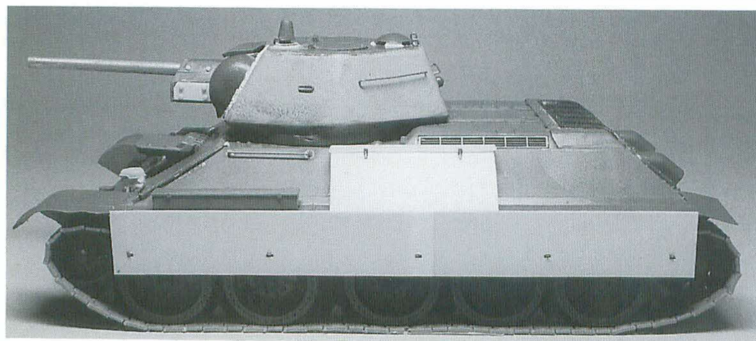
製作

キットはズベズダのT-34・1943年型を使います。イタレリブランドでも発売されていますので、入手は楽です。主な改造点は、砲塔形状の変更、車体



①駐退器カバーのボルトが省略されているので追加。
②溶接跡の表現がないのでエポキシパテを使って再現。
③砲塔の上下のラインを段のないものにするためポリパテで裏打ちして整形する。





①サイドスカートは資料から分割位置を割り出した。
②車体左右につく雑具箱等はプラバンで再現。
③エンジングリルメッシュはエデュアルドのエッチングパーツを使用。
④砲塔上面のペリスコープ位置がハッチに近すぎるので前方へ移動。

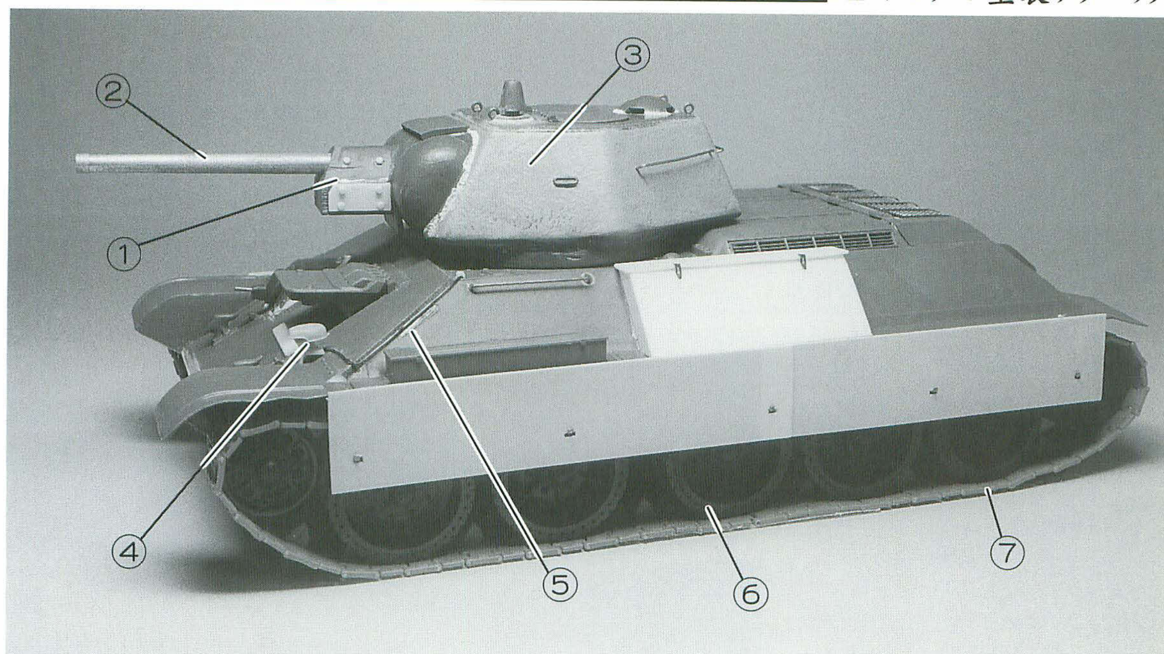
側面の雑具箱、サイドスカート、といったところです。

上下の鋳造ラインをまっすぐなものにする為、内側にポリパテをつめてから削り込みます。表面の鋳造肌は表現が少しオーバーなので、ペーパーでならした後タミヤパテをすり込んで再現します。駐退器カバー左側は照準器の視界を広げる為に削られています。ペリスコープは基部ごと前方へ移します。各部の溶接跡はエポキシパテで再現します。砲身はジョルディルビオのアルミ製に変換。

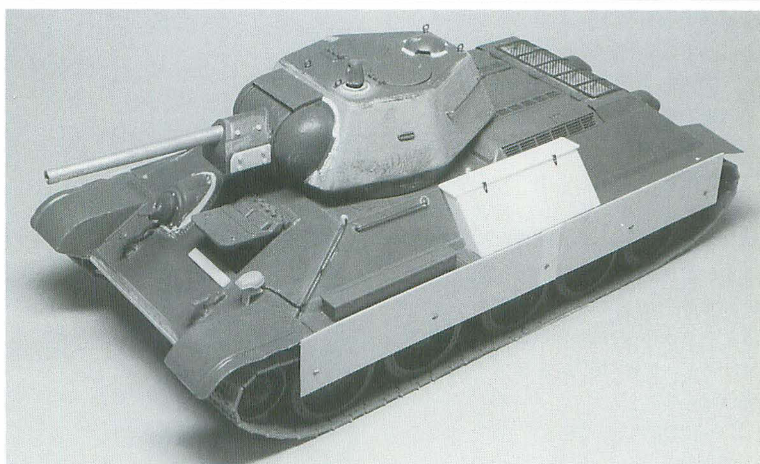
車体

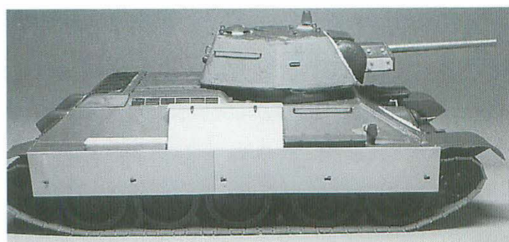
車体側面の雑具箱は、0.3㎜のプラバンで。留め金具はエデュアルドのエッチングパーツです。エンジングリルのメッシュも同セットから使用します。この内側にはプラバンでルーバーを入れてあります。

サイドスカートはその分割部、取り付け方法に「？」の部分がありましたが、資料をじーっと見つめた結果、作

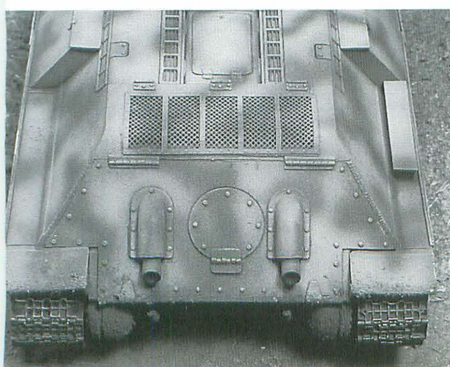


①駐退器カバー左側のみ削る。
②ジョルディ・ルビオのアルミ製砲身。
③タミヤパテで鋳造肌を再現。
④ドイツ軍が使用したのでライトはノテックランプをつける。
⑤ライトコードはエナメル線で。
⑥転輪はタミヤのゴム製リムタイプに交換。
⑦モデルカステンの可動履帯SK-34を使用









例の様に落ちつきました。それでもフェンダーへの取り付けが判らない。溶接してしまってはメンテナンスが出来ないし……。

車体前部左側にはノテックランプを付けます。これの配線も推定です。

転輪はキットと違い実物がゴム付きなので、タミヤのT-34から流用しました。再版されなければ出来なかった事ですね、こりゃ。

キャタピラはモデルカステンの可動タイプSK-34T-34用履帯M42を使用。スカートのおかげでせっかくの「たるみ」がかくれてしまいました。







①上塗り
②下塗り
③迷彩

塗装

さて今回はドイツ車輌の塗装攻略本という事で、段階をくわしく説明します。

1．下地

モデルが完成したら金属パーツ部分にメタルプライマーを筆塗りします。これはスプレーでもかまいません。

次にソフト99のプラサフを全体に吹きます。改造、修整等により各種の材質が使用されモデルを一つの塗膜でおおい､均一の表面にする事が目的です。又、表面のキズ、接着剤のハミ出しなども発見する事が出来ます。

2．下塗り

最終的には車体色によって違いますが、私の場合緑系やグレー系の車輌は黒、ダークイエロー系には茶色を使います。車体の陰となる部分（足周りや車体下部）は後々この色がそのまま残ることになります。今回はグンゼ産業Mr. カラーの41番、レッドブラウンで塗っています。

3．上塗り（基本色）

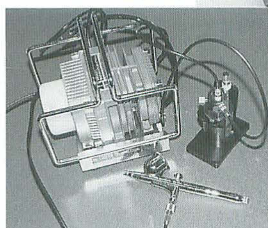
迷彩色のベースカラーとして、グンゼ産業Mr. カラー39番ダークイエローを吹きます。この時、下塗り色を陰として残すようにします。各パネルの接合部、隅っこが暗く残る感じです。

4．迷彩

まずMr. カラー41番、レッドブラウンでパターンをハンドピースで吹きます。塗料の濃度は少し薄めにし、コンプレッサーのエアの圧力も低くします。減圧弁をお持ちの方は1.0kgf/cm²くらいに設定します。私の場合グンゼ産業のMr. リニアコンプレッサーを使用。これは圧力が1.0kgf/cm²になっているので使い易く、しかも音はほとんど無しというスグレモノ。さらにMr. カラー70番ダークグリーンを吹きます。

足周りにはMr. カラー22番ダークアースを吹き、土、ホコリによるヨゴレを再現。又、車体全体にも吹きます。この時はすこしはなれた所から全体をまんべんなく吹き、迷彩の３色が落ちつくようにします。

コンプレッサーはグンゼ産業 Mr.リニアコンプレッサーを使用。





5．ウェザリング

今までは全てラッカー系の塗料でしたが、ここからはエナメル系となります｡今回はハンブロールを使用します。

33番マットブラックと98番チョコレートを半々混ぜたものを溶剤で溶き、モデルの全体に塗ります。車体の上から下へ向けて筆を運びます。ある程度のムラは雨水によるホコリの流れの再現になります。

ドライブラシは187番マットダークストーンで。エッジの部分にメリハリを付ける感じで行います。

6．仕上げ

デカールを貼りっぱなしではそこだけ浮いて見えますので、ハンブロールの187番マットダークストーンを溶剤で薄めたものをサッと塗ります。乾燥したらグンゼ産業のMr. スーパークリアのツヤ消しを吹きます。

最後にパステルを使います｡耐水ペーパーでパステルを粉にし、筆にとってモデルにすり込みます。サクラが出している「ヌーベルカレーパステル」は画材屋さんで手に入ります。これのセピア、ブラックが一番使用率が高いといえます。セピアはボルトや溶接跡等にすり込み､ディテールを強調します。砲口や排気管のヨゴレに適しています。

ジオラマ

写真用パネル（これも画材店で入手可）にシナベニアで立ち上げをつけ、発泡スチロールで地面を作ります。その上にドフィックスのカベ補修材を塗ります。乾かないうちに同じ補修材を粉のまま茶コシでふりかけます。小さな石はコルク片です。草は「鳥の巣」とスタティックグラスの混ぜたもの。さらに乾燥パセリも加えます。キャタピラの跡は、地面が固まらないうちにキット付属のベルトキャタピラを押しつけてやります。塗装はタミヤのアクリルカラーを使います。ドライブラシをしてメリハリをつけます。水はクリアエポキシ樹脂をラッカー系のダークアースで着色したものです。

Sd.Kfz250/1 NEU
&
SU-85M

ラマ製作記

DRAMA
AKING OF
SURRENDER"

Masakazu Arayashiki

る



ティックスグラス、情景用パウダー等
接着。草はサイザル麻を適当な長
まま木工ボンドで直付けしている。
で、部分的にドライフラワー(オラ
喜屋ホビー取扱い)を植えてアクセ
はシャギー風にカットして自然な
はレミ社のプラ製バキュームフォー
バウマン取扱い)。
では接着せず位置の確認だけ。

98−1424

−2666

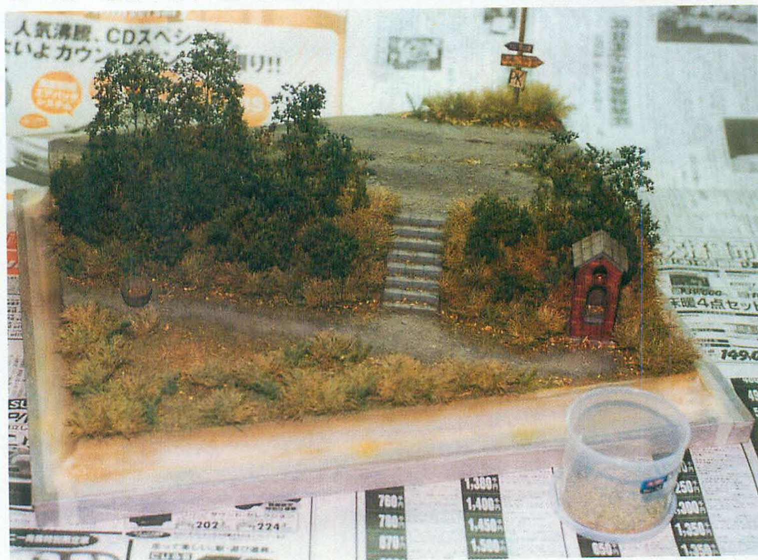
4着色する



▲いきなり塗装の済んだ状態。塗装はすべてアクリル塗料で行なった。地面と草は、明度の異なる色を数色吹き付けて立体感を強調してやる。仕上げは軽くドライブラシを行なう。因みに、突き刺さっている楊枝は後でドライフラワーを差し込むための目印です。

▼出来上がったベースに、別に塗装しておいたドライフラワーの樹木や、小物類を接着する。樹木の葉はハーブのスペアミントを使用した。定番の食品スパイス、枯草色のドライフラワーの葉・情景用パウダー等のブレンドをふりかけて完成。

5小物類を付けて完成



HE SURRENDER

Berlin-Mitte 15 km
über Welassowa 1 km

Masakazu Arayashiki

1ベース作り



▲台は日本画用のパネルで、これに木目シートを貼る。発泡スチロールで大まかな地形を作ったら、立ち上り部分にバルサ材を接着。ペーパー掛けして表面を整え、オイルステンで着色、つや出しニスで仕上げる。

▼台の枠をマスキングして、ドフィックスの壁補修材を盛り付ける。園芸用土で表面をコーティングしたら、砂や小石等をばらまいて変化をつけてやる。写真の袋詰め３つはこれに使用したカスタムディオラミックのガレキセットのもの。乾燥後、水で溶いた木工ボンドを染み込ませて固着する

2地面を作る



ジオラ

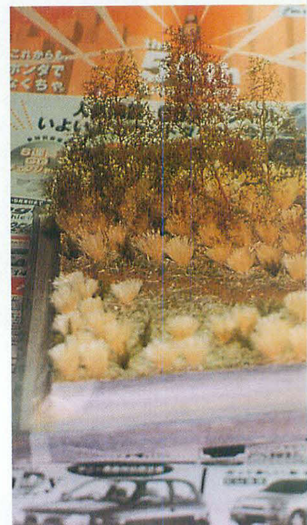
DIO

MA

"THE S

荒屋敷　正和

3植物を植え



▲下草に麻縄やスタテ
をブレンドしたものを
さにカットして、その
これだけでは単調なの
ンダドライフラワー
ントをつけてみた。草
感じにする。白い小屋
ムキットのミニ教会（
樹木と建物はこの段階

問い合わせ　喜屋ホビー TEL03—33
バウマン TEL03—3795

Sd. Kfz250/1 NEU

GUNZE SANGYO 1:35
Sd.Kfz250/1 NEU
Modeling by
Masakazu Arayashiki

Sd. Kfz250/1ノイ 半装軌・軽装甲兵員車

グンゼ産業 1/35

荒屋敷 正和



3色迷彩





Three-color Camouflage Sd.Kfz250/1NEU

それまでの Sd. Kfz250は複雑な車体だったので、生産性が悪く、1943年10月から新ボディのNEU（ノイ）が登場した。終戦の1945年春までに約2,700両が生産された。

ノイは生産開始時期がダークイエローが基本色となった1943年２月よりも後のため、ジャーマングレー色塗装は基本的にないと考えられる。

模型は３色迷彩をタミヤアクリル塗装で行ない、リアルさを出すためにウェザリングを実施した。











ジオラマに登場したのは、ドラゴン1/35のSU-85Mとジャガーモデル、バーリンデンのフィギュア、レミ社のミニ教会、樹木はオランダドライフラワー。
ソ連軍の進撃に降服したドイツ軍を表現。勝ち誇って前進するSU-85MとSd. Kfz250/1の組み合わせは劣弱となったドイツ軍の大戦末期の状況が強調されている。
水たまりの作りや、フィギュアや小物の配置に注意。







ダークイエロー+オリーブグリーン2色迷彩

7.5cmPak97/98(f)auf Pz.KpfwT-26(r)

ZVEZDA/ITALERI 1 : 35
CONVERSION

Modeling by
Minoru Shimizu

7.5cmPak97／98(f)auf Pz.KpfwT-26(r) ダークグリーン迷彩

ズベズダ／イタレリ 1/35

清水　稔



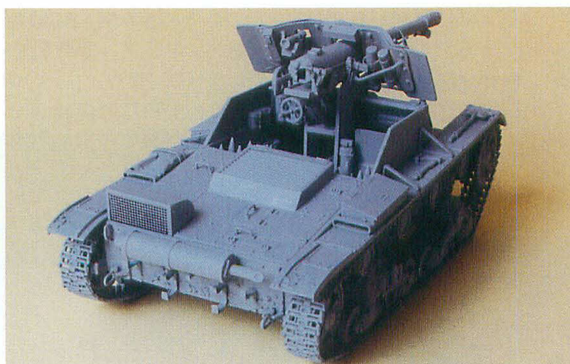


車体はスベズダ／イタレリのT-26、砲はミニアート・スタジオの砲架、防盾、マズルブレーキを使用



下地

水洗いの後にタミヤのスーパーサーフェイサー（グレー）を吹き付ける。細部のキズなどはこの時に目立ってくるので修整する。



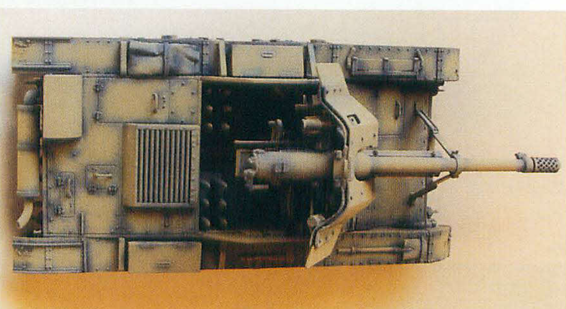
サーフェイサーを吹き付ける事により、オープントップ特有の内部ディテールが浮き上がってくる。



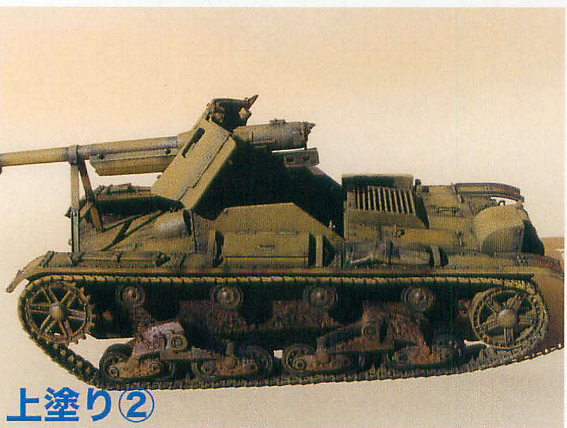


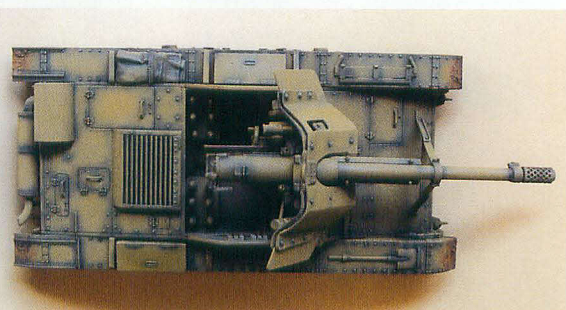
下塗りにグンゼ産業のMr. カラー　ジャーマングレーを吹き付ける。





上塗りはタミヤ水性アクリルのダークイエロー＋ホルベインの透明水彩絵の具（イエローオーカー）を加えた物を明暗２色（アイボリー、ブラックを混ぜて作る）を作り吹き付けた（下地色を残す）。





上記のダークイエロー＋イエローオーカーのみの色で上で吹いた内側に吹く。この後、上塗りでつぶれてしまった影の部分へリキテックスのアース・ブラックで墨入れした。



リキテックス（水性アクリル絵の具）を水で薄めて筆塗りで入れた迷彩。



下周りは主にソフトパステルを使用。細部のディテールを浮き立たせる為にハンブロールのバフを使用し、リベットをはじめ各部をドライブラシする。



今まで発表されている写真は１枚しかないが、そのスタイルと独特の塗装が印象的な7.5㎝Pak97/98 (f) auf Pz. KpfwT-26 (r) 自走砲。その名のとうりフランス製1897式7.5㎝砲（防盾はPak38）をロシアのT-26戦車に載せたもので、どちらも鹵獲品を有効利用しためずらしい兵器。

この自走砲の独特な迷彩はオリーブグリーンの帯が網の目のように塗られているもの。これを筆塗りで再現するため、リキテックスの水性アクリル絵の具を使用。色はフーカス、グリーン、ヒュー半透明を混色したもの

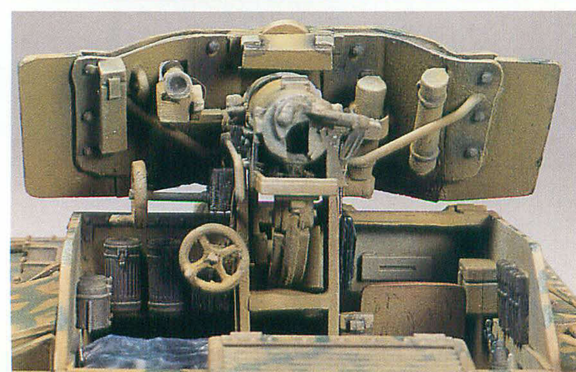
7.5cmPak97/98(f) auf Pz.KpfwT-26(r)

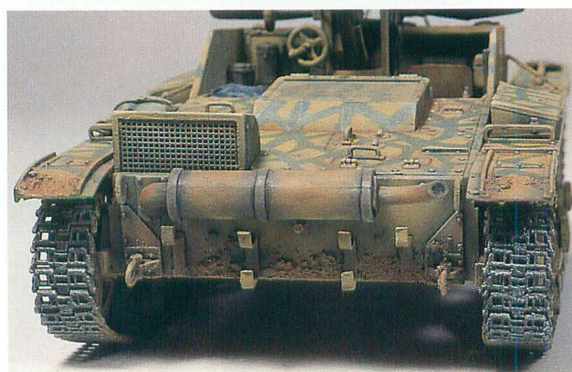


















T-34-76 BEUTEPANZER

ZVEZDA／ITALERI 1:35

Modeling by
Daisuke Obayashi

T-34-76鹵獲戦車　ダークイエローベース迷彩

ズベズダ／イタレリ 1/35

尾林　大輔


①塗装前　完成状態。雑具箱、サイドスカートなどに注意。


②サーフェイサー塗布後、レッドブラウンで下塗り（影作り）。


③１色目ダークイエロー、足周りは下地色を残す。


④迷彩色レッドブラウン、ダークグリーンを吹く







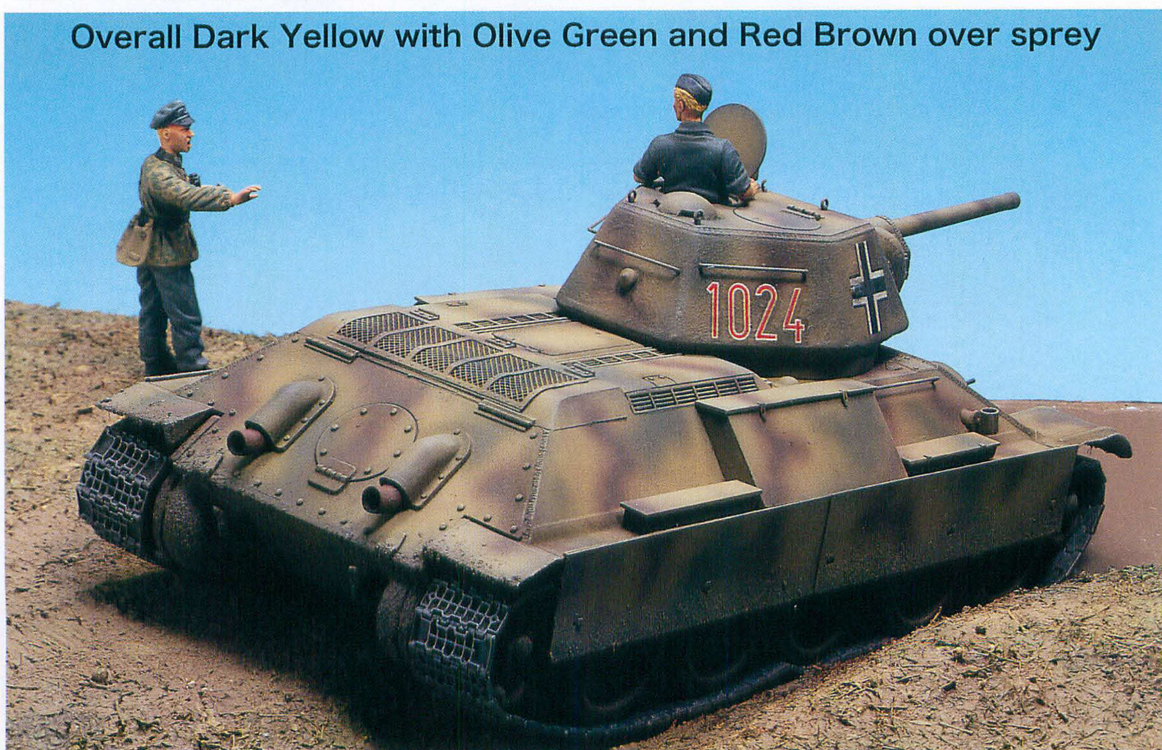




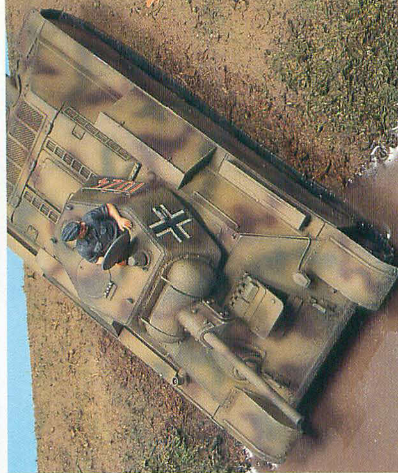


ドイツ軍は鹵獲した敵の車両をかなり有効に利用した。装備をドイツ軍仕様にしたり、使い易く改造したりし、塗装もドイツ軍車両と同様に施され、国籍マークも大きく目立つように描かれた。作例はズベズダ／イタレリのT-34中戦車を使用し、ドイツ戦車と同様の手順で塗装した（左頁参照）。このままでは色が落ちつかないので遠めからダークアースを全体に吹く。デカールにはMr. スーパークリアのツヤ消しを吹きつけている。

Overall Dark Yellow with Olive Green and Red Brown over sprey









BEUTEPANZER T-34-76





SHANGHAI DRAGON 1:35

BURMMBÄR
Späte Produktion

Modeling by Kazuhiro Tokuda

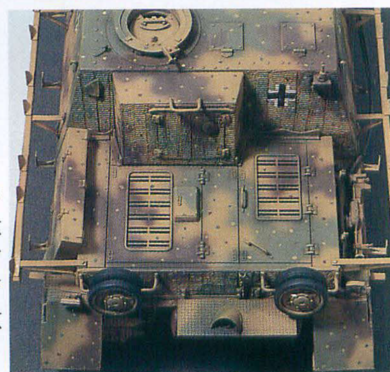
突撃戦車ブルムベア　後期型

上海ドラゴン 1/35

製作：徳田　和大



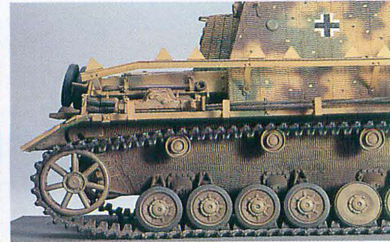




1944年８月から新迷彩パターンが導入された。3色迷彩の各色の上に別の色の斑点を入れる「光と影の迷彩」である。これは以前アンブッシュ（待ち伏せ）迷彩と呼ばれていたもの。作例では現在のAFVモデル塗装の2つのやり方（a.サーフェーサー後に基本色塗装、b.サーフェイサーを吹いて先に影色で下塗りし基本塗装をする）の中間的方法をとってみた。aの発色の良さとbの微妙なグラデーションを得られる長所の両面の特性を生かした塗装法である。詳しくは本文105頁からの記事で。又、カラー写真の続きも111頁に。







オリーブグリーンベースの3色迷彩

PANTHER

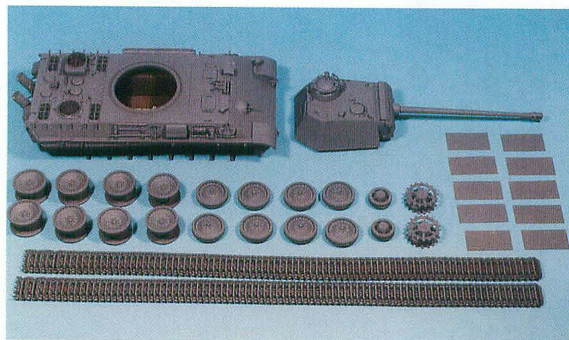
PANZER KAMPF WAGEN V Ausf.G

Olive Green based 3Color scheme

GUNZE SANGYO 1:35

V号戦車 パンター G 後期型 グリーンベースの3色迷彩

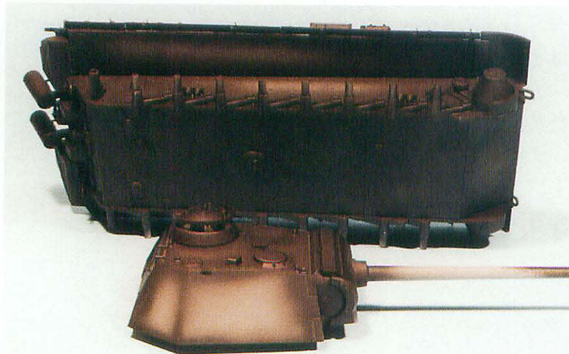
パンターＧ後期型（赤外線暗視装置付）　グンゼ産業 1/35　製作：河上　重文



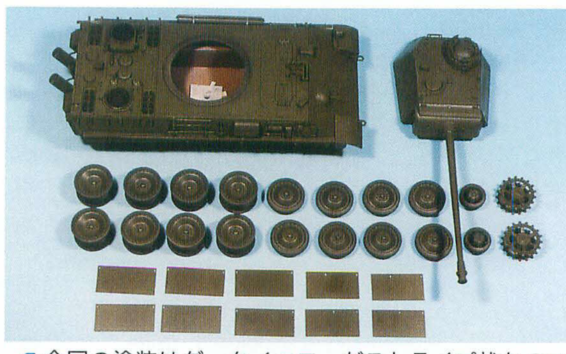
1 洗浄後に乾燥させ、エッチングパーツにメタルプライマーを忘れずに塗り、ソフト99プラサフを吹き付けて下地処理する。



2 下地処理の後、ラッカー系のつや消し黒をスプレー（エアーブラシ）する。これは基本塗装の時に塗り残しがあっても目立たなくする為。

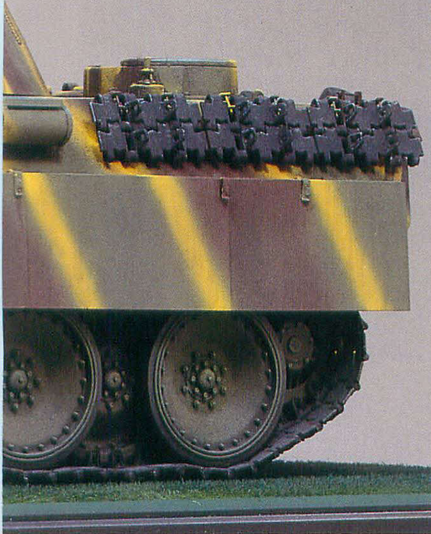


3 裏側も忘れずに黒く塗り、砲塔も凹部や角部に吹きつける。

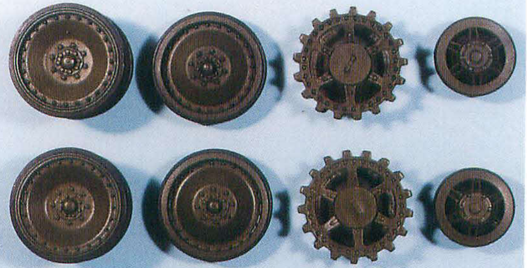


4 今回の塗装はダークイエローがストライプ状なので最後に塗る為、先にダークグリーン（S. D. Eのデュンケルグリューン）を全体に吹きつける。

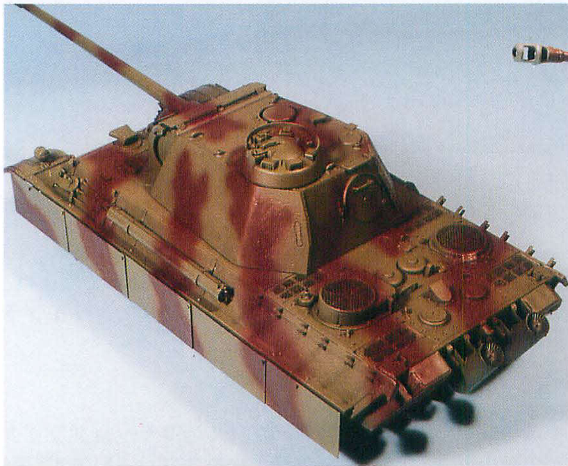
Modeling by
Shigefumi Kawakami



5 転輪、起動輪、誘導輪は転輪のゴム部をアクリルのフラットブラックとジャーマングレーを混ぜた物で筆塗りした後エナメルのフラットブラックを薄めた物をボルトや凹部に流し綿棒で拭き取る。上がウオッシングした状態。下地が暗い為わかりにくいかも。

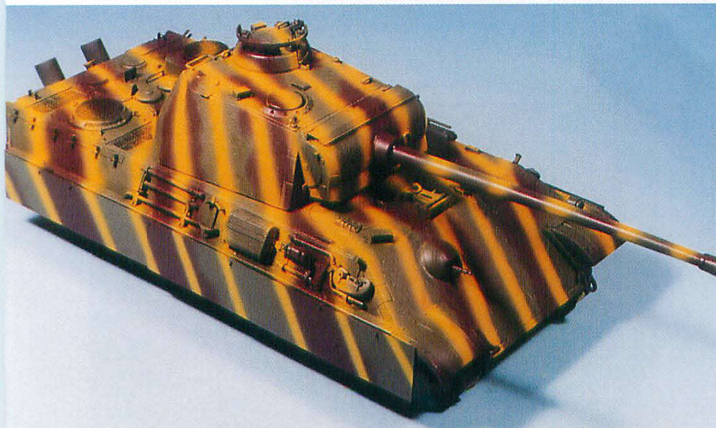








6 基本のダークグリーン塗装後、レッドブラウンの迷彩をスプレーする。この時サイドスカート（シュルツェン）は仮り留めしておきます。レッドブラウンはS.D. Eのロットブラウンを使用。



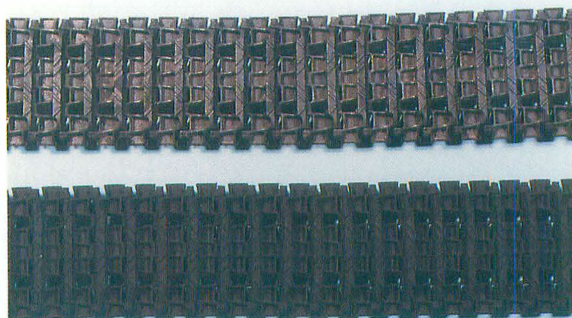
7 最後にダークイエローの縞模様をスプレー。実車写真では側面の縞はもっと細かい（本数が多い）のですが、私の好みで少なめにしている（実車はたぶん上から見た時に、左右斜めに縞模様になると思われる）。



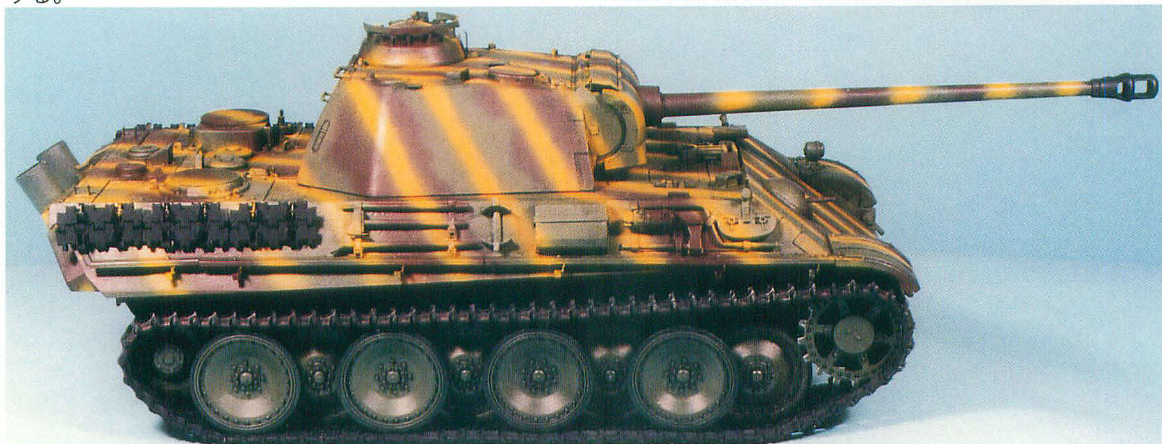
オリーブグリーンベースの3色迷彩



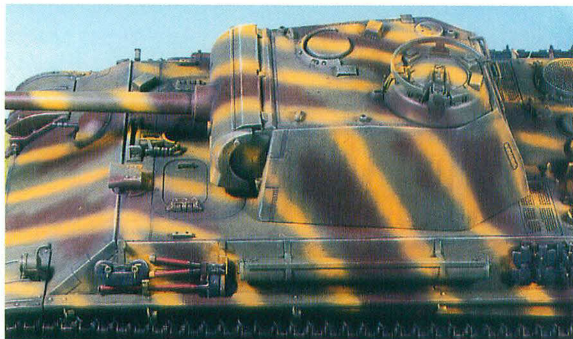
◀車体下部はダークグリーンのまま。サイドスカート(シュルツェン)は足周りを後付けするために取りはずし可能にしている。



▶キャタピラはアクリルのフラットブラック、ダークグレー、ハルレッドを混ぜた物を吹き付ける（写真下の状態)。その後エナメルのウッドブラウンとダークイエローを混ぜた物を薄めて、凹部に筆で流し込む感じで塗っていく。乾くと凹部に溜まった感じになる(写真上の状態)。その後エナメルのフラットアルミで凸部をドライブラシする。



基本色の３色塗装の後、エナメルのフラットブラックでウオッシング。このウオッシングは全体のトーンを落とす為と凹部に黒が残り、メリハリをつける役目をする。拭き取りは綿棒を使い、方向を考えながら行う。その後、足周りを接着する。



◀ウオッシング後、OVM類等をアクリル塗料で仕上げ、車体、砲塔などのエッジ部をアクリル塗装でドライブラシする。

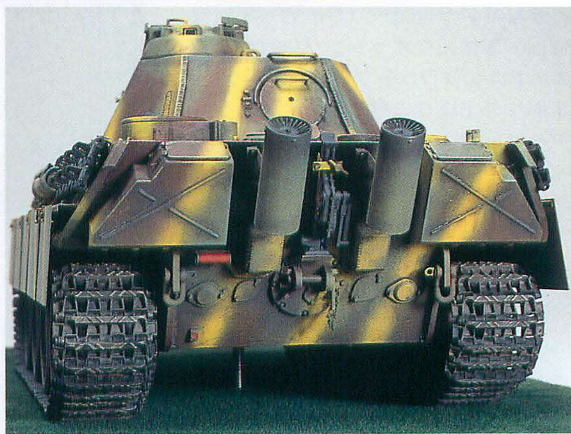


◀使用した機材、塗料、筆。

▼排気マフラー部は上部をアクリルのフラットブラックと少量のダークグレーを混ぜた物をスプレーします（砲身マズルブレーキ部も同じ)。その後足周りには水性つや消しクリヤーと少量のダークイエローとウッドブラウンを混ぜた物をスプレーします。

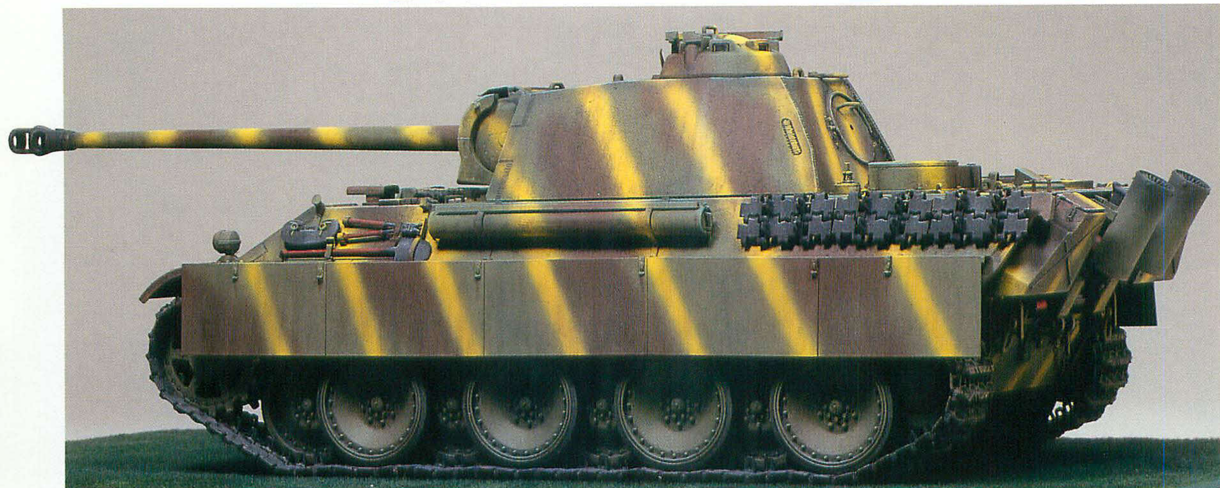


PANTHER Ausf.G Late
パンターG後期型


パンターG型は3千両以上生産され大戦末期に活躍した。そして後期型はアゴ付き防盾、消炎マフラー、機関室上のヒーター用ダクトを装備。また少数ながら赤外線暗視装置を装備した車両も実戦に投入されている。

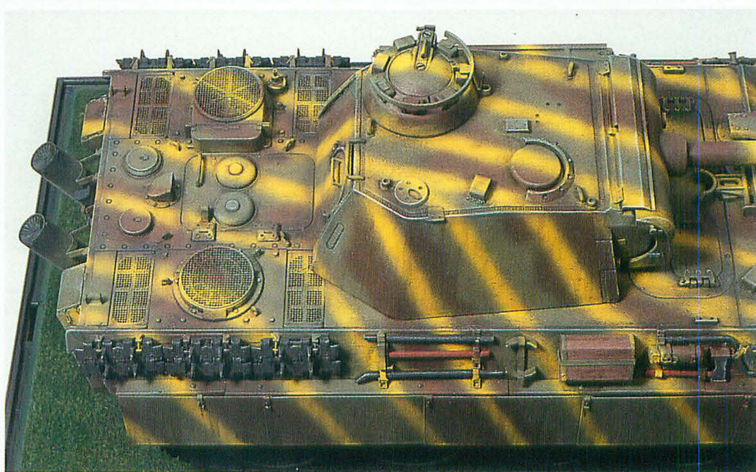


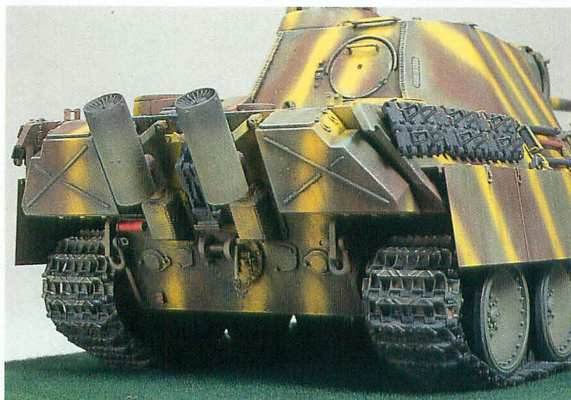



1944年11月にドイツ軍はそれまでのダークイエローをベースとした迷彩からオリーブグリーンをベースにした迷彩に変更する指示が出た。

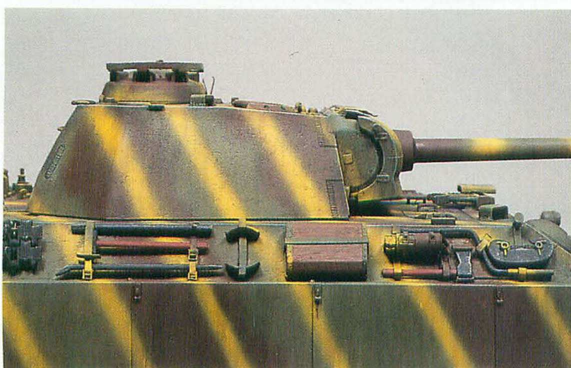
作例は、このオリーブグリーンベースの３色迷彩でも独特のパターンで塗られたパンターG後期型を再現。

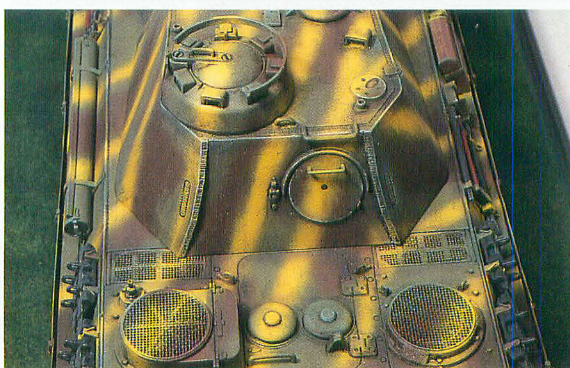
３色迷彩の塗料にはSDEから出ているソリッドラッカー（ラッカー系）を使用。車体のウオッシングには薄めたエナメルのフラットブラックで行ない、足周りの土埃りの感じをつや消しクリアーに少量のウッドブラウンとダークイエロー（水性）を混ぜた物を吹いて再現。











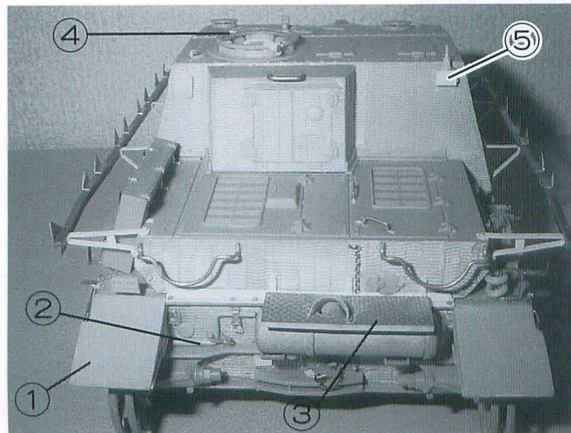
光と影の迷彩の塗装法



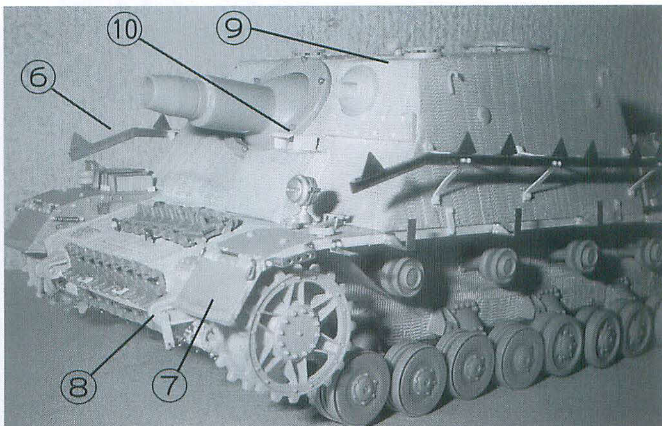
Ⅳ号突撃戦車ブルムベア 後期型

上海ドラゴン 1/35　　製作：徳田　和大　Kazuhiro Tokuda

AFVモデラーなら絶対にそそられるドイツものの豊富な塗装バリエーション、中でもアンブッシュ迷彩（光と影の迷彩）はドイツもの人気の原因の1つともいえそうです。アンブッシュ迷彩（光と影の迷彩）といえば1944年冬のアルデンヌ攻勢時のパンターG型やⅣ号駆逐戦車が思い浮かびますが、今回はリニューアルされたドラゴンⅣ号戦車系からブルムベアを選んでみました。マフラーを横置き、上部転輪を4つ、コーティングをしてある後期型でも初期の仕様で製作。塗装はダークイエローベースの3色迷彩に丸斑点の基本的なパターンで仕上げてみました。



①ドラゴンのパーツは内側のモールドが省略されているのでタミヤのⅣ号戦車のものを流用。
②OVMのクランプ類はアベールのエッチング。
③マフラーを横置きに、エッチングはショーモデリングのブルムベア中期型から。カバーはプラパイプを斜めにカットしたもの。
④銃架用リングマウントを起動輪のスポークをカットしたもので工作。

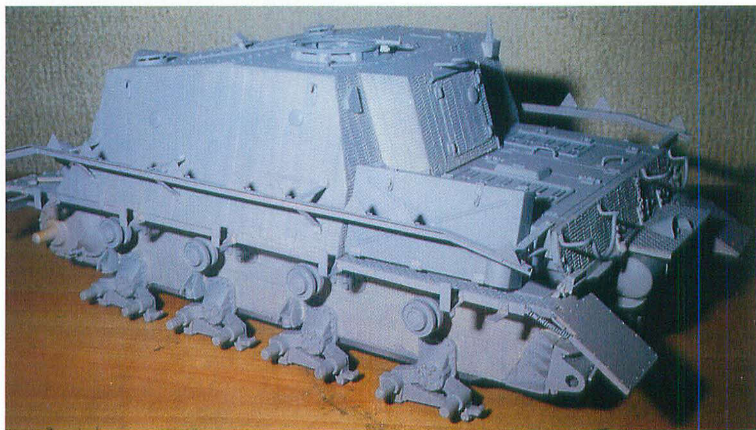


⑤アンテナ基部はプラバンとプラペーパーで自作。
⑥シュルツェンレールは鉄道模型用のL型材、三角板はショーモデリングのエッチング（Ⅳ号突撃砲用）、ステーはエバーグリーンのプラ材で自作、思ったよりも丈夫。
⑦フェンダー前端部分は旧版に比べ格段にイメージアップしている。内側のディテールを追加すればかなり良い感じになる。
⑧牽引用ホールドを板状の握りタイプに、前面装甲板ごとタミヤのⅣ号戦車J型から流用した。
⑨コーティングはグムカのエッチング製プレートとポリパテで。迷彩の斑点が入れづらく少し後悔した。
⑩バイザーをプラペーパーで自作。

1 下地仕上げ



サーフェイサーを吹き終えた状態。下地の色・質感を整えるために全体に吹く。多少塗り残しがあっても問題はなく（次の暗部色でカバー出来る）むしろ厚塗りに注意。この段階で工作の不備やキズ等があれば修整を終らせておく。



2 暗部色を吹きつける

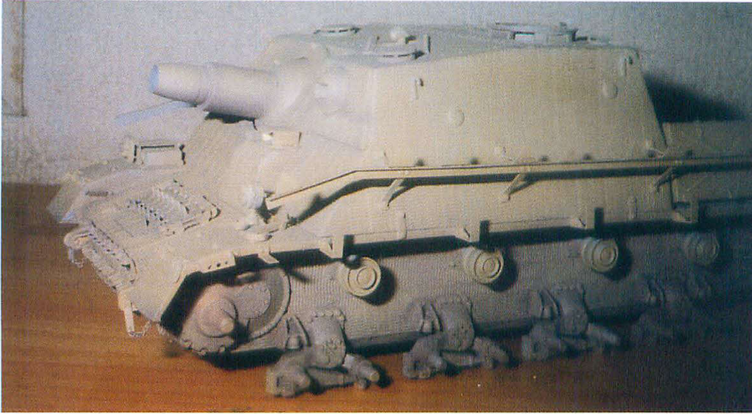




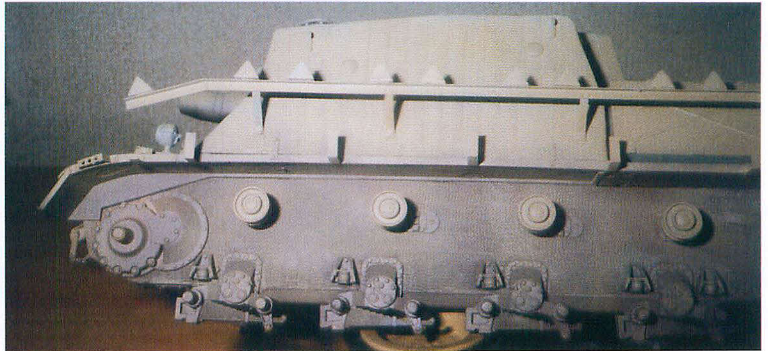


車体下部を中心に暗部色（茶系）を吹きてける。車体上部もグラデーション効果をねらったが、ほとんど効果がなく、結局仕上げのパステルで処理した。下塗りで処理する場合、もっと暗い色（黒＋マホガニー）の方が良いかも。

3 基本色を塗る

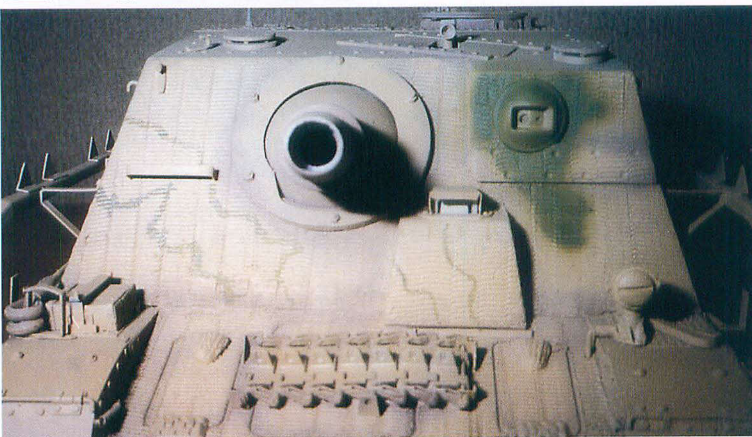


基本色のダークイエローを吹く。一気に吹きつけないで薄く数回に分けた方がきれいに仕上がる。可動キャタピラを使用したので転輪類は別に塗装した。



下地の暗部色をつぶさない程度にダークイエローを吹いた。車体下部、さらに構造物周りや転輪部分などを中心にダークアース系色を吹いて、おおまかに調子をつけておく。

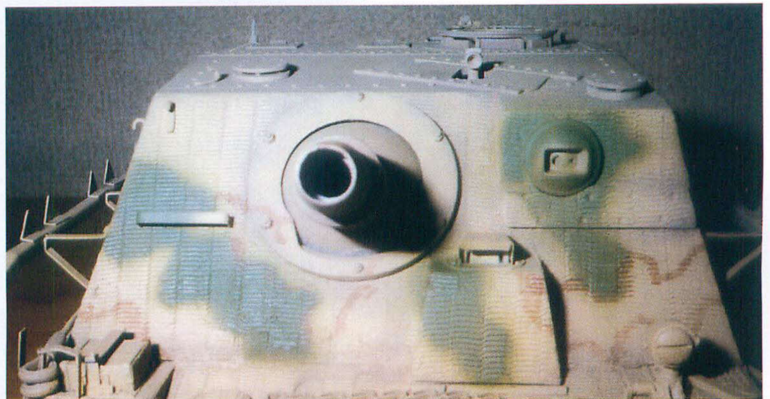
4 迷彩色を塗る1



今回は色の境をぼかすので、いきなりエアブラシでも問題ないが、予め用意したラフスケッチを参考に筆でアウトラインを下書きした。あとは塗りつぶすだけなので悩まずに吹きつけが出来る（場合によってはエアブラシだけより複雑なパターンが描ける）。

5 迷彩色を塗る2

エアブラシだけで塗装する場合も、迷彩色の境界を濃い方の色（今回はブラウン）を筆塗りしておくと色がにごらずパターンもはっきりする。筆塗りはタミヤ水性アクリルを使用。





下地仕上げ

中性洗剤とぬるま湯で油分や埃などの不純物を取り除いてから下地塗装します。金属部のエッチングパーツにサビ止め・塗料を吸着させるためにグンゼ産業「Mr. サーフェイサー1000」を吹き着けて下地仕上げ。異種素材や成型色の異なるパーツを使用した場合、色と質感を統一するためにまんべんなく吹き付けます。

基本塗装

今、日本の戦車模型の基本塗装は①サーフェイサー→基本塗装②サーフェイサー→先に影色で下塗り→基本塗装の２通りの方法が主流です。今回①の発色の良さ②の微妙なグラデーションを得られる長所を生かして中間的な方法で下塗りしました。主に足周りを中心に完成後、影になりそうな部分だけ茶系色を吹き付け（車体上部の暗部色はあまり効果がなかった）ます。この影色を生かして基本色を吹き付けますが、あまり“残す”ことを意識しすぎると色として残ってしまうので、ダークイエローがのってアース系色になる位を目安にします。基本塗装に使う塗料は取り入れる技法や期待する効果によって異なるので一概に決められませんが、エナメル、油性塗料を仕上げに多用する戦車模型ではラッカー系が適していると思います。今回ベースカラーはグンゼ産業39番ダークイエロー＋21番ミドルストーンを使っていますが、スケールエフェクト、ウオッシングによるトーンダウンを考えて明るめに設定してあります。

迷彩塗装

アンブッシュ迷彩（光と影の迷彩）は塗装パターンが完成後の視覚に直結してくるので、作業時に簡単なスケッチを描いてイメージを固めておきます。カラーイラストや実車写真を参考にしますが、そのまま模型に転用できることはまずないので資料考証＋感性でアレンジします。迷彩パターンに規則性をもたせた方が模型としてはキレイな見映えになると思います。パターンが決まったらエアーブラシのノズルを絞ってアウトラインを描いて中を塗りつぶしていきます。塗料は溶剤の量で飛沫が変化するので十分試し吹きします。迷彩色に基本色のダークイエローを少量混ぜておくと色のバラツキを押えられます。複雑なパターンや境界をはっきりさせたいときは面相筆で薄く下書きをすると良いでしょう。一通りの作業が終ったら全体のバランス（迷彩面積＋各色の配置）をチェックして調整していきます。

斑点はあと１回でドライブラシが終り位の所で書き込みます。全体にまんべんなく入れながら密度を決めていきますが、エナメルを使えば失敗しても拭き取れます。

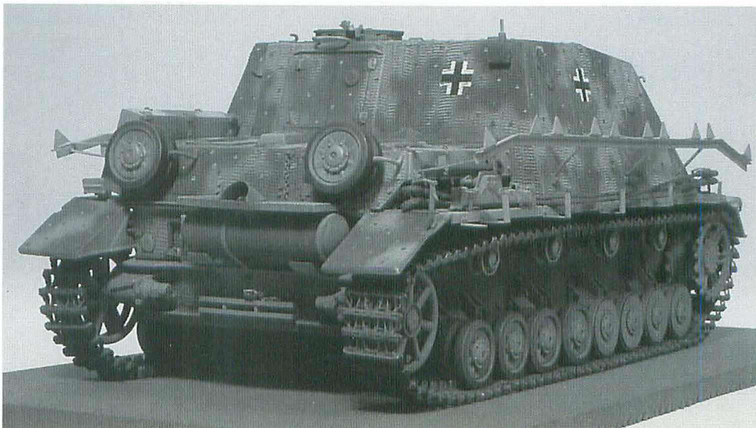
ウオッシング

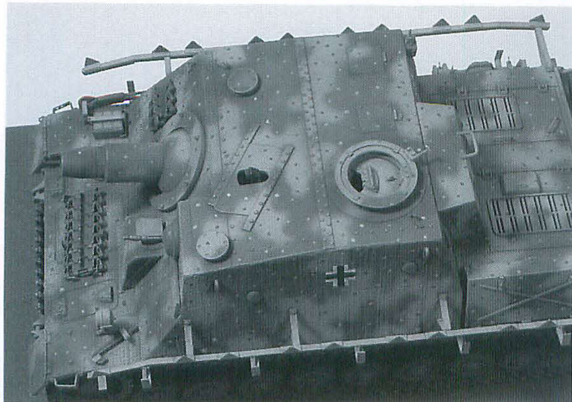
ドライブラシと並んで戦車模型では古典的な技法ですが、最近はパステル、エアーブラシによるシャドー付けも定着してきて少し意味合いが変わってきたようです。今回は迷彩パターンが視覚的なポイントになっているので、車体上部は「色のついた溶剤」程度のもので塗膜を落ち着かせるために軽く行っています。車体下部はウェザリング、スミ入れを兼ねて「薄めた塗料」で通常のウオッシングの効果を出してみました。筆目やシミを残さないのがキレイに仕上げるコツです。

ドライブラシ

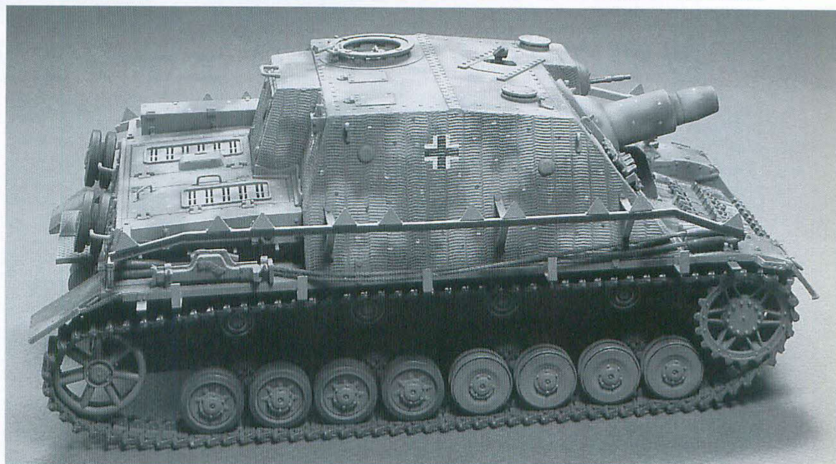
ディテールを浮き立たせたり、微妙なグラデーションをつけるために行う技法ですが、単色塗装の様に何段階も色を重ねず、基本色の３色をまとめることに重点を置きます。下塗りにラッカー系を使っているので水性アクリル、エナメルどちらでも使えますが、全体にアクリル、ハイライトや限定的な部分には少量でも伸びの良いエナメルを使い分けています。塗料は普通に筆塗り出来る位に溶剤で濃度を調整しておきます。筆先の塗料は一見色がついていない位まで拭き取り、一度に結果を期待せずに根気よくくり返します。

一通りの作業が終って全体のトーンにまとまりがなければ水性アクリルのバフをウォッシングの溶剤くらいに薄めて全体に遠吹きしてやります。出来れば基本塗装後にトーンがまとまっているのがベストなので、この方法は応急手段と考えておいた方が良いかも。これで一通りの作業は終りですが必要に応じて各工程をくり返して最終的な調整をします。









細部塗装、仕上げ

OVMの金属部分はアクリルのダークグレーで下塗り、この上に薄めたエナメルのブラウン系色を塗り重ねています。仕上げはシルバーでドライブラシしますが、下塗りとシルバーで一つの黒鉄色になるような感じが自然です。木目部分も下地のダークイエローを生かしながら、茶系色で木目を薄く書き込んでいきます。エナメル、油彩は流動性がよく、乾燥時間も長いので、溶剤の量によって、微妙な色合いや質感を表現出来るので色々試してみると良いでしょう（奥が深いですよ）。

パステルによる仕上げは今の戦車模型の必需品ですが、今回は影の補正とスス表現に軽く使用しました。あまり早い段階でパステル処理すると、ドライブラシと混ざって本当に汚くなってしまうで、ひとまず完成って所で使用します。ウェザリングや影つけはリアルに仕上ると同時に、目を飽きさせないポイントを設ける意味もあるので、全体とのバランスも大事です。

デカールは丸斑点を書き込んだ段階で貼りました。マークソフターに水性の木工用ボンドを混ぜて多めに塗布し、ほとんど乾いた所でつまようじでコーティング面に馴じませ仕上げのつや消しスプレー（ニッペ）で光沢を押えてあります。

まとめ

実はここ半年ほど塗料を換えたり塗装法を換えたりで仲々納得のいく塗装が出来ず悩んでるとこでした。で、自分なりのイメージ(どう仕上げたいか)をもつことが大切だなと改めて考えてしまいました。イメージに近ずけるのに必要な技法を選択して技術が伴ったときに納得のいく完成品が得られるにではないでしょうか（それでも底なしに欲が出てくるのが模型のおもしろいとこでもありますが…）。

参考にして下さい。

○基本塗装（ラッカー系）

ダークイエロー：グンゼ産業Mr. カラー39ダークイエロー＋21ミドルストーン（ホワイトで明度調整）。

グリーン：SDEソリッドカラーAG6デュンケルグリュン＋グンゼ産業Mr. カラー39ダークイエロー

ブラウン：グンゼ産業Mr. カラー41レッドブラウン＋39ダークイエロー

エアーブラシで吹き付けるさいの濃度は3倍ぐらいに薄めたものを使用するが、必ず試し吹きをする。

エアーブラシ　シングルとダブルアクションを併用しているが、操作が楽なので最近はシングルを多用している。ボタン操作を塗装面との距離をコントロールすることで幅広くつかえる。エアーブラシはタミヤのHGエアーブラシ（シングルアクション）、コンプレッサーはタミヤのスプレーワーク（AFV向きの圧力？）。

○仕上げ用塗料

ウオッシング　油絵の具　バーントアンバー、溶剤はペテロール（LEFRANC&BOURGEOIS製、流動性が高く乾燥も早くシミになりにくいので最近気に入っている）。

ウォッシングの筆　一度に広い面積をカバーできるように大きめの平筆を使っている。毛抜けの多い筆は使わない方が良い。

ドライブラシ　タミヤのアクリル塗料　XF59デザートイエロー＋XF57バフ。

ドライブラシの筆　平筆を大中小揃えて場所によって使い分けている。メーカーには特にこだわっていないが毛足に腰があって多少痛んだぐらいのものが使い易い。

ハイライト　ハンブロール（エナメル）94デザートイエロー＋ホワイト(油彩)

パステル　FABER-CASTELL

○細部塗装

木目部分　油絵の具　バーントジェンナ、イエローオーカー、パーマネントホワイト

シルバー、金属のドライブラシ　タミヤのペイントマーカーのシルバー

金属のドライブラシは平筆より丸筆の方が、キャタピラなどには研磨感が出る。

6 迷彩色を塗る3

迷彩色は各色ではなく各面ごとに仕上げていった。今回、予めラフスケッチを用意したのは戦闘室前面と左側、その他の部分はそこからパターンを発展させていった（実際の作業とスケッチを並行して作業を進めた）。



7 迷彩のバランスをチェックする



一通りの迷彩パターンが入った状態。３色の比率や配置をチェックしてダークイエローで修整を加えたり、迷彩色を吹きたして最終的な仕上げをする（各面ごとにちぐはな印象にならないようにバランスに注意する）。

8 斑点を入れる

ウオッシングでトーンを落し、全体に軽くドライブラシをしてから斑点を入れた。この後、デカールを貼り再度ドライブラシをして全体のトーンをまとめて行く。必要なら車体下部に再度ダークイエロー、ダークアースで修整を加え、上下のバランスを整える。



ドライブラシで使っている筆

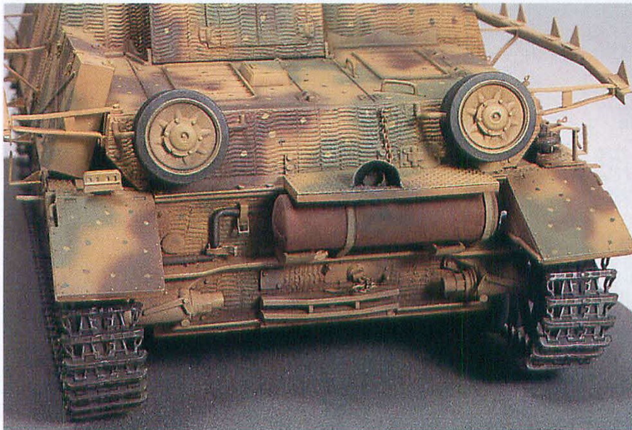




9 パステル、仕上げ

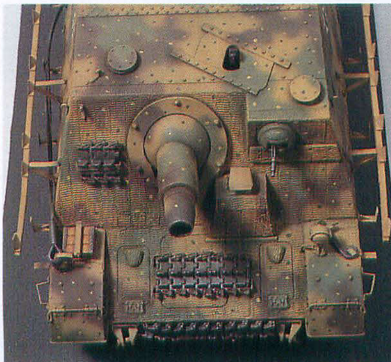
パステル処理はハッチや構造物周りの角部分を中心に、アクセント的に控えめに行なった。粉末にしたパステルチョークを面相筆でこすりつけるノーマルな方法。仕上げにつや消しクリアーで定着させる。

BURMMBÄR
Späte Produktion





国籍マークはデカールを使用。マークソフターに木工用ボンド（水性）を混ぜたものを使いコーティング面に密着させる。



OVMの金属はダークグレーにブラウン系色を塗り重ねシルバーでドライブラシ。木目部は茶系色で木目を薄く書き込んで行く。

カラーは99頁にもあります。



基本色オリーブグリーンの3色迷彩



パンターG後期型　3色迷彩

グンゼ産業 1/35　製作：河上　重文　Shigefumi Kawakami

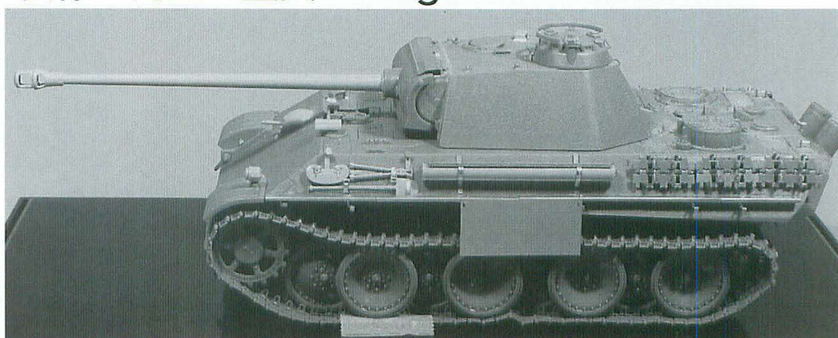
はじめに

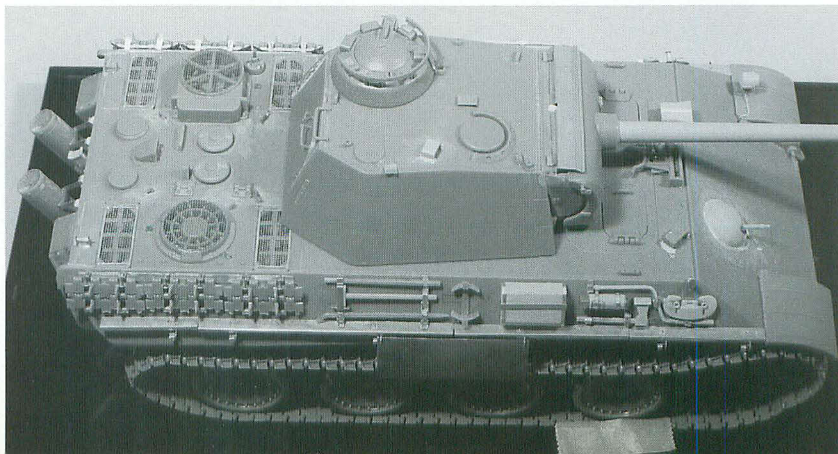
今回私が担当する事になったグンゼ産業のパンターG型後期型ですが、パンターについてもっと知りたい方は、先に発刊されているパンサーモデルフィーベルを参考にされてみてはいかがでしょうか。今回は塗装がメインという事なので、少々変わったダークイエローが縞模様のパンターにしてみる事にします。グンゼ産業のキットは暗視装置付きなのですが、今回の塗装車体には付きませんのでその点を注意して組み立てます。

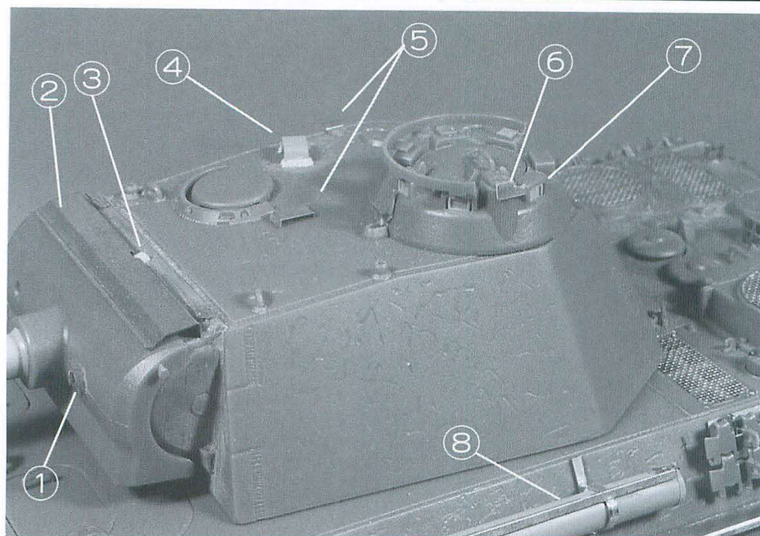
ディテールアップにはアベールのエッチングパーツとタミヤのパンサーG型スチールホイール仕様を使用してみました。

砲　塔

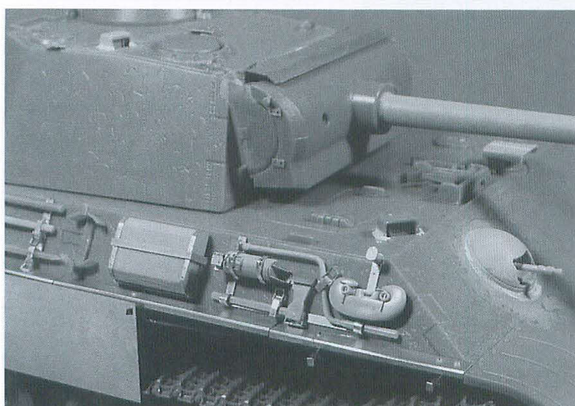
砲塔ですが、砲身は私の好みでタミヤの砲身と交換して取り付けてみました。キューポラのペリスコープと装填手用ペリスコープはタミヤより流用し

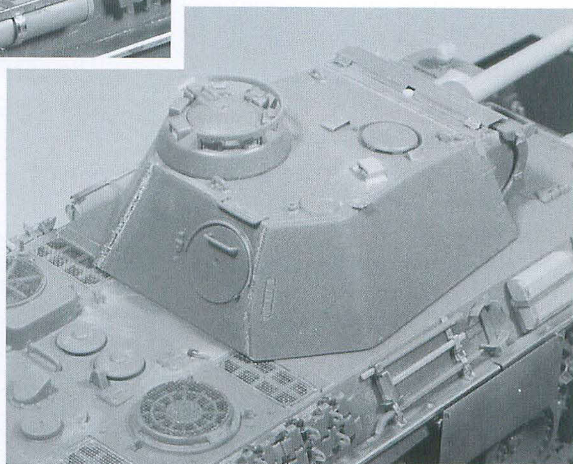


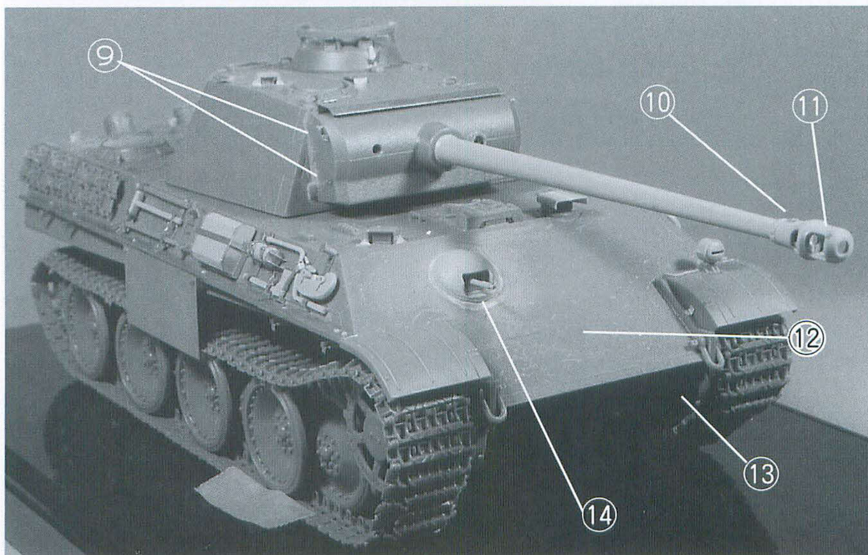




①コントレール　プラパイプより自作。
②防盾カバーをアベールのエッチングより。
③プラバンで自作。
④タミヤよりペリスコープガード流用。
⑤⑥アベールのパンサー用エッチングを使用。
⑦ペリスコープはタミヤのパンサーG型スチールホイールのパーツを流用。
⑧アベールのエッチングを曲げて使う。







⑨エッチングパーツ。
⑩アベールのエッチング。
⑪砲身は好みからタミヤを使用。
⑫装甲板表面はリューターで荒らす。実際にはこんな表面ではないが、模型としての雰囲気のため。
⑬不足しているボルトを追加。
⑭機銃及びマウント部はタミヤより流用

取り付けます（ペリスコープはスチールリム転輪パーツに付属しています)。

防盾基部カバーはアベールのエッチングパーツを使用しました。また直接照準サイト及びハッチストッパーもエッチングで追加します。ハッチストッパーは0.3㎜プラバンを接着し、厚みを出します。その他アベールのエッチングで毒ガス検知パネル等を接着します。

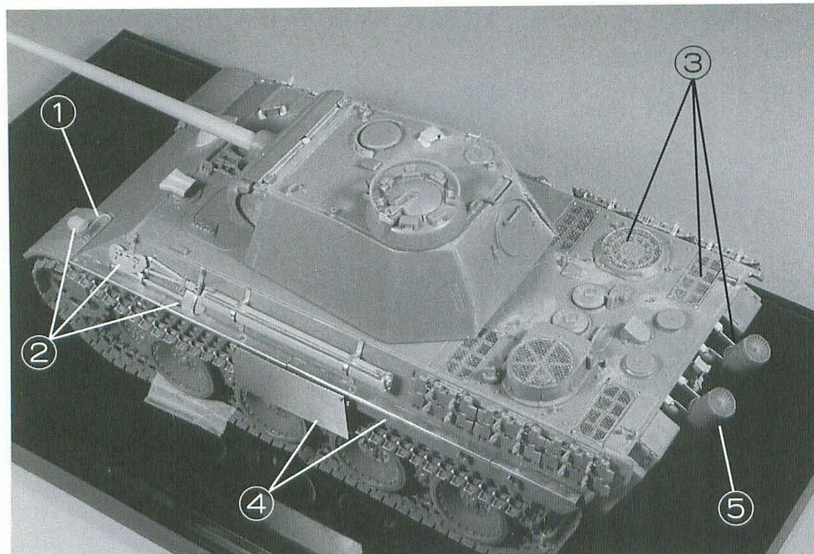
防盾の照準器用雨樋は少し短く感じたのでコントレールのプラパイプを利用して作り換えてみました。

車　体

車体は基本的にキットのままで、エッチングパーツを使用して細部のディテールアップを計ります。

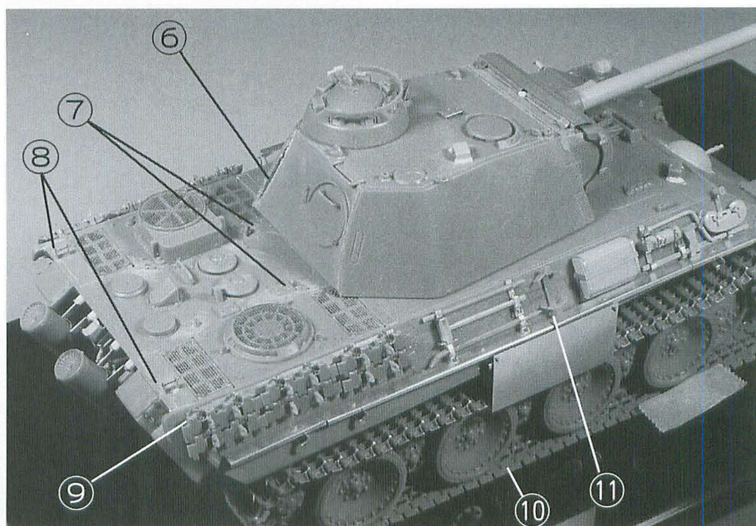
車体前面の前方機銃用マウントはタミヤのパーツを利用しますが少し小さいので車体側にポリパテを盛って調整して取り付けてみました。

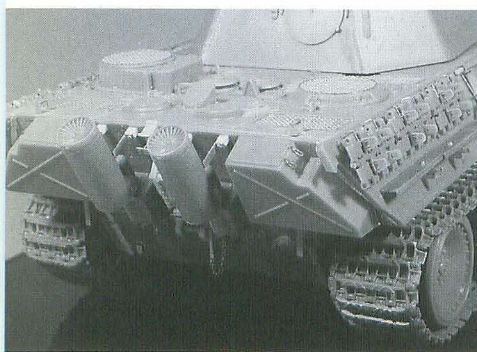
操縦手用ペリスコープ部は上部にカバーが付いているので、タミヤのパーツを利用しますが、幅が合わない為に



①モデラーズのプラグコードを使用。
②タミヤよりOVMを流用。OVMステーはアベールのエッチング。
③メッシュ部はアベールのエッチング。排気管支持架座はプラバンで追加したものにステーはエッチング使用(アベール)。
④シュルツェン及びステーもエッチング。
⑤排気管の合わせ目はパテで修整

⑥溶接跡を再現。
⑦説明書のままだと砲塔が回転すると当たってしまうので、後方へ移動(※接着位置に注意)。
⑧⑨基部はアベールエッチング。ストッパーは0.3㎜真鍮線。
⑩キャタピラはモデルカステンの可動連結式。
⑪フチを薄く削る





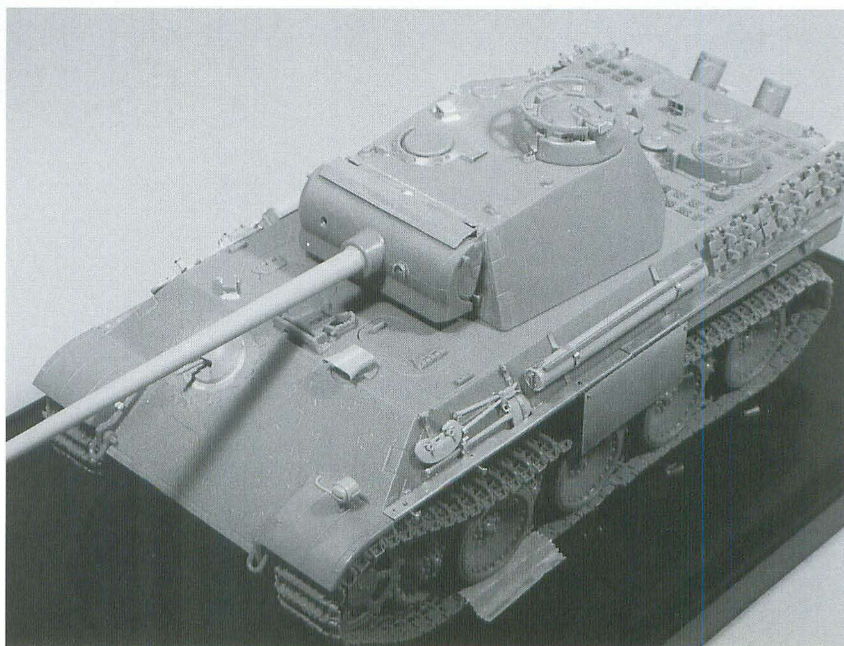
カバーの方を中間で切り離し、プラバンをはさむ形で幅を調整しました。

車体前部下起動輪内側に省略されているボルトを追加します。

各OVM類は好みでタミヤのものをトレードしてエッチングパーツを利用し取り付けます。

今回はシュルツェンを装備した状態にしますので、アベールのシュルツェンとシュルツェン取り付け基部ステーを使用して取り付けます。シュルツェンはエッチングの裏側にプラバンを接着し、車体との接着面を増しています。

後部グリル部はエッチングパーツを使用してメッシュ部を再現します。ここはエッチングパーツの利用価値が大きい所です。キャタピラは今回モデル



カステンの可動式を使ってみました。

塗　装

まずは塗装する前に、一度中性洗剤を混ぜた水で洗います。その後よく乾燥させた後に、エッチングパーツ部には忘れずにメタルプライマーを塗り、下地処理の為にプラサフを吹き付けます。私の場合ソフト99を使っています。

基本塗装の前に、ラッカーのつや消し黒でスプレーしておきます。これは基本塗装時に塗り残しなどがあっても目立たないようにする為ですので凹部や下面などしっかりと塗装しておきます。

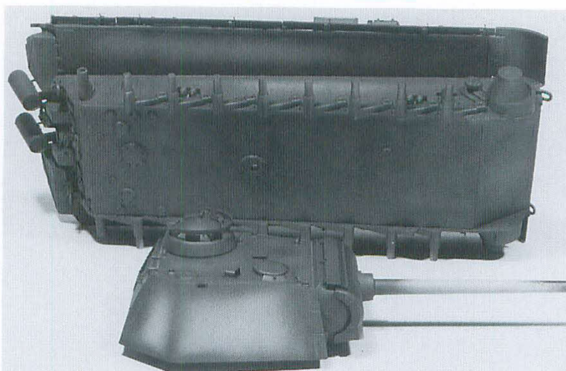
次に基本塗装になるわけですが、私の場合はエナメルのフラットブラックでウォッシングを行ないますので、基本色はラッカー系塗料を使います。基本の３色はエス・ディー・イーから発売されているデュンケルグリューン、ロットブラウン、デュンケルゲルプをそのまま使用しています。

基本塗装ですが、今回はダークイエローが縞模様ですので最後に塗る事にしますので初めにダークグリーンを全体を吹き付けます。乾燥後、レッドブラウンで迷彩模様を吹き付けます。この時、シュルツェンは仮止めしておきます。次に縞模様のダークイエローを吹き付けます。これで車体の基本３色は終わりです。

私の場合足周りは最後に取り付ける為別々の状態で塗装しています。転輪、起動輪、誘導輪はダークグリーン塗装のままとして、転輪のゴム部分をアクリルのフラットブラックとジャーマングレーを混ぜた物で筆塗りします。乾燥後に、エナメルのフラットブラックを薄めた物をボルトや凹部などに流しこみ、凹部に少し残るように綿棒で拭き取ります。

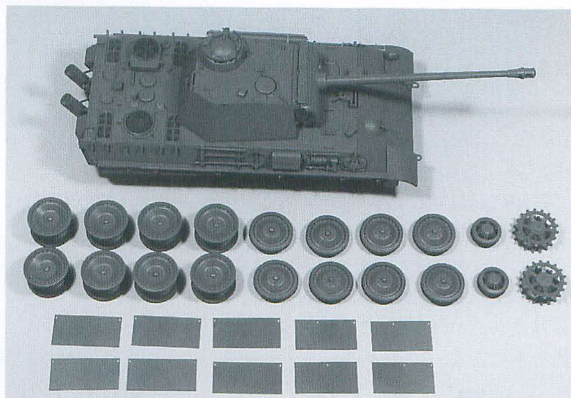
キャタピラは黒塗装の後、アクリルのフラットブラック、ダークグレー、ハルレッドを混ぜた物を吹き付けます。乾燥後にエナメルのウッドブラウンとダークイエローを混ぜた物を薄めて凹部に流し込む感じで筆で塗っていきます。乾くと凹部に土が溜まった感じになります。その後エナメルのフラットアルミで凸部をドライブラシして仕上げます。乾燥後に転輪、誘導輪、起動輪、キャタピラを車体に取り付けます。

車体は基本の３色を塗装後、エナメルのフラットブラックでウォッシングを行ないます。このウォッシングで全体のトーンが落ちますので、少し色が落ちついた感じになります。綿棒で拭き取る時に方向を考えながら汚れた感じになるように少しスジを残しながら拭き取ります。その後各OVM類をエナメル塗料で塗装して、ドライブラシをします。車体はエッジ部分を中心にエナメル塗料でドライブラシをしていきます。砲身マズルブレーキと後部消炎マフラー上部はアクリルのフラットブラックとダークグレーを混ぜた物でスプレーします。



サーフィサー塗付後黒を隅や角にスプレーする。

基本色を塗る。

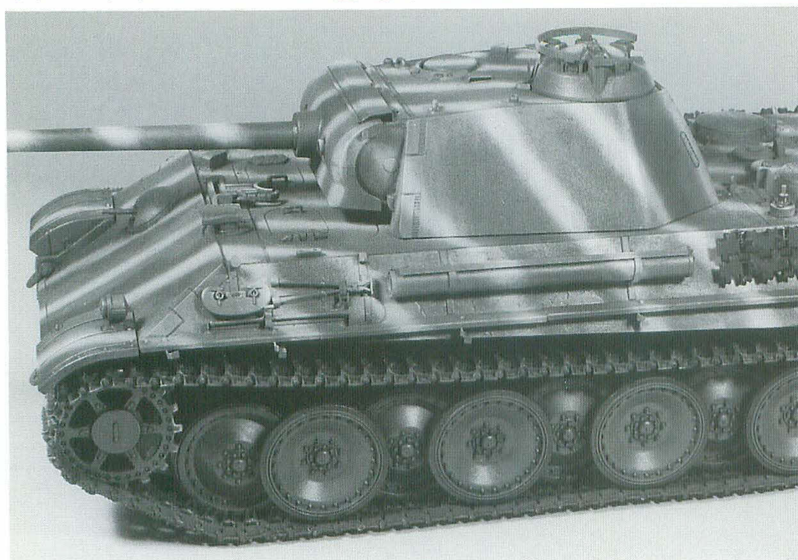


レッドブラウンを塗る。

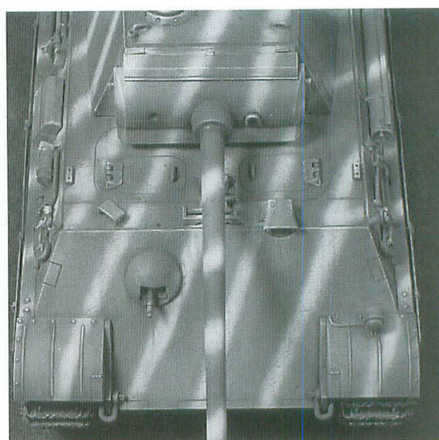


ダークイエローを塗る。





◀足周りを取りつけウオッシングを行なう。



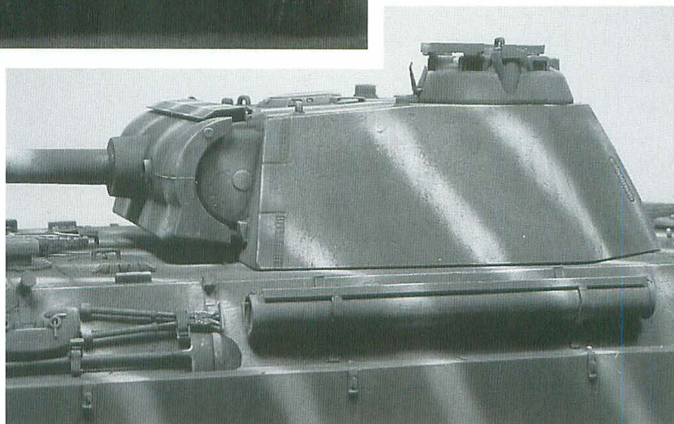
ウオッシング後OVMを塗りエッジをドライブラシする。



最後に足周りには水性のつや消しクリアーに少量のウッドブラウンとダークイエローを混ぜた物を吹き付けます。これは土埃りの感じを出す為です。その後全体につや消しクリアーを吹き、艶を整えます。

最　後　に

塗装に関しては、人それぞれの方法がありますので、自分に合った方法を探して下さい。また私は色とかパターンに関してあまりこだわっていませんので、どうしても本物に忠実に作りたい人には参考にならないかと思いますので悪しからず。模型は楽しく作りましょう。



参考資料
アハトゥンク・パンツァー第４集
大日本絵画
シュトルム＆ドランク№.５パンター
戦車マガジン
グランド・パワー№.024 V号戦車
パンター　デルタ出版
パンサーモデルフィーベル
モデルアート社

使用キット
パンターG後期型（暗視装置付）
グンゼ産業
パンサーG（スティールホイール仕様）
タミヤ
パンター後期型キャタピラ
モデルカステン
パンターAusf. G/F エッチング
サイドスカートエッチング
アベール

使用コンプレッサー
スプレーワークSW-653　タミヤ

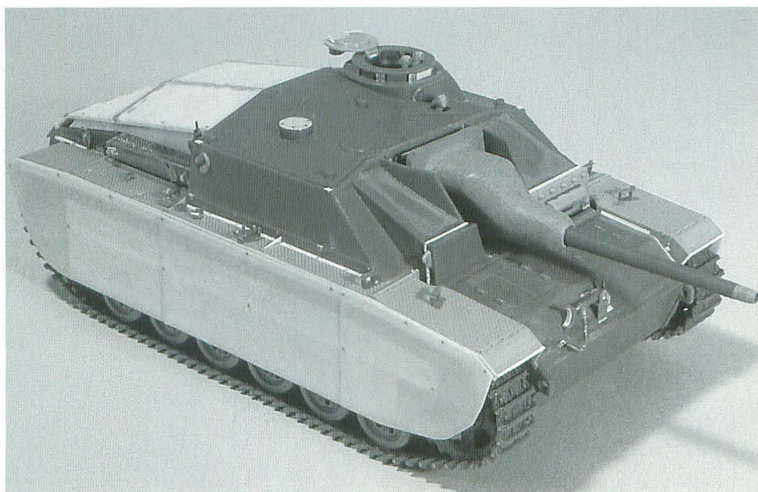


オリーブグリーン単色塗装法



アルデンヌ戦の偽装Ⅲ号突撃砲

グンゼ産業 1/35 Ⅲ号突撃砲G型(後期型)改造　　製作：佐藤　豊



…さらに話は前号から続く

「サトウさん、サトウさん、いいものがあるよ。」

突撃砲モデルフィーベル２で、いつか復讐してやる…なんて書いたら、またイガラシさんから電話があった。

ーなにそれ？

「…アルデンヌの偽装Ⅲ突。」

ーあれって、ヘンだよねー。

「カッコわるいのヨ、あれが…。」

ーでも、次はドイツ軍の塗装の本らしいし…。

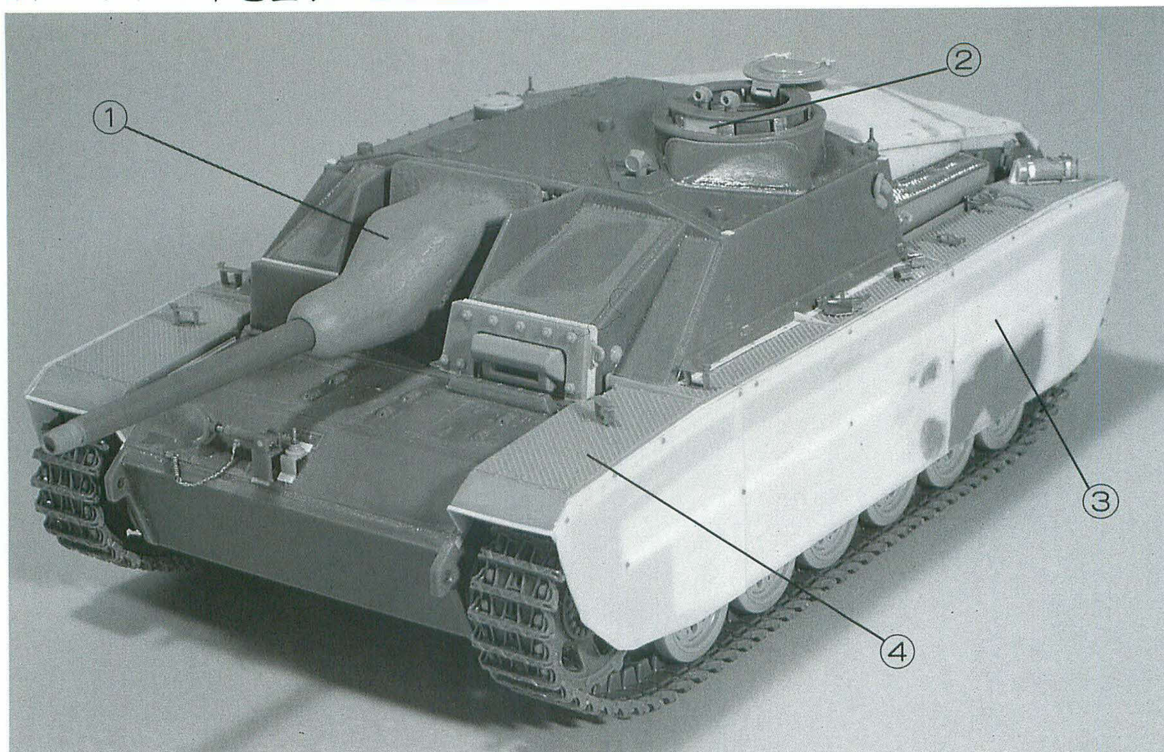
「いいじゃん、一応ドイツ軍だし…資料もあるよー。」

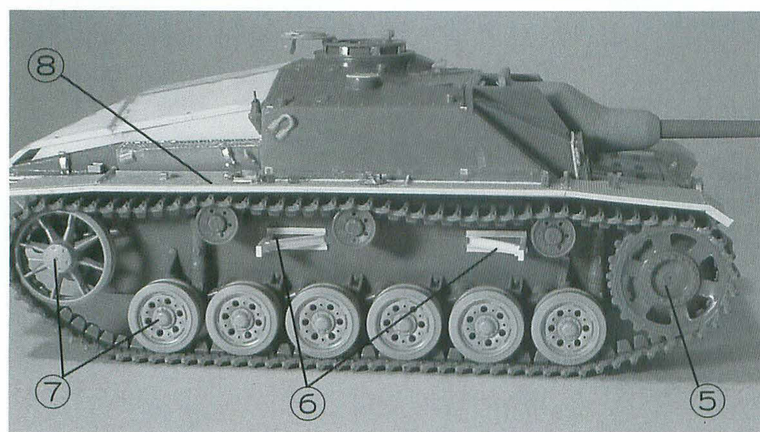
それなりに凝った偽装をしているM10／パンサーと違い、どう見てもヤル気のないグリーン単色・白星付きのⅢ号突撃砲なんて、ドイツ軍好きの人は絶対に見たくないはず…と思ってたら、編集Kさんから意外にあっさりとOKが出た。「いやぁ、前の本に入れようと思ってて、忘れちゃってたんですよー。いいんじゃないですかネ、補足ということで…。」あれー？これじゃ復讐にならないじゃないかー！

実車について

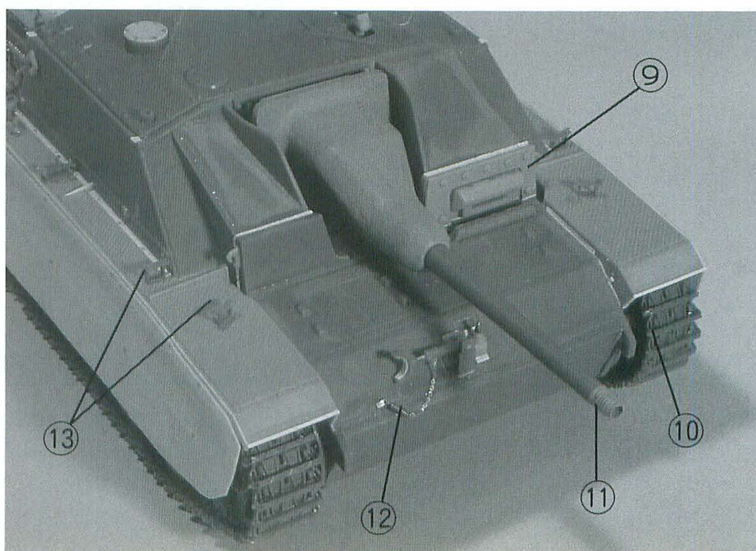
実車はアルデンヌ戦で米軍側を混乱させるため、有名なスコルツェニーの指揮のもとに投入された第150戦車旅団Y戦闘団の車両です。Ⅲ号突撃砲G後期型がベースで、大きなスカートと機関室上の（変な）カバーが特徴です。このスカートとカバー部分は鉄材のフレームに２㎜鋼板張りで作られています。

ところで、ドイツ人はこのⅢ号突撃砲を米軍の何かに似せようと思ったんでしょうか。戦闘室とスカートにわざわざ星を付けてるところ見ると、砲塔があるように見えるといいなーぐらいに思ったのかも…。さすがに乗員たちはこれじゃヤバイと思ったのか、車体に偽装網をかけていたようですが、いくらモノにこだわらないアメリカ人相

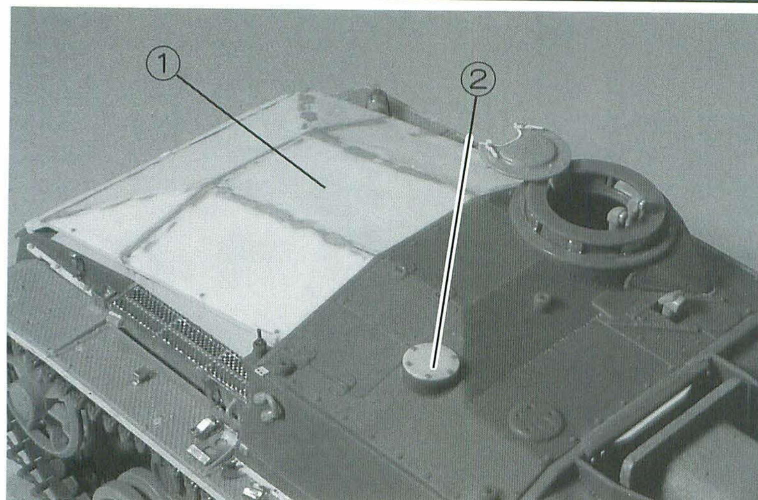




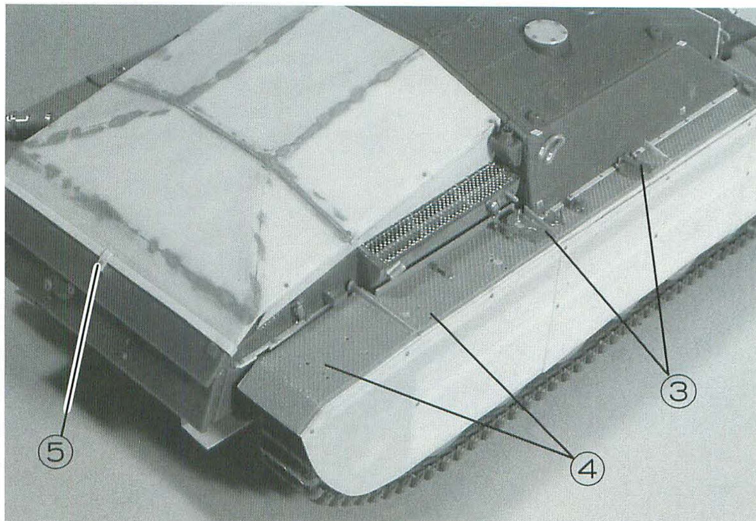
①この車両は同軸機銃を装備していない。
②最前部のペリスコープは撤去されている。
③特製のスカートは0.3㎜プラバンで。
④グンゼ産業のフエンダーはOVM取付け位置のモールドがちょっとウルサイのでタミヤ製と交換した。
⑤起動輪はモデルカステン製。
⑥スカートのステーの構造は推測。
⑦転輪、誘導輪はタミヤ製。
⑧フェンダーのフチはスカートとの接着面になるので、エバーグリーンのプラ材を貼り込み、増積するとともにエッジを出しておく。



⑨操縦手バイザーをタミヤより流用。
⑩キャタピラはモデルカステンSK-17。
⑪砲口部分はプラパイプにDIYショップで買った安いダイスでネジ山を再現。ただし実車のネジ山のピッチはもっと細かい。
⑫チェーンはアベールのエッチング、スプリングは銅線の手巻き。
⑬タグロープのブラケットはコの字形のタイプ。モデルカステン製。



①機関室のカバーは 1.0 ㎜のプラバンで作り、リューターを使い凹みを表現する（上面前部のカバーは機関室の点検のためボルト留めではないかもしれない）。
②リモコン機銃は撤去されている。



③OVMはほとんど取り外されているので、強度を考えアベールのエッチングを使用（思っていたより作りやすいし、パーツを接着で組んでいくタイプよりずっと丈夫。これからも使っちゃうかもしれない）。
④ジャッキとジャッキ台はブラケットごと撤去されているようだ。
⑤機関室カバーの後端は荷物ラックのベースを利用して固定しているらしい。

手でもコレはないと思うぞ。

製作

今回は実車通りグンゼ産業のⅢ号突撃砲G型（後期型）からの製作します。G後期型の製作については前の「突撃砲モデルフィーベル2」で尾林さんが詳しく解説されていますので（オバヤシさん、ご結婚オメデトウ、えー、結婚生活には三つの袋が…ってオヤジかおまえは！）そちらを参考にしていただくとして、改造のポイントのみ説明します。
①機関室のカバーは1.0㎜プラバンで作り、リューターを使って、実車通りベコベコに仕上げます。
②スカートは、キャタピラとのクリアランスがあまり無いので0.3㎜プラバンで作り、キャタピラと干渉しない部分のみ1.0㎜プラバンで裏打ちしています。下部車体から伸びているステーの構造は推測です。
③消火器を除きOVMは取り外して機関室のカバーの中に入れているようです。そこでパーツの取り付け穴の多いグンゼ産業のフェンダーを切り取り、タミヤのフェンダーと交換しています。
④今回製作した「C５号車」は、マズルブレーキとリモコン機銃を取り外しているようです。ただし、両方とも装備している車両も確認できます（大日本絵画刊「バルジの戦い」上巻120ページの車両）。

塗装について

今回私が行った作業手順は以下の通りです。
(1) 泥付け、下地塗装（マーキングの仕込み）。
(2) 車体ベース塗装、車体下周りの泥色塗装、転輪のゴム部の塗装。
(3) 足周りウオッシング及びドライブラシ。
(4) スカート、主砲、戦闘室上面の取り付け及び接着部分のタッチアップ。
(5) ウォッシング、ドライブラシ（途中の早い段階でマーキング）。
(6) キューポラ、照準器等の細部塗装。
(7) パステルとドライブラシによる仕上げ。

今回は固定式のスカート付きなので足周りの塗装が先行するなど、通常の塗装作業と多少手順が入れ替わっている部分があります。

泥付け・下地塗装

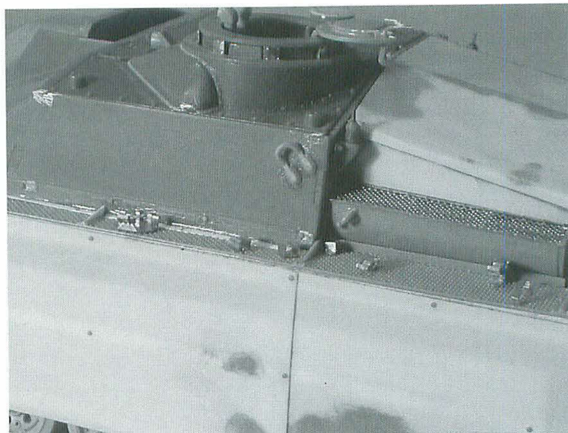
泥はグンゼ産業・サーフェイサー500にカラーパウダーと重曹を混ぜたものを塗っています（突撃砲モデルフィーベル２のオバヤシさんの泥がカッコよかったので、早速、重曹使わせてもらいました）。キャタピラにも泥付けをしますが、接地面についた泥は（起動輪の歯や転輪の接地面も）溶剤を含ませたティシュペーパーで拭き取っておきます。

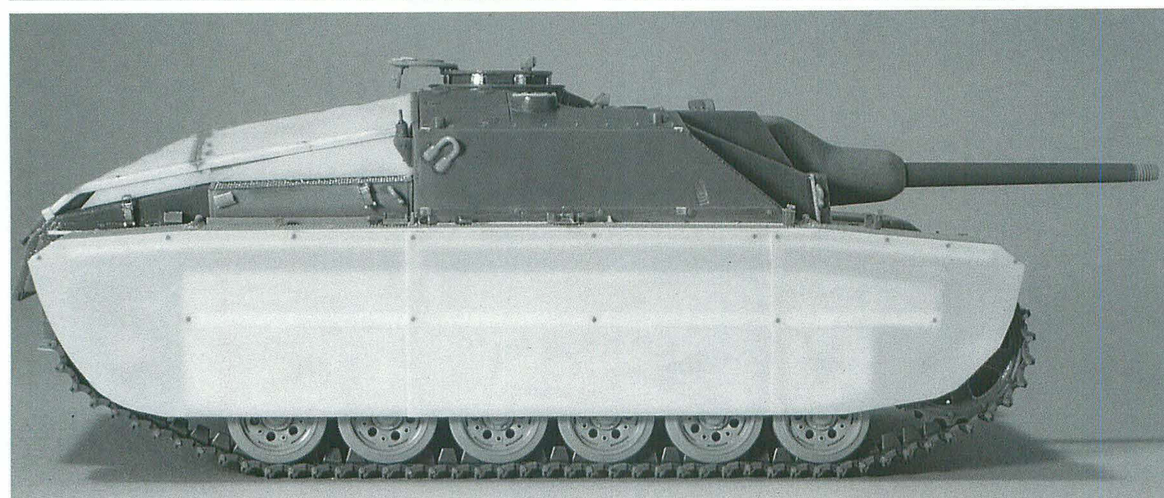
下地には、サーフェイサーは使わずにグンゼ産業Mr. カラーのエアクラフトグレー（№73）を吹いています。

基本塗装

この車両の塗装色はダークグリーンとのことなのですが、それがどんなグリーンなのかわかりません。実は、最初タミヤアクリルのダークグリーン（XF61）を吹き付けたのですが、英軍







系の色で（←あたりまえザンス。）「米軍戦車に化ける」というこの車両のコンセプトからあまりにカケ離れてしまうので、結局途中でオリーブグリーン（XF58）に塗り直しています。

泥を付けた部分には、同じくタミヤアクリルのフラットアースとフラットブラックを混ぜた物をベース色にします。フラットアースは乾燥すると多少（暗く）沈むようなので、ウオッシングでさらに暗くなる分を考え、フラットブラックの量を調整します。キャタピラはウオッシングしないので、他の部分より一段暗めに混色したアースをベース色にします。

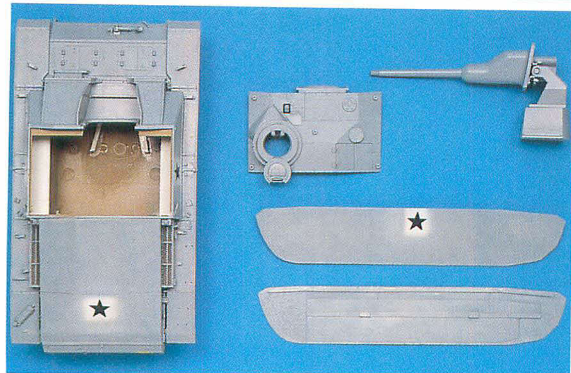
ウオッシング

ウオッシングはタミヤエナメルのフラットブラック＋ジャーマングレー＋フラットアースで作った茶色がかったダークグレーで行います。泥の着いた部分は強めにかけていますが、オリーブグリーン部分のカゲの強調は仕上げの段階で行うとして、この段階では車体色が多少落ち着き、ディテールにほんのりとカゲがつく程度に押さえています。

ドライブラシ

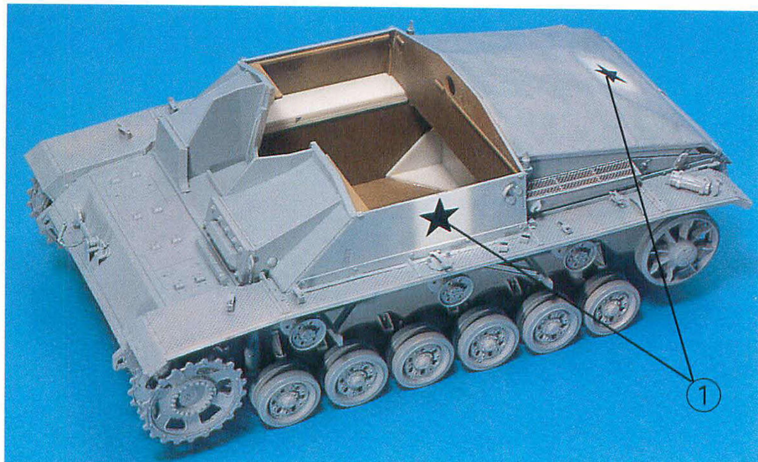
オリーブドラブやダークグリーンなどの暗めの単色塗装の場合には塗装が単調になりがちです。そこで比較的広い面積の部分にはグラデーションをつけていく必要が出てくるわけですが、ダークイエローの単色や迷彩塗装とは違い、ディテールやエッジの周辺のみにドライブラシをかけ、ベース色に対してウオッシングやパステルで暗い方向にグラデーションをかけようとすると、基本となる色の明度が低い分だけどうしても全体に暗く、またコントラストの強い仕上がりになってしまいます。そこでベース色を出発点に「明るくしていく」方向で作業を進めます。

グラデーションをつける方法としては、ドライブラシとエアーブラシによるグラデーション吹きがありますが、私はほとんどの場合、アクリル絵の具用のリターダー（アクリラのリターディングメディウムやリキテックスのグラデーションメディウムなどの遅乾用添加剤）を加えたタミヤアクリルのドライブラシで仕上げています。一般にアクリル塗料は乾燥が速く、ダマになりやすいのでドライブラシ向きではないのですが、このリターダーを20〜30%加えると通常の２〜３倍は乾燥時間が遅くなり、また塗料の伸びもよくなるようです。さらに最大のメリットとしては、このリターダーを加えることによって、塗料が下地の色を完全に隠さないクリアー塗料状になるので、ドライブラシの段階を従来より大まかにしても、下に塗られた色を生かした自然なグラデーションをつけることができます（逆に言っちゃうと、なかなか色が乗らないってことなんだけど）。ただし、リターダーを加えても、アクリル塗料の溶剤分は揮発が速く、適宜溶剤を加えてドライブラシしやすい粘度を保つ必要があります。私は、T. グリーンランド氏の言う「卵の殻のようなサテン調」が好きなので、あまり強いツヤ消しにはしませんが、フラットベースを加えればツヤ消しになります。ただし、もとの塗料の状態に左右される事もあるようなので、やはりテストが必要です。とは言え、足周りなどのよう

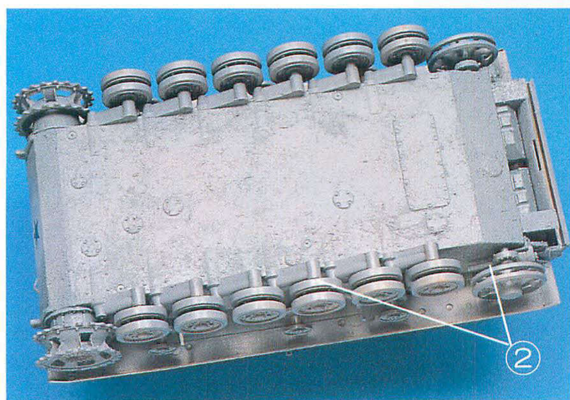


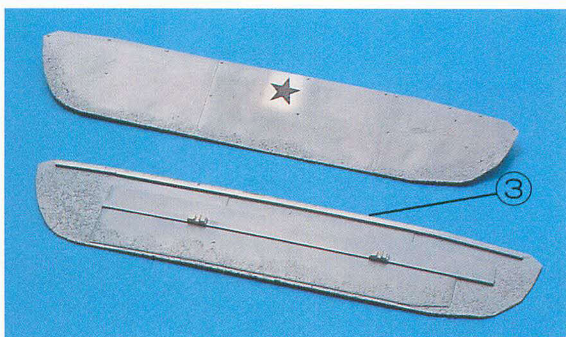
下塗りとしてグンゼ産業Mr. カラーのエアクラフトグレーを吹く。この段階ではツヤが出てしまっても構わない。むしろ表面をザラつかせないように注意する。細かなキズやスキマはこの段階で処理し、修整個所にはもう一度グレーを吹いておく。

星マークの位置にツヤ消しホワイトを吹きつけ、マスキングとしてインレタを貼る（①）。インレタは画材店で購入した星印だけを集めたセットの物（車体色を塗装し十分に乾燥させたところで、粘着力を弱めたテープを使ってインレタをはがす。結果をお見せできずに残念）。今回は部分的だが、車体色がダークイエローの場合にはホワイトは車体全体に吹きつける。最初から白で下塗りをしてしまうと、細かなキズが見えにくい。



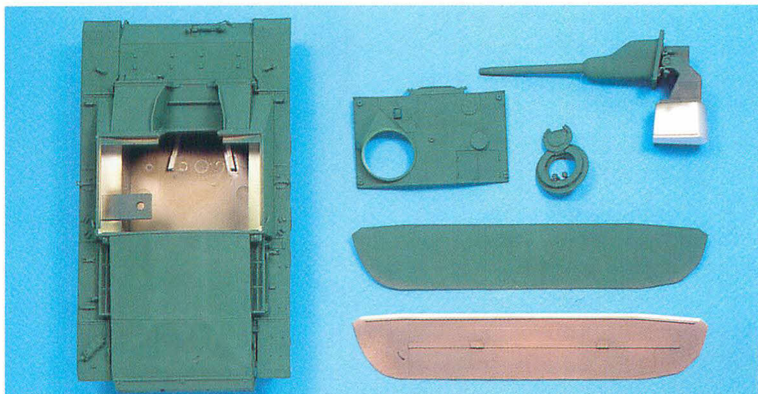
車体下面の泥は程々に。ホイールのキャタピラと接触する部分（②）に付いた泥はしっかり落としておく。また、弾力性がある転輪のゴム部に付いた泥は、乾燥すると鋼製のホイール部分より先に落ちてしまうので、特に水分を含んだ泥を再現しない限り、控え目にしたほうがいいと思う。





泥付けは下塗りの前に行う。接着面（③）は、簡単にマスキングしておくと後がラク。

にしっかりとツヤ消しで仕上げたい部分はエナメル塗料を使ったほうが確実で、今回もそうしています。「そこまでして、アクリル塗料を使うか？」の声も聞こえてきそうですが、出戻りオトウサンのなかには家族から「クサイ。」と言われて肩身の狭い思いをしている方もおられると思いますので、私みたいに…（オクサン、私はアナタのマニキュアの除光液も結構クサイと思うぞ…。黙ってるけど。←オヤジ、誌上でグチるなー）。



車体色のオリーブグリーンと、泥部分のフラットアース＋フラットブラック（塗料はいずれもタミヤアクリル）を吹き付ける。必要であればフラットベースを加え、この段階では完全なツヤ消しに仕上げる。

マーキング

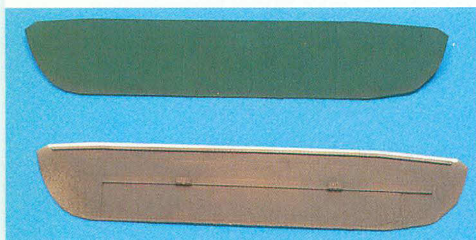
この車両のマーキングは白星に偽の所属コード、味方識別の為の黄色の三

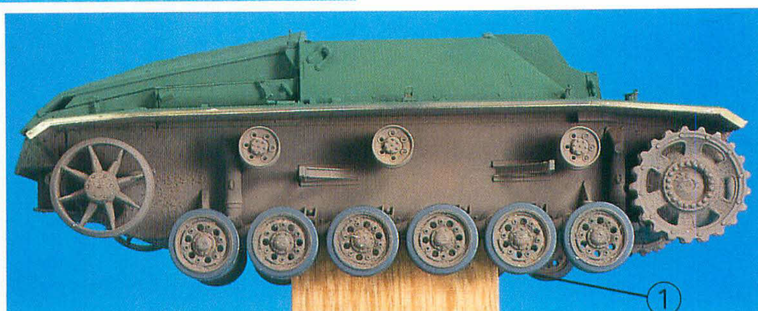


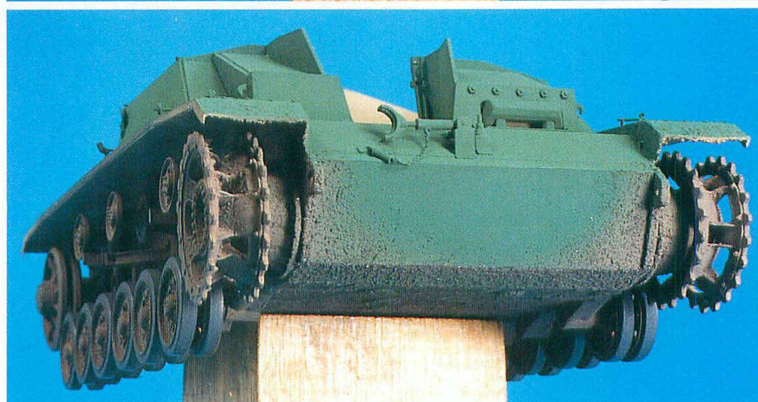
この段階での塗装は、後の過程でつけるグラデーションの暗部となるので、特にスケールエフェクトは考えない。考え方としてはツヤ消しの黒やマホガニーで下塗りをするのと同じだが、さらなる暗部はのちにウオッシングやパステルで付けていく。

転輪のゴム部の塗装はフラットブラックを加えたジャーマングレイで。アクリル系のジャーマングレーは、なぜかドライブラシの過程でツヤが出てきやすいので、しっかりフラットベースを加えるか、エナメル系を使ったほうが安心。

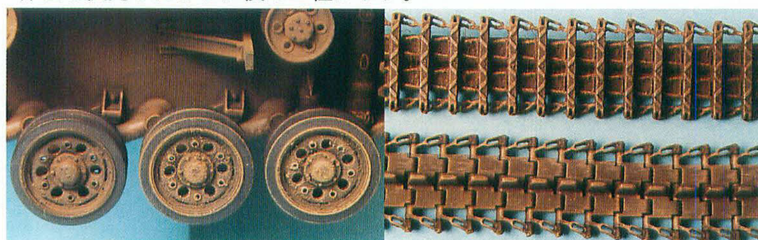
今回の車体色は暗いので、特に黒や銀で下塗りするまでもないが、光が透けて見えないよう、薄いプラ材の部分にはしっかりと色をのせる。







泥はグンゼサーフェイサー500に細かなカラーパウダーと重曹を混ぜた物。車体色と泥色との境界は余り気にする必要はないが、この段階では車体色を優先したほうが後の工程がラク。



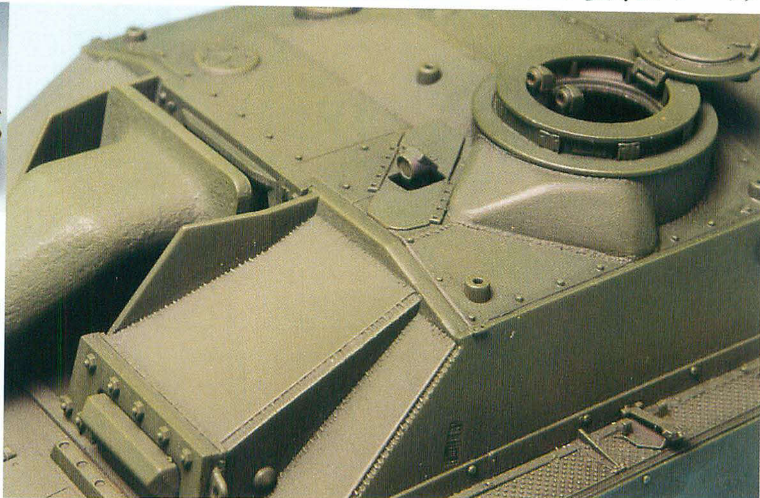
転輪のドライブラシ。左からベース色に黒褐色でウォッシング、フラットアースでのドライブラシ（中央）、さらにフラットアース＋バフでドライブラシしたもの（右）。塗料はタミヤエナメルを使用。泥をつけた足周りは、車体色部分よりコントラストの強い仕上げのほうが引き立つようだ。

キャタピラはウォッシングしない分、他の部分よりベース色を暗くする。ドライブラシの回数、使用塗料は他の部分と同じだが、接地面及びホイールに接する部分のエッジにはもう一段メタリックグレーでドライブラシをかける。さらに、キャタピラを車体に取りつけたのち、部分的にクロームシルバーでアクセントをつけている。

角形と、いたって地味なものです。戦闘団には５両のIII号突撃砲が配備されたようですが、この「Ｃ５号車」以外の車両番号は不明です。Ｘ戦闘団に同じく５両配備されたM10／パンサーの例を見ると（確認されている４両の番号はB４、５、７、10号車)、III号突撃砲の車両番号が必ずしもＣ１～５号車ではなかった可能性があります。また、識別用の黄色の三角形の位置は推測です。

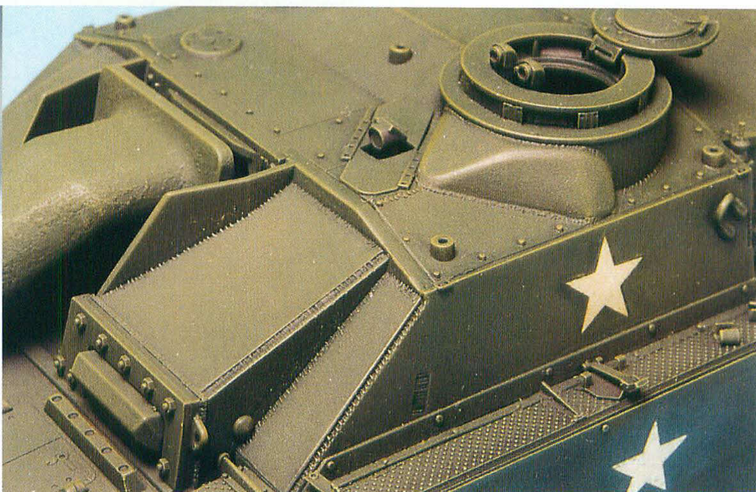
当初、白星に関してはT. グリーンランド氏が紹介した、下地の段階でインレタを貼り込みマスキングする方法を取っていたのですが、車体を塗り直した為に、結果的にはデカール仕上げとなってしまいました（ただし、氏の名誉のためにも、私自身いままで数作においてこの方法を使っていて、必要なインレタさえ入手できれば、ベストの方法である事をお伝えしておきます)。そんな訳で（←ダサイ）白星はいろいろなキットからの寄せ集め、所属コードはクリアデカールにインレタ貼りです。今回は前の「突撃砲モデルフィーベル２」で徳田さんが紹介された「水につける前のデカールをペーパーと砂消しで処理し、厚みと光沢を取る」方法にトライしています。私は1000番のペーパーだけで処理しグンゼのマーク



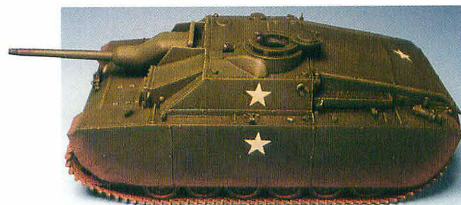


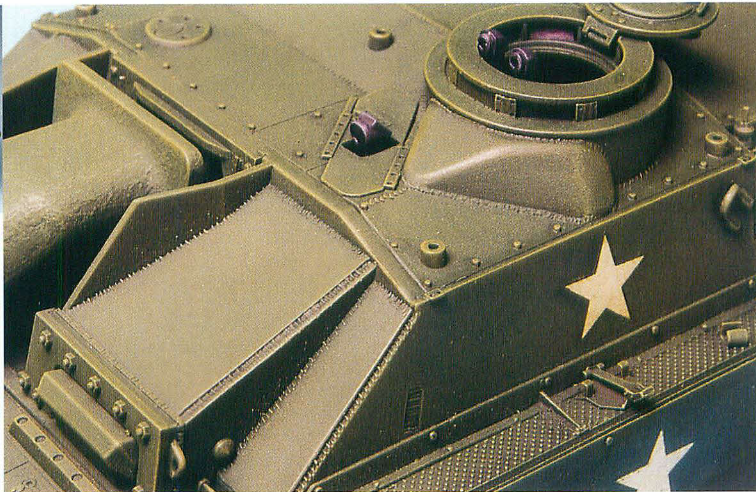
ウォッシングの後、ドライブラシ一段目をかけた段階。塗色はオリーブグリーン＋ダークイエロー＋フラットホワイト。ツヤは時間がたてばもっと落ち着く。この段階ではエッジばかりでなく、「面」に対しても積極的にブラシをかける。メデュウムの効果で、たった一段のドライブラシでもグラデーションがついているのがわかるだろうか。





マーキングをして二段目のドライブラシをかけた状態。オリーブグリーンやオリーブドラブ、ダークグリーンのドライブラシの場合、白の量だけで明度を上げていこうとすると先に黄色味が消え、色調が段々とグレーにコロンでいってしまうので、ダークイエローやイエローグリーンをメインに使い、黄色味を補ってやる。ドライブラシ用の塗料は密閉できる容器に多めに作り、小出しに使ったほうが便利だ。





最終（三段目）と細部にドライブラシをかけた状態。この段階ではエッジやディテールを中心にブラシをかける。奥まった場所に塗料が乗らないよう、だんだんと使用する筆の幅を広げていくという手もある。この後、パステルで暗部を補う。

ソフターを併用しましたが、かなり塗装に近い仕上がりになりました(正直、目からウロコです)。ただし、慎重にニスの層だけを削る事が大切で、ペーパーに印刷の色が付いたらもう削り過ぎです（特にエッジの部分には注意してください)。また、古くなったデカールやデカールの種類によっては割れてしまう場合もあるようですので、必ず不要部分でテストしたほうがいいと思います。

私は通常、ベース色とマーク類とのバランスを取るため、ドライブラシの比較的早い段階ででマーキングを行うことにしています。マーク上にもドライブラシがかかってしまいますが、最終的にマークの上だけをタミヤのエナメル溶剤を湿した綿棒で慎重にこすると、適当に色味が残って周囲の色となじみます。もし、ツヤが出すぎてしまったら、薄めた車体色かツヤ消しクリヤ

アクリル絵の具用の遅乾剤２種。リキテックス・グラデーションメディウム（右）と、アクリラ・リターディングメディウム（中央）。



リキテックスは緩めのガムシロップ状、アクリラはジェル状。アクリラの方が溶剤の量で粘度を調整しやすいので便利。アクリル塗料を使った道具を洗浄するための消毒用アルコール（左）。純正の溶剤より強力だし、何より乾燥が早い。ただし塗装用には使わないほうがいいようだ



塗料皿がわりのプラスチックカップ（右）で本来はお弁当の漬物やケチャップの容器。フタ付きなのがミソで、アクリル塗料でも３、４日は問題なく保存できる。10個入りで150～200円と市販の調合ビンより安い。パレットがわりの冷凍食品のトレー（左）。もちろん使い捨て。また（写真はないが）ケーキ作り用の回転台は塗装台として大変便利。このほかにもスーパーの売り場には役立ちそうなものがたくさんあるので、たまには奥サンの買物に付き合ってみるのもいいと思う（奥サンの機嫌もよくなるし…）。

をサッと吹いて押さえておきます。

仕上げ

仕上げはパステルとドライブラシを並行して行います。パステルは使用する個所により、アース、黒褐色、ダークグレーなどを粉末のままか、もしくはアクリル溶剤で溶いて使い分けています。面積が広い場合は無理ですが、つき過ぎてしまった粉末のパステルの除去にはアイシャドウ用の小さなスポンジブラシが使えます。

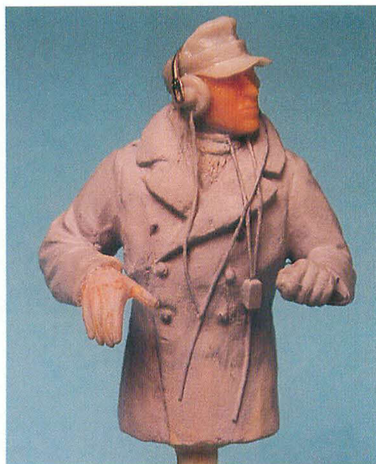
照準器や（今回はありませんが）OVMなどの小物もスケールエフェクトを考えベースの色はそれぞれの指定色より明るくしておきます。特に機銃などの金属部分は、暗いグレー（ジャーマングレー＋フラットブラック）をベースに、少量のブラックを加えたメタリックグレー→クロームシルバーと段階をつけてドライブラシをかけ、パステルでカゲをつけたほうがコントラストが強過ぎずいいようです。

ところで、ドイツ軍車両のOVMってオイルを染み込ませた金属の地肌がムキ出しなんでしょうか。それとも機銃みたいに薬品で「黒染め」してるんでしょうか。ご存じの方、どなたか教えてください。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

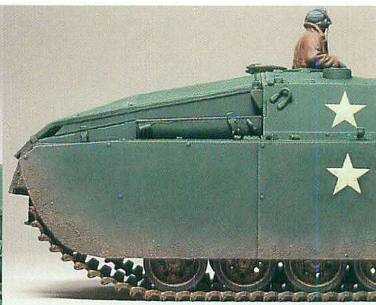
塗装については、いろいろと試行錯誤を繰り返してきたのですが、出戻り５年目にして完成品は15作ほどで、正直なところ私自身、いろいろなライター方のテクニックに触発されながら未だ研究中といった段階です。そんな私が塗装法を披露するなんて実はケッコウ恥ずかしいんですが、この中にひとつだけでも皆さんの役に立つ情報があれば幸いです。

…で、その後




左．フィギュアはドラゴン「ジャーマンタンククルー」からの改造。エポパテで作った米軍のメルトンコートを着せてみた（作戦準備のドタバタからいって、都合よくタンカースジャケットは支給されなかったと思うぞ）。

右．塗装はすべてハンブロールを使用。米軍のコートの色はかなりバラツキがあるが、ODというよりブラウン系。この時期ほとんどが真鍮の金ボタンつき（ちょっとマヌケ）。

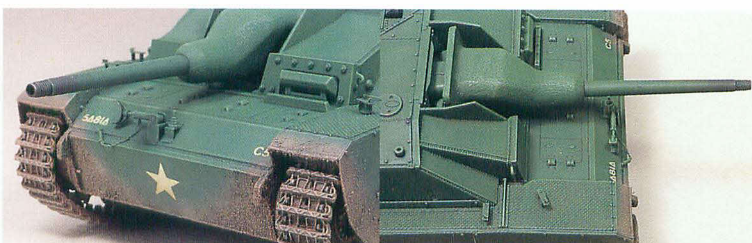



家に遊びに来たイガラシさんに、完成直前のIII号突撃砲を見せた。
—イガラシさん、イガラシさんコンナンなりましたけど…。
「ダセー！ ヘー、変なの…（と、ひとしきり）…で、サトウさん、次ナニ作るの？実はさあ、オモシロイ車両があるんだけど…。」
イガラシさん、ちょっと待った。もしかしてアンタ、自分が見てみたいもの私に作らせてないか…？
「いままでも結構いろんな人にやってもらってるんだよねー。」
—プ、プロデュースド・バイ・イガラシ!?アンタ、TKかー！…で、私は？
「パシリ・モデラー。」
…うー、わんわんわんわん。

ARDENNES 1944





















オリーブグリーン単色塗装法



タミヤのアクリルXF-58 オリーブグリーン使用。



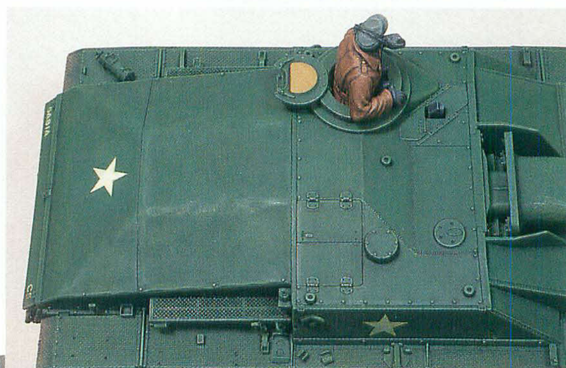


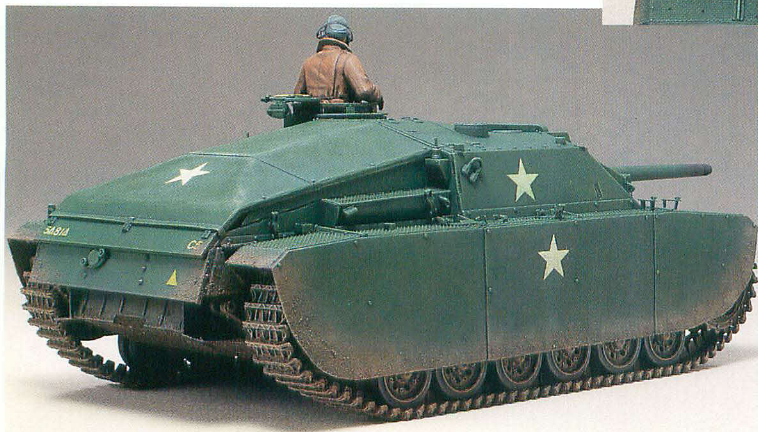
ウオッシング後ドライブラシでグラデーションをつける。





泥はサーフェイサー+カラーパウダー+重曹を混ぜたもの。





ドイツ車輌とは思えないオリーブグリーン単色の偽装III号突撃砲は、アルデンス戦でM10/パンサーと共に米軍を混乱させる目的で投入された。

作例ではMr. カラーのエアクラフトグレーで下塗り後、オリーブグリーンを塗る。この時、泥の部分にはフラットアース+フラットブラックを塗っておく。次にウオッシング後、明るくして行く方向性のドライブラシ(三段階)をする。仕上げにパステルを使って暗い部分に補っている。

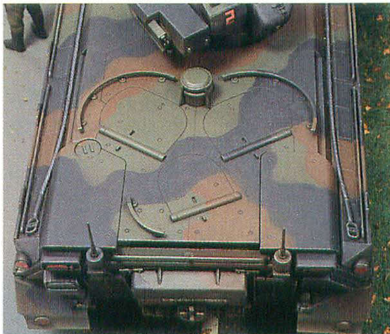
SPz MARDER 1A3

Revell 1:35
Modeling by
Hideki Shimawaki

マルダー1 A3歩兵戦闘車 NATO迷彩

ドイツレベル 1/35

製作：島脇　秀樹









ドイツレベルから発売されたマルダーは完全新金型で、最新のA3タイプをモデライズ。車体各部に実施された追加装甲でそれまでのマルダーと大きく印象が違っているのが良くキット化されている。乗員フィギュアはエリーテ社製。









NATO軍の現在標準化された３色迷彩色はグンゼ産業からそのものズバリの色が発売されている。これを使ってマルダー1A3歩兵戦闘車を塗装した。塗装手順については折込カラー131、132頁で詳しく説明。

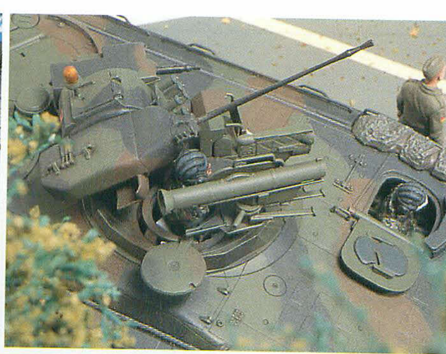
ドライバー用ハッチは開状態に自作しプラバンでペリスコープを再現させた以外はストレートに組んだもの。パーツにヒケが多いものの合わせは良好で、ミラン対戦車ミサイルやライト類のクリアーパーツも入っていてドイツレベルのやる気が感じられるキットだ。





現用ドイツ連邦軍の車輌には一般公道を走るための黄色の回転ライト、大型ミラーがある。ミラーにはアルミテープを貼っている。









SPz Mard

Modeling by



ボカシではないので、まず迷彩のアウトライ



げる。はみ出しているようで、はみ出してな
はみ出している微妙なセンスが要求される。

ここからは筆塗りしやすい水性アクリルを使
ため、グンゼ産業のトップコートつや消しを
銀塗装ではなく、アルミシールを貼った。



8



エナメル塗料のドライブラシで立体感を強調。このあと全体にトップコートつや消しを吹き付ける。ツヤが必要な部分にはクリヤーを筆でのせる。

9



パステルをヤスリ（写真はミニ四駆のスポンジタイヤ用ヤスリ）で粉末にして、足周りに筆ではたき付けて、ホコリっぽさを表現。



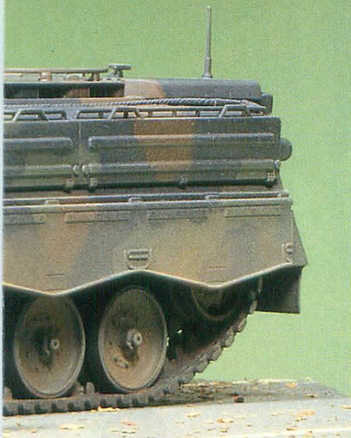
10 完成。つや消し塗装で表面がザラついているので、パステル粉は落ちない。指紋をつけないように注意。

DENÉE 12k

er 1A3

Hideki Shimawaki







NATO 3色迷彩

マルダー1A3 塗装工程

NATO standard camouflage scheme

1



全体にサーフェイサーを吹く（タミヤ・スーパーサーフェイサー（グレイ））。



2 混色した焦げ茶色で足周りを筆塗り、エアーブラシ併用で塗る。これが最後に暗部の色とキャタピラ色になる。



3

ベースになるグリーンをエアーブラシで吹き付ける。足周りの奥まった所に塗料が回らなくてもかまわない。なるべくキャタピラにグリーンの塗料がはみ出さないようにする。



4 NATO軍の迷彩は完全な
ンを筆で描き込む。



5

▲エアーブラシで迷彩を仕上
い。はみ出してないようで、

▼細部塗装とデカール貼り。
用。デカールには表面保護の
吹いておく。バックミラーは

6



エナメル塗装を油絵の具の溶剤、ペトロールで溶いてウオッシング。濃い目にしてあとで拭き取る手法をとっている。

7



NATO軍 3色迷彩 塗装法

SPz MARDER 1A3

NATO 3Color camouflage pattern

ドイツ連邦軍 マルダー1A3歩兵戦闘車

ドイツレベル 1/35

製作：島脇 秀樹 Hideki Shimawaki

ドイツ戦車の塗装本でドイツ連邦のマルダー1A3とは、ちょっと狙いすぎですか？タネを明かしますと、グンゼ産業から陸上自衛隊とNATO軍の戦車色セットが発売になったので、今度の塗装本が「ドイツAFV」である事が全く念頭になかった私は（最初に聞かされていた事が後に判明する)、毎度おなじみ担当K氏に「陸自やろう、陸自やろう。」と提案したのですが、K氏からは「あんたは何考えてんの？」という冷たいお言葉。それがやぶへびになってドイツレベル、マルダー1A3を作る事になったのでした。AFVクラブのヴィーゼルの方が小さいからもっと楽にできたんじゃないかと気付いたのは完成してからでした。

組立て

塗装本ではありますが、組立てについても一応軽く触れておきましょう。（今だキットレビューがないので）

まずこのキット、ヒケがとにかく多いです。最初にパーツを全部チェックして、全てのヒケをパテ埋めしておき





ドイツレベルの完全真金型による最新型のキット。



組み立てが終わった状態。ドライバーズハッチを開けたのと、ペリスコープにプラバンを入れた以外はストレート組み、砲塔のハッチ以外はモールドで表現されている。

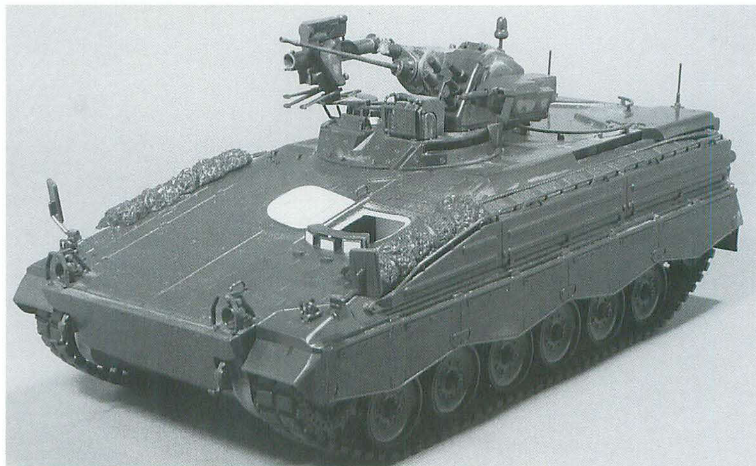
ヒケが多いためパテ埋め処理は最初にしておく。ベルト式キャタピラ、サイドスカートとも接着してから塗装する事にした。

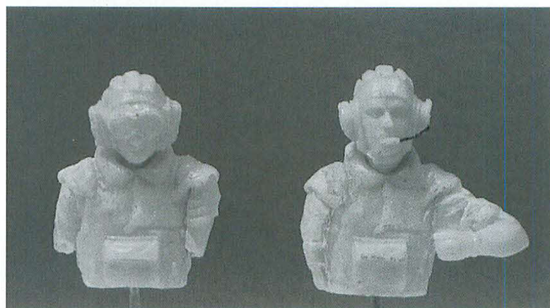
ます。組立て順にその都度パテ盛りなんて事をしてたら、乾燥時間だけでほとんどの時間を取られてしまいます。

私が作ったキットでは、転輪のサスシャフトに微妙に垂直でない物があったり、転輪のパーツの厚さがバラバラだったりしました。もし他の物もそうなら組立てに注意が必要です。キャタピラは説明書では焼き止めですが、現物は塗装可の接着式です。ただし長すぎるのでコマを切り飛ばし、スカートで見えない所をホチキスどめしました。

しかし、パーツの合わせは良好だしマーキングのバリエーションも豊富だし、クリアーパーツも入ってるし、なかなかの好キットです。クリアーパーツの有無がなぜ評価の対象になるかというと、ただ単純に透明だからうれしいってだけじゃなくて、その分ランナー一枠増えるって事じゃないんですか。その分値段が高くなってるかも知れませんが、それ以上にメーカーのやる気を感じさせてくれます。ドラゴンのT-34-85、ファインモールドの三式中戦車が良い例です。

作例は、ドライバーズハッチをオープン状態に自作し、ペリスコープにプラバンを入れた以外はストレート。塗装前にキャタピラやスカートまで全て組み込みました。フィギュアはエリーテ社のレジン製。ドイツ連邦軍のフィギュアは少ないので貴重な存在です。マルダーのコマンダーズハッチ周りはとても複雑で、そのままでは載せられないので改造が必要です。





エリーテ社製ドイツ連邦軍マルダー乗員レジン製フィギュア。マルダー 1A3 のコマンダーズハッチ周りは複雑なので両腕をポリパテで新造しないと載せられない。気泡は多目なのでパテ埋めは念入りに。

塗装に関して

今回のマルダーの塗装の手順はカラー写真のキャプション131、132頁を見てもらうとして、ここでは塗装に関する別の事を書いてみたいと思います。

現在私が主に使っているエアーブラシは、ワークのピースメーカー、ウェーブのスーパーエアーブラシ、タミヤのスプレーワークHGエアーブラシです。価格も含め、性能はぞれもほぼ同一といったところで満足しています。

コンプレッサーはウェーブのレトラ5/17。他に専用ピースメーカー付きのワークのしずか御免。私のコンプレッサーに求める第一条件はまず静粛性です。吹き付け中でもTVの音は聴きたいし、うるさいコンプレッサーでは長時間の作業は、精神的にまいってしまって続きません。だからグンゼ産業のリニアコンプレッサーのシリーズも気になるところです。

AFVモデラーの多くはタミヤのMMシリーズと共に成長しました。ずっとタミヤの色指定に従って塗装してきたため、使用している塗料は水性アクリルという人が多いと思います。現に私もそうでした。グンゼ産業の（通称：ラッカー系）Mr. カラーは、吹き付けの時の匂いに私は弱くてほとんど使用してませんでした。また戦車色が半ツヤだった事とドイツ戦車３色の色調のことがありました。

ダークイエローは白が、ジャーマングリーンは黒が強く感じられるので、正確な色かどうかよりも、自分好みの色ではありませんでした。

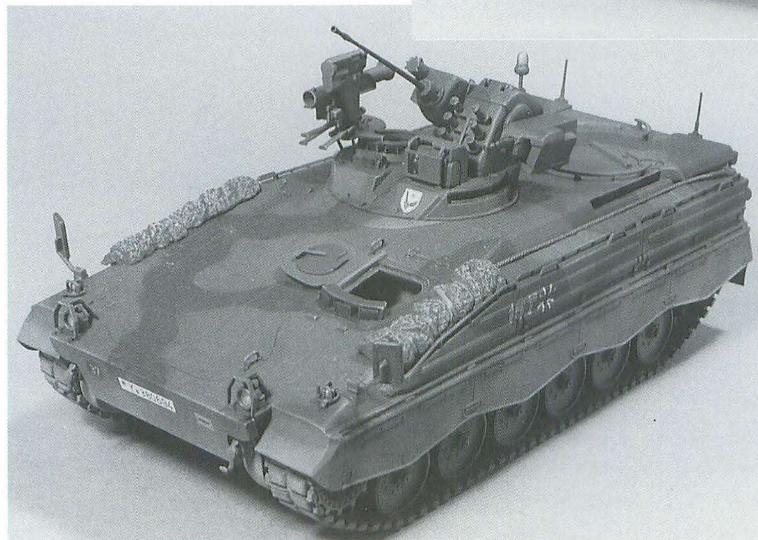
しかし、グンゼ産業の塗料がじょじょ

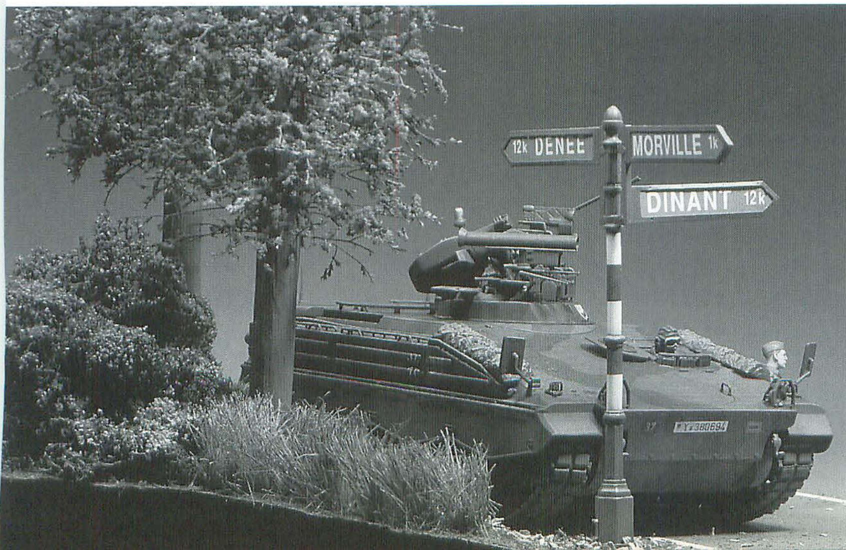




グンゼ産業の NATO 軍（ドイツ連邦軍）色 Mr. カラー戦車セット。溶剤系アクリル樹脂塗料の３色組(ブローンセグリュン、レーダァブラオン、テーアシュバルツ)。他に陸上自衛隊色も発売中。



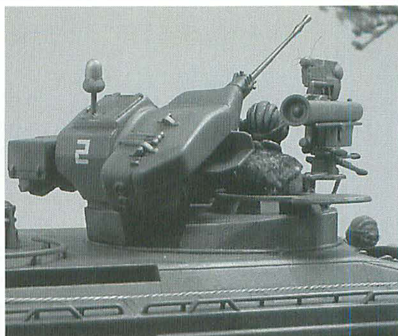




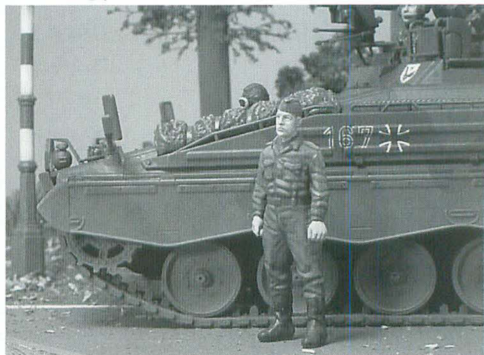
に変化していく様を、私は何年もかけて見守っていました。例えば水性ホビーカラーやトップコートの初期の物は乾が遅く、ツヤが消えにくいものでしたが、現在の物は安心して使用できます。Mr. カラー内の戦車色も、パンツァーカラーという紆余曲折はありましたが、オリーブドラブを含め、ツヤ消しの新しい色調にこっそりと変わっていきました。そして驚いた事に、それまでなかったダークグリーン（旧名ジャーマングリーン）の缶スプレーがこれまたこっそりと登場しているのです。これは、数年前に発売された大戦末期ドイツ戦車グリーンベース説を受けての事としか考えられず、このフットワークの軽さはまさに驚愕でした。また、レベリングウスメ液という溶剤の登場で、吹き付けがさらにしやすくなり、私の最大のネック、あの匂いも軽減されました。

車両の細部やフィギュアの塗装のほとんど、筆塗りのしやすいタミヤの塗料の水性アクリルを使用している私ですが、ウェザリングをする上での水性アクリル塗料の塗膜の弱さが少し気になっていたのも事実で、現在は以上の理由で車体の塗装はグンゼ産業の Mr. カラーを使ってます。まさに適材適所。塗装作業工程にゆとりが生まれました。ちなみに、今、ビンナマ色で大戦中のドイツ３色迷彩をするなら、Mr. カ





マルダー乗員は新迷彩の防弾チョッキを着ているのに注意。







ラーの39ダークイエロー、136ロシアングリーン2、そして今回使用のNATO軍カラーセット内のレーダアブラオンの組合わせが一番のお気に入りです。なぜ70ダークグリーンと41レッドブラウンが正しい色として指定されているのにそれらで迷彩しないかというと、自分好みの方を優先しているからでしょう。

なぜ全部組立ててから塗っているのか

前の増刊「突撃砲モデルフィーベル2」では、わざわざ連結可動式キャタピラを使いながら、シュルツエンまで装着してまとめて塗装しました。今回のマルダーもベルト式キャタピラをはかせ、スカートも接着してから塗装しています。ちょっと頭を使って段取りをうまくすればもっと楽に塗り分けられそうなものですが、なぜそうしないのかというと…。

まず、時間に追われて模型を作っている関係で、少しでも時間をむだにしたくないという事。極端な話、段取りを考える10分でも惜しいのです。ソフトスキンや車体内部再現以外なら、どんな戦車でも、今回のような方法で塗り分けられるのを経験上知ってますので、とりえず何も考えず一気に組立ててしまいます。

それと、またこの話題かと思われそうですが、誤解を恐れずにいうと、私は戦車単品を作りたくて作ってるわけではなく、ジオラマの大道具、小道具という対象で見ていると言う事。同じ面積を効果的に埋めてくれるなら、(私にとって) 戦車でも茂みでも同じなのです。という事はつまり、千円のプラキットでも二万円のレジンキットでも扱いは同じという事です。レジンのキャタピラを一コマずつ塗ってから組み立てる人はまずいませんよね。とりあえず形になるか組んでみるしかないでしょう。それと同じ感覚で、同じ面積を埋めてくれる千円のプラキットもガンガン作ってしまうのでこんな事になるのでしょう。

ただしこれはあくまで私個人の手法ですので、それを万人にすすめる気は毛頭ありません。それぞれ、ヒントにするなり、反面教師にするなりして自分のスタイルを確立してください。

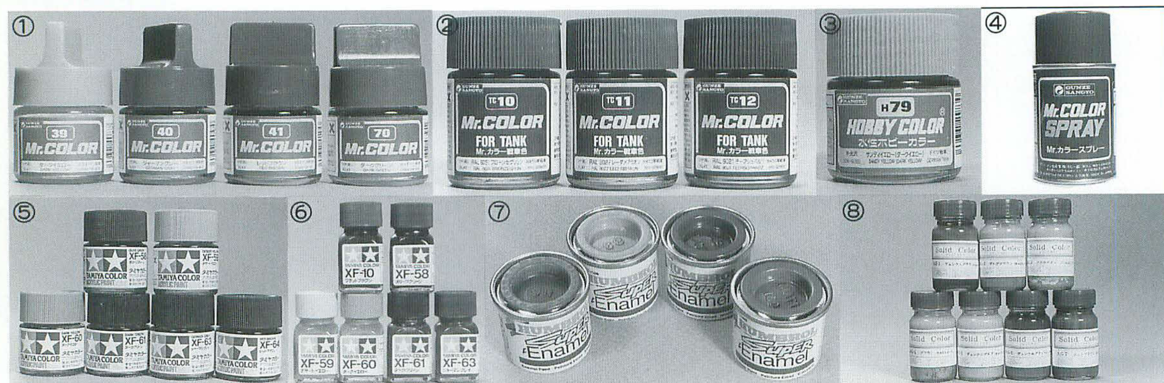
ドイツAFV用塗装用品

■下地用サーフェイサー



塗装前の傷の発見や材質や成型色の違いを揃えて発色を良くするのがサーフェイサー。①タミヤからはファインサーフェイサーL（ホワイト）600円（左）、スーパーサーフェイサー400円（中）両方とも正味量180ml。右はスーパーサーフェイサー 400円 100ml②グンゼ産業の Mr.サーフェイサー500スプレー400円100ml。③グンゼ産業 Mr. ホワイトサーフェイサー1000 600円170ml。④グンゼ産業 Mr. レジンプライマー・サーフェイサー 700 円 180ml（レジン用）。⑤ソフト99のボデーペン・プラサフ900円300ml（レジン・メタル用）。⑥モデラーズ　グレーサーフェイサー700円100ml。

■塗料



ドイツ戦車色（大戦中）として発売されているのは通称ラッカー系「アクリル樹脂塗料」２種類　グンゼ産業　Mr. カラー、SDEソリッドカラー「水溶性アクリル（樹脂）塗料」２種類　タミヤカラーアクリル、グンゼ産業　水性ホビーカラー、エナメル系（油性）塗料２種がある。①グンゼ産業　Mr. カラー 39 ダークイエロー、40ジャーマングレー、41レッドブラウン、70ダークグリーン各10ml120円②グンゼ産業　Mr. カラー戦車色セット　NATO軍（ドイツ連邦軍）色　TC-10ブローンセグリュン、TC11レーダァブラフォン、TC12テーアシュバルツ　18ml ３色セット 600円③グンゼ産業　水性ホビーカラーH-79サンディイエロー（ダークイエロー）10ml120円、他にH32ダークグレーH47レッドブラウン　各10ml120円④Mr.カラースプレー 39ダークイエロー　40ジャーマングレー　70ダークグリーン　各100ml　400円⑤タミヤカラー（アクリル）XF58オリーブグリーン XF59デザートイエロー XF60ダークイエロー XF63ジャーマングレイ XF64レッドブラウン　各23ml180円⑥タミヤカラー（エナメル）XF58オリーブグリーン、XF59デザートイエロー、XF60ダークイエロー、XF63ジャーマングレイ、XF64レッドブラウン　各10ml120円⑦ハンブロール（エナメル）83ジャーマンオーバー・オール・サンド、86ジャーマン・カモフラージュ・ミディアム・グリーン、160レッドブラウン、67ジャーマン・パンツァー⑧S. D. Eソリッドカラー AG1デュンケルグラウ、AG5デュンケルゲルプ、AG6デュンケルグリューン、AG7ロットブラウン　他３色有 各50ml600円。

■エアーブラシ



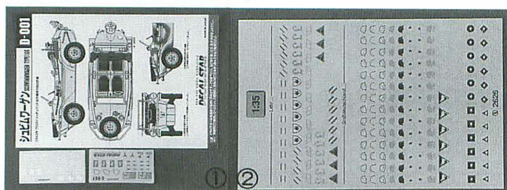
ドイツ車両の迷彩の多くはスプレーによるぼかし塗装。これを手軽に美しく仕上げるためにはエアーブラシが必需品だ。①グンゼ産業　プロコン BOY　WA ダブルアクションタイプ（ノズル径0.3㎜）11,800円。②グンゼ産業　Mr. エアブラシ・PROダブルアクションタイプ（ノズル径0.3㎜）塗料吸い上げ式　12,800円（吸い上げ式のシングルアクションタイプも有る9,800円）。③グンゼ産業　プロコンBOY　シングルアクションタイプ（ノズル径0.3㎜エアー付き）8,400円④タミヤスプレーワークHGトリガーエアーブラシ（ノズル径0.3㎜　ダブルアクションタイプ）15,800円⑤タミヤスプレーワークHGエアーブラシ（ノズル径 0.3 ㎜　ダブルアクションタイプ）12,800円⑥ウェーブ　スーパーエアブラシ（ノズル径0.3㎜　ダブルアクションタイプ）12,000円。

■コンプレッサー



エアーブラシで塗料を吹き出させるのが空気で、これを安定して送るのがコンプレッサーだ。①タミヤ　スプレーワーク HG コンプレッサー（２電源方式）最高空気圧 1.1kgf/cm² 最大連続使用圧力 0.8kgf/cm²　15,000 円②タミヤ　スプレーワーク・エアーブラシセット（２電源方式、エアーブラシ付き）最高空気圧 1.1kgf/cm²、最大連続使用圧力 0.5kgf/cm²　9,800 円③タミヤ　コンプレッサーセット SW－653　電源は 100V コンセント、エアーフィルター、手元スイッチ、エアーホース２種（各 1.5m）スタンド付き、最高空気圧 3Kgf/cm² 最大連続使用圧力 2kgf/cm²　47,800 円④グンゼ産業　Mr.リニアコンプレッサー L5　駆動ノイズが静かなのが特徴。最高圧力 1.2kgf/cm²、定格圧力 1.0kgf/cm²　AC100V　25,000 円。他に Mr. リニアコンプレッサー／エアブラシセット（プロコン BOY　WA ダブルアクション、エアーレギュレーターなどアクセサリー付き）39,800 円と Mr. リニアコンプレッサーセット（エアーレギュレーターやホースなどが付く）28,800 円も発売中⑤ワークアソシエーション　しずか御免　作動音が静かなコンプレッサーとハンドピースなどのセット　最高圧 0.2kgf/cm²　29,800 円。

■デカール



師団、戦術、車輌ナンバーなどは手軽に貼れるデカールが便利。①デカールスター　001 シュビムワーゲン　グロスドイッチュランドなど（ドライデカール）800 円他にタイガーⅠ用なども発売中　●問い合せ　喜屋ホビー☎ 03－3398－1424。②トラックラインデカール 2626　WWⅡドイツ　パンツァーレーア、グロスドイツッチュランド部隊マーク（水転写スライドマーク）1,400 円。ニスの余白が少なく、のりも強いもので、仕上げのつや消しクリヤー吹きにも OK。他にドイツ歩兵師団マーク、ナンバープレートなど。●問い合せ　カスタムモデルズ☎ 048－651－8690

■仕上げ、汚し用アイテム



仕上げの明度落しやスミ入れ、汚しの材料としてはまず①グンゼ産業からウエザリングカラーセット　６色入り　700 円がある。これは　マッド（つや消し）、オイル（光沢）、スート（つや消し）、ラフグレー（つや消し）、ラフサンド（つや消し）で、汚しの色が分からない人にも簡単に汚し塗装ができるもの。各 10ml。②パステル　土が付着した粉っぽさを表現したり、墨入れとしても使用できる。使い方は紙ヤスリで粉にしたものを直接筆で置いたり、溶剤で溶いて使用。またチョークの様に直接こすり付けても OK。大きな画材店などでバラ売りもしている。③リキテックス（水性アクリル絵の具）筆塗り用として模型用塗料の上に塗ることも可能。水で薄める時にはマットメディウムを加えることで定着力が増す。画材店などで取り扱い。④油絵の具　ウォッシング用などに使う。色やメーカーは沢山あるので１本づつ試して、使い易い物を探してみるのが良い。⑤ペトロール　油絵の具の用の溶剤。油絵の具を薄めるのに使用。エナメル溶剤のようにプラを弱くしたりしないため、ウォッシングに向いている。テレピン油も油絵の具の溶剤。

読　者　プ　レ　ゼ　ン　ト

AFV モデル塗装テクニック・ドイツ編の読者の皆様にプレゼントをご用意いたしました。

このAFV モデル塗装テクニック・ドイツ編についてのご感想、ご批判等を何でもかまいませんので必ずお書きの上、ご応募下さい（必ずハガキでお願いします）。

①タミヤ　1/35 シュタイヤー1500AO1 ……………… ２名様
　以上　提供：田宮模型
②グンゼ産業　Mr. カラー戦車色セット
②NATO 軍（ドイツ連邦軍）戦車色 ……………… ６名様
③グンゼ産業　ウェザリングカラーセット ………… ６名様
④グンゼ産業　1/35　ソミュア S35 ２名様
⑤グンゼ産業　1/35　パンターG 後期型（赤外線暗視装置付）
…………………………………… ２名様
⑦グンゼ産業　1/35　Sd. Kfz250/8 軽装甲兵員車シュルメン
…………………………………… ２名様
　以上　提供：グンゼ産業
⑧HiPM1/35　Ⅰ号戦車A型 ……………………… ２名様
⑨アランホビー　1/35　Ⅰ号戦車F型 ……………… ２名様
　以上　提供：バウマン

●ご希望商品番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を感想と共にご記入のうえ、下記の住所までハガキでお送り下さい。

〒102-0072　東京都千代田区飯田橋3－3－11　飯田橋ばんらいビル 6F　㈲モデルアート社　増刊 AFV 係

●締め切りは 1999 年 2 月 28 日（消印有効）。

編集後記

いかがでしたでしょうか？今回の増刊AFVモデル塗装テクニック・ドイツ編は。私自身、塗装についてはまだまだ知らないこのばかりで、編集しながら今度これをやってみようなどと思ってしまいました。何しろこの何年も塗ってないもので…サーフェイサーなら２年前に吹いたんだけど…。それと色を塗る直前のものなら何個かあるんですが。

この本が発売になっている頃、私は嫁さんの実家（長野）へ行っています。車で帰ろうと思っているんですが、気になるのが天候なのです。何しろ、雪道なんてスキーはしないから走ったことないのです。南信なので12月中はまだ雪は積もらないという話なのですが、今年の天気はどうも不安ですよね。天候不順で野菜は高くなってるし、なんか変。そういえば、今年の１月に帰る時は東京も大雪で安全策をとってバスで帰りました(着いたらビックリするくらいの積雪だったのでこれは正解でした)。チェーンは持っているのですが、もちろん付けたことはなく不安…。かといって今回は身重な嫁さんなので、バスでは３時間以上かかるのに休憩は１回しかないのでこちらも不安。しかしいつかは走らねばならない雪道なので覚悟を決めて行って来ます。車といえば、ここのところ車を２ヵ月以上洗っていません。11月中は雨が降らず乾燥していたので、いいウェザリング状態となってたのですが、12月に入ってから雨が多く自然洗車状態でこれはもう１ヵ月ぐらい洗車しなくてもいいかなと思えるほど。そうは言ってもワックスは落ちているし、嫁さんの実家に帰る前には奇麗にしとかないとやっぱり恥ずかしいもんね。

さて、次回のAFVものは、56年前の夏に起った史上最大の戦車戦クルスクの戦いをドイツ・ロシア両軍の車輌を模型で再現します。発売は夏頃を予定していますのでちょっと先ですが御期待下さい。

MODELER
青木秀之、荒屋敷正和、伊藤康治、尾林大輔、河上重文、佐藤豊、島脇秀樹、清水稔、杉村光生、徳田和大、村田稔、山田卓司、谷崎英也

WRITER
寺田光男

PHOTOGRAPHER
岩河敏

CO-OPERATION
田宮模型、グンゼ産業、長谷川製作所、モデルカステン、喜屋ホビー、マキシム、バウマン、レインボーテン、かめやま模型、カスタムモデルス、

PUBLICITY

ACKNOWLEDGMENT
・Patton Museum of Cavalry and Armor [U.S.A]

モデルアート１月号臨時増刊　No.529

AFVモデル 塗装(とそう)テクニック ドイツ編(へん)

1999年１月20日印刷
1999年１月25日発行
発行人：井田　博
編集人：加藤　聡
発行所：有限会社モデルアート社
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-3-11
飯田橋ばんらいビル７Ｆ
TEL. 03-3262-6450, FAX. 03-3288-4561
振替00140-6-196313
印刷所：株式会社サンニチ印刷
写　植：有限会社アドバン
定価2,200円（本体2,095円），送料120円

PUBLISHER
MODEL ART Co. Ltd
3-11,3Chome, Iidabashi, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0072, Japan

昭和43年４月３日第３種郵便物認可 平成11年１月25日発行 モデルアート１月号臨時増刊 第529集



AFVモデル塗装テクニック
ドイツ編



定価2,200円 本体2,095円 雑誌08734-1
Ⓛ-2/14
T1108734012203

